

Tokyo Urban Tech

NICHE

工学院大学建築系学科同窓会誌

<http://www.kogakuin.or.jp/kenchiku/>

2011 Vol. 34



スキルと、活かす場を結ぶ。人材と、企業を結ぶ。

Nikken Gakuinでリンク!!



**資格教育40年超えの日建学院だから
今こそ私たちにできること
ここから私たちがめざすこと**

業界の枠を超え、前向きに頑張るすべての人の力になります。
使える資格を取る。スキルを磨いてデキる人材になる。
それだけじゃ終わらせません。
スキルを活かした自分らしい就職・転職まで強力にサポート。
ひとりでも多くの人が、よりよく働き、
より充実した毎日を送れること。
そんな究極の目標に向かい、私たちも歩み続けます。



スキルを
磨くのは...

個別型フリースタイルコース

全国の日建学院で、好きな日時に好きなコースを、
自分専用の個別ブースで学べる学習スタイルが始動。
自分ペースで学べる独学のメリットと、日建学院
自慢の映像講義・教材はもちろん、アドバイザーや
資格試験情報などもセットになった通学のメリット、
すべてイイトコドリで学習に専念できます。

人と企業の
マッチングは...

ジョブサーチセンター

人材育成の経験と実績で、企業との信頼関係を築
いてきた全国ネットの日建学院だからできる求人
情報センターを、全国10カ所に開設。日建学院生なら、
ここから自由に全国の有力求人情報にアクセス
可能。しかも専門のアドバイザーが、よりよい就職・
転職までしっかりバックアップします。

日建学院

あなたの「夢」、応援します。

日建学院コールセンター ☎ 0120-243-229

株式会社建築資料研究社 東京都豊島区池袋2-50-1 受付/AM10:00~PM5:00(土・日・祝日は除きます)

建築系学科同窓会は、現役学生の為の支援講座を開催しています。

卒業年の合格を目指す

2級建築士

工学院大学 アカデミックコース

建築士の基礎から実務まで、
確実に実力を積み上げ、
合格へ導いてくれる学習です。

この講座は、工学院大学の授業進行に合わせて、建築に必要な「建築のための数学」や「力学の基礎」から、毎年、少しずつ知識を習得できるよう無理のない学習プログラムになっています。この講座を受講して、卒業年に2級建築士学科試験の一発合格を目指しましょう。これが最も早く、一級合格につながるようになります。

卒業年に一発合格を

step 1 一年生対象
インターネットによる自宅学習

1 学年：準備講座 Web

建築のための数学

建築に必要な数学の知識取得を目的に学習(集合又はWeb)を行います。

■構造で使う数学(力のモーメント)

■法規で使う数学(天井高)など

構造 ①

建築に必要な力学について学習します。

■反力とは

■静定ラーメンなど

学習時間の目安

■期間 6月から3月

■回数 11回(90分)

■目安 2週間に1回(2時間)の学習

■同窓会特別支援価格：4,000円

step 2 二年生対象
インターネットによる自宅学習

2 学年：基本講座 Web

構造 ②

建築構造の概要から建築材料までの内容を学習します。

■応力とは

■建築材料

木材・金属・コンクリートなど

法規

建築基準法の概要から建築制限などを学習します。

■建築士法と業法

■容積・高さ制限など

学習時間の目安

■期間 6月から3月

■回数 24回(90分)

■目安 1週間に1回(2時間)の学習

■同窓会特別支援価格：5,000円

step 3 三年生対象
インターネットによる自宅学習

3 学年：実務講座 Web

3 学年：実務講座 (プレアカデミック) Web

計画

建築計画の各論から、建築設備などを学習します。

■住宅・集合住宅

■消火・防災設備など

施工

施工準備から、仕上げ工事までの内容を学習します。

■施工計画

■内装・断熱工事など

学習時間の目安

■期間 10月から3月

■回数 36回(90分)

■目安 1週間に1回(2時間)の学習

■同窓会特別支援価格：10,000円

step 4 四年生対象
インターネットによる自宅学習と、卒論・設計提出前の10・11月に集中講義、及び卒業後の全国にある179校への通学講座(168,000円)が含まれます。

4 学年：2級問題解説講座 (アカデミック) 通学

受験準備力学

建築に必要な力学の断面の性質と応力についての基礎を学習します。

■断面の性質と応力

■静定トラスなど

受験準備法規

建築基準法の構成や用語から、基礎的な内容を学習します。

■基準法のしくみ

■高さ制限など

学習時間の目安

■期間 10月から3月

■回数 14回(90分)

■目安 1週間に2回(2時間)の学習

2級問題解説講座

4科目の総まとめと本試験と同様の模擬試験を行います。

■各科目のまとめ

■模擬試験と全国統一模擬試験など

卒業した後の通い講座も含まれます。

4月から最寄りの日建学院へ

※通学で弱点補強を行い、合格へと導きます。

■同窓会特別支援価格：36,000円

(Web 講座+大学における講義+卒業後の通学講座を含む)

※講座内容は予告なく変更する場合がありますのでご了承ください。

講座に関するお問合せ 日建学院コールセンター ☎ 0120-243-229 株式会社建築資料研究社 東京都豊島区西池袋1-15-7

日本初の建築学部創設にあわせて…

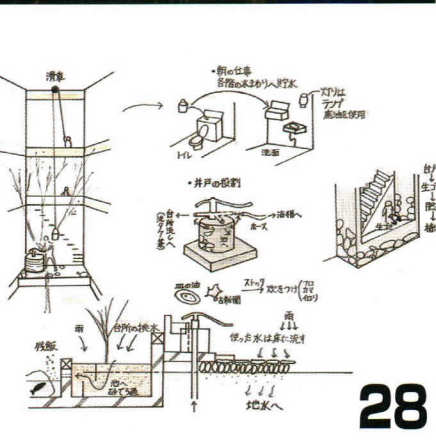
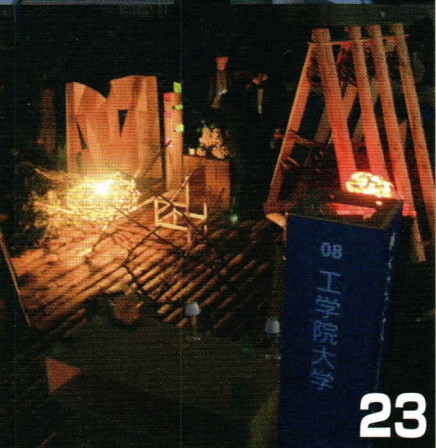
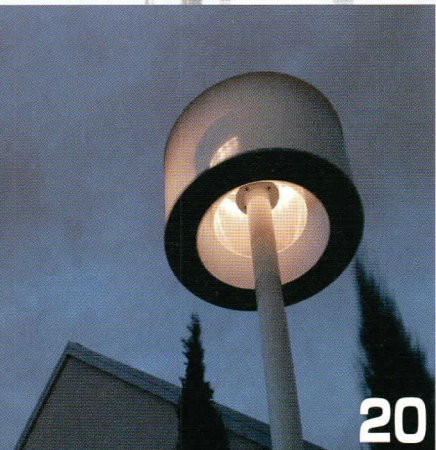
在学中に取得できる インテリアコーディネーター

工学院大学 インテリアコーディネーター集中講座

講座に関するお問合せ 新宿校舎にて、夏休み(2011年8月初旬)一週間の集中講義で開催予定。詳細は学内掲示をご覧ください。
同窓会に関するお問合せ 工学院大学建築系学科 谷口研究室 Tel.03-3340-3529

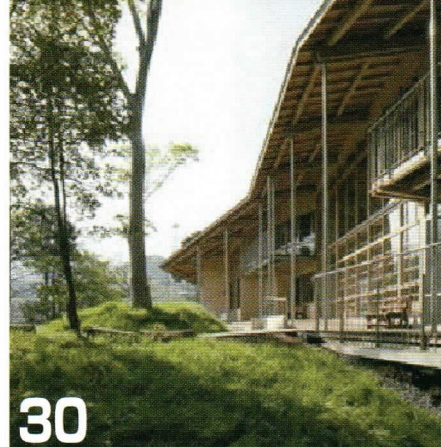
申し込みは、同窓会ホームページ(<http://www.kogakuin.or.jp/kenchiku/>)にて必要手続きが簡単にできます。

〈主催〉工学院大学 建築系学科 同窓会

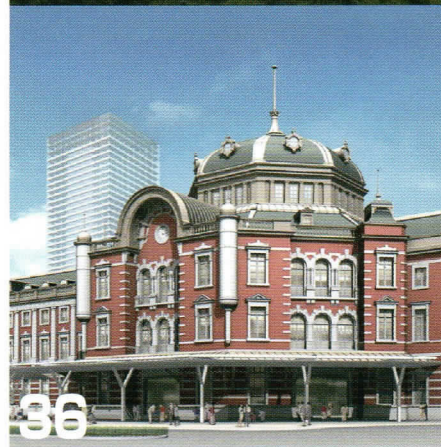


NICHE 目次	
巻頭言	10 同窓会会長あいさつ 加藤隆弘
特集	12 日本初の建築学部新設 一新学部構想 長澤泰 建築学部長 (2011年4月就任)
	14 建築学部誕生記念連続シンポジウム 4回連続で開催
トピックス	Topics
18	1. 学士院会員の内田祥哉先生が特認教授に就任
18	2. 久田嘉章教授「日本建築学会賞」受賞
19	3. 東正則教授「農村計画学会・学会賞(業績)」受賞
19	4. 「防災教育：国際フォーラム in 新宿」開催
20	5. 鈴木敏彦教授「Green Good Design Award 2010」受賞
21	6. 保清人「グッドデザイン賞」連続受賞
22	7. 江角敏則「JIA 中国建築大賞」受賞
23	8. 東京デザイナーズウィーク 2010 学生展
24	9. 日本建築学会設計競技最優秀賞 受賞 「海辺のカフカ」鈴木高敏、坂本達典
25	10. ベトナム・ダナン工科大学と協定調印
25	11.1 級建築士合格、工学院大学が全国4位に躍進
26	12. 建築学科公開講座「新しい建築構造の世界」開催報告
28	13. 第3回高校生の建築フレッシュ・アイデア・コンペ2010
30	14. ロンドンで中村勉教授 「リーフ賞(ヨーロッパ先進建築家フォーラム賞)」
31	15. 若手エンジニアへのメッセージ(第7回 つのはず会)
32	16. 建築学科同窓会総会の報告、役員名簿
33	17. 工学院大学校友会・全国大会の案内
新刊書紹介	34 新刊書紹介 10冊
特別企画	特別企画 / 学校法人工学院大学創立 125 周年
36	1. 大内田史郎「東京駅丸の内駅舎保存・復元」
40	2. 蔡龍保「戦前期工手学校卒業生の台湾における活動」八坂志賀介
44	3. 西村公宏「筑波山測候所と福満繁記」
連載企画	輝かしき先輩たち⑫
48	類洲環「小坂町に、ぜひ一度、お出かけ下さい」北湯口勇太郎

NICHE CONTENTS		
Foreword	10	Greetings from President of Alumni Association-Takahiro Kato
Special edition	12	THE FIRST SCHOOL OF ARCHITECTURE IN JAPAN WILL BRING "WIND OF CHANGE" Yasushi NAGASAWA , Vice President, Kogakuin University / Dean, School of Architecture (to be officially assigned in April 2011) /Professor, Department of Architecture
Topics	14	Continuous symposium of Department of Architecture birth commemoration Holding ..four continual times it..
		Topics 18 Yoshichika Uchida teacher of the member of the Japan Academy assumes the position of the Adjunct professor. 18 Professor Masanori Azuma Won "Farm village plan society and society prize (achievement)" 19 Professor Yoshiaki Hisada won " Thesis prize of Architectural Institute of Japan" 19 "Disaster prevention education: International forum in Shinjuku" Holding 20 Professor Toshihiko Suzuki Won "Green Good Design Award 2010". 21 Mr.Kiyoto Tamotsu "JAPAN GOOD DESIGN" THREE TIME AWARD WINNING 2009-2011 22 JIA Chugoku International Architectural Award Winning Design / Slow House Designed by Toshinori Esumi 23 Student Exhibition, Tokyo Designer's Week 2010 24 Mr.Takatoshi Suzuki and Mr.Tatsunori Sakamoto Won "The Architectural Institute of Japan design game best prize" 25 Greetings Partnership Agreement with University of Da Nang, University of Technology, Viet Nam 25 The first class architect passing. This university progressed to the fourth place in the whole country. 26 Open School, Department of Architecture, Kogakuin University "A New World of Architectural Structures" 28 The 3rd high school student's fresh construction idea competition 2010 30 Professor Ben Nakamura -the European advanced architect forum prize was won in London" 31 Message of young engineers. The 7th meeting of Tsunohazu 32 Report of Architectonics Department Alumni Association, general meeting / Director list of names 33 Kogakuin University schoolmate association Guide of national athletic meeting
Year book	34	Year book 10
Special project		The 125th Anniversary of Kogakuin University School corporation establishment 36 Preservation and Restoration of Marunouchi Post-House, Tokyo Station Written by Shiro Ouchida , East Japan Railway Company 40 An Activity in Taiwan by A Graduate from Polytechnic - A Case of Shigasuke Yaita - Written by Tsai Lung-Pao Assistant Professor, Department of History of National Taipei University, Taiwan 44 "Tsukuba Mt. meteorological observatory and Shigeki Fukumitsu" Written by Kimihiro Nishimura
Serialization plan		Tribute to Our Great Seniors Vol. 12 48 Mr.Yutaro Kitayuguchi. Make A Visit to Town of Kosaka, Please! Written by Kan Ruisu



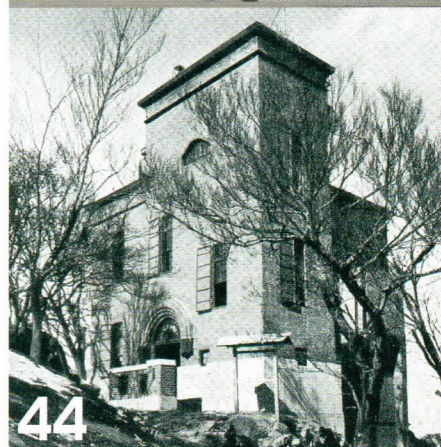
30



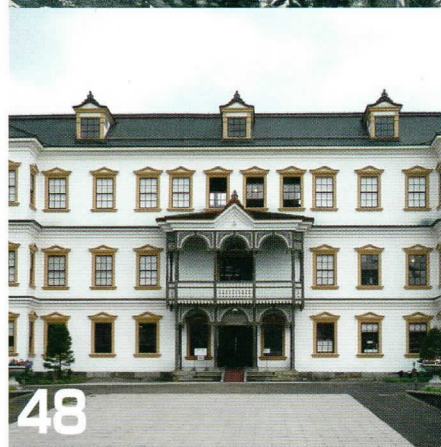
36



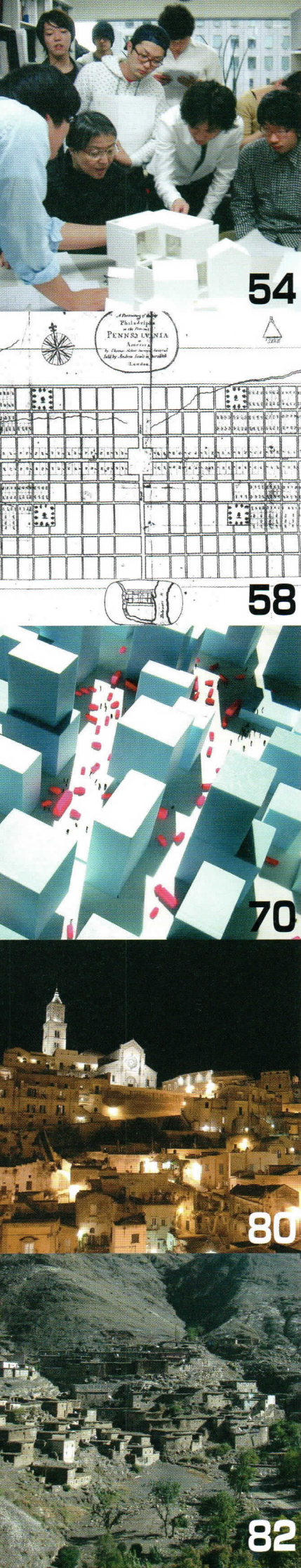
40



44



48



NICHE 目次

連載企画

連載企画、研究室を訪ねて

- 52 1. まちづくり学科 / 野澤教授の研究室紹介
- 54 2. デザイン学科 / 木下教授の研究室紹介
- 56 3. 建築学科 / 野部教授の研究室紹介

建築デザイン特論

- 58 萩原俊一 「都市デザインと建築」

Around the World

- 66 片桐和也 「アメリカからメキシコ、そして日本へ」
- 70 橋本しのぶ 「イタリヤからの便り オランダ留学のその後」

NICHE 取材

- 74 高齢者を魅了する、今話題の百貨店経営者に聞く ダイシン百貨店
西山敷社長

NICHE PASSPORT

- 78 1. 土田揚裕子「ヨーロッパの茅葺き建築の旅」
- 80 2. 殿村勇貴「外を愛するイタリアの文化。街並を求めて」
- 81 3. 増田康治「タイ・ラオスの寺院建築を巡る」
- 82 4. 宮坂瑞穂「モロッコ、イスラム都市を巡る」

NICHE GALLERY

- 86 1. 澤崎宏「平城宮跡会場 全体整備計画」
- 90 2. 東海林弘靖
「新千歳空港新国際線旅客ターミナルビル照明デザインについて」
- 94 3. 加藤匡毅「宇宙エレベーターからの視点」
- 98 4. 矢田和弘 松江歴史館
- 100 5. 小椋祥司 デンタルクリニック

新任教員の挨拶

- 102 1. 建築学科、河合直人教授
- 102 2. 建築デザイン学科 飯島直樹教授
- 103 3. 建築デザイン学科 富永祥子准教授
- 103 4. 建築デザイン学科 笥淳夫教授
- 104 5. まちづくり学科 宮村正光教授
- 104 6. まちづくり学科 篠沢健太准教授

また会う日まで（退職教員の挨拶）

- 105 1. 宮澤 健二教授
- 106 2. 大橋 一正教授
- 107 3. 大塚 毅 准教授
- 108 4. 安原 治機教授
- 109 5. 東 正則教授

建築学科ホームページ

新建築学部紹介

- 127 2010 年度 各研究室の在籍者名簿
- 128 2009 年度 卒業設計・卒業研究題目
- 134 表紙デザインコンセプト 広告案内 編集後記

工学院大学建築系学科同窓会誌 NICHE（ニッチ）2011 VOL.34

●発行日 2011 年 3 月 31 日 ●発行 / 工学院大学建築系学科同窓会 会長 加藤 隆弘

●住所 / 163-8677 東京都新宿区西新宿 1-24-2 電話 03-3342-1211（内線）2746 谷口研究室

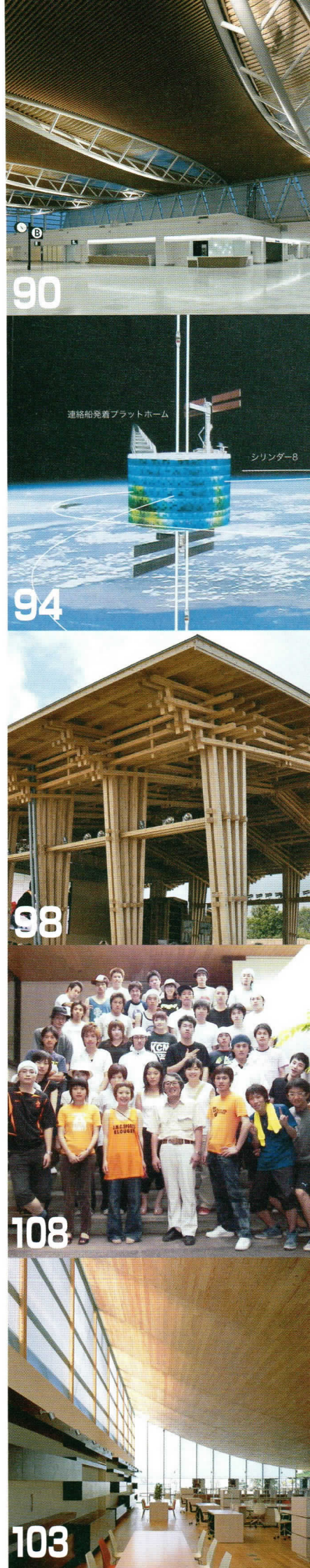
●編集長 / 大場光博

●編集委員 / 谷口宗彦、楠昭、加藤隆弘、伊藤真人、鈴木敏彦、西川豊宏、大塚篤、高木雅行、鰐坂誠之、横田彩子、山崎文久

NICHE CONTENTS

Serialization plan		A serial project and the laboratory are visited.
52	City planning subject	Prof. Nozawa's laboratory introduction
54	Design subject	Prof. Kinoshita's laboratory introduction
56	Architectonics department	Prof. Nobe's laboratory introduction
		Urban Design and Architecture
58	Shun' ichi Hagiwara Ph.D. in Social Science (Major in Urban and Regional Planning and Minor in Regional Economics) Professor Emeritus, Hosei University Adjunct Professor, Michigan State University	
		Around the World
66	From U.S.A. to Japan via Mexico	Kazuya Katagiri , Architect
70	A letter from Italy ~ After going abroad to study at the Netherlands ~	Shinobu Hashimoto , Architect
		NICHE comments
74	The senior citizens are impressed Report of Manager at Department Store of the current topic.	Hiroshi Nishiyama President of Daishin Department Store
		NICHE PASSPORT
78	Yuko Taage " Living under Thatchered Roofs "	
80	Yuki Tonomura " The World Biggest Living Room "	
81	Koji Masuda " Touring round Temples in Thailand and La "	
82	Mizuho Miyasaka " Visiting Four Major Moroccan Cities "	
		NICHE GALLAY 2011
86	Overall Planning for Heijokyo Capital Ruin - The 1,300th Anniversary of Capital Relocation to Nara -	Hiroshi Sawazaki
90	Grand Illumination Design for International Terminal, New Chitose International Airport, Hokkaido Designed by	Hiroyasu Shoji , Lighting Designer, LIGHTDESIGN, INC.
94	A View from Space Elevator Designed by	Masaki Kato , GEOGRAPH
98	A Unique Museum Specialized in Matsue Clan in Edo Period Historical Museum of Matsue Designed by	Kazuhiro Yada , Kankyo Keikaku Kenchiku Kenkyujo
100	A Design for Dental Clinic Designed by	Shoji Ogura , Forest Architect & Associates
		The new teacher's greeting
102	Architectonics Department	Professor Naoto Kawai
102	Architectural design subject	Professor Naoki Iijima
103	Architectural design subject	Associate Professor Hiroko Tominaga
103	Architectural design subject	Professor Atsuo Kakehi
104	City planning subject	Professor Masamitsu Miyamura
104	City planning subject	Professor Kenta Shinosawa
		The Retirement teacher's greeting
105	Professor Kenji Miyazawa	
106	Professor Kazumasa Ohashi	
107	Associate Professor Tsuyoshi Ootsuka	
108	Professor Haruki Yasuhara	
109	Professor Masanori Azum	
110	Introduction of Architectonics Department Homepage	
119	New Department of Architecture introduction	
127	Fiscal year 2010 A list of people is include	
128	Fiscal year 2009 Graduation design title comments & Graduation research title	
134	Cover design concept / Advertising guide / Editor's note	

- 編集協力 / 藤井彩加 (工学院大学大学院修士 1 年)、渡辺ちひろ (同大学院修士 1 年)
- 表紙デザイン / 池谷高浩 (同大学院修士 2 年)
- 建築系学科同窓会年会費 (郵便振込 4,000 円 / VISA カード引き落とし 3,000 円)
- 本文デザイン・印刷 / 研精堂印刷株式会社



90

94

98

108

103

確認申請は 住宅性能評価センターへ 正確・迅速・丁寧な対応を、お約束します。

■建築確認

業務区域：宮城県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都（島しょ部を除く）、神奈川県、新潟県、富山県、石川県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県、鳥取県、島根県、広島県、山口県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県及び鹿児島県の全域

■住宅性能評価

■【フラット35】適合証明

■住宅瑕疵担保責任保険検査

■長期優良住宅

■住宅版エコポイント

業務区域：日本全域

出張所新規開設！

千葉県松戸市（平成 23 年春）
福岡県久留米市（平成 23 年年内）



■本社：※1階が kinko's です
東京都新宿区新宿 1-7-1 新宿 171 ビル 3 階 / TEL: 03-5367-8730 (代表)

□北関東地区出張所：栃木県宇都宮市中河原町 3-19 宇都宮セントラルビル 5 階
TEL: 028-610-7140

□西関東地区出張所：東京都町田市原町田 4-1-11 大塚プラザビル 8 階
TEL: 042-709-0420

□山陰地区出張所：島根県出雲市平田町 140-13
TEL: 0853-62-5931

□西九州地区出張所：長崎県佐世保市三浦町 1-13 三浦教会前ビル 8 階
TEL: 0956-42-5401

□南九州地区出張所：鹿児島県鹿児島市中央町 9-10 創夢第一ビル 4 階
TEL: 099-299-1200

代表取締役・田野邊 幸裕は、工学院大学建築学科の卒業生です。現在多数の卒業生がスタッフとして活躍しています。新卒、20-30代の一級建築士の方、建築基準適合判定資格者の方、住宅性能評価センターで審査者・検査員として働いてみませんか？当社では安心して働いていただける環境が整っています。まずは、担当：宮田（平成 15 年修了）または菊池（昭和 51 年卒）電話：03-5367-8730 までご連絡ください。



国土交通大臣 指定確認検査機関 / 国土交通大臣 登録住宅性能評価機関 / 住宅金融支援機構 協定指定機関 / 住宅瑕疵担保責任保険検査機関 / 国土交通大臣 登録建築物調査機関

株式会社 住宅性能評価センター

www.seinouhyouka.co.jp

住宅性能評価センター 検索

構造計算適合性判定のご指名は 株式会社 建築構造センターへ！！

信頼

過去1,836件の判定実績が信頼の証です。

※平成19年8月～平成22年12月までの判定件数

迅速

的確な審査業務により、判定日数短縮を図ります。

充実

15都県の判定が8事務所で行えます。

※島根県、長崎県は県所在事務所または東京事務所での判定となります。

業務指定

青森県	秋田県	宮城県	山形県	福島県
群馬県	栃木県	埼玉県	東京都	神奈川県
鳥取県	島根県	長崎県	宮崎県	鹿児島県

新事務所を近日オープン予定です。

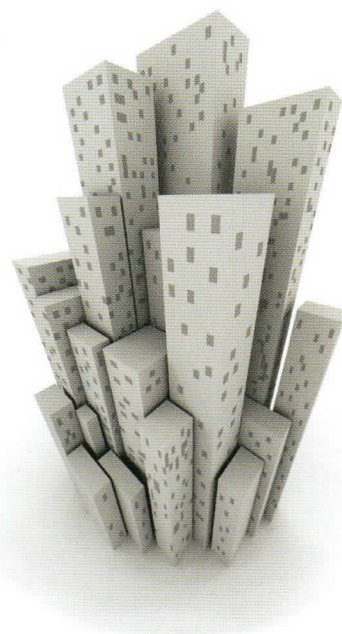
池袋事務所	千葉事務所
沖縄事務所	愛知事務所

平成22年2月から耐震診断等評価業務を開始しました。

業務区域 日本全国

事務局と連絡先 東北事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町2-10-28
カメイ仙台グリーンシティ4階
TEL : 022-726-5885



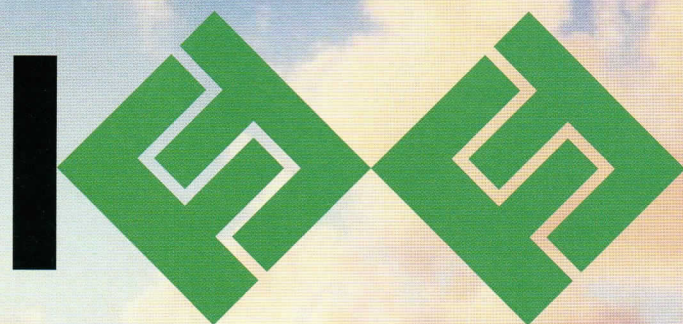
代表取締役社長 田野邊 幸裕 (建築学科 昭和44年卒)
常務取締役 加藤 隆弘 (建築学科 昭和52年卒)
取締役 平野 久雄 (建築学科 昭和41年卒)

本社 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-1-2 白鳥ビル2階
TEL : 03-6413-5777
[http : //www.kozocenter.co.jp](http://www.kozocenter.co.jp)
東北事務所 〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町2-10-28 カメイ仙台グリーンシティ4階
TEL : 022-726-5885
福島事務所 〒963-8004 福島県郡山市中町11-5 やまのいビル1003号室
TEL : 024-921-5777
神奈川事務所 〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸2-10-39 日総第5ビル3階
TEL : 045-534-7773

山陰事務所 〒690-0874 島根県松江市中原町6番地
TEL : 0852-60-0144
長崎事務所 〒850-0033 長崎県長崎市万才町6-33 高木ビル501号室
TEL : 095-829-5222
宮崎事務所 〒880-0866 宮崎県宮崎市川原町5-10 ミネックス川原8階
TEL : 0985-73-9477
南九州事務所 〒890-0024 鹿児島県鹿児島市中央町9-10 創夢第一ビル4階
TEL : 099-299-1203

水面に放たれたエネルギーが、
力強く、幾重にも波紋を描いていくように。
創り上げたひとつひとつの建設物が、
一人ひとりのゆたかな暮らしを拡げていく。
そんな街づくりをすすめていくことが、
創業以来100年にわたって変わることのない
“F=FUJITA”の仕事です。
想像を超える創造力で、
果てしなく広がる未来の起点になる。
私たちは、100年目のフジタです。

2010年、おかげさまでフジタは創業100周年。



ANNIVERSARY

次の100年を築く。

FUJITA

www.fujita.co.jp

PRの為にはトータルソリューションが大切です。



企業・製品ブランディング

セールスプロモーション

広告デザイン制作

WEB サイト構築・運用

基幹系システム開発・運用

販促コンサルティング

ITコンサルティング



Japan Joint Solutions

日本ジョイントソリューションズ 株式会社

www.jjss.co.jp

社名 日本ジョイントソリューションズ株式会社 (JJSS) Japan Joint Solutions Co.,Ltd.

所在地 〒107-0062 東京都港区南青山 5-6-6 Maison Blanche 14F

TEL : 03-5464-0113 (代) FAX : 020-4663-9836 MAIL : contact@jjss.co.jp

設立 2004 年 3 月

資本金 2,000 万円

代表取締役社長 杉山敏美 (山口ふるさと大使)



つながりの結び目

工学院大学建築系学科同窓会会長

加藤 隆弘

1978年 工学院大学1部建築学科卒業
東京都立玉川高等学校出身

私は、昨年5月30日、朝焼けがしたこの日、新宿校舎で開催された建築系学科同窓会総会で、田野邊幸裕氏(昭和44年卒)のあとを引き継ぎ、同窓会の会長に選出されました。

私の在学中の所属研究室は山下司研究室です。学生時代は建築の秘めた可能性をひたすら追い求めていたように思います。私が卒業した頃の社会情勢は今と似て、決してよいものではありませんでした。就職は大いに悩みましたが、波多江健郎先生の事務所に入りました。

建築の世界はその時々社会情勢に左右され、翻弄されるものだと強く感じたものでした。時代の流れはその時々においていろいろな波があります。その波のつながりが、あるときは荒波で引きちぎれそうな時もありますが、しかし、結果としてその荒波がかえって強い結び目となるものです。

同窓会の会長を受けるにあたり、私の職責は、同窓生同士がさらに強いつながりとなるような結び目の役割を果たし、このつながりが綿々とつながるようにすることと考えています。



新たなステップ

工学院大学の建築教育は本年大きく変わりました。日本で始めて設置された建築学部のもと、まちづくり学科、建築学科、建築デザイン学科の3学科に編成変えました。もちろん、伝統ある二部も健在で、多くの学生が夜間に学んでいます。このような新しい体制のもと、先生方の布陣も代わり、新しい先生方も数多く増えました。その結果、今年は従来より多くの受験生を得ることができ、勢いある建築学部になっているように感じられます。

新しい同窓会誌

今回、充実した同窓会誌にするために、新たに編集スタッフが増員され、新しい取組みのもとに同窓会誌「NICHE」が発刊されました。在校生が海外に目を向けることも多く、同窓生も実際に海外で仕事をするが増え、外国人と共同の仕事の機会も多くなったことに対する一つの対応として、同窓会誌での英文併記を標準化しました。これによりダイレクトに海外で活用することも可能となりました。表紙のデザインは、毎年コンペにより選んでいます。今年も優れた17の応募案の中から池谷君(修士2年)の作品が選出されました。

新しい学術交流

二人の同窓生のつながりにより、海外の2大学と学術交流協定の締結を行うことができました。一つはベトナムのダナン工科大学で、田野邊幸裕氏がきっかけを作り、もう一つはミラノ工科大学で、鈴木敏彦氏がきっかけを作り本学と協定



ベトナム、ダナン工科大学との親善交流 2010年5月3日

を結ぶことができました。特にダナン工科大学には締結にあわせ、本学学生を含め14名のツアーを組み、現地で研究発表等による国際交流を行いました。

今後の取組み

学園創立125周年記念事業

学園の事業計画の一環として、創立125周年にあわせ、八王子キャンパスに総合教育棟の新設、既存建物の建替えなどの計画があります。これらは学生の勉学環境充実のためであり、建設資金の一部は同窓生の募金によってまかなわれます。この事業のために同窓生の支援協力をお願いします。

校友会全国大会

今年10月8日(土)9日(日)に校友会の全国大会が埼玉で開催されます。8日の記念式典と祝賀会は新宿校舎で行われます。建築系学科同窓会としても、各研究室、クラブ、サークルの集いなども同時に行い、多くの同窓生が集まる良きつながりの一つの節目になるように願っています。是非ご参加ください。

学生支援

同窓会では、昨年より同窓会の賛助会員制度が発足しました。現在2社(日建学院、総合資格)が賛助会員です。この2社は資格取得の総合会社あり、同窓会はこの2社と協力し合い、在学生の為に特別な資格講座を編成・提供し資格取得を目指させています。

結び

今年3月に大学では、同窓生5名の先生方が定年により退官されました。東正則先生、大塚毅先生、大橋一正先生、宮澤健二先生、安原治機先生です。長きに渡り本学のためにご指導くださりありがとうございました。

最後に、前会長であった田野邊幸裕氏は、会長在任3期9年にわたる期間中、私たち同窓生をリードしてくださいました。その功績は多大であり、感謝することであることを結びの言葉にいたします。

Greetings from President of Alumni Association

It is my honour and pleasure to say a few words to you as the President of Alumni Association, Department of Architecture, Kogakuin University.

Our department is on the move, which is probably the most dynamic in the history of the department. It will be independent from the other departments under the Faculty of Engineering and to form the Faculty of Architecture, under which there will be three major academic segments for studying Architecture in general, Cityscape Designing and Architectural Designing. In order to establish its position as one of the important hub universities in the region of East Asia, we have welcomed six new professors with a wide variety of experiences and achievements. The efforts have borne fruit when we had more test-takers than previous years.

Talking about "Niche", annual magazine exclusively edited for the members, the editorial organisation has been renewed to make it more interesting and international. As the first step, "Niche" will be partly bilingual; Japanese with English abstracts.

It is also worth mentioning here is the new partnership with two foreign universities; Il Politecnico di Milano and the University of Da Nang in Viet Nam. Each of the partnership was made possible by the effort of two graduates; Professor Toshihiko Suzuki and Mr. Yukihiro Tanobe. Especially with the University of Da Nang, 14 delegates including students traveled to the city to sign an agreement for academic partnership with the Vietnamese counterpart.

All in all, I believe that year 2011 should be earmarked as not only the new beginning of our department but also the new development of Kogakuin University as a whole. As the president of alumni association, I would like to send congratulatory messages to all of you.

建築教育の「新しい風」を起こす 建築学部

長澤 泰 工学院大学副学長、建築学部長（2011年4月就任）

工学院大学は、ついに2011年4月「建築学部」を開設します。明治政府が建築学科を工学部内に設置して以来、初めての出来事です。地震国日本では、建築物の「耐震性」が重視されますし、使いやすい「機能性」も大切です。工学の持つ科学的合理性を追求することは必要なことです。しかし、本来、建築の持つ「芸術性」や「社会性」は工学を超えていますし、国家や地域の「文化性」の象徴でもあります。これからは地球環境への配慮、建築廃棄物の処理、省エネ対策も重視され、環境にやさしい建築を模索せねばなりません。これらの問題は工学技術だけでなく、社会の法律や制度などにも関連します。「建築学部」を創ることにより、工学部教育のなかでは実現が難しかった学問分野、例えば「美学」、「社会学」、「心理学」、「法学」、「歴史学」、「地理学」、「福祉学」「言語学」など新しい分野の採用が容易になります。「建築学部」は、現在の「建築学科」と「建築都市デザイン学科」の二学科を再編し、新しい分野を加え、「まちづくり学科」「建築学科」「建築デザイン学科」の三学科で構成されます。このように、従来の固定的な「建築」の殻を破って、「新しい風」を送り込みます。

別の見方をしてみましょう。新学部では、空間スケール軸の広がりを実現します。従来の建築の枠組みに加え、家具やインテリアなど小さなスケール、逆にランドスケープ、地域など大きなスケールを扱う領域が現れます。例えば、建築デザイン学科では、今まで家政学系で扱ってきたインテリアデザインを建築と関係づけて深く学べます。また、まちづくり学科では、建築物が主要な構成要素になる集合体「まち」のあり方や創り方を学べます。

建築学科では、構造・材料・設備・生産・計画といった伝統的な建築学分野をさらに深く学び、これからの社会の要請に即した建築を探求します。

「ハード」-「ソフト」がもう一つの軸です。建築は「箱モノ」とも呼ばれて、ハードな「もの」のデザインが中心でした。建築学部では、ソフトの方面にも領域を伸ばします。プロジェクトやイベントのマネジメントやプロデュースする「こと」のデザインも扱います。「まち」は、人々が日々の生活をおくる場所を提供しますので、この少子高齢社会の「まち」では、こども達やお年寄りへの配慮を特に考えねばなりません。福祉住環境の分野はこのような問題に挑戦します。また、自然災害や犯罪から人々の生活を守る安全な都市空間の実現を学べます。

「入学」のかたちも変えました。「数学」は受験必修科目ではありません。従来は学科を指定して受験していましたが、「建築学部」自体の受験が可能です。入学した学生はすべて1・2年次では共通カリキュラムで基礎的教育を受けます。ご承知のように、実際の建築分野は若者が考えているよりもずっと広いものです。2年次修了時に広範囲な建築学から自分の進みたい分野の学科を選べます。学科指定した学生も他学科へこの段階で変更できます。「建築学部」では、入学直後から建築学と教養科目の基礎を履修します。3・4年次になり、自己の興味や将来の方向性が少し固まった段階でも、必要な教養科目をとれる用にカリキュラムの編成変えをしました。

建築業界不況時になぜ「建築学部」開設なのか?とよ

く聞かれます。工学院大学では、以上のような発想で10年以上も前から着実に構想を固め、準備をしてきましたので、たまたま開設時期に世の中が不況になったに過ぎません。さらに、建築学部では建築を取り巻く周辺分野まで視野に入れていますので、従来の建築業界だけでなく、思いがけない新しい業種まで、その就職先にできるような教育を目指しています。

どうぞ新「建築学部」をご支援ください。
※新建築学部紹介は111ページ参照ください。

「 建 築 学 部 」 専 任 教 員 配 置 表

2011年4月1日現在

まちづくり学科	都市デザイン	倉田 直道 教授
		野澤 康 教授
		遠藤 新 准教授
	ランドスケープデザイン	篠沢 健太 准教授
	安心・安全	久田 嘉章 教授
		宮村 正光 教授
		三好 勝則 特専教授
		村上 正浩 准教授
	環境共生	中島 祐輔 准教授
		西川 豊広 准教授
建築学科	建築計画	内田 祥哉 特任教授
		長澤 泰 教授
		山下てつろう教授
		鈴木 敏彦 教授
	建築構造	河合 直人 教授
		近藤 龍哉 准教授
		小野里憲一 准教授
		山下 哲郎 准教授
	建築生産	吉田 倬郎 教授
		阿部 道彦 教授
		遠藤 和義 教授
		田村 雅紀 准教授
	建築設備	宇田川光弘 教授
		野部 達夫 教授
		柳 宇 教授
建築デザイン学科	建築デザイン	谷口 宗彦 教授
		澤岡 清秀 教授
		木下 庸子 教授
		中村 勉 特専教授
	インテリアデザイン	飯島 直樹 教授
		西森 陸雄 准教授
		富永 祥子 准教授
	福祉住環境デザイン	筧 淳夫 教授
		赤木 徹也 准教授
	保存・再生デザイン	後藤 治 教授
		藤森 照信 教授
		中島 智章 准教授

THE FIRST SCOOLOF ARCHITECTURE IN JAPAN WILL BRING "WIND OF CHANGE"

Yasushi NAGASAWA, Vice President, Kogakuin University / Dean, School of Architecture (to be officially assigned in April 2011) /Professor, Department of Architecture

Kogakuin University proudly announces that it will officially inaugurate "School of Architecture" in coming April, 2011. It is an epoch-making achievement because all the architectural studies have been integrated with the studies in Faculty of Engineering without exception since the dawn of modern era approximately 130 years ago.

This conceptual change implies significantly because designing architecture often calls for scientific and technological approach, i.e., durability, functionality and sustainability to name but a few. That said, some of its aspects -- artistic expression and social compatibility -- are not within the realm of technology and natural science. Also, architecture sometimes symbolizes native culture and lifestyle. Additionally, we have to take a judicial side of architecture into account especially in producing actual buildings in villages and cities.

Kogakuin University has stepped up further to restructure the current academic organization comprised of Architectural Studies and Architecture / Urban Designing. From the beginning of the new academic year in 2011, the new school will include three departments, namely Townscape Planning, Architectural Studies and Architectural Designing. In so doing, we are committed to inspiring the next in architectural studies that should go beyond the existing borders.

I have been often asked the reason why our university would restructure the architectural department under the glooming economic climate. To answer the question, it is fair to say that it is just a coincidence. We have worked for more than a decade to achieve the goal that I am talking about with pride and joy.

On behalf of all those involved, I would like to declare that the School of Architecture will be aiming at providing a wide spectrum of in-depth education to respond to the demands from the students as well as the industry and society in equal terms.

*Please refer to page 111.



工学院大学副学長
・工学部長・建築学科教授 長澤 泰

学 歴
1944年 福島県生まれ、千葉県本籍、東京都育ち
1968年 東京大学工学部建築学科卒業、工学士取得、卒業設計賞(辰野賞)受賞、学生デザイン賞金賞受賞
1968年 芦原義信建築設計研究所所員
1974年 厚生省病院管理研究所研究員
1977年 北ロンドン工科大学医療施設研究部門留学(ブリティッシュカウンシル奨学生)
1980年 厚生省病院管理研究所主任研究官
1989年 東京大学工学部助教授
1993年 建築学会賞(論文)受賞
1993年 東京大学工学部教授(1996年－大学院工学系研究科教授)
2007年 工学院大学工学部教授(2008年－同主任教授)
2009年－2011年1月現在
工学院大学副学長・工学部長・建築学科教授

「建築学部誕生記念連続シンポジウム」 4回連続で開催

第1回

「建築をつくる楽しさを語り合う」

赤瀬川原平氏×南伸坊氏×藤森照信教授

2010年5月25日(火)18:00~19:45



天気快晴、新宿キャンパス1階アトリウムで開催され500名を超える来場者。前衛美術家の赤瀬川原平氏、イラストレーターの南伸坊氏、藤森照信教授の3名が「建築の楽しさを語り合う」をテーマに、トークセッションを繰り広げました。顔ぶれを見ただけでも楽しさが伝わりそうです。屋根の上にタンポポが生えている赤瀬川さんの不思議な自宅「タンポポハウス」。



長年にわたり「路上観察学会」「縄文建築団」で建物を観察することや、つくることの楽しさを分かち合ってきた3名



第1回
建築をつくる楽しさを語り合う
赤瀬川 原平 × 南 伸坊 × 藤森 照信

平成22年5月25日(火) 18:00~19:45
17:00より先着順受付
工学院大学 新宿キャンパス 1Fアトリウム

予約不要 / 入場無料(定員500名)
※参加者多数の場合、入場をお断りすることがあります

●プログラム

- 17:00 受付開始
- 18:00 開会あいさつ (工学院大学新学長 吉澤 幸)
- 18:10 赤瀬川 原平、南 伸坊、藤森 照信によるトークセッション
「建築をつくる楽しさを語り合う」
- 19:40 閉会あいさつ (工学院大学学長 水野 朝樹)
- 19:45 閉会

●主催
工学院大学

第2回 開催予定 平成22年7月6日(木)
at 工学院大学 新宿キャンパス

トークセッション 講師 藤森 照信 南 伸坊

高橋 秀

第1回 建築をつくる楽しさを語り合う

赤瀬川 原平 × 南 伸坊 × 藤森 照信

平成22年5月25日(火) 18:00~19:45

工学院大学 新宿キャンパス 1Fアトリウム

予約不要 / 入場無料(定員500名)

※参加者多数の場合、入場をお断りすることがあります

●プログラム

- 17:00 受付開始
- 18:00 開会あいさつ (工学院大学新学長 吉澤 幸)
- 18:10 赤瀬川 原平、南 伸坊、藤森 照信によるトークセッション
「建築をつくる楽しさを語り合う」
- 19:40 閉会あいさつ (工学院大学学長 水野 朝樹)
- 19:45 閉会

●主催
工学院大学

第2回 開催予定 平成22年7月6日(木)
at 工学院大学 新宿キャンパス

トークセッション 講師 藤森 照信 南 伸坊

日本初『建築学部』誕生
記念連続シンポジウム

設置申請中

お問い合わせ 工学院大学事務局
TEL 03-3340-0126
E-MAIL techinfo@ic.ac.jp

による軽快なトークに、来場者は時間も忘れ、聞き入っていました。縦横無尽な楽しいトークセッションでした。

出演者プロフィール

- 赤瀬川原平氏：前衛芸術家、随筆家、作家。ポップアートの先駆的活動を展開し、「父が消えた」で芥川賞、「雪野」で野間文学新人賞を受賞。
- 南伸坊氏：イラストレーター、エッセイスト、漫画家。雑誌「ガロ」の編集長。
- 藤森照信教授：工学院大学建築学科教授、建築家、建築史家。日本建築学全論文賞・作品賞の両方の受賞経歴をもつ。専門の建築史学にとどまらず広範な内容の著作も多数発表。多くの建築作品も手掛けの一方、展覧会を開催するなど幅広い活動を行っている。

第3回

「21世紀の建築」

伊東豊雄氏×藤森照信教授×木下庸子教授

2010年9月27日(月)18:00~19:45

前回同様、新宿キャンパス3階アーバンテックホールで開催。まず現代建築を牽引する建築家、伊東豊雄氏による講演。スクリーンいっぱいに作品が紹介され大変わかり易い。引き続き出席者によりトークセッション「21世紀の建築」をテーマに、伊東氏と藤森照信教授、木下庸子教授の3名により実施。「現在の建築はどこでも同じ均質である。これをどうしたらいいのかが自分のこれからの課題」と伊東氏は語る。伊東氏が手掛ける現在進行中のプロジェクトの話題をはじめ、世界を舞台に活躍する3名が「21世紀の建築」について話を繰り広げた。一方では、藤森先生設計の太さ30センチの竹で支えられた空中の茶室や、台湾の湖に浮かび漂うコンクリート製の茶室も紹介。想像外の作品で会場を驚かせた。



●伊東豊雄氏講演●

「これからの建築を考える」

●トークセッション●「21世紀の建築」

伊東 豊雄 × 藤森 照信 × 木下 庸子

伊東 豊雄氏 講演者

藤森 照信 講演者

木下 庸子 講演者

平成22年9月27日(月) 18:00~19:45
17:00より先着受付

工学院大学 新宿キャンパス 3Fアーバンテックホール

予約不要/入場無料(定員250名)
※参加費多数の場合、入場をお断りすることがあります

●プログラム

- 17:00 受付開始
- 18:00 開会あいさつ
- 18:10 伊東 豊雄氏による講演
「これからの建築を考える」
- 19:00 伊東 豊雄、藤森 照信、木下 庸子による
トークセッション「21世紀の建築」
- 19:40 閉会あいさつ
- 19:45 閉会

●主催

工学院大学

第4回 開催予定 平成22年11月15日(月)
at 工学院大学 新宿キャンパス

トーク セッション

藤本 壮介【建築家】 藤田 勇 講演

日本初「建築学部」誕生
記念連続シンポジウム

第3回

1103-5677
東京板橋区駒場1-15-2
tel:03-3340-0126
e-mail: info@topolink.co.jp

工学院大学

出演者プロフィール

●伊東豊雄氏：現代建築を牽引する一人。新たな建築概念のもと、さまざまな作品を発表し、近年は海外での活躍も目立つ。数々の受賞歴のほか、最近ではインテリアデザインなども手掛け、その活躍の場は多岐にわたる。

●木下庸子教授（建築家、工学院大学建築学科教授）は、海外で育ち、大学・大学院ともアメリカで建築を学んだ後、設計活動に従事。戸建住宅、集合住宅、オフィスなどさまざまな作品を発表、多数の受賞歴があり。設計活動のほか、教育活動にも力を注ぐ。

「建築表現の最先端」

2010年11月15日(月)18:00~19:45





日本初「建築学部」誕生

記念連続シンポジウム



武蔵野美術大学美術館 常設展

藤本壮介氏 演 **「Primitive Future」**

トークセッション **「建築表現の最先端」**
 藤本 壮介 × 藤森 照信 × 倉田 直道



藤本 壮介 氏
建築家
 1960年に東京都文京区生まれ。武蔵野美術大学建築学科を卒業後、1985年に渡米。1990年にニューヨークで設立した建築事務所「KEN YEANG ARCHITECTS」の代表取締役。2000年に帰国後、東京で建築事務所「KEN YEANG ARCHITECTS」を設立。2005年に武蔵野美術大学建築学科の教授に就任。2010年に武蔵野美術大学建築学科の学長に就任。



藤森 照信 氏
建築家
 1942年に東京都生まれ。武蔵野美術大学建築学科を卒業後、1965年に渡米。1970年にニューヨークで設立した建築事務所「TERUMASA FUJIMORI ARCHITECTS」の代表取締役。2000年に帰国後、東京で建築事務所「TERUMASA FUJIMORI ARCHITECTS」を設立。2005年に武蔵野美術大学建築学科の教授に就任。2010年に武蔵野美術大学建築学科の学長に就任。



倉田 直道 氏
建築家
 1960年に東京都生まれ。武蔵野美術大学建築学科を卒業後、1985年に渡米。1990年にニューヨークで設立した建築事務所「NAOMICHI IKEDA ARCHITECTS」の代表取締役。2000年に帰国後、東京で建築事務所「NAOMICHI IKEDA ARCHITECTS」を設立。2005年に武蔵野美術大学建築学科の教授に就任。2010年に武蔵野美術大学建築学科の学長に就任。

平成22年11月15日(月)

18:00～19:45
17:00より先着観受付

工学院大学 新宿キャンパス 3Fアーバンテックホール

予約不要／入場無料(定員250名)

※参加者多数の場合、入場をお断りすることがあります

●プログラム

- 17:00 受付開始
- 18:00 開会あいさつ
- 18:10 藤本 壮介氏による講演「Primitive Future」
- 19:00 藤本 壮介氏、藤森 照信、倉田 直道によるトークセッション「建築表現の最先端」
- 19:40 開会あいさつ
- 19:45 閉会



●主催

工学院大学

ACCESS
東武池袋線 新宿駅西口徒歩10分
 有明線 茗荷谷駅徒歩10分
 丸の内線 茗荷谷駅徒歩10分
 丸の内線 茗荷谷駅徒歩10分

11月14日
 東京都新宿区西新宿1-24-2
 tel.03-3340-0126
 e-mail: info@egkai.jp

第4回

工学院大学

●藤本 壮介 氏：建築家。2000年に藤本壮介建築設計事務所を設立。2005年「AR Award」を受賞。2006年度最優秀賞を含めて3年連続で受賞し、一躍注目を浴びる。「Primitive Future」は、2008年の建築書のベストセラーとなりました。自然と人工物の狭間にある新しい形と空間を探索する建築は、更に進化する事を期待される。

(写真 / 工学院大学広報部。資料 / 学園広報誌 窓 166 号、建築系学科 Home Page。取材 / NICHE 編集部)

Topics 1

学士院会員内田祥哉先生が 特任教授に就任

昨年9月、内田祥哉先生が、本学の特任教授に就任されました。10月14日には「保存と活用」というテーマで、就任記念の講義をいただきましたことを、ご存知の方も多いと思います。

内田先生のご専門は建築構法で、1977年には「建築生産のオープンシステムに関する研究」で、建築学会賞（論文賞）を受賞されています。住宅、公共建築、オフィスビルなどに大きく影響を与える成果であるとともに、その背景に、建築の国際的な動向や日本の建築の伝統や特徴に対する鋭い観察力を見ることができます。

先生は、設計においても「佐賀県立博物館」「佐賀県立九州陶磁文化館」で、2度建築学会賞（作品賞）を受賞されています。ご自身の設計活動とともに、研究室から優れた設計者が輩出していることにも注目ください。

1996年には「建築構法計画に関する一連の研究および設計活動による建築界への貢献」により建築学会対象を受賞されています。永年の研究・設計活動が高く評価されたものと言えますが、その後も今日まで、なお活発な活動をつづけています。就任記念講義の「保存と活用」では、ロングライフビル推進協会（BELCA）のBELCA賞審査委員会の委員長のお立場から、BELCA賞受賞建築が持っている多様な価値を語ってくださいました。別の機会には、木造建築、建築とガラス、モジュラーコーディネーションについても、示唆に富んだ講演をされています。



先生は、昨年12月、学士院会員に就任されました。ますますお忙しく過ごされているご様子です。今なお若さあふれる先生のご活動から、これからも多くのことを学ばせていただけることを、嬉しく思っています。

（記 吉田倬郎 工学部建築学科教授）

Mr. Yoshichika Uchida Appointed as Adjunct Professor

Mr. Yoshichika Uchida was appointed as Adjunct Professor of Kogakuin University last September. As his first work in our university, he offered a special lecture on "Preservation and Use of Existing Architecture" on the 14th of October, 2010.

Professor Uchida has a long career as a researcher and an architect. His keen eyes to the international trend in architecture shed unique lights to the Japanese traditional architecture. He was also awarded twice by the Architectural Institute of Japan for his superb designing works.

Currently a member of Working Group for Long-life Buildings, he has specific views on the relationship between glazing and architecture as well as modular coordination.

Professor Uchida, still young at heart, will surely contribute to the further improvement in educational quality at Kogakuin University.

Topics 2

農林計画学会賞を受賞されましたのでご報告します。

東 正則

このたび「滞在型市民農園の普及及び啓発に寄与した業績」が、農村計画学会の発展に顕著な貢献をしたとして、農村計画学会賞（業績）を授与されました。

思いがけない学会賞であり、大変光栄に思っております。これもひとえに皆様方のご支援の賜であり、心より御礼申し上げます。調査にあたりご協力をいただいた全国各地の市町村の担当者及び農家の方々にも、この場をお借りしてご報告と御礼を申し上げます。

Topics 3

2010年度建築学会賞(論文)受賞

このたび「広帯域強震動の効率的な計算手法の開発と応用に関する一連の研究」により、2010年度日本建築学会論文賞を受賞いたしました。本研究は設計用入力地震動のサイト波の策定等に活用する広周期帯域の強震動を効率的に計算する諸手法を開発し、その建築分野での利活用の成果をまとめたものです。研究の遂行には、多くの方々のご指導・ご協力を頂き、特に工学院大学の学生諸君や卒業生の協力無しには成し得ませんでした。心より御礼申し上げます。なお2010年5月31日には建築会館にて贈呈式が行われ(写真1)、7月2日には本学にて「受賞を祝い記念講演」と「祝賀会」を開催頂きました。また9月10日には富山大学(五福キャンパス)で行われる2010年度日本建築学会大会〔北陸〕にて受賞記念講演を行わせて頂きました。

Receiving the Prize of AIJ 2010 (Research Theses Division)

In 2010, I received the Prize of AIJ (Architectural Institute of Japan) in the categories of research theses for "A series of studies on developments and applications of efficient methods for simulating broadband strong ground motions". Picture shows the award ceremony at the AIJ building on May 31, 2010. In addition, I had opportunities

to deliver lectures on the theses at Kokakuin University on July 2, and at Toyama University on September 10 during the AIJ fall meeting. I would like to thank many people, especially my university professors and the students of Kogakuin University.



贈呈式の様子(建築会館にて)



久田 嘉章

略歴

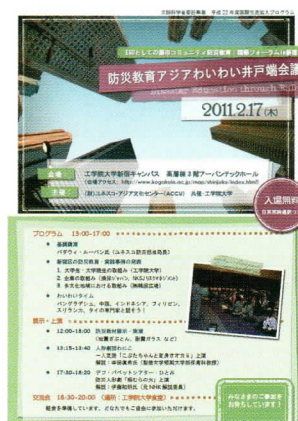
1984 早稲田大学理工学部建築学科 卒業
1986 早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻 修了
1989 早稲田大学工学部建築学科 研究助手(3年間)
1991 工学博士 早稲田大学
1993 南カリフォルニア大学地球科学科 研究助手(2年間)
1995 工学院大学建築学科 講師・助教授を経て現在に至る

Yoshiaki Hisada

1984: Bachelor of Engineering, Department of Architecture, Waseda University
1986: Master of Engineering, Department of Architecture, Waseda University
1989: Research Associate, Department of Architecture, Waseda University
1991: Doctor of Engineering, Department of Architecture, Waseda University
1993: Research Associate, Department of Earth Science, University of Southern California
Present: Professor, Department of Architecture, Kogakuin University

Topics 4

「ESDとしての都市コミュニティ防災教育:国際フォーラムin 新宿」を本学で開催:2011年2月16日~18日



「国連ESD(持続発展教育)の10年」展開において、重要な分野である防災教育をテーマとした国際フォーラムが本学で開催された。本フォーラムは、ユネスコ・アジア文化センター主催・工学院大学共催により実現したものであり、アジア諸国(バングラデシュ、中国、インドネシア、フィリピン、スリランカ、タイ)の防災教育専門家、フランス・ユネスコ防災担当局長、本学建築系学科の久田教授・村上准教授など国内の防災専門家、教育機関・企業・自治体関係者などが参加した。2月17日には、「防災教育アジアわいわい井戸端会議」をアーバンテックホールで開催し、ユネスコ防災担当局長による基調講演、日本やアジア各国の防災教育の取り組みの紹介、ESDとしての防災教育のあり方に関するパネルディスカッションなどが盛大に行われた。(取材 NICHE編集部)

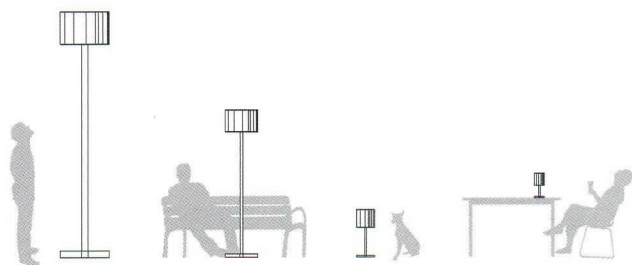


The Asia-Pacific Cultural for UNESCO will organize "International Forum in Shinjuku: Urban Community-based Disaster Education through ESD" in Tokyo, Japan from 16 to 18 February 2011 together with Kogakuin University. This forum is expected to promote disaster education in the communities in each of the participants, as well as to develop international and communal network, by sharing examples of good practices and educational materials in order to prepare for natural disasters.

Topics 5

鈴木敏彦教授／Green Good Design Award 2010を受賞

MAWARIDOROは自然エネルギーをLED照明に用いるデザイン家電です。そよ風が吹くとランプシェードが軽快に回転して風力で発電します。同時に太陽光がバッテリーを充電するので、夜間はコードレスなガーデンライトとして使うことができます。このたび、環境の持続可能性に貢献するプロダクトとして、2010年グリーングッドデザイン賞のベスト100製品に選定されました。グッドデザインアワードとはヨーロッパセンターとシカゴ学術振興協会が主催する賞で、その歴史は1950年にエーロ・サーリネンとチャールズ&レイ・イームズの設立にさかのぼります。本年は46カ国から1000を超えるプロダクト、建築、ランドスケープと都市計画プロジェクトの応募が集まり、BMWのスポーツカーや、レンゾ・ピアノ設計のカリフォルニア博物館もサステイナブルなデザインに選ばれました。この功績に対して学園創立123周年記念表彰式において大学表彰を授かりました。



Professor Toshihiko Suzuki Won "Green Good Design Award 2010".

Professor Toshihiko Suzuki, who began teaching urban studies at Kogakuin University in 2010, won the prestigious "Green Good Design Award 2010" with his MAWARIDORO LED-oriented eco-friendly lights. The shade of the lamp turns to generate electricity when blown by wind. Also, the photovoltaic system charges battery, making it possible to use the light as nocturnal garden illumination without consuming plug-in electricity.

The award is organised and sponsored by the European Center for Architecture Art Design and Urban Studies and the Chicago Athenaeum. It has more than 60 years of history that can go back to 1950 when the Center was founded by Eero Saarinen and Charles & Ray Eames. For the 2010 award, there were more than 1,000 applications from 46 countries including outstanding designs of consumer products, architecture, landscape and urban planning.



鈴木 敏彦

学歴
1984 工学院大学建築学科修士課程修了
略歴
1984-1990 黒川紀章建築都市設計事務所
1985-1986 フランス新都市開発公社EPA marne
1992-1993 文化庁芸術家インターン
1995-1999 早稲田大学建築学専攻博士課程
1999 東北芸術工科大学生産デザイン学科助教授
2007 首都大学東京システムデザイン学部准教授
2010 首都大学東京システムデザイン学部客員教授
2010 工学院大学建築都市デザイン学科 教授

Toshihiko Suzuki
1984 Graduated in Architecture from Kogakuin Univ.
1984 - 90 Kisho Kurokawa Architect & Associates
1985 - 86 EPA marne (Marne la vallee, France)
1992 - 93 Artist fellowship, the Agency for Cultural Affairs
1995 - 99 Doctoral programme, Waseda Univ.
1999 - Associate professor, Department of Product Design, Tohoku University of Art and Design
2007 - 10 Associate professor, Department of System Design, Tokyo Metropolitan Univ.
2010 - Guest professor, Department of System Design, Tokyo Metropolitan Univ.
Professor, Department of Architecture, Kogakuin Univ.

Topics 6

グッドデザイン賞連続受賞

工学院大学建築環境コース、東研究室でサステナブルな生態・農業都市を学び、建築だけではなく、ランドスケープの世界に足を踏み入れました。工学院卒業後に北欧では、NOVAという北欧全国が結集した機関が運営する修士プログラムU F U G (Urban Forestry and Urban Greening) に、日本人として初めて招聘されました。そこでは、全世界の多様な分野のプロフェッショナルの人たちと共に、“環境都市”をランドスケープの視点で学びました。修士修了後、オーストラリア、シドニーのランドスケープ事務所に就職し、住宅、集合住宅、公共広場、ホテル、病院、森林、河川、都市計画などを、オセアニアだけでなく、アジア、中東アラブ、ヨーロッパで行いました。昨年日本へ戻り、父の建築会社に(株)ロスフィー東京事務所を設立し、ランドスケープデザインを始めました。海外留学や就職の合間に、父などと一緒に研究を始めていた環境プロダクトの“フラクタルひよけ”は、2009-2010のグッドデザイン賞金賞を受賞することができました。建築と自然回復プログラムを導入したランドスケープデザイン、地中別荘”ヴィラ・ファニーも同年グッドデザイン賞を受賞。2010-2011年に設計されたマルヤガーデンズ屋上庭園”ソラニワ”はランドスケープデザインとして、グッドデザイン賞を獲得しています。東京事務所としては、日本国内だけではなく、国外でもフラクタルひよけの開発、設計、企画、販売、施工を行いながら、ランドスケープデザイン、都市計画を含め、ヒーリングガーデンなどの設計も行っています。

その他に、まちづくりのコンサルティング、ファシリテーター(住民と住民を繋ぐ役割)を行っています。九州新幹線の開通する鹿児島では、衰退する商店街”天文館”復興のため、“Wheel Sharing(車輪共有)”プロジェクトも立ち上げました。車輪のシェアをすることで、回遊性と滞留性を生み出す手法を開発しています。2010年には、NPO法人日中ランドスケープフォーラムの理事、コンサルティング部のリーダーとして都市緑化の新しい姿を、各環境関連の専門(屋上緑化、壁面緑化、ドライミストなど)の人たちと共に活動しています。同年、フラクタルひよけは、感性価値創造フェアに選ばれ、香港で発表。2011年には、マカオ政府の招待で環境展で発表します。

このように、工学院大学の建築学科からスタートした私は、“環境”や“農業”を学び、よりよい都市を繋ぐランドスケープデザインを行いながらも、人に優しい環境プロダクトを開発することになりました。

ランドスケープに関して、日本では、欧米、他のアジア諸国に比べ、学部や学科も未だになく、その仕事の多様性から一般的に受け入れられることは少ないです。お仕事としても建築や土木業界、造園業界などで“お庭”として済まされる事が多く、業界としては厳しい現状にあります。一方でアメリカなどは、ランドスケープの分野こそが、環境社会における“唯一の成長産業”として期待しているのも事実です。これからも、世界へ目を向け、日本のランドスケープ業界を盛り上げるために精進していきたいと思っています。

私を育ててくれた工学院大学は、建築学部を創設し、まちづくり学科もできました。これを機に、世界へ誇れる学生が旅立

つことを期待しています。そして日本の建築産業が多様性を増し、ランドスケープを受け入れ、健康的で持続可能な町並みや、新しい日本の風景が作られていくことを祈っています。

JAPAN GOOD DESIGN THREE TIME AWARD WINNING 2009-2011

LOS FEE established the architecture firm in 1983 and was joined by landscape architect Kiyohito Tamotsu in 2007 after returning from overseas.

With him, we started the company as supporters of a new style of ecologically focused architecture, landscape architecture and product designs which are framed within Japanese style design approach. Creating on the interdisciplinary team in architecture, landscape architecture, urban design, horticulture and social design we cross traditional design boundaries scoped 4 design aspects: social, function, ecology and economy.

Our clients have discovered that this unique approach with creativity and the new technologies we encompass to illuminate complex urban and environmental issues. Our one of the design innovations is COMOLEVI “Forest Canopy” which is awarded JAPAN GOOD DESIGN GOLD AWARD recognized as passive ecological products to mitigate global warming issues.



保 清人

略 歴

工学院大学 環境建築コース 東研究室 2005年卒
デンマーク王立コペンハーゲン大学、スウェーデン農業科学大学
ランドスケーププランニング修士、風景画修士論文
オーストラリア、シドニー
・mcgregor+coxall landscape architecture and urban design
・Taylor Brammer landscape architects
project: オーストラリア国立美術館、迎賓館、病院、商業施設、集合住宅、個人住宅、ドバイのランドスケープ、ヒーリングガーデンデザインなど多数
e-mail : mail@losfee.jp
HP : <http://www.losfee.jp>



Director (TOKYO OFFICE)

Tamotsu, Kiyohito

- ・Senior Landscape Architect
- ・Senior Registered Architect
- ・Master of Landscape Planning
- ・NPO JCLF Director
- ・Columnist of “Under’s High”
- ・Certified Ikebana & Chado

- ・Master of Landscape Planning in University of Copenhagen and Swedish University of Agricultural Sciences.
- ・Bachelor Degree of Engineering, Architecture (Environment designs) in Kogakuin University.
- ・Project: Wheel Sharing(Social Designs), Villa designs(architecture), Comolevi Designs (product), and Sora-niwa (roof garden) designs.
- ・Oversea work in Sydney, Australia
Mcgregor+coxall landscape architecture and urban design
Taylor Brammer landscape architects
- ・Column Under’s High Landscape Report and etc.



JIA中国建築大賞受賞/Slow House

江角 俊則

風土への順応性や、その土地に引き継がれてきた生活の知恵を現代の暮らしの器として再構築した住まいです。日射、風などの自然エネルギーを活用するため、緑化屋根の深い庇と南北に谷風を通す「風の道」を設けています。また薪割りや畑仕事など額に汗するスローライフが求められ、土間を暮らしの中心としています。

平屋の場合夏期屋根材からの放熱が問題となりますが、緑化屋根の下では一年を通して快適な室内環境が実現しました。

環境負荷の小さな建築を、ローテク設備によって実現しています。自動制御される高性能な設備機器が人の感覚をスポイルすることと比較して、かまど・五右衛門風呂・薪ストーブなどのアナログ設備には使用に応じた熟練があり、スキルアップが暮らしの楽しみとなります。火のある暮らしは地方に伝承される古来からのスタイルです。



JIA Chugoku International Architectural Award Winning Design / Slow House Designed by Toshinori Esumi

As its name may imply, the house was designed for spending slow life. It features a variety of traditional technologies and equipment, namely furnaces and wood stove, which requires regular firewood chopping. It takes some time to fully learn the daily household works but the designer is convinced that the task makes life more interesting and the owner should feel closer to the surrounding nature. The "low tech" Slow House will cause the minimum impact on the nature and environment.



建築家 江角 俊則

略歴

1982 工学院大学 建築学科 卒業
1985～2007 (有)江角建築事務所
2007～ 江角アトリエ
1993～ 島根県立大学短期大学部 非常勤講師
1999～ 米子工業高等専門学校 非常勤講師

mail : to.e-atelier@izumo-net.ne.jp

Topics 8

東京デザイナーズウィーク2010学生展

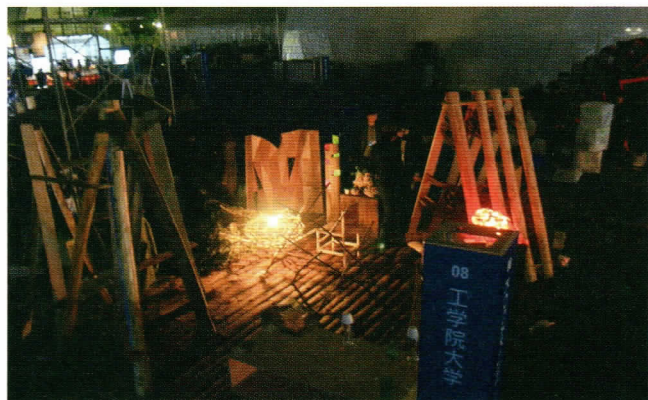


2010年10月29日(金)～11月3日(水)、明治神宮外苑にて開催された東京デザイナーズウィーク学生展にて、工学院大学は初参加にして学校賞を受賞しました。学生展のテーマは絶滅危惧種です。35校の多くが絶滅動物や温暖化を取り上げる中で、プロダクトデザイン特論の受講者14名は林業に着目しました。「林業は絶滅危惧種だ。現在の日本の森林は十分な手入れがなされず荒廃し、発揮すべき機能が生かされていない。また保育作業や伐採・搬出にかかる費用も回収できず、後継者不足の問題が起きている」そこで「葉堆積煉瓦」や「裂けた木の部屋」など斬新な作品提案を行いました。樹皮を敷き詰めた工学院大学ブースにはさわやかな森の香りが漂い、訪れた来場者の心を和ませていました。授業から学外発表に至るまで、環境に対するデザインの役割を熟考する機会となりました。

出展者(建築学専攻修士1年):小沢翔太、加藤雅史、坂本達典、佐藤央一、島川太尊、清水基宏、高田裕志、竹重剛毅、田中美香、殿村勇貴、長谷川公彦、三平真樹子、山田善紀、渡辺ちひろ

指導教員: 鈴木敏彦、原田智章

制作協力: 財団法人氷川保善会 理事長 石田光正、フォレスト森の会議 会長 石田芳英



Student Exhibition, Tokyo Designer's Week 2010

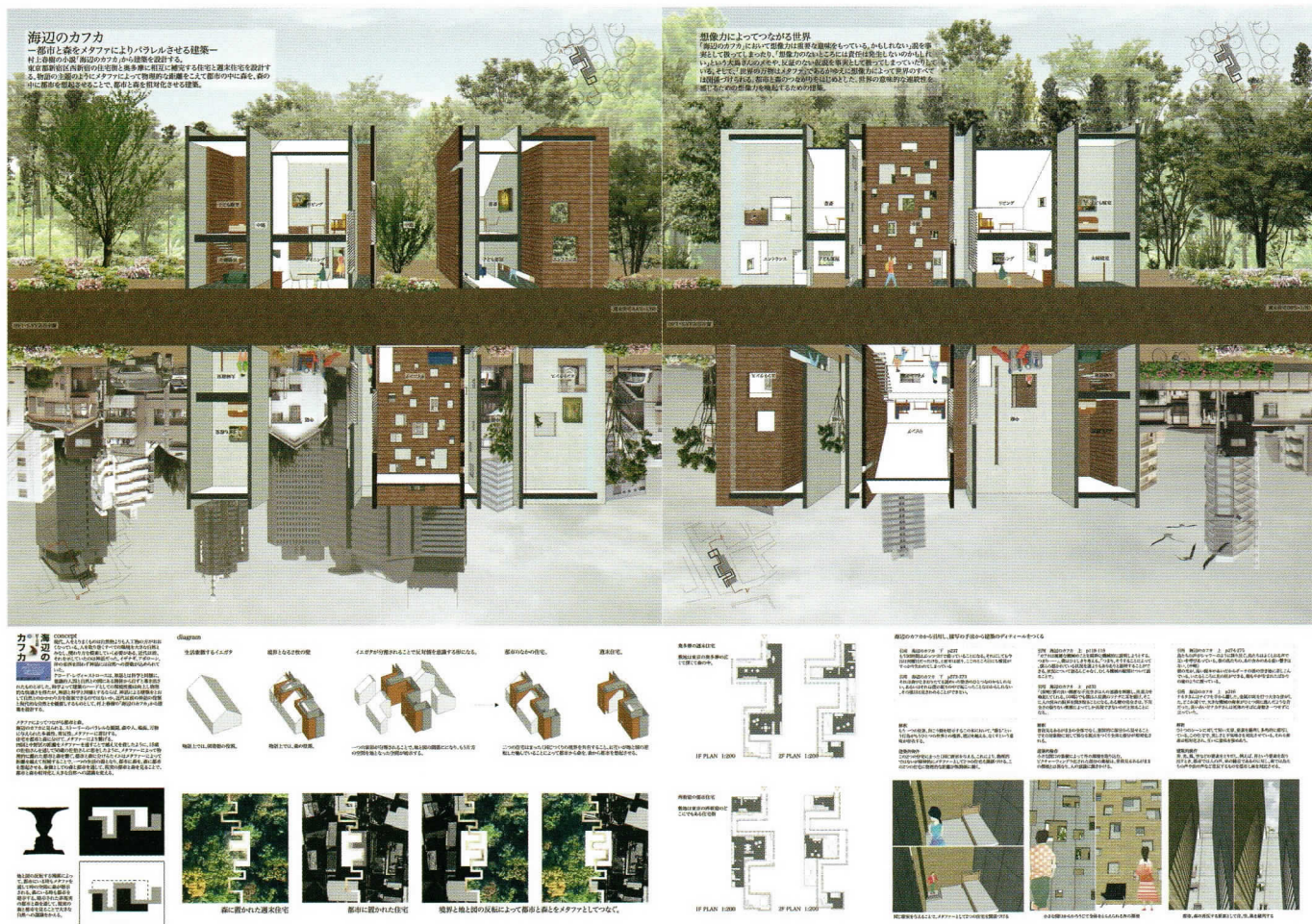
Kogakuin University participated for the first time in Tokyo Designer's Week 2010, held in Meiji Jingu Gaien from the 29th of October to the 3rd of November, 2010. Reception of "School Award" consolidated our university's unique position of state-of-the-art way of thinking. Our stand attracted a number of visitors thanks to an interesting presentation on forest industry.

Fourteen students specialised in advanced product design drew their attention to forest industry as "endangered industrial species". Their presentation was not only unique in its viewpoint but also it had several suggestions for sustainable development of the industry in the future.

Topics 9

建築学専攻の院生が、 みごと日本建築学会設計競技「最優秀賞」を受賞

日本建築学会始まって以来、最多応募数の設計競技



日本建築学会が主催する2010年度支部共通事業設計競技(課題:「大きな自然に呼応する建築」)において、建築学専攻修士2年の鈴木高敏(澤岡研究室)さんと修士1年の坂本達典(谷口研究室)さんの設計作品が、見事「最優秀賞」を勝ち取りました。

このコンペには、全国の支部から433作品もの応募があり、支部審査、全国第1次審査を経て、9月9日の富山大学で開催された日本建築学会全国大会で最終審査(伊東豊雄審査委員長)が行われ、ここで最優秀賞に選定されたものです。

受賞作品の「海辺のカフカー都市と森をメタファによりパラレルさせる建築―」は、村上春樹の小説「海辺のカフカ」の主題のようにメタファによって物理的な距離をこえて、都市の中に森を、森の中に都市を想起させることで都市と森を相対化させる建築を構想し、これにより新たな建築空間を提案しています。



喜びの受賞、鈴木・坂本両君

日本建築学会 2010年度支部共通事業設計競技応募要項
<http://www.aij.or.jp/jpn/symposium/2010/100709.pdf>

Topics 10

ベトナム、ダナン工科大学との協定調印

工学院大学建築学系同窓会では、ベトナムのダナン工科大学ナム学長と兼ねてより親交のあった前同窓会会長田野邊幸裕氏の提案により、両大学の学術交流を目的とした関係構築のための検討を重ねられてきました。2010年4月30日、工学院大学とダナン工科大学の学術交流協定書が締結されました。また、ダナン工科大学との親善交流の第一歩として5月3日、4日、国際交流事業としてベトナムに赴きダナン工科大学にて「ダナン工科大学親善交流」がおこなわれました。

初の親善交流の内容としては、3日に両校の教授陣によるシンポジウム、並びに両校学生たちによる研究発表会（ポスターセッション）が行われ、翌4日には古都ホイアンを訪れ、両校の教授陣、学生同士によって、まちなみの保全についての意見交換が活発になされました。

Partnership Agreement with University of Da Nang, University of Technology, Viet Nam

Thanks to the tremendous effort of bridging between the two universities by Mr. Yukihiko Tanabe, the former president of the alumni association, Kogakuin University officially entered the academic partnership with University of Da Nang, Viet Nam on the 30th of April, 2010.

As the very first footprint, our delegates visited Da Nang as an international academic exchange programme on the 3rd and 4th of the following month. A panel discussion with professors representing the two universities was organised on the first day. The professors and students visited ancient town of Hoi An to exchange views on cityscape preservation on Day two.



4月30日の調印式。調印後に握手を交す両校学長。



両校の教師陣によるシンポジウムの様子。



日本、ベトナムの街並みについて意見交換を行う様子。

Topics 11

1級建築士合格者＜全国大学別ランキング ベスト20位＞

国土交通省：建築技術教育普及センター発表 2010年工学院大学・全国第4位に躍進！！

2004年(平成16)			2005年(平成17)			2006年(平成18)			2007年(平成19)			2008年(平成20)			2009年(平成21)			2010年(平成22)		
ランク	大学名	合格者数	大学名	合格者数	大学名	合格者数	大学名	合格者数	大学名	合格者数	大学名	合格者数	大学名	合格者数	大学名	合格者数	大学名	合格者数	大学名	合格者数
1	日本大学	370	日本大学	333	日本大学	205	日本大学	243	日本大学	262	日本大学	273	日本大学	239	日本大学	239	日本大学	239	日本大学	239
2	東京理科大学	147	芝浦工業大学	125	東京理科大学	101	東京理科大学	131	東京理科大学	147	東京理科大学	187	東京理科大学	139	東京理科大学	139	東京理科大学	139	東京理科大学	139
3	近畿大学	133	近畿大学	122	芝浦工業大学	82	京都工芸繊維大学	90	京都工芸繊維大学	97	早稲田大学	124	早稲田大学	100	芝浦工業大学	100	芝浦工業大学	100	芝浦工業大学	100
4	芝浦工業大学	129	東京理科大学	121	早稲田大学	82	早稲田大学	89	早稲田大学	89	早稲田大学	124	早稲田大学	81	工学院大学	81	工学院大学	81	工学院大学	81
5	工学院大学	110	早稲田大学	119	近畿大学	73	芝浦工業大学	72	芝浦工業大学	72	芝浦工業大学	95	工学院大学	80	近畿大学	80	近畿大学	80	近畿大学	80
6	早稲田大学	100	工学院大学	92	工学院大学	63	工学院大学	71	工学院大学	71	工学院大学	82	工学院大学	77	大阪工業大学	77	大阪工業大学	77	大阪工業大学	77
7	明治大学	99	大阪工業大学	80	京都工芸繊維大学	56	近畿大学	70	近畿大学	70	明治大学	82	明治大学	73	法政大学	73	法政大学	73	法政大学	73
8	大阪工業大学	96	明治大学	80	大阪工業大学	56	関西大学	57	関西大学	57	大阪工業大学	68	大阪工業大学	68	法政大学	79	法政大学	79	法政大学	79
9	東海大学	78	東海大学	74	明治大学	48	大阪工業大学	55	大阪工業大学	55	神戸大学	64	神戸大学	64	東海大学	74	東海大学	74	東海大学	74
10	武蔵工業大学	76	神戸大学	70	法政大学	46	明治大学	52	名城大学	52	名城大学	63	名城大学	62	明治大学	74	明治大学	74	明治大学	74
11	神戸大学	71	金沢工業大学	65	法政大学	44	法政大学	47	法政大学	47	法政大学	60	法政大学	62	京都大学	72	京都大学	72	京都大学	72
12	金沢工業大学	67	関西大学	64	名城大学	43	名城大学	47	名城大学	47	名城大学	58	名城大学	68	金沢工業大学	57	金沢工業大学	57	金沢工業大学	57
13	名古屋工業大学	65	愛知工業大学	63	関西大学	42	神戸大学	45	神戸大学	45	東海大学	56	東海大学	59	東海大学	59	東海大学	59	東海大学	59
13	京都大学	65	法政大学	62	千葉大学	42	広島大学	44	広島大学	44	千葉大学	55	千葉大学	60	千葉大学	60	千葉大学	60	千葉大学	60
15	法政大学	64	名城大学	60	東海大学	42	東海大学	43	東海大学	43	武蔵工業大学	52	武蔵工業大学	54	武蔵工業大学	54	武蔵工業大学	54	武蔵工業大学	54
16	関西大学	57	京都大学	55	東京工業大学	42	千葉大学	35	千葉大学	35	名古屋工業大学	50	名古屋工業大学	50	名古屋工業大学	50	名古屋工業大学	50	名古屋工業大学	50
17	京都工芸繊維大学	56	千葉大学	51	神戸大学	38	神戸大学	38	武蔵工業大学	35	愛知工業大学	46	愛知工業大学	49	愛知工業大学	49	愛知工業大学	49	愛知工業大学	49
18	関東学院大学	55	武蔵工業大学	50	広島工業大学	35	広島工業大学	35	九州大学	34	横浜国立大学	43	横浜国立大学	44	横浜国立大学	44	横浜国立大学	44	横浜国立大学	44
19	東京電機大学	54	広島工業大学	47	大阪市立大学	35	大阪市立大学	34	東京工業大学	34	大阪大学	43	大阪大学	43	大阪大学	43	大阪大学	43	大阪大学	43
20	千葉大学	50	東京工業大学	46	愛知工業大学	34	名古屋工業大学	34	名古屋工業大学	34	東京工業大学	43	東京工業大学	40	東京工業大学	40	東京工業大学	40	東京工業大学	40

工学院大学工学部建築系学科公開講座 「新しい建築構造の世界」開催報告

2011年度建築学部創設決定を記念して、上記の公開講座を開催しました。はじめに学部授業「建築特別講義」の1コマを利用し、プレ公開講座とし、その後7回は完全な公開講座として開催致しました。

会場出席者は、延べ1460名でした。また同時にライブおよび収録後インターネット送信も行われ、インターネットでの視聴者を含めると相当の方にご覧いただきました。

資金的にもご支援いただきました学校法人工学院大学、主に広報活動活動として、建築系同窓会等26団体の後援協力を得ました。また、企画準備に協力頂いた本学名誉教授広澤先生、東京工業大学和田教授、講座実施に協力頂いた主に構造系の教員と同窓生の皆様、学生諸氏、また実際講演を担当頂いた学内外の講師の方々にも感謝申し上げます。

(記 宮澤健二)

建築系学科公開講座「建築特別講義」& 2011年度建築学部創設記念講演のご案内 主催：工学院大学建築系学科

No.1 「東京スカイツリーの構造設計と施工」

場 所：新習教室3階アーバンテックホール 273名収容可
新習教室西新館1-24-4、新習教室より徒歩5分
入王子駅より徒歩10分、八王子駅より徒歩10分

内容と予定時間
7月9日(金)

16:00 受付開始
16:30 開講式
16:40 司会挨拶
16:50 東京スカイツリーの構造設計と施工
17:00 東京スカイツリーの構造設計と施工
17:10 東京スカイツリーの構造設計と施工
17:20 東京スカイツリーの構造設計と施工
17:30 東京スカイツリーの構造設計と施工
17:40 東京スカイツリーの構造設計と施工
17:50 東京スカイツリーの構造設計と施工
18:00 東京スカイツリーの構造設計と施工
18:10 東京スカイツリーの構造設計と施工
18:20 東京スカイツリーの構造設計と施工
18:30 東京スカイツリーの構造設計と施工
18:40 東京スカイツリーの構造設計と施工
18:50 東京スカイツリーの構造設計と施工
19:00 東京スカイツリーの構造設計と施工
19:10 東京スカイツリーの構造設計と施工
19:20 東京スカイツリーの構造設計と施工
19:30 東京スカイツリーの構造設計と施工
19:40 東京スカイツリーの構造設計と施工
19:50 東京スカイツリーの構造設計と施工
20:00 終了

写真提供：(株)大林組

工学院大学工学部建築系学科公開講座「新しい建築構造の世界」のご案内 主催：工学院大学建築系学科

No.2 「新しい木構造の世界」

場 所：新習教室3階アーバンテックホール 273名収容可
新習教室西新館1-24-4、新習教室より徒歩5分
入王子駅より徒歩10分、八王子駅より徒歩10分

内容と予定時間
9月19日(日)

12:40 受付開始
13:00 開講式
13:10 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
13:20 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
13:30 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
13:40 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
13:50 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
14:00 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
14:10 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
14:20 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
14:30 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
14:40 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
14:50 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
15:00 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
15:10 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
15:20 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
15:30 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
15:40 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
15:50 木構造の歴史・構造と大規模・高層化
16:00 終了

写真：浅川剛

工学院大学工学部建築系学科公開講座「新しい建築構造の世界」のご案内 主催：工学院大学建築系学科

No.3 「保存と耐震改修」

場 所：新習教室3階アーバンテックホール 273名収容可
新習教室西新館1-24-4、新習教室より徒歩5分
入王子駅より徒歩10分、八王子駅より徒歩10分

内容と予定時間
10月8日(金)

16:40 受付開始
17:00 開講式
17:10 保存と耐震改修
17:20 保存と耐震改修
17:30 保存と耐震改修
17:40 保存と耐震改修
17:50 保存と耐震改修
18:00 保存と耐震改修
18:10 保存と耐震改修
18:20 保存と耐震改修
18:30 保存と耐震改修
18:40 保存と耐震改修
18:50 保存と耐震改修
19:00 保存と耐震改修
19:10 保存と耐震改修
19:20 保存と耐震改修
19:30 保存と耐震改修
19:40 保存と耐震改修
19:50 保存と耐震改修
20:00 終了

講演概要

参加者の皆様へ

工学院大学工学部建築系学科公開講座「新しい建築構造の世界」のご案内 主催：工学院大学建築系学科

No.4 「建築の形態と構造デザイン」

場 所：新習教室3階アーバンテックホール 273名収容可
新習教室西新館1-24-4、新習教室より徒歩5分
入王子駅より徒歩10分、八王子駅より徒歩10分

内容と予定時間
12月17日(日)

12:40 受付開始
13:00 開講式
13:10 建築の形態と構造デザイン
13:20 建築の形態と構造デザイン
13:30 建築の形態と構造デザイン
13:40 建築の形態と構造デザイン
13:50 建築の形態と構造デザイン
14:00 建築の形態と構造デザイン
14:10 建築の形態と構造デザイン
14:20 建築の形態と構造デザイン
14:30 建築の形態と構造デザイン
14:40 建築の形態と構造デザイン
14:50 建築の形態と構造デザイン
15:00 建築の形態と構造デザイン
15:10 建築の形態と構造デザイン
15:20 建築の形態と構造デザイン
15:30 建築の形態と構造デザイン
15:40 建築の形態と構造デザイン
15:50 建築の形態と構造デザイン
16:00 終了

講演概要

参加者の皆様へ

"A New World of Architectural Structures"

The series of the lectures gathered 1,460 attendants in total, which was simultaneously transmitted via internet. In

The open-school lectures were sponsored by Kogakuin University and supported by 26 architectural organisations including the alumni association of Department of Architecture. Also, it should be noted here that Mr. HiroSawa, emeritus professor of Kogakuin Univ., Mr. Owada, Professor of Tokyo Institute of Technology and others helped us plan the contents of the lectures. We would like to extend our gratitude for all of them for successful implementation.

[illegible]

工学院大学公開講座「新しい建築構造の世界」のご案内 主催：工学院大学建築系学科	
第7回「これからの耐震設計と地震防災」	
工学院大学 新宿校舎3階アーバンテックホール	
12月17日(金曜) 17時から20時 16時30分受付開始	
17:00～17:05	主催説明・司会 近藤雅樹(工学院大学)
17:05～17:55	講演① 地震動と防災 久田基彦(工学院大学)
17:55～18:45	講演② 日本の耐震技術の海外への応用・寺本隆雄(東京理科大学)
18:45～19:00	(休憩)
19:00～19:50	講演③ これからの耐震設計と 和田章(工学院大農工大学)
19:50～20:00	(この時間から10分後の受付開始)
20:00～20:30	公開講座後援挨拶 長澤浩(工学院大学大学院長・建築系部長)

Figure 1 consists of several parts. At the top left is a photograph of the Nishikawa Hotel, a multi-story building with a red and white facade. At the top right is a photograph of the hotel's interior, showing a large, modern building with a glass facade. Below these are four diagrams (a, b, c, d) showing the evacuation routes and the location of the hotel's entrance and exit. The diagrams are labeled with 'a', 'b', 'c', and 'd' and show the hotel's layout and the evacuation routes. The diagrams are labeled with 'a', 'b', 'c', and 'd' and show the hotel's layout and the evacuation routes. At the bottom left is a photograph of the hotel's interior, showing a large, modern building with a glass facade. At the bottom right is a photograph of the hotel's interior, showing a large, modern building with a glass facade.

テーマ『自然とともに暮らす』

最優秀賞	各部門1点	奨学金5万円
優秀賞	各部門2点	奨学金3万円
審査員特別賞	各部門5点以内	奨学金1万円

「絵の部門」最優秀賞「不便な家～スケルトンキューブ～ある家族の挑戦」高橋昂大（東京都立蔵前工業高等学校 3年）

不便な家～

スケルトンキューブ

～ある家族の挑戦

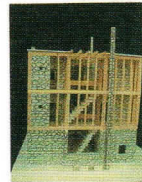
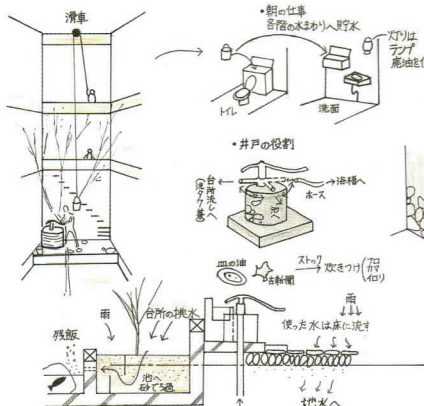
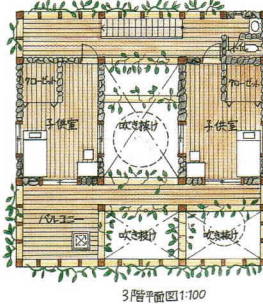
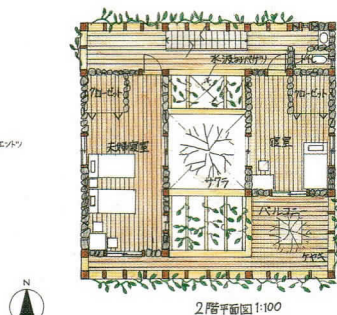
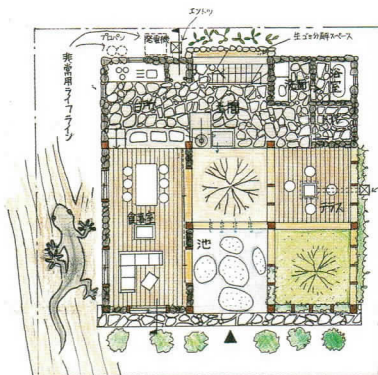
コンセプト

「自然と共存」するとはどういうことなのだろうか？
山間部や山奥などの別荘では自然を利用し、設立する事もたやすいかもしれない。
しかし、共生とは、自然をうまく利用することではないと思う。共に生きるとは、
相互の立場を考慮し、寄り合うことが重要だと考えた。
人間だけに都合のいいものではなく、私達も自然環境のために譲らなければならないものがある
と思います。
そこで、私は、人間が暮らす部分の限界を考えてみました。しかも、山奥や山奥ではなく、
現在私が住んでいる街をモデルとして現実的なチャレンジを提案します。

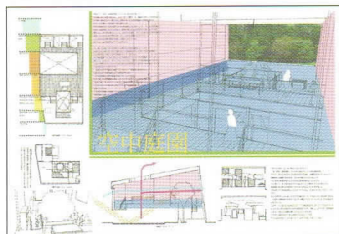
1階の主間の井戸を中心として、
ガス・水道・電気は一切使わずに生活する。
そのため以下の点を解決する。

- ・灯り → ランプを使う。油など
も燃料としてストック。
- ・給水 → 井戸水を飲料。
生活用水としても使用。
- ・排水 → 地盤でろ過して池へ
・冷暖房 → 特に夏の暑さ対策は
バーゴラや柱に植物が
絡みつき夏は日陰になる。
また風通しが良い。
暖房はイロリや壁炉で
暖をとる。落ち葉や
枯れ枝、ゴミなども
燃料にする。
大谷石の壁は断熱性に
優れていて表面に苔が
生え、湿度の調節も
行ってくれる。
ゴミ → ガマの灰やつぎや
肥料、魚の餌など

これらをシステムに機能させるには、
家族がそれぞれ水汲みなどの仕事を
分担しなければならない。
大人も子供も仕事や学校以外で
家族がサポートするため重要な役割を
持ち、自分の存在価値を確認し、
周囲の仲間とコミュニケーションが
生まれる。
春は桜の花が咲き、夏は緑に囲まれ、
秋は虫や蛙の音が響く。
冬はイロリを囲みお茶を飲む。
そんな生活にチャレンジしてみたい。



「絵の部門」審査員特別賞・澤岡清秀賞
「空中庭園」



浅野拳人（三重県立四日市工業高等学校 2年）

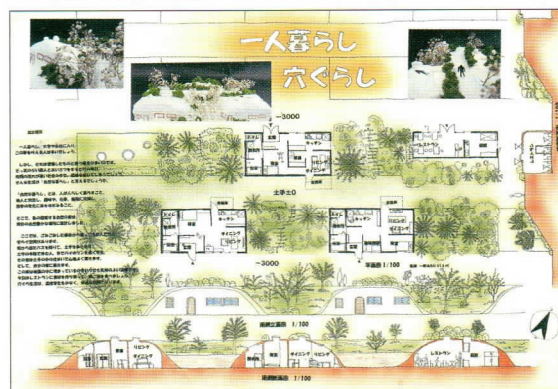
「絵の部門」審査員特別賞・藤木隆明賞
「自然とともに暮らす」



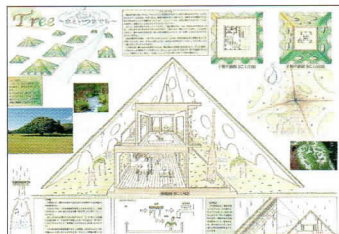
島原詩穂（京都府立伏見工業高等学校 3年）

「絵の部門」優秀賞
「一人暮らし 穴ぐらし」

井田葉月（静岡県立科学技術高等学校 3年）



「絵の部門」審査員特別賞・木下庸子賞
「Tree～水といつまでも～」



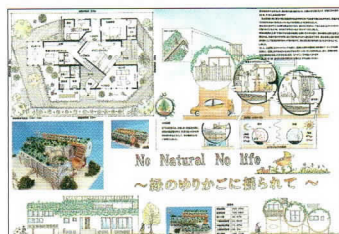
高島涼（静岡県立沼津工業高等学校 3年）

「絵の部門」審査員特別賞・西森陸雄賞
「木漏れ日の表情」



富岡瑞希（東京都立田無工業高等学校 3年）

「絵の部門」審査員特別賞・谷口宗彦賞
「No Natural No Life～緑のゆりかごに揺られて～」



望月夏帆（静岡県立科学技術高等学校 3年）

「絵の部門」選外佳作

「光と風 自然との共生」

伊藤雅規・千葉県立東総工業高等学校 3年

「forest house～自然の中の回廊～」

星野和也・埼玉県立春日工業高等学校 3年

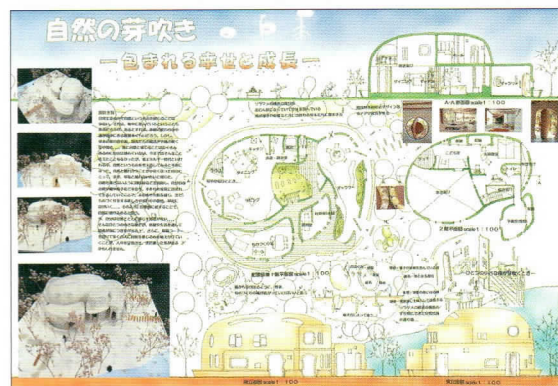
「水辺の家」

戸井田愛美・埼玉県立熊谷工業高等学校 1年

（各同賞内は氏名の五十音順です。）

「絵の部門」優秀賞

「自然の目吹き～包まれる幸せと成長～」海野洸哉（静岡県立科学技術高等学校 3年）



Topics 14

「七沢希望の丘初等学校」の設計でリーフ賞を受賞して

昨年10月にロンドンでリーフ賞(ヨーロッパ先進建築家フォーラム賞)の持続可能開発部門賞受賞式に出席しました。この建築賞は10年ほど前にヨーロッパの建築家に対する賞として出来たものですが、数年前からドバイのエミレーツがスポンサーになったため、全世界の建築家を対象とするように変わっています。日本では2008年に隈研吾さんが六本木のサントリー美術館で商業建築部門賞を受賞しています。今回は中村勉と同時に芝浦工大准教授の原田真宏さんの住宅とダブル受賞となりました。評者のスピーチを以下に示します。



七沢希望の丘初等学校

「持続可能な開発部門賞は持続性の高い人工的環境を創造するにあたって、物質とエネルギー消費における永続的でかつ効率的利用が可能な、新しい開発に焦点が当てられている。今年度は、審査員は素晴らしい建築で、省エネ型で、清潔感にあふれ、そしてうねった形態をした建物を選考した。そのプロジェクトは将来の数世代にわたってしっかり使い続けられる建物であるばかりか、これから後に続くものへの先例となるデザインであることが評価された。

七沢希望の丘初等学校は神奈川県大山の東、山間部と農村地域の間の里山にある。完成した建築は大変美しく、多様な教育に対応できる空間が生まれている。建物には雨水、下水、汚水、道路、熱エネルギーなどのインフラサービスを、自立的に地域内でまかなう仕組みが内蔵されている。最も感動的な点は、森から採取した新鮮空気を、ホット(クール)チューブで地中熱によって加温した後、二重床内に導入し、室内と床下で循環させる暖房システムである。

審査員たちはゼロカーボンデザインを採り入れながらも、大変巧みに周囲の自然に調和していること、そして建築が取り巻く環境と一体となっていることを高く評価した。

この素晴らしいプロジェクトに参加した全ての人たちに万感の祝辞を申し上げたい。このプロジェクトは、これからの持続可能性を追求する多くのプロジェクトにとって、疑いもなく模範となるプロジェクトであるといえる。」



建築学科特別専任教授 中村 勉

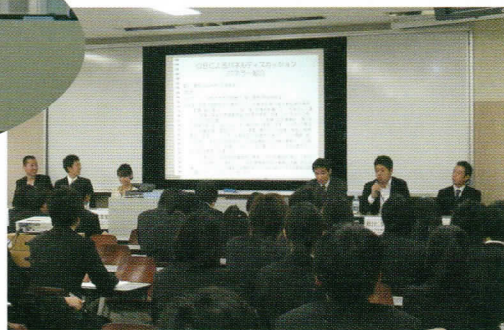
略歴
1946年生まれ
1964年 東京大学工学部建築学科卒業
1964年 (株)横総合計画事務所入社
1977年 (株)AUR 建築都市研究コンサルタント取締役副所長
1988年 (株)中村勉総合計画事務所 所長
2003年 ものづくり大学教授
2008年 ものづくり大学名誉教授

東京大学大学院・東北大学大学院 他に非常勤講師
2009年 工学院大学工学部建築学科特別専任
日本建築学会作品選奨・グッドデザイン賞・
公共建築賞優秀賞BCS建築賞など、受賞作品多数

Topics 15

今後の業界を担う 若手エンジニア(候補)へのメッセージ ～卒業生によるパネルディスカッション～

平成22年11月27日に工学院大学新宿校舎において第7回つのはづ会企画が催され、多くの卒業生、在校生が出席し、盛会となりました。今回は同企画の様子をご紹介します。



パネルディスカッションの様子

1. つのはづ会とは

つのはづ会の「つのはづ」とは、現在工学院大学新宿校舎の所在する場所をかつて「角管(つのはづ)」と呼んだことに由来しています。本会の目的は、中島康孝・大橋一正研究室の卒業生やその他の研究室卒業生間の永永い交流の場として昭和63年に設立され、今年で22年を迎えます。会員は平成22年10月1日現在、997人となり、世代を超えた交流の場として今日に至っております。主な催しとしては、隔年の総会、学年幹事会の他、今回ご紹介するパネルディスカッションが年末に毎年開催されています。

2. パネルディスカッションについて

環境設備系研究室の卒業生による在学生への知識、技術還元を提供したい思いと在学生の実務に関する情報収集の場を求める思いとが融合し、研究活動や就職活動の準備段階となる11～12月に恒例行事として開催され、今年で7回目になりました。パネラーには若手の卒業生を招き、実社会での経験や学生時代のエピソードなどを紹介してもらいます。また、近年、宇田川研究室、野部研究室、中島(裕)研究室からの参加もあり、環境設備系研究室における恒例行事になっています。

3. パネラー紹介

十分な知識と技術力を身につければ、将来応用が利くと思います。就職活動していた頃を振り返っても、まさか国土交通省で建築物の基準作りをする事になるとは夢にも思いませんでしたから!



山本 大介(やまもと だいすけ)

1999年3月卒業後(大橋研究室)、日比谷総合設備㈱にて工事管理業務、独立行政法人都市再生機構にての機械設備設計業務に従事し、現在は国土交通省住宅局建築指導課にて建築基準法等の技術基準規定策定業務に従事している。

日本における就職活動は特異で賛否両論様々な意見がありますが、短期間に様々な会社の業務内容や雰囲気自身の目で確認できるチャンスでもあると思います。



新川 隆将(しんかわ たかまさ)

2004年3月修了後(野部研究室)、㈱竹中工務店に入社、現在は新社員ローテーションの一環として設備工事施工管理業務、設計業務、各種設備検討業務に従事している。

学生のときにはこの建設業界が具体的にどのようなことを行っているのかが分りづらく、将来のイメージが沸きにくいかもしれません。



古川 悠(こがわ ゆう)

2007年3月修了後(野部研究室)、ダイダ㈱に入社、技術研究所において研究開発業務に従事している。

初めからことと決め付けずに、自分は今何がしたいのか、10年後の自分はどうなっていきたいのか、今のうちからたくさん想像を膨らませ、自分の働く姿をイメージしてください。



宮沢 祐香里(みやざわ ゆかり)

2006年3月卒業(大橋研究室)後、住商ビルマネージメント㈱に入社。テナントリーシング室に所属し住友商事が所有しているオフィスビルにテナントを誘致する営業業務に従事している。

就職の厳しい状況でご苦労されていると思いますが、続けていれば必ず実ると思うので頑張ってください!



上田 亮平(うへだ りょうへい)

2008年3月修了(中島祐輔研究室)後、㈱山武に入社。半年間の研修を経て、現在は計装営業1部に所属している。

自分に合う仕事って見つかる事は非常に難しいと思います。私の場合やりたい仕事とは少し違っていたけど入社して4年が経ってようやく自分の仕事に対してやりがいと楽しさが生まれました。



放生 孝弘(ほうじょう たかひろ)

2006年3月卒業(中島裕輔研)後、斎久工業㈱に入社。商業施設、病院、集合住宅等の新築、改修工事現場で衛生設備全般の工事管理業務に従事している。

今、取り組んでいる研究を大事にしてください。その過程で得た思考法・作業法は一生の財産だと思います。そして出来れば、研究を通して獲得したものを活かせる職業に就く努力をして下さい。



中村 北斗(なかむら ほくと)

2009年3月修了(野部研究室)後、㈱森村設計に入社。プロポーザル補助業務、設備設計及び積算の補助業務に従事しつつ研究委託業務として日本冷凍空調学会発表なども行っている。

4. パネルディスカッションの様子

環境設備系研究室に所属する現役生50名と卒業生35名(パネラー含む)の計85名の参加がありました。各パネラー紹介の後、現役学生から様々な質問がパネラーに向けられ、設備設計の仕事や施工現場での体験談、学生当時のエピソードなど盛り沢山。開始当初は緊張の雰囲気でしたが、討論が進むにつれて会場はますます熱くなっていました。

5. 懇親会の様子

飲食をしながらの懇親会。パネルディスカッションではおとなしかった卒業生が本領を発揮。その熱弁ぶりには、就職活動を控える現役生も呆然。現役の皆さん、社会のお話、いろいろ聞けたかな?卒業生の皆さん、最近の大学生の印象はいかがでしたか?そんなこんなで、日和佐氏(昭和46年卒業)による締めて今回は無事(?)終了しました。

Topics 16

建築系学科同窓会総会の報告

2010年5月30日(日曜日)午前10時30分～11時30分
工学院大学新宿キャンパス20階第6会議室、出席者31名



加藤隆弘同窓会会長

新宿キャンパスに同窓生が集まり、定刻に楠昭副会長が議長で開会。田野邊幸裕前同窓会会長が44期の説明。議案1、第44期(2009)の事業結果の報告(2009年度収支決算額：収入

8,417,142円、支出6,406,095円、次期繰越し収支差額2,011,047円)、続いて監査より決算報告がありました。次期の同窓会は新会長に加藤隆弘さんが就任し、新役員人事(下記参照)の提案、及び賛助会員制度や125周年企画等の説明があり、引き続き後藤利明理事より次年度の第45期(2010)事業計画の説明(2010年度予算額：収入6,551,047円、支出6,530,000円)がありました。前会長の田野邊さんの発案



で進められていたベトナム・ダナン工科大学との学術交流の調印式には、4月30日水野明哲学長並びに同窓生ら10名も参加して締結され、新しい交流の花が咲きました。1級建築士合格が全国の大学順位5位になり、新学部構想も2011年開設と間近になりました。最後に議案及び同窓会の役員新規人事について、全員の拍手をもって承認されました。

(取材/NICHE編集部)

工学院大学建築系学科同窓会 2011年度 運営委員会名簿

● 建築系学科同窓会 役員 (2011年2月20日現在)

(第45期役員/任期2010年4月1日～2013年3月31日の3年間)

顧問 北沢 興一、南迫哲也、高木雅行
田野邊幸裕、金尾武彦、計5人
会長 加藤 隆弘
副会長 (会長補佐) 谷口宗彦(校友会担当)
谷 政美(校友会担当)
(出版事業担当)大場光博
(メディア担当)大塚篤
(125周年事業担当)後藤敏明
(交流・支援事業担当)浅野賢一計6人
幹事 楠昭、鯉坂誠之、計2人
会計監査 宮澤健二、南雲正博、計2人
会計 柴田卓次、佐々木秀史、計2人
運営委員 関谷真一、田中正裕、鈴木敏彦、高橋一元
菊池一雄、斉藤敏博、高橋昭彦、菅家幹
伊藤真人、三好 薫、高城文一、神崎 健
佐藤保廣、望陀宣夫、板谷 信、武田昌宏
渡部莊児、望月大介、小林将夫、西川豊宏
横田彩子、計21人

● 工学院大学 校友会 役職者・評議員 (2011年2月20日現在)

監 事	高橋一元
副会長	谷口宗彦
組織・事業部	副部長 谷 政美(常任理事)
	理 事 加藤 隆弘
総 務 部	理 事 関谷真一
財 務 部	理 事 田中正裕
企画・広報部	理 事 鈴木敏彦、大場 光博
学園連携部	理 事 後藤 敏明
評 議 員	(理事補欠1)菊池一雄、(理事補欠2)斉藤敏博 (理事補欠3)高橋昭彦、(理事補欠4)菅家幹 評議員 北沢興一、高木雅行、田野邊幸裕 浅野賢一、大塚篤、楠昭、鯉坂誠之、宮澤健二 南雲正博、柴田卓次、佐々木秀史、小野里憲一 伊藤真人、三好 薫、高城文一、神崎 健 佐藤保廣、望陀宣夫、板谷 信、武田昌宏 評議員(補欠) 大橋一正

● 学校法人 工学院大学

評議員議長 加藤 隆弘

Topics 17

工学院大学校友会第17回全国大会 2011.10.8

実行委員長 黒澤兵夫

我が母校の先輩・後輩・仲間と集おう！未来に向かって話そう！！

の埼玉大会 校友 母校に集おう！！の



平成23年3月吉日

参加費：会員8,000— 同伴者/家族5,000— 学生4,000—

式典当日(平成23年10月8日)

- ・校友の憩いの会(10:30～13:15 新宿キャンパス28階)
- ・式典(14:00～14:35 アーバンテックホール)
- ・講演(14:40～15:40 アーナンテックホール)

「渋澤 栄一の起業家精神」

埼玉県生誕、幕末の幕臣

我が母校と関わりが深い実業家

記念館：渋沢雅英館長の講演

- ・記念パーティ(16:00～18:00 アトリウム)

- ・オプショナルツアー(10月9日 鉄道ミュージアム・小江戸)
(10月9～10日 秩父・長瀬等)

和太鼓・軽音楽・演歌歌手の競演そして大抽選会。
話題豊富で皆様の参加お待ちしております！

新企画 第17回校友会全国大会・埼玉大会で初めて試みる行事、プロローグ「各種の懇親会」

1. 6同窓会(学科別)
2. クラス会(学科・卒年別)
3. OB会(運動/文化部・研究室・先生方等)
4. 趣味の会
5. 学生発表(ECP, JABEE)

工学院大学校友会会員各位

埼玉大会 校友母校に集おう！！

埼玉大会・プロローグ「各種の懇親会」のご案内

平成23年3月吉日

全国大会・埼玉大会実行委員会

第17回校友会全国大会・埼玉大会で初めて試みる行事、プロローグ「各種の懇親会」について
その概要とあわせてサンプル事例を紹介いたします。

開催日時 10月8日(土) 10時30分から13時15分の間、フリータイム

場 所 新宿校舎 28階の会議室を中心に希望に応じて教室を開放・提供

ご提供品 お昼の軽食とお茶等のお飲み物を提供

事前申込み 別紙申込書による、申込み期限 8月末日までに実行委員会宛(jimu2@kogakuin.or.jp)

事例紹介 一部進行中のものも含む

〔事例1・同期会の開催〕

昭和37年機械工学科卒業の同期会。ここ数年関東地区在住者で、ゴルフや一泊旅行を実施。

今年はこの機会を捉え全国の同期に声掛けをして30人規模の同期会開催を準備中。

〔事例2・同窓会行事の開催〕

機械系同窓会は毎年この時期に「秋の集い」として講演会や学生プロジェクトの報告会を実施してきた。今年は全国大会との同時開催としてこの時間を活用する。内容は研究室訪問や学生プロジェクトとの懇談等を検討中。

〔事例3・支部総会等の開催〕

現在福島県支部から支部総会開催の申請あり、また複数の支部で支部懇談会等の計画が進行中。その他、支部間の交流の場としての活用も期待したい。

〔事例4・研究室の集い〕

指導教授を囲む研究室単位のOB会や現役学生との交流会、ECPや新学部等の紹介等。

〔事例5・部活動単位の同窓会の開催〕

体育会・文化会問わず、部活単位の集いや現役との交流会、激励会の開催。

〔事例6・校友会会長または学園関係者を囲む懇談会〕

学園の現状や取り巻く環境と将来展望について語り合う会、希望者(20人以上)が多ければ実行委員会で設定。

〔事例7・趣味の会の発表・展示会や懇親会〕

写真同好会や俳句の会等、趣味のグループの発表・展示会や集会の開催

〔その他・ご希望があれば実行委員会へご相談下さい〕

以上

新刊書 紹介

同窓生や建築学科の教員など
関係者が執筆しました新刊書をご紹介します。

BOOK 10

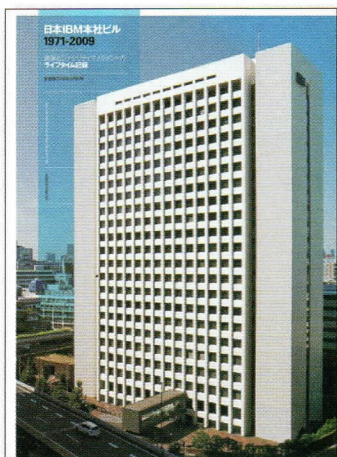


やさしく学ぶ建築製図 エクスナレッジムック

工学院大学非常勤講師 松下希和+同大学院修了(山本研)照内創+長沖充

朝エクスナレッジムック
☎ 03-3403-1829
117ページ
2,600円+税
2011年1月26日発行
A4版

平面図・立面図・断面図からパース、プレゼンテーション図面まで、はじめて建築を学ぶ方を対象に、ルイス・カーンの傑作「フィッツャー邸」の現地取材をもとにした題材に、中山繁信教授の達者なスケッチを多数採用した、わかり易いテキストです。

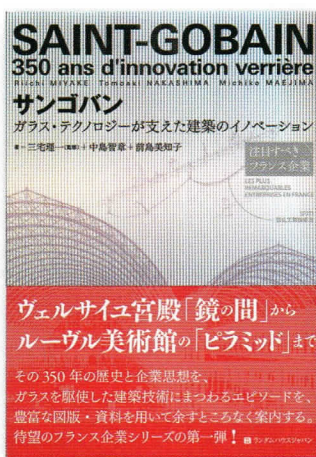


日本 IBM 本社ビル 1971-2009 建築とファシリティ マネジメントの ライフタイム記録

編集委員37名中、
工学院大学教授 遠藤和義、
教授 後藤治、教授 野部達夫、
准教授 村上正浩

株式会社 新建築社
☎ 03-3811-7105
176ページ
3,048円
2010年9月別冊発行
A4版

昨今、多くの建物が解体や改築されるニュースが報道されているが、日本IBM本社ビル同様に、全ライフサイクルにわたる貴重な資料や運転でデータ、最終性能や劣化状況の確認データなどを残しておくべきと考える。日本IBM本社ビルがその第1号として良き先例になれば幸いである。(編集後記より抜粋)

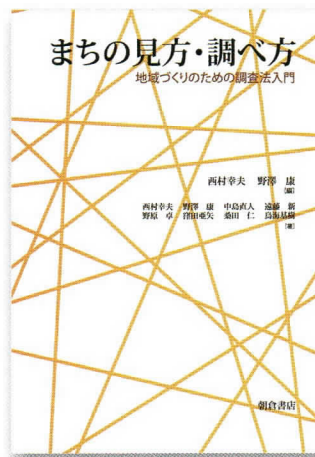


SAINT-GOBAIN サンゴバン ガラス・テクノロジー が支えた 建築のイノベーション

三宅理一(監修)+
工学院大学工学部建築学科
准教授 中島智章+前島美智子

株式会社 武田ランダムハウスジャパン
☎ 03-5256-5692
248ページ
3,200円+税
2010年8月31日発行
A5版

注目すべきフランス企業、ヴェルサイユ宮殿「鏡の間」からルーヴル美術館の「ピラミッド」まで、その350年の歴史と企業思想を、ガラスを駆使した建築技術にまつわるエピソードを、豊富な図版・資料を用いて余すところなく案内する。待望のフランス企業シリーズの第一弾! (帯封より)

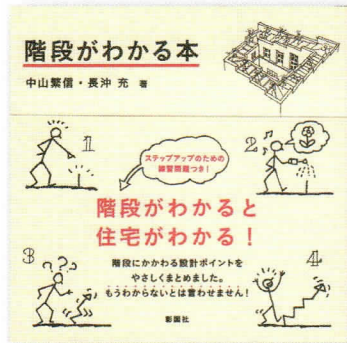


まちの見方・調べ方 地域づくりのための 調査方法

工学院大学工学部教授 野澤康
+東京大学教授 西村幸夫

株式会社 朝倉書店
☎ 03-3260-0141
148ページ
3,200円+税
2010年10月20日発行
B5版

地域づくりに向けた「現場主義」の調査方法を解説した指南書。「事実を知る」「現場で考える」「現象を解釈する」の3部構成。学生や市民、行政職員がまちづくりを実践する第一歩には最適。「まちづくりの応援書」とも評された。



階段がわかる本

工学院大学建築学科教授(2001~10)
中山繁信・長沖充 著

株式会社 彰国社
☎ 03-3359-3231
168 ページ
価格 2,000 円 + 税
2010 年 6 月 10 日
サイズ/縦 15×横 15cm

階段がわかると住宅がわかる!。階段にかかわる設計ポイントをやさしくまとめました。もうわからないとは言わせません!。学生にとって階段は、設計製図の授業の中でも最もプランをまとめる難しい箇所といわれています。本書は授業の体験などをもとに、階段の仕組みや設計のポイントを丁寧に解説しています。(彰国社の挨拶文より抜粋)



図説 台湾都市物語

工学院大学
建築都市デザイン学科教授 後藤治(監修)
王惠君・二村悟(著)

河出書房新社
☎ 03-3404-1201
144 ページ
1800 円 + 税
2010 年 2 月 18 日発行
B5 変形

台北・台中・台南・高雄、都市と建築の決定版ガイド
台湾と日本の関係には、近代の一時期、日本が台湾を統治したという不幸な歴史がある。・日本統治は、台湾に台湾総督府をおき、第二次世界大戦後の1945年10月25日まで統治したのである。その時期につくられたさまざまな建造物は、多数現存し、われわれに多くの歴史を物語ってくれる。本書は、台湾の歴史的建造物を紹介しようとするものだが、その中心は統治時代のものである。(帯封より)

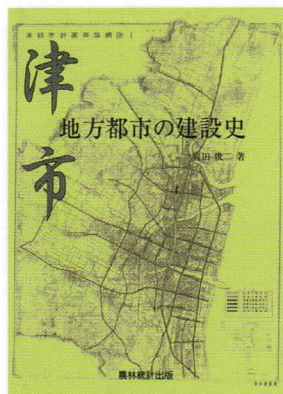


図説 バロック 華麗なる建築・ 音楽・美術の世界

工学院大学工学部建築学科
准教授 中島智章

河出書房新社
☎ 03-3404-1201
144 ページ
1800 円 + 税
2010 年 8 月 30 日発行
B5 変形

劇的な流動性、過剰ともいえる装飾性をもつ、ヨーロッパで栄えた美術・文化の様式「バロック芸術」。トロンプ・ルイユ(だまし絵)を駆使し、ロココが生まれた……。時代を画したバロックの建築・音楽・美術を総合的に論じる画期的な1冊。美しく、華麗な写真・図版満載! 永久保存版。(帯封より)

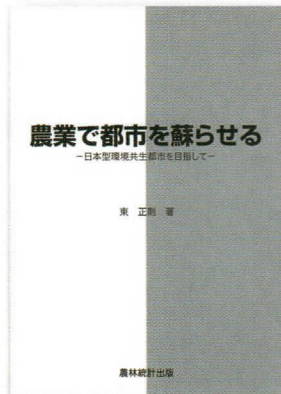


津市・地方都市の 建設史

津市立三重短期大学教授
岩田 俊二 著
(工学院大学大学院1973修了)

農村統計出版 株式会社
☎ 03-3511-0058
ページ 174 ページ
2,200 円 + 税
2010 年 3 月 15 日発行
A5 版

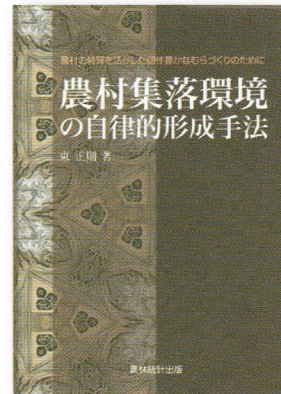
津市を例にして、明治以降の地方都市の建設過程を検証した。地方都市の誕生、発展は国の政策に因るところが大きかった。



農業で都市を蘇らせる -日本型環境共生都市を目指して- 工学院大学建築学科 教授 東 正則

農村統計出版 株式会社
☎ 03-3511-0058
238 ページ
2,600 円 + 税
2010 年 11 月 25 日発行
A5 版

なぜ、都市に農地が必要なのか。都市農地の消滅を目前にしている今、対象とする農地を明確にし、その保全手法が確立されなければならない。本書は、これまでの抽象的な議論から発展し、より具体的な保全手法の検討を提案する。(書籍案内より引用)



農村集落環境の自立的形成手法 農村の特質を活かした 個性豊かなむらづくりのために

工学院大学建築学科 教授 東 正則

農村統計出版 株式会社
☎ 03-3511-0058
378 ページ
4,000 円 + 税
2010 年 12 月 20 日発行

農村の生産と生活の利便性を確保しながら、農村地域独自の環境形成をしていくにはどうすればいいのか。日本独自の個性を持つ農村空間を持続させるため、都市計画とは一線を画した各地域の自律的な環境形成手法を、豊富な事例をもとに提起する。(書籍案内より引用)



東京駅丸の内駅舎保存・復原

東日本旅客鉄道㈱ 大内田 史郎

1、はじめに

「赤レンガ駅舎」として広く親しまれている東京駅丸の内駅舎は、わが国の近代建築の祖、辰野金吾の設計により1914年に竣工した。【図1】

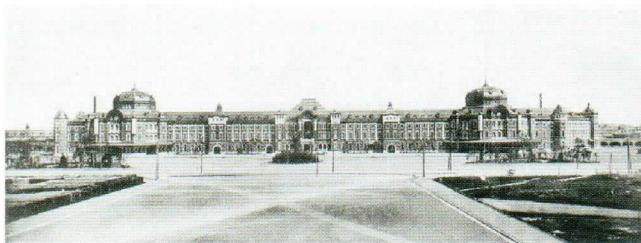


図1 創建時の丸の内駅舎（出典：『記念寫真帖』）

しかし、1945年の東京大空襲によって屋根や内装を焼失し、戦後まもなく復興されたものの、創建時の姿ではなく、南北のドーム屋根は八角形に、切妻部は2階建てにする応急復旧で、その姿を大きく変え今日に至っているが、近代建築としての文化財的価値が認められ、2003年には国の重要文化財に指定された。【図2】



図2 戦後の丸の内駅舎（2002年撮影）

一方、竣工から90年以上が経過し、将来的には構造補強等が必要になることもあり、今後のあり方について様々な検討が行われてきたが、2001年度の「東京駅周辺の再生整備に関する研究委員会」にて、首都東京の顔としての景観形成が重要で、

そのためには丸の内駅舎の保存・復原が必要不可欠だと認識され、現在進められている「東京駅及び周辺の整備計画」の開発もあいまって、創建時の姿に保存・復原することになった。

その後、当社内に専門委員会を設置し保存・復原に関する検討を進め、2004年から基本設計及び実施設計を行い、2007年に工事に着手した。現在は、着工から3年以上が経過し、2012年の完成に向け工事を昼夜行っている。

2、丸の内駅舎の歴史

2-1 創建時の設計

当初の丸の内駅舎の設計は、F.バルツァーによって進められていたが、この案は明治天皇の意向で却下されたともいわれており、1903年に辰野金吾（辰野葛西事務所）に設計が依頼される。辰野自身もバルツァー案を酷評しているが、プランの基本的な構成はそのまま踏襲されることとなる。【図3】

辰野の設計期間中には、予算や機能の見直しによって規模が縮小されることもあったが、後藤新平が「世界があつと驚くような駅をつくりたい」と要望し、3階建ての大規模な駅舎になったと言われている。

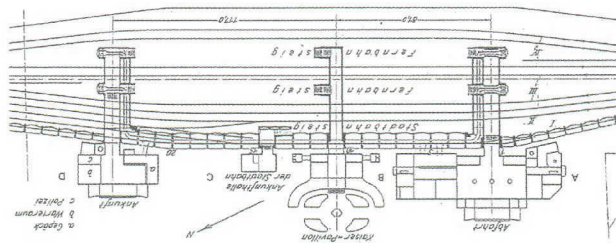


図3 バルツァー案（出典：『東京駅と辰野金吾』）

2-2 辰野金吾

丸の内駅舎の設計者である辰野金吾は、1854年に肥前国唐津藩で誕生する。1879年に工部大学校を首席で卒業し、ロンドン大学への留学を経て、帰国後の1884年に工部大学校教授に就任している。【図4】

その後、1902年に大学を辞職し、1903年に辰野葛西事務所、1905年に辰野片岡事務所を設立して、生涯で200以上もの建物の設計に携わっており、丸の内駅舎以外にも21作品が国内に現存している。また、本学の前身である工手学校の設立に発起人の1人として深く関わっている。



図4 辰野金吾 (1854-1919)
(出典：『工学博士 辰野金吾伝』)

2-3 創建時の概要

創建時の外観は、南北のドーム屋根の形状が円形であるほか、各所に尖塔や角塔があり、戦災復興時と比較すると全体的に賑やかなデザインで、ドーム内観には、様々な装飾が施されていた。【図5】

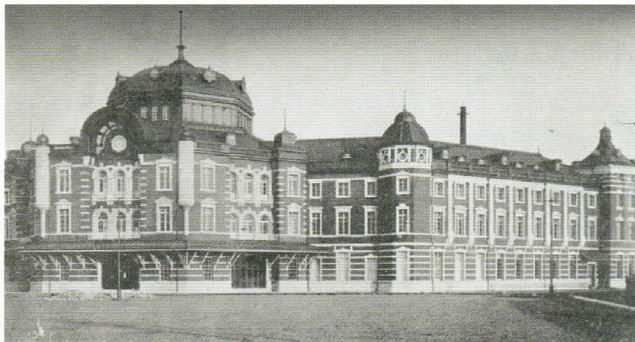


図5 創建時の南ドーム (出典：『建築画報』)

建物の概要は、鉄骨工事は石川島造船所、建築工事は大林組で、地上3階建て、延床面積は約23,900㎡、長さは約335m、鉄骨の重量は約3,140t、職人の延べ人数は約75万人であった。構造は鉄骨煉瓦造で、構造用煉瓦の中に鉄骨が内蔵されており、鉄骨の建て方は約1年2ヶ月で完成している。【図6】

また、ホテルは1915年に開業しており、興味深い点として「ホテルの内装を、原爆ドームの設計者のJ.レツルが設計した」

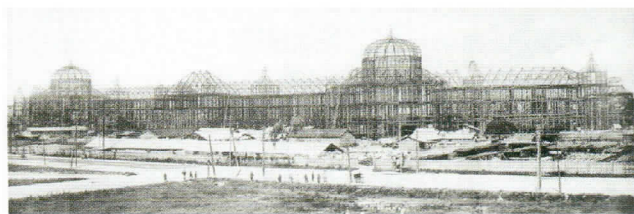


図6 創建時の鉄骨工事 (出典：『記念寫真帖』)

という説があり可能性は高いが、詳細は不明である。

2-4 戦災復興工事の概要

関東大震災で無被害だった丸の内駅舎も、1945年の東京大空襲で被災し、屋根や内装は全て焼失してしまう。戦災復興工事は、終戦直後から約1年半という工期の中で2階建ての駅舎への復興工事が行われ、1947年に工事が完了している。当時は「4～5年持てば良い」と言って、突貫で工事が進められたようだが、終戦直後の混乱した状況下において、約1年半でこの復興工事を完了させたことは凄いことであったと思う。【図7】

建物の概要は、地上2階建て、延床面積は約19,600㎡となり、線路側の外壁はモルタル塗りで仕上げられ、ドーム屋根は八角形となったが、この戦災復興工事の2階建ての姿が、本工事に着工するまでの約60年もの間、親しみ続けられることになる。【図7】



図7 戦災復興工事の様子 (出典：『東京駅歴史探見』)

3、丸の内駅舎保存・復原

3-1 基本方針

本工事の基本方針は、「風格ある都市景観の形成」「歴史的建造物の継承」「赤レンガ駅舎の恒久的な保存・活用」で、その具体的な方法として、「外観の保存・復原」「ドーム内観の復原」「免震工法の採用」「駅・ホテル・ギャラリーとしての活用」を図っている。

「風格ある都市景観の形成」としての「外観の保存・復原」は、現存する2階部分を保存しながら、戦災復興工事でつくられた既存の屋根を撤去して、新たに屋根と切妻部の3階部分を復原するものである。また、「ドーム内観の復原」は、戦災復興工事でつくられたジュラルミン製の天井を撤去して、ドーム内観に施されていた装飾を復原するものである。「歴史的建造物の継承」としては、現存する煉瓦壁を可能な限り保存するために、本工事では「免震工法の採用」を行っており、駅舎の下部に地下躯体を新設し、地下と地上の間に免震装置を設ける免震レトロフィットとなる。さらに、「赤レンガ駅舎の恒久的な保存・活用」としては「駅・ホテル・ギャラリーとしての活用」を前提にプランを計画している。

3-2 外壁・屋根・ドーム内観の復原

外壁は、化粧煉瓦・花崗岩・擬石塗によって構成されているが、復原のポイントはやはり煉瓦である。丸の内駅舎の煉瓦には構造用煉瓦と化粧煉瓦があり、創建時の外壁は構造用煉瓦に2種類の厚さの化粧煉瓦を交互に張付けた「下駄っ歯積み」であったが、本工事で復原する3階部分の外壁は、新しいSRC造の躯体に化粧煉瓦を張付ける構法を採用したため、本工事では化粧煉瓦の再現が重要となる。

そこで、化粧煉瓦を再現のために原料の調査や焼成温度を変えて何度も見本焼きを繰返した上で、実物大の外壁モックアップを設置して検証を行った。【図8】



図8 外壁モックアップ

創建時の屋根は天然スレートと銅板で構成され、古写真の発見から、天然スレートの殆どが一文字葺であったことが判明した。【図9】

創建時の天然スレートは戦災で消失し、戦災復興後の1952年に天然スレートに葺替えられた後も全面的な葺替えが2度行われ、着工前は1990年に葺替えられた状態であった。本工事では、この天然スレートのうち状態が良いものは再利用する。



図9 創建時の屋根（三菱地所所蔵）

創建時のドーム内観には様々な装飾が施されており、装飾の意匠は、秀吉の兜や剣等、日本的なモチーフが多く使われていたことが判明したが、とくに特徴的なものとして、干支のレリーフを挙げることができる。当初は何の動物なのか不明であったが、その後の調査によって、ドーム内観の8箇所のコーナーにはその方位に従って12支中の8支のレリーフがあったことが判明した。【図10】



図10 創建時のドーム内観（出典：『記念写真帖』/『建築世界』）

これらの装飾は、創建時は漆喰と石膏でつくられていたが、本工事では安全性に配慮してGRGも採用して復原され、実物大のモックアップを設置して検証を行った。

3-3 施工の概要

着工後、まず既存駅舎内の営業施設等を段階的に仮設に切替えながら、駅舎の内外に仮囲いを設置して工事を進めた。工事は大きく以下の4つのステップに分けることができる。【図11】

第1ステップは、地下部では仮受け時に駅舎を支える杭の打設等を行い、地上部では解体調査や記録保存を行いながら内装の撤去を進めた。また、南北ドームでは戦災復興工事でつくられたジュラルミン製の天井を撤去し、既存のドームレリーフの調査を実施した。

第2ステップは、駅舎を仮受けしてから既存の松杭を撤去して地下の躯体工事に着手し、地上部では戦災復興工事でつくられた既存の屋根の撤去を行うとともに、保存する外壁の調査を行った。

現在、現場は第3・第4ステップが混在している状況であり、第3ステップでは、逆打ち工法によって地下躯体工事を進めるとともに、地上部では耐力不足の既存床の撤去を行った場所から、床を新設するとともに、復原する外壁や屋根の躯体工事を進めている。

最終の第4ステップとしては、免震化を行うとともに、前述した検証に基づく復原部分の仕上げ工事を行ない、最後に駅舎

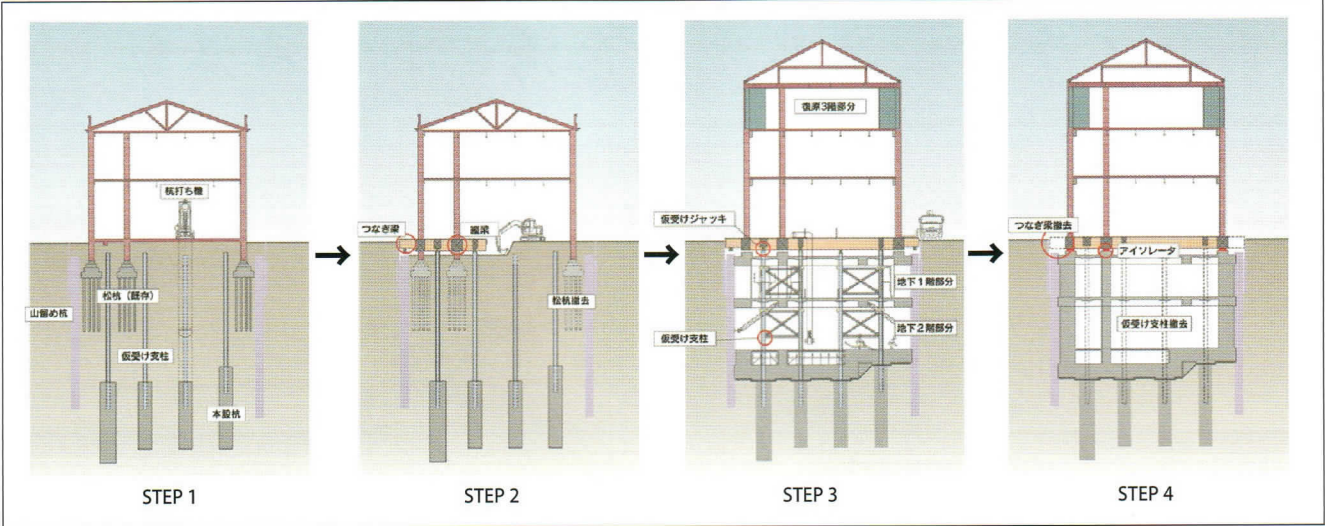


図 11 施工ステップ図

全体の内装・設備工事や外構工事を行って完成となる。

4、おわりに

2012年の完成に向け、工事は折返し地点を過ぎたが、創建時や戦災復興時の丸の内駅舎について調べれば調べるほど「非常に丁寧につくられている」ということが理解でき、それ以上に関係した方々の熱意や気概を強く感じる。

そのような中で、本工事に携わっている我々の使命は、物質的に形を復原するだけでなく、現代に失いかけている精神的な部分についても十分理解しながら学びとって、さらにはそれを後世に伝えていくことだと考えている。

本工事を進めるにあたっては、その使命を十分に認識して取り組み、100年後も現役の建物として広く親しまれている駅舎になることを目標に、残りの工期においても着実に工事を推進していきたい。

Preservation and Restoration of Marunouchi Post-House, Tokyo Station
Shiro Ouchida, East Japan Railway Company

Marunouchi Post-house at Tokyo Station has been beloved as "Red-bricked House" for many years, which was originally designed by Kingo Tatsuno (1854 - 1919), a legendary architect, in 1914. Due to war damage, the roofs and interior decorations were burnt and lost. After the end of WWII, the house was restored but the original form was not recovered. The dooms at the northern and southern ends were replaced by octagonal structures. The main buildings were just two-stories instead of the original full three-story configuration. No further restoration work had been made until recent days.

The major construction project described here is to recover the original shape to the main buildings, namely the third floor and gabled roof. In addition, the underground structure will be created to make the whole buildings seismically isolated.



東日本旅客鉄道(株) 大内田 史郎

学 歴
1993年 静岡県(私立)静岡学園高等学校卒業
1997年 工学院大学工学部建築学科建築学コース卒業
澤岡研究室
1999年 工学院大学工学院工学研究科修士課程修了
澤岡研究室

略 歴
1974年生まれ。1999年東日本旅客鉄道㈱入社。
2001年から丸の内駅舎保存・復原を担当し、現在は
工事監理の統括を担当。2006年「東京駅丸ノ内本屋の
意匠と技術に関する建築史的研究」にて東京大学より
博士(工学)を取得。

EAST JAPAN RAILWAY COMPANY

戦前期工手学校卒業生の台湾における活動

－八板志賀助を事例として－

蔡龍保



台湾総督官邸 現:台北賓館

1、はじめに

現在、東京新宿に位置する工学院大学の前身は戦前の「工手学校」である。当校は、1887年、旧幕臣の渡辺洪基によって「技術立国」、「工業立国」の考えと使命の下に創設され、土木、機械、電工、造家（建築）、造船、採礦、冶金、製造舎密（化学）の8学科を置いた。初期の卒業生は、該校の「技術立国」と「工業立国」の精神と機能を十分に発揮して日本国内で活躍した。1895年、日本は最初の植民地として台湾を獲得し、積極的な植民地経営を展開した。日本人技術者の考えと理念は、「技術立国」から「技術殖民」に向かい、多くの技術者が日本帝国の植民地統治に協力し、台湾の各種基盤建設事業に従事した。そのような趨勢の中で、多くの工手学校卒業生が台湾に赴いた。1895年から1905年までの間、少なくとも128名の工手学校卒業生が台湾総督府土木部、鉄道部、臨時台湾土地調査局等の官庁、及び鉱山、製糖、土木建設等の民間会社で活躍したが、彼等がそこで果たした役割の大きさは軽視できない。その内、造家学科の卒業生は、主として台湾総督府の中央及び地方官庁の営繕組織や

民間の建設会社で大いに活動した。本稿では、八板志賀助を事例として、その戦前期における台湾での実況を紹介することにした。



台湾総督府高等法院
現:司法院「司法大廈」台湾総督府の管轄下にあった裁判所

2、渡台、帰国、そして満州へ

八板志賀助は、1882年8月15日、鹿児島県土族八板平蔵の長男に生まれた。本籍地は、熊本郡北種子村西之表188番戸（現：鹿児島県種子島西之表市）である。八板に関して、最も早くその記載を見出せる資料として、『台湾総督府公文類纂』所収の「雇員御採用ノ儀ニ付内申」という文書をあげることができる。この文書には、1899年当時、民政部土木課長であった長尾半平が弱冠17歳で日給55銭の台湾総督府僱員であった八板を、雇員としての適当な技術を持っていることを理由に、民政長官後藤新平に対してその昇任を具申し、同年12月20日に月俸18円の雇員に任じられたことが記されている。1900年10月1日、八板は家庭上の都合をもって、台湾総督児玉源太郎に辞職願を提出し、同月4日、雇員を免じられ、内地に戻る。八板がもともと何を契機に訪台して総督府で勤務することになったのかは分からないが、少なくとも彼がまだ若年の頃に台湾総督府で働いていたことは確定することができる。

八板は内地に戻った後の1902年2月、工手学校造家学科に入学し、1903年7月に卒業した。第29回生であった。1904年3月、文部省官房建築課雇員（月俸8円）となり、上野図書館新築工事の製図と監督の任に就いた。1905年6月18日、満州軍倉庫臨時雇員（月給30円）に転任し、その満州地方における建築設計と監督の仕事に当たった。1906年7月1日、関東都督府民政部土木課建築事務嘱託（月手当40円）、同年10月31日、大連市岡田工務所職員（月給40円）、1907年6月2日、関東都督府大連民政署営繕嘱託（月手当50円）、同年12月31日、同府民政部土木課兼大連民政署嘱託（月手當55圓）を経て、1909年3月31日、関東都督府民政部土木課技手（6級俸）に昇任した。

1905年6月に満州軍倉庫臨時雇員となった後、1910年1月に台湾総督府に転任を命じられるまでの4年7ヶ月の間、八板が関わった建築工事として、長春警務署長官舎、長春郵便局庁舎及官舎、奉天郵便局長官舎、撫順警務支署及官舎、営口測候所庁舎及官舎、大連第二小学校等があげられる（別表参照）。

3、台湾への再訪とその活動

1901年1月24日、台湾総督府へ転任を命じられた後、同年2月23日、台湾総督府土木局営繕課技手（5級俸）に任命された。1916年3月、台湾勸業共進会工務部営繕係事務員を兼務し、1922年5月17日、台湾総督府土木局営繕課技師に昇任した。1924年12月10日、依願退職し、以後、内地の民間会社で働く時期がしばらく続くことになる。同月11日より、近藤十郎の建築事務所（東京府下豊多摩郡井荻町下荻窪52、現：東京都杉並区荻窪）で働き始め、230円の月手当を受けた。1927年8月20日、近藤十郎の建築事務所を辞め、同年10月14日、再度渡台し、台湾総督府官房会計課技師に任じられた。1929年5月12日、再び台湾総督府土木局営繕課技師となり、1937年5月4日、台湾神社臨時造営事務局技師の兼任を命じられた。その後、台湾米穀移出管理事業の推進に従って、その関連施設建設の必要性が生じたことで、1940年11月21日、台湾総督府米穀局総務課技師を兼任することになった。1940年1月19日、神社建設のために中国福建省廈門に赴いたが、それ以後の八板の動静を追跡できる関係資料は管見の限り見あたらない。

台湾近代建築の図面史料をみると、台湾総督府の営繕組織が建築物の設計をする時、一つの建築毎に一人の技師をあて、その設計を主導させるとともに、建築の規模に照らして、その下に一名から数名の技手を配置し、建築物の細部の設計、施工図の制作と図面の制作及び複製の仕事を担当させたことがわかる。すなわち、建築物の多くの部分は技手によって設計されたのであり、技手の建築設計上の重要性は建築技師に劣るものではない。八板は台湾総督府土木局営繕課技手の時期、近藤十郎と松山森之助の両技師の下での仕事を多く担当した。また、これらの土木建築を専門とする技術者は、公務にゆとりがある際、上官の許可を得た上で、民間業者の委託を受け、その工事の設計と監督の任にも当たった。

八板の在台期間は少なくとも33年に達し、長期にわたって台湾で活躍したが、その間、相当多くの建築工事に関与した。それらの事績は三つの類型に区分できる（別表参照）。第一に、台湾総督府土木局営繕課に属す官庁建築事業であり、例えば、総督官邸、専売局庁舎、医学校講堂、台北庁庁舎、台北医院、高等法院、府立樂生院、台湾气象台等があげられる。第二に、その他の官庁の委託にかかる事業で、例えば、台湾総督府鉄道部より委託の鉄道部庁舎、台湾総督府文教局より委託の建功神社（台湾の靖国神社）、廈門神社建立委員会より委託の廈門神社、台湾神社臨時造営事務局より委託の台湾神社等がある。第三に、民間の会社及び団体の委託にかかる事業であり、例えば、故祝辰已民政長官銅像建設会、大阪商船会社、台湾商工銀行、新竹神社建立委員会、大日本武徳会台湾支部等の委託事業がこれに含まれる。

4、おわりに

工手学校出身の八板志賀助は一般的に中級技術者(技手、職工長)に属す。台湾総督府で在職した期間は相当長く、その豊富な実務経験は学歴と専門知識の不足を補い、22年を経て、技手から技師に昇格したが、それは決して易しいことではない。八板は、戦前の台湾における建築界で大いに活躍し、彼が官庁と民間による委託で設計、関与した建築物は、その建築設計の才華が十分に具現化されたものであるといえる。総督官邸(現台北賓館)、専売局(現煙酒公売局)、医学校講堂(現台湾大学医学院講堂)、台北庁舎(現監察院)、高等法院(現司法院)等の多くの建築物は100年を経た今も台湾の国民に親しまれ、歴史的価値・機能を評価され使用され続けている。その他の建築物についても、例えば、鉄道部庁舎、建功神社、新竹神社、台湾気象台等は文化財、遺跡として保存され、一般の参観に供されている。

引用文献

- ・『台湾日日新報』
- ・『台湾総督府公文類纂』
- ・『総督府物語』(黄俊銘／向日葵文化／2004年)
- ・『植民統治之基礎工程—日治時期台湾道路事業之研究 1895-1945』(蔡龍保／国立台湾師範大学歴史学系／2008年)
- ・「「技術立国」から「技術殖民」へ—日本統治時代初期工手学校卒業生の台湾における活動を例に(1895-1905)」(蔡龍保／未投稿)



台北庁舎 現:監察院



台北帝国大学 医学部 附属医院 現:台大医院 旧館



現:台湾総督府公売局



台湾大学医院旧院 (元台湾総督府台北医院)

別表 八板志賀助参与の建築工事一覧表（1904-1920）

時 期	項 目	所 属 または 工 事 委 託 機 関	建 築 工 事 名	担 当	工 費（円）	手 当（円）
1904.3-1905.6		文部省	上野図書館新築工事	監督、製図		
1908.6-11		関東都督府民政部土木課	民政部土木課	設計	8,500	
1908.6-11		同上	長春郵便局庁舎及官舎新築工事	設計、監督	75,000	
1908.7-11		同上	奉天郵便局長官舎新築工事	設計	8,500	
1909.6-10		同上	撫順警務支署及官舎新築工事	設計	20,000	
1909.6-10		同上	營口測候所庁舎及官舎新築工事	設計	10,000	
1909.7-12		同上	大連第二小学校新築工事	設計、監督	120,000	
1910.12-1912.3		台湾総督府土木局営繕課	基隆郵便局庁舎其他新築工事	設計	66,000	
1911.11.8		故祝辰已民政長官銅像建設会	故祝辰已民政長官銅像	設計		20
1912.2-1913.3		台湾総督府土木局営繕課	総督官邸改築工事	設計	150,000	
1912.5.1		大阪商船会社				不明
1912.6-1913.2		台湾総督府土木局営繕課	財務局税務課基隆出張所新築工事	設計	33,000	
1912.7-1913.7		同上	専売局庁舎新築工事	設計	120,000	
1912.8-1913.9		同上	打狗郵便局庁舎其他新築工事	設計	70,000	
1912.11-1913.3		同上	医学校講堂新築工事	設計	114,000	
1913.2-1916.9		同上	台北庁舎新築工事	設計	332,000	
1913.12.27		台湾商工銀行				285
1914.10-1916.2		台湾総督府土木局営繕課	台北医院庁舎新築工事	設計	288,000	
1915.7-11		同上	台湾総督府研究所長官舎新築工事	設計	10,000	
1915.7.24		台湾商工銀行				50
1916.11-1919.7		台湾総督府土木局営繕課	台北医院庁舎新築工事	設計、監督	331,000	
1917.6-1918.6		台湾総督府鉄道部	台湾総督府鉄道部庁舎新設	設計	250,000	
1917.11.17		新竹神社建立委員会	新竹神社新築工事			70
1918.7.1		大日本武徳会台湾支部	大日本武徳会台湾支部演武場建築	設計		40
1919.3-8		台湾総督府土木局営繕課	台北医院汽缶室煙突新設工事	監督	22,000	
1919.12-1921.1		同上	台北医院汽缶室及洗濯所新築工事	設計、監督	88,000	
1920.12-		同上	台北医院伝染病棟新築工事設計	監督	350,000	
1928		台湾総督府文教局	建功神社	設計		
1931-1934		台湾総督府土木局営繕課	台湾総督府高等法院 及台北地方法院庁舎新築工事	工事主任		
1934.12-1935.6		同上	花蓮港法院支部庁舎		80,000	
1936.8		同上	台湾総督府立樂生院恩賜治療室、運動場、 第二住宅等工事	設計兼工事主任		
1937.5		台湾神社臨時造営事務局	台湾神社			
1937.11-1938.6		台湾総督府土木局営繕課	台湾氣象台	設計		
1940.1 - 12		廈門神社建立委員会	廈門神社	設計		

備考：(1) 民間より委託された事業の時期は台湾総督府よりその手当の授受を許可された日付を記した。(2) 工事の起工年月が不明の場合、竣工年月のみを記載した。
(3) 近藤十郎の建築事務所で働き始めた時点からその職を辞して再び台湾に戻り台湾総督府土木局営繕課での勤務を開始するまでの期間（1924.12-1927.10）における関係資料がないため、その間の動静は不明。

An Activity in Taiwan by A Graduate from Polytechnic - A Case of Shigasuke Yaita -

Shigasuke Yaita, a graduate from Polytechnic (Koshu Gakko), predecessor of Kogakuin University, was a so-called "medium-grade engineer (technician, foreman)". He worked for the office of the General Governor of Taiwan for a long time, during which he eagerly learned and gained experiences to be promoted to fully-fledged engineer. It was not an easy task.

After that, he played an active role in architectural industry in the island and made tremendous contribution to the development of Taiwanese architecture by designing a number of buildings for both private and governmental sectors. Among his works, the General Governor's house (currently known as state guest house in Taipei), the public corporation building, the medical school lecture hall (lecture hall in Medical Graduate School, University of Taiwan) and the High Court house (judicial office) are still used. In addition, there are a number of his works that are preserved and shown to public.



国立臺北大學歴史學系 助理教授 Tsai Lung-pao 蔡 龍保

学 歴
1998年 国立台湾師範大学歴史学系学士
2001年 国立台湾師範大学歴史学系修士
2006年 国立台湾師範大学歴史学系博士

略 歴
東京大学文学部外国人研究員
工学院大学客員研究員
立教大学外国人研究員
一橋大学外国人研究員

専 門 植民地時代の台湾交通史、土木史

mail : henrytsai8@hotmail.com

Tsai Lung-pao
Curriculum Vitae
Education: Ph. D. of National Taiwan Normal University
Visiting Scholar, Univ. Tokyo, Japan
Visiting Scholar, Univ. Kogakuin, Japan
Visiting Scholar, Univ. Rikkyou, Japan
Visiting Scholar, Univ. Hitotsubashi, Japan
The present post: Assistant Professor, Department of History of National Taipei University, Taiwan

筑波山測候所と福満繁記

西村 公宏

1.はじめに

茨城県つくば市北端にある筑波山(男体山)山頂(旧筑波郡筑波町)には、表札の無い風化した建物がひっそりと佇んでいる。この建物は、かつて中央气象台附属筑波山測候所と呼ばれ、関東平野に唯一所在する山岳測候所・通信所として重要な役割を担ったが、観測機器等の発達により、平成13(2001)年3月、閉所に至ったのである¹⁾。本稿では、今なお山頂に残る旧測候所に着目し、建物の概要とその設計者について見て行きたい。

2.筑波山測候所

『昭和四年十一月 筑波山測候所要覧』によると、筑波山測候所は、明治34(1901)年、山階宮氣象観測所として、筑波山の山頂に創立、明治42(1909)年4月には、中央气象台に移管され中央气象台附属筑波山測候所に改称されている。この測候所は、絵葉書(図1)にも取り上げられる等、筑波山の名所となったが、しだいに老朽化が進んだので、昭和3(1928)年に入り取り壊し、同年12月、総坪数41.5坪、鉄筋コンクリート2階建一部3階建(塔屋)の新しい山頂観測所が竣工、その他、木造平屋建42坪の中腹観測所及び木造平屋建26坪の山麓観測所の整備もなされた²⁾。

竣工当初の写真による絵葉書(図2)、気象庁所蔵の平成13(2001)年3月現在の台帳図面「筑波山測候所」(図3)及び平成13(2001)年3月発行の『筑波山測候所筑波山通信所のあゆみ』に掲載された「筑波山測候所新営工事山頂観測所平面図」(図4)等も参考にすると、全体の構成は、縦長の直方体を組み合わせたもので、外壁スクラッチタイル張、主な窓は縦長鎧戸付で、全体的に縦の線が強調されているが、南側玄関の欄間及び3階の窓は半円状で、ファサード(正面)に変化を与えている。ちなみに、欄間には放射状の格子とステンドグラスが嵌められているが、ステンドグラスの図柄は、霞ヶ浦と帆引き船である³⁾。

平面については、玄関を入ると、階下は中廊下で、西側に南から観測室(約5.3坪)、暗室(1坪)等が、東側には南から晴雨計室(2坪)、機械室(4坪)が配されている。南東隅の階段を上がると、2階は、西側南から応接間(4.5坪)、図書並研究室(5.5坪)、東側は寢室(6坪)である。

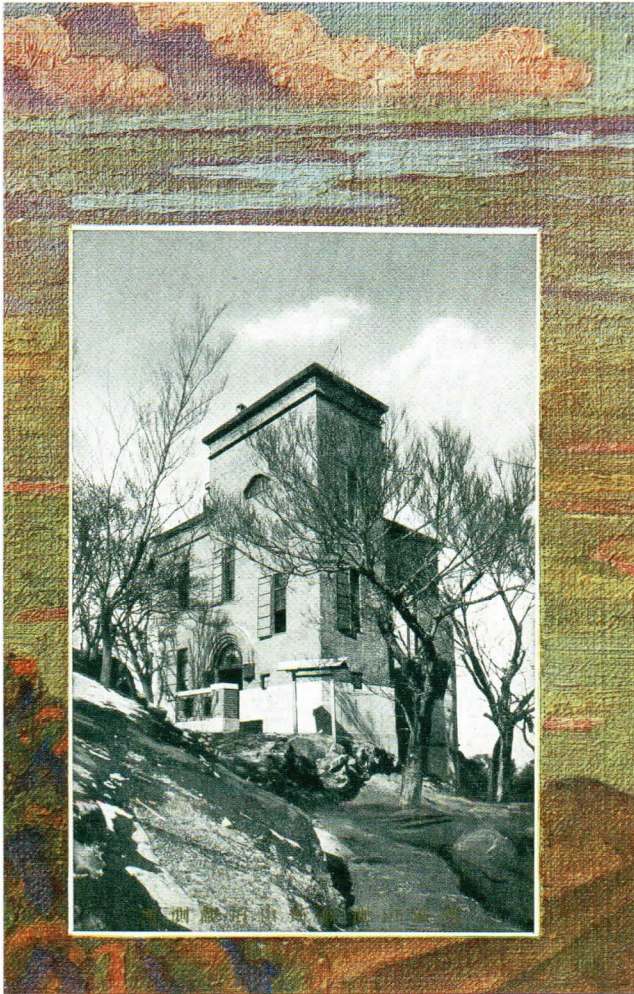


図1

3.陳列室

昭和5(1930)年6月発行の「理學界」(28(6)号)に掲載された「研究所めぐり」によると、筑波山測候所の業務は、氣象観測、地震の観測及び博物の調査であった。博物の調査とは、地方氣象と地質及び動物植物との関係の調査であり、採集品は測候所の1室(図書並研究室)に陳列された⁴⁾。昭和4(1929)年3月発行の「博物館研究」(2(3)号)に掲載された「筑波山測候所附属博物館」には、「建物の一部を陳列所に充て、筑波山關係動植礦の天然物並氣象關係の資料を蒐集陳列して、公衆の觀覽に供するさうである。三年後には筑波高速鐵道も上野不忍池畔から開通し、二時間で往けることになる筈であるから、同博物館計畫は世人から少からず歡迎せられることであらう」とあり⁵⁾、竣工当初から觀覽が意図されていたことが窺え、また、昭和7(1932)年7月発行の『全國博物館案内』には、「陳列室…(中略)…同測候所參觀者にのみ觀覽せしめてある」と記されており、參觀という形で公開がなされていたことが知られるのである⁶⁾。前述の『筑波山測候所要覧』には、中央气象台囑託畠山久重による筑波山の地質、動植物等に関する詳細な解説が見られ、陳列室の整備は、畠山を中心になされたと考えられる⁷⁾。

ちなみに、陳列室は昭和30年代に拡充され、「筑波山氣象參考館」に発展しているが⁸⁾、当時のパンフレット(図5)には、「大正14年(1925年)にはケーブルカーが開通したので山は登山者で再び繁栄に向った。」と記されている。陳列室開設の背景には、山頂の賑わいがあったのではないかと考えられるのである。



面図

図 3

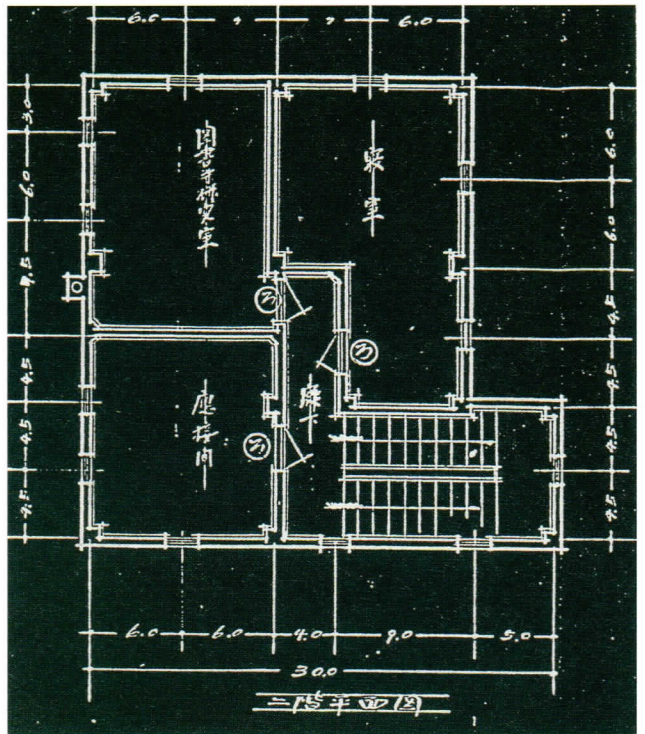


図 4

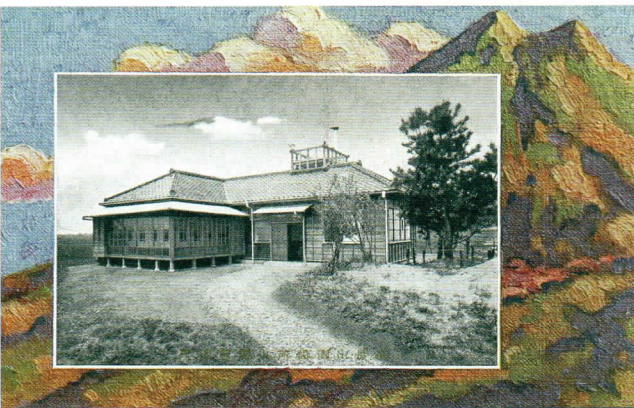


図 2

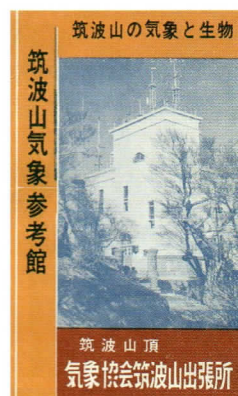


図 5

4. 福満繁記

昭和12(1937)年10月発行の『測候瑣談』には、「昭和三年になつてから、筑波山測候所改築の豫算案が通つたので、文部省建築課の福満繁記氏に設計を依頼し」とあり、『文部省職員録』を併せて検討すると、設計を担当したのは、文部省建築課技手福満繁記であったことがわかる⁹⁾。『建築學會會員住所姓名録』等の資料によると、福満繁記は、鹿児島県加治木工業学校を経て、大正5(1916)年2月12日、工手学校建築学科を卒業している¹⁰⁾。『文部省職員録』に「建築課 技手」として氏名が確認されるのは、「大正九年十一月一日調」から「昭和十一年十月一日現在」までで、『建築學會會員名簿 昭和12年10月31日現在』には「福満建築事務所」とあることから、文部省退職後は建築事務所を自営していたことが知られる¹¹⁾。

福満については、中央气象台附属父島測候所¹²⁾、中村記念館(中央气象台内)及び高層气象台本庄出張所の設計者であることがすでに指摘されているが、これらの内、中村記念館は、全国気象測候従業者の計画によるもので、昭和7(1932)年9月に着工している¹³⁾。当時は、中央气象台福岡支台をモダンな意匠でまとめた堀口捨己が、引き続き品川観測所等を手掛けていた時期であり¹⁴⁾、このような状況において、設計者に選ばれたことは、福満が建築技術者として、一定の評価を得ていたことを示していると言える。

その他、「昭和六年八月刊行 高層氣象臺彙報 第六號」には、「高層氣象臺測風氣球觀測塔…(中略)…昭和五年十一月竣工…(中略)…構造 鉄筋混凝土二階建(延坪四坪 延坪五坪)…(中略)…設計者 文部省建築課 福満繁記」と記されている¹⁵⁾。この建物は、茨城県つくば市赤塚(旧筑波郡小野川村大字赤塚)に現存しており、旧筑波山測候所と同様、木立の中にひっそりと建っている。

5. おわりに

平成18(2006)年1月1日、筑波山の山頂における気象観測は再開された。筑波山神社が管理する旧測候所の建物等を利用して、筑波大学が筑波山気象観測ステーション(無人観測)を設置したからである¹⁶⁾。このユニークな企画を、多くのマスコミが取り上げたが、古びた建物がかつて多くの参観者で賑わったことや建物の設計者について報じられることはなかった。豊かな自然の中を登ってきた人々は、山頂で雄大な眺望を楽しんだ後、傍に佇む建物を不思議そうに眺めるのである。

補注

- 1) 気象庁予報部通信課無線通信室筑波山通信所東京基地事務所：筑波山測候所筑波山通信所のあゆみ 同所 2001
- 2) 中央氣象臺：昭和四年十一月 筑波山測候所要覽 同臺 1929
- 3) 昭和5(1930)年4月竣工の中央气象台三島支台の欄間においても放射状の格子とステンドグラスが嵌められており、ステンドグラスの図柄は箱根の山と雉である。なお、玄関付近にステンドグラスを用いた例としては、昭和4(1929)年3月竣工の中央气象台附属輪島測候所、同6(1931)年3月竣工の中央气象台福岡支台及び同7(1932)年10月竣工の中央气象台臨時富士山麓観測所をあげることができる。
- 4) 研究所めぐり 筑波山測候所, 理學界, 28(6)号, pp.42-43, 1930.6 なお、陳列室の位置は、中山正夫氏(筑波山測候所勤務)ならびに仁井田一郎氏(柿岡地磁気観測所勤務)へのヒヤリングの内容及び『筑波山測候所筑波山通信所のあゆみ』に掲載された図面より、2階西側北の図書並研究室であり、後に東側北の寝室も加わったと考えられる。
- 5) 筑波山測候所附属博物館, 博物館研究, 2(3)号, p.13, 1929.3
- 6) 日本博物館協會編：全國博物館案内 刀江書院 1932
- 7) 畠山久重は「理學界」の主筆として、理学思想の啓蒙普及に尽くしたことで知られている。長男久尚は第2代気象庁長官である。畠山久重遺稿 あしあと 地人書館 1959
- 8) 気象庁予報部通信課無線通信室筑波山通信所東京基地事務所：前掲書 2001
- 9) 昭和8(1933)年3月発行の『測候瑣談』には「福満繁之氏」となっており、『筑波山測候所筑波山通信所のあゆみ』も同様であるが、昭和12(1937)年10月発行の『測候瑣談』では「福満繁記氏」に訂正されている。
- 10) 年月日等については、各同窓会等の職員の方に確認して頂いた。
- 11) 「建築課 技手」の内、出張所勤務は「札幌出張所」(T(大正)9.11.1, T10.11.1)、「津出張所」(T11.11.1, T12.11.1)、「小平出張所」(S(昭和)9.10.1)、「小平出張所 所長心得」(S10.10.1)である。
- 12) 黒川直樹：小笠原観光の問題点と観光資源の再評価, 小笠原研究, 7, pp.45-46, 1982
- 『昭和七年十二月 中央氣象臺一覽』には、「昭和五年…(中略)…十二月附属父島測候所ノ廳舎、官舎建物改築工事竣工ス。」と記されている。中央氣象臺：昭和七年十二月 中央氣象臺一覽 同臺 1932
- 13) 気象庁：気象庁百年史 同庁 1975
なお、『高層气象台創立30年の回顧と現況』によると、高層气象台本庄出張所の竣工は昭和13(1938)年3月である。
高層气象台：高層气象台創立30年の回顧と現況, 高層气象台彙報, 特別号, pp.32-33, 1950.11
- 14) 西村公宏：御前崎測候所庁舎の設計について, 御前崎測候所史, pp.41-44, 2010
ちなみに、品川観測所は昭和7(1932)年9月起工、昭和8(1933)年3月竣工である。
- 15) 高層氣象臺測風氣球觀測塔, 高層氣象臺彙報, 第六號, pp.90-91, 1931.8
- 16) 林陽生：新たに開設した筑波山気象観測ステーション, 筑波フォーラム, 75, pp.133-136, 2007.3

気象建築ウォッチング

茨城県の筑波山及びその周辺は、気象施設と縁の深い土地柄である。すでにふれたように、筑波山の山頂には中央気象台附属筑波山観測所が、また、筑波山を西に望む石岡市柿岡には中央気象台附属柿岡磁気観測所(大正元(1912)年末に中央気象台の地磁気部門が東京旧本丸より移転)が、さらに、北に望むつくば市長峰には潤層気象台(大正9(1920)年8月創設)が設けられている。これらの敷地には、大正期から昭和初期にかけて竣工した建物の一部が残されており、当時の佇まいを今に伝えている。(図6 旧筑波山測候所庁舎、図7 同ステンドグラス、図8 地磁気観測所実験室(設計 佐藤貞次郎 大正13(1924)年5月竣工)、図9 同庁舎(同大正14(1925)年8月竣工)、図10 高層気象台測風気球観測塔(昭和5(1930)年8月竣工)



図6



図8



図7



図9



図10

謝辞:本研究を進めるにあたっては、国土交通省気象庁、文部科学省、筑波山神社、工学院大学、鹿児島県立加治木工業高等学校及び茨城県庁等の皆様方から種々のご配慮を賜りました。記して謝意を表します。

Mt. Tsukuba Meteorological Observatory and Shigeki Fukumitsu By Kimihiro Nishimura

Mt. Tsukuba Meteorological Observatory was located at the summit of Mt. Tsukuba (877m), pioneering the high-altitude meteorological observation in Japan. In December 1928, a new partially three-story building with armored concrete, featuring the overall floor area of 136.95m². The overall design layout remained very simple with a combination of rectangular parallelepiped with decorative stained glasses in the fanlight. The observatory featured an exhibition space where a wide variety of specimens of animals and plants in Mt. Tsukuba.

The building was designed by Shigeki Fukumitsu, a graduate from the Polytechnic, a forerunner of Kogakuin University.



茨城県土木部都市計画課 西村 公宏

学 歴

1960年 香川県生まれ
千葉大学大学院園芸学研究科中退
東北大学大学院工学研究科修了
博士(学術)千葉大学、博士(工学)東北大学
2006年 第26回東北建築賞研究奨励賞受賞

著 書 大学附属臨海実験所水族館
近代日本大学附属博物館の一潮流
東北大学出版会 2008

共著等 御前崎測候所史 御前崎測候所 2010
解題 田村剛の庭園観 栢書房 2011

NISHIMURA Kimihiro

Ph.D. Dr.Eng
City Planning Division, Ibaraki Prefectural Government.

Mt. Tsukuba meteorological observatory and FUKUMITSU Shigeki

輝かしき先輩たち 12

小坂町に、ぜひ一度、
お出掛け下さい

北湯口勇太郎



1. ルネサンス風とイスラム風が混在する傑作

北湯口勇太郎である。勇太郎は、1869年(明治2年)9月23日、秋田県鹿角郡小坂村に生まれた。父は、小坂村が小坂村として名を馳せる小坂鉱山の専属大工であった。勇太郎は、1891年(明治24年)2月に工手学校建築学科を卒業する。第4回生で、同窓には22名がいた。

卒業すると、勇太郎はすぐに帰郷する。帰郷するというのは、即ち小坂鉱山で働くことに他ならない。小坂鉱山工作課が、勇太郎の就職先であった。5年後の1896年(明治29年)には、職頭から雇員に、さらに職員として採用された。その時の月給が17円と資料は語る。

勇太郎が職員となった小坂鉱山とは、どんな会社だったのだろうか。先にも少し触れたが、村は小坂鉱山で成り立っていたのだ。

小坂鉱山で、銀の鉱石が最初に発見されたのは1861年(文久元年)だった。溶鉱炉が完成したのは1870年(明治3年)……勇太郎の生まれた翌年である。その後、新製練法の導入により、1881年(明治14年)には日本一の銀生産量を記録する。そして1884年(明治17年)、小坂鉱山は政府から、大阪の財閥だった藤田組に払い下げられた。

1900年(明治33年)、小坂鉱山は銅山として再出発する。それからの発展は目覚ましく、腹子(愛媛県)、足尾(栃木県)と並んで日本三大銅山と呼ばれるようになった。1907年(明治40年)には銅の生産量の日本一を誇る。その額は当時の秋田県の予算の8倍を超えたというし、人口も6万人を数えたというから、その隆盛ぶりを想像するのは難しくない。

では、北湯口勇太郎は、その景気の良い会社で何をしていたのか。



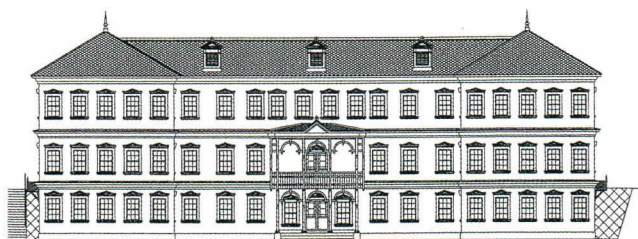
何故に、「輝かしき先輩たち」の一人に名を列ねるのか。

「小坂鉱山事務所」が、1997年(平成9年)に小坂町に譲渡され、2001年(平成13年)に現在地の小坂中央公園に移築・復原されている。

木造3階建て。ルネサンス風の佇まいは、気品に充ちている。小坂町の穏やかな風土に、白い漆喰壁と、ドーマー屋根、整然と並ぶベディメントが心地よく治まっている。正蔓の長さ：126尺(38.178m)。

玄関回りが、ユニークである。何故か、イスラム風。アーチの透かし彫りの模様は「藤の花」である。会社は、藤田組である。さらには「藤」と「田」の字もあしらい、洒落気もたっぷりだ。明治・大正期の様式建造物には、こうした様式の楽しい混成が常だが、鉱山事務所も“時代の主張”を力強く表現している。

内部の中央玄関ホールには、螺旋階段が3階まで突き抜けている。このうねり方と仕上げが、また圧巻である。小坂鉱山事務所は、2002年(平成14年)、国重要文化財に指定された。



移築復原案正面図



2. 鉱山事務所は小坂鉱山の隆盛を象徴する建築だった

この鉱山事務所を設計担当した人こそ、北湯口勇太郎であった。竣工は1905年(明治38年)。小坂鉱山が銅山として再出発し、軌道に乗りかけた時である。事務所は、そのシンボルの意味と役割を担って、鉱山の中心市街である銀山帳りに建てられた。重責を見事に旺たして、勇太郎は、どんな気持ちだったのだろう。

これだけ頼られていたのに、勇太郎は、自分の代表作の事務所の完成した翌年、藤田組を退職してしまう。資料によれば、当時の鉱山事務所の所長であった武田恭作の独立に伴った、とある。武田鉱業の社員として、八森町の椿鉱山に勤務する。

これも資料だが、八森町の椿鉱山は小坂鉱山の近況、とある。八森町(現八峰町)は、小坂町の西へ約62km、日本海に蔓した港



明治百年通りから見た全景

町だ。近況とはいえ、山道を毎日帳うのは困難だったのだろう、勇太郎も住所を小坂から八森に移している。

1915年(大正4年)、久原鉱業に入社し、大分県佐賀関製錬所を仕事場とする。久原鉱業の社長である久原房之助は、かつての藤田組での小坂鉱山所長であった。久原房之助は、すでにこの『輝かしき先輩たち』に登場している。『輝かしき先輩たち』⑤熊澤榮太郎』(vol.27/2003年)である。熊澤も、1917年(大正6年)に久原鉄工所に就職している。後の日立グループを築く房之助が最も幅広く精力的に活動していたこの頃、工手学校出身者は数多く、房之助の世話になったのではないかと思われる。

1919年(大正8年)に勇太郎は、東京・池袋に自分の建築設計事務所を開設する。そして、1931年(昭和6年)12月9日に逝去する。享年62歳であった。

残念ながら、小坂鉱山事務所以外の勇太郎の作品は判然としない。事務所ほどの才気があるのだから、その手から造られた建築は蔓白かったはずだ。

3. 小坂町は一見の価値のある町だった

秋田県鹿角郡小坂町は遠かった。Googleマップで東京からのルートを検索して、まず驚いた。JR新幹線：東京～盛岡(2時間30分)→IGRいわて銀河鉄道：盛岡～十和田南(2時間11分)→徒歩：十和田南～小坂町(約2時間13分)。最後の徒歩：約2時間13分には泣けた。とはいえ、行かなければ取材にならない。結局は盛岡から高速バスがあり、“徒歩：約2時間13分”は免れたが、日帰りは無理なので、小坂町での宿泊を探した。これにも驚



玄関周り…イスラムに“和”もコラボしていますね



2階の玄関上バルコニーより康楽館を見る

いた。ホテルが1軒、民宿が2軒あったのだが、どこも満室で断られた。季節柄、東北は祭りの時期で、町を挙げての祭りでもあるのかと聞いたら、製錬所が稼働中で、それに従事する人たちが滞在しているのだという。

まだ、小坂鉱山は現役でいたのだ。採掘こそ行なわれていないが、なかではレンガ造の施設がまだ数軒、使用されているという。そして、小坂町。勇太郎の鉱山事務所の南側で「康楽館」が興行を打っていた。「興行」？ そう芝居小屋で、それも日本最古の木造芝居小屋なのだ。絵に描いたような和洋折衷で、近代建築オタクにはたまらない作品だ。そもそもは小坂鉱山の従業員のための娯楽施設で、設計は“もしや”と思ったが、竣工は1910年(明治43年)で、この時には勇太郎はもう小坂鉱山にいない。設計は勇太郎の部下の山本辰之助であった。

鉱山事務所の北側、小坂川に架かる中島橋を渡ったところに、これまたイキなファサードを持った洋館が建っていた。聞けば、「花園館」といい、秋田県最古の映画館という。これも小坂鉱山の従業員のための娯楽施設の一つだったのには間違いない。明治百年帳りを挟んだ西側には「天使館」(旧聖園マリア園)も残されている。

小坂鉱山事務所も、康楽館も、建築に従事している者であれば、一見の価値はある。ぜひ一度、お出かけ下さい。

(記：類洲 環)

*取材にあたり、小坂町役場さん大変にお世話になりました。原稿を深めることのできた資料、および文中の図版は、全て小坂町役場さんからの提供です。誌蔓を借りて、お礼を申し上げます。また、小坂鉱山事務所をはじめ歴史的建造物の数々を残し、有効活用して下っている小坂町役場に、重ねて感謝を捧げます。

Tribute to Our Great Seniors vol. 12 Yutaro Kitayaguchi Make A Visit to Town of Kosaka, Please! Written by Kan Ruisu

This year's article features Yutaro Kitayaguchi. He was born in Village of Kosaka on the 23rd of September, 1869 and studied in Department of Architecture, Polytechnic (the forerunner of Kogakuin University) where he graduated with 22 other students in February, 1891.

He returned to the village immediately after completing his academic life to work in Kosaka Colliery. After five years of hard work, he was promoted to be an official employee with a monthly salary of JPY17 in accordance with a reliable reference.

Kosaka Colliery was very rich by running a lucrative business of silver mining but the real growth as a company came when it restarted as copper mining firm under the umbrella of Fujita Gumi, one of the largest company syndicate headquartered in Osaka. It did not take time for Kosaka Colliery to be regarded as one of the top three mining companies in Japan with the record of the largest volume copper production in 1907. The village was, in the full sense of the word, built around the company. The population in 1907 reached 60,000.

Now, let's turn our attention to the protagonist of the article, Yutaro. He designed the headquarters of the Colliery, the ownership of which was transferred to the municipal government of Town of Kosaka in 1997, moved, restored and preserved in mint condition in Kosaka Central Park in 2001.



螺旋階段



His design was tremendous. The three-story building reminds me of a fine Renaissance architecture because of white lime plaster finish combined with the Dormered roof and pediments systematically aligned. The entrance projects uniqueness. It seems to have an Islamic nuance. The arch features a relief of Japanese wisteria (called "fujii" in Japanese), which must have been a small tribute to the parent company, "Fujita Gumi". Also found are two Chinese characters meaning "Fujita" at the entrance area. It is a humorous way of company CI representation, which seems to be nice. Inside the building, the spiral staircase reaches to the 3rd floor in the central entrance hall.

His work, completed in 1905, was influenced by the Renaissance and Islamic architectural designs. It is worth mentioning here that the mixture of styles was often seen with the architectures in Meiji (1868 - 1912) and Taisho (1912 - 1926) periods.

The headquarters building was designated important cultural property in 2002.

One year after the completion, Yutaro quit Fujita Gumi to remain faithful to Kyosaku Takeda, head of the mining department who established his own company. Then, in 1915, he joined Kuhara Minery, run by Fusanosuke Kuhara, who was formerly the president of Kosaka Colliery and laid the foundation of Hitachi Group later.

Let's go back to the main track. When I made up my mind to cover this beautiful work of art, I tried to get information how to reach Kosaka, which surprised me. According to Google Map, I have to take Shinkansen (bullet train) for 2 hours, transferring to a local train for 2 hours and 10 minutes and walk for another 2 hours! To my relief, there was a bus service from Morioka to Kosaka and I did not have to walk.

The travel was worth making. Some of the buildings in Kosaka Colliery venue are still being used though no mining is carried out. One example is "Koraku Kan" theater in the southern neighbor of Yutaro's headquarters, which combines the western and Japanese tastes, appealing to architectural nerds. It was designed by Tatsunosuke

Yamamoto, a junior staff of Yutaro, and completed in 1910.

In the north of the colliery, there was a western-oriented house near Nakajima Bridge, which is called "Kaen Kan", the oldest cinema in Akita Prefecture. I wonder if it was one of the amusement facilities for the employees of Kosaka Colliery.

In Town of Kosaka, there are several interesting architectural assets. It may take some time to reach there and, if you are not very lucky, you are forced to walk for a couple of hours, maybe. That said, I want to say it again that it is worth visiting the town!

Complements:

I would like to extend my gratitude for the staff members in Kosaka Town Office for their supports and cooperation. All the references and materials used for the articles are provided through the courtesy of the Town Office. Special thanks should be dedicated to the efforts and passion of the Town Office. It is not hard to imagine that there should be great care and affection needed to preserve the historically important buildings in great condition while using them.



類 別 環 [本名：伊藤真人]

略 歴

1945 東京都立川市生まれ

1968 工学院大学建築学科卒業

1973 新建築社編集部入社

1997 環編集室設立

著 書

『伽牙組忍法帳〜いざ戦わん、真田新十勇士よ!』

『西洋館炎上』『一わくわくクラブ奮闘記』



康楽館 (1910年/国重要文化財)



花園館 (1913年)



天使館 (1932年)

連載
企画大学近況、研究室を訪ねて1
野澤研究室

ゼミ見学会（三軒茶屋）

研究室の研究テーマはなんですか、具体的にどのような活動を行っていますか？

野澤研究室の研究テーマは、大きな分野で言えば都市計画・都市デザインです。その中でも、近年はまちづくり条例、デザインガイドラインなど、地域に固有の規範やルールに着目した研究に多く取り組んでいます。また、形態規制制度や密集市街地整備の手法、震災復興や中心市街地活性化、都市計画マスタープラン、都市のデザイン要素など、長年継続的に取り組んでいるテーマも健在です。

日本は、既に高齢社会、人口減少社会に突入しています。今後は、こうした社会背景に対応した都市計画・都市デザインの研究や提案が求められてきます。高齢者に対応したまちづくりから、居住地として選ばれて生き残ることのできるまちづくり、縮退とよばれるまちを閉じていく手法まで、今後の課題



中野区の方々との卒論中間発表会

は膨大です。こうしたものに積極的に取り組んで行きたいと考えています。

2010年度、初の試みとして、以前から関わっていた中野区本町2,3丁目地区を対象として、様々な角度のテーマから地区に切り込んでいく選択肢を提示し、数名の卒論生がこれに呼応して研究に取り組んでいます。加えて、区役所職員・OBにも協力をお願いして、ゼミや中間発表会に出席していただき、ご意見をいただく機会を設けています。区の立場を理解しながら、なおかつ既成概念にとらわれない学生らしい自由なアイデア・発想が生まれることが期待されています。

どの分野でも同じですが、特に私の研究室の分野は、こうした実社会との接点なしには成立しない分野です。今後も地方自治体や地域と連携して、より実践的なまちづくり研究やまちづくりデザインの提案に取り組んでいきたいと考えています。学生から

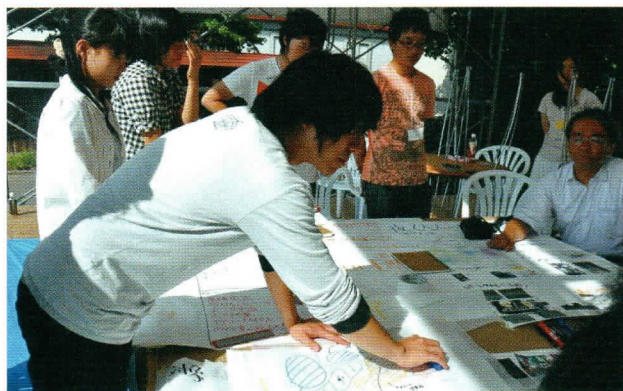
を見ると、設計なのか、論文なのかという目で研究室を見がちですが、両方がうまく組み合わせられてこそ良いまちづくりが提案・実現できていくでしょう。

学生にどんなことを期待していますか？

学生には2つのことを期待しています。

ひとつは、内弁慶にならず、積極的に外に出て行くことです。私の研究室では、わからないことがあれば、そこに行ってみよう！というのが大原則です。GoogleのStreet Viewなどは便利ですが、現場に自分の身を置いて初めてわかることは少なくありません。フットワークの軽さを身につけてほしいものです。

また、私の研究室では、大学院生の都市デザインワークショップ(WS)への参加を通して、他大学の教員・学生との交



2009年黒石WSエスキース(手前が当研究室小田君)

流を行っています。言わば、対外試合です。私が企画・指導に参画している日本建築学会のシャレットWSには、2005年の第1回から毎年大学院生が1,2名参加しています。2009年の黒石WSに参加した小田洋介君(2011.3修士修了)は、その後も地区内の銭湯の再生提案をまとめるために、何度か現地に赴いて活動を続け、重要な役割を果たしました。

2011年のシャレットWSは東京開催。それも西新宿の再生をテーマにすることで準備を進めています。地元開催ですので、何らかの形でより多くの学生に少しでも雰囲気を経験させたいと思っています。

もうひとつは、自分が取り組んでいる課題が社会の中でどのような位置づけにあり、どのような意義があるのかを理解



2010年越前大野WS発表会(マイクを持っているのが当研究室奥村君)

することです。興味を持ったことからスタートするのは重要ですが、それだけでは意義のある研究にはなっていきません。私の研究室では、卒論のテーマを決めるにあたって、研究企画(テーマ、目的、手法、既往研究の中での位置づけ、想定される結論など)を繰り返し議論します。夏休みぐらい、場合によっては夏休み後まで続きます。こうした議論の中で、自分で調べ、考え、自分の立ち位置を明確に意識するようになってほしいと考えて、ゼミを運営しています。



コンペ入賞の小田君と柴崎君(中島智研究室)

Prof. Nozawa's laboratory introduction

Nozawa Laboratory focuses on urban design and city planning. In recent years, we mainly research on community planning ordinances and design guidelines as a rule for some communities. We think that it will become more important to research on design and planning for aged society, survival strategy as sustainable communities, or how to close some suburban residential areas because the population of our country is gradually decreasing.

Our mottoes are to go outside aggressively for perceiving the atmosphere of the area 'on the site' and to understand the standing position of each study by surveying the district, reviewing existing researches and discussing with many people.



建築都市デザイン学科 野澤 康

学 歴

1987年3月 東京大学工学部都市工学科 卒業
1993年3月 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
博士課程 修了(博士(工学))

略 歴

1993年6月～ 東京大学工学部都市工学科 助手
1995年4月～ 工学院大学工学部建築学科 専任講師
1998年4月～ 工学院大学工学部建築学科 助教授
1999年4月～ 工学院大学工学部建築都市デザイン学科
助教授(学科新設による異動)
2005年4月～ 工学院大学工学部建築都市デザイン学科
教授 現在に至る
2010年4月～ 学長補佐・就職支援センター所長・
大学院運営委員長 兼務 現在に至る

Yasushi Nozawa

Education

1987 Department of Urban Engineering,
University of Tokyo
1993 School of Engineering,
University of Tokyo
1995 Department of Architecture,
Kogakuin University
1999 Department of Design
in Architecture and Urbanism,
Kogakuin University

2005-present

Professor, of Dept. of Design in
Architecture & Urbanism
Kogakuin University

2010-present

Associate to the President
Chairman of Graduate School Committee
Dean of Career Support Center

連載
企画大学近況、研究室を訪ねて2
木下研究室

子供ワークショップの風景

研究室の研究テーマはなんですか、具体的にどのような活動を行っていますか？

木下研究室は建築のデザインが主体の研究室で、住まいから都市を考えることをテーマに設計に取り組んでいます。住まいは都市を形成する建築の基本単位ですが、それら住まいによって成り立つ街や、更には街並みや都市景観についても考察を展開していくことを目標としています。

わが国の住まいは、特に戦後の20世紀後半において、家族＝核家族を単位として一つの住宅に一家族が住むことが前提に考えられてきました。しかし戦後半世紀以上が経過した今、現代の家族は実に多様化しており、家族＝核家族という図式はもはや典型的な家族像として存在し得ないように思われます。また、2005年に日本の人口は、1899年に統計を取り始



新宿の木下研究室にて

めて以来、初めて出生率が死亡率を下回り、文字通りの少子高齢化時代となったわけです。そのような社会状況のなかで「家族」とは何か、あるいは「居住するための単位」とは何なのかという根源的なところからの住まいの再構築が求められているのではないのでしょうか。住まいという都市の基本単位を発端として、わが国の今後の都市像や社会像にまで発展し得る提案を、若い学生とともに考えていきたいと思っています。

研究室では、設計事務所も主宰している建築家としての私自身の活動とともに、学問や研究という枠にとらわれずに、実務に関係したフィールド・サーベイや市民ワークショップなどにも学生たちが積極的に参加してもらう機会を心がけています。そうすることで、実社会のなかでの建築家の役割についての意識も高められることと信じています。

木下研究室には年齢も経歴も異なるさまざまなメンバーがいます。2009～2010年度は日本の住宅について研究する目的で来日したアメリカのフルブライト研究員も在籍しており、英語による設計演習も実施されました。また、カナダの大学院生との短期ワークショップも隔年行われており、建築デザインを学びながら英語も抵抗なく話せるようになることで、コミュニケーションの輪が広がります。



英語による設計講評会

学生にどんなことを期待していますか？

建築を学ぶということは、単に机に向かって学問を習得することだけではないのです。むしろ、机に向かっていない以外の時間に思わぬ発想が浮かんだりするものです。建築を学ぶということは身の回りの生活について考えることであり、おいしいものを食べて感激することであり、旅に出てよいものをたくさん見たり街のなかの美しいものに触れたりして刺激を



ゼミ合宿見学会

受けることなのです。一番身近な「住まい」について考えることはもちろん、「食」を味わい「旅」を楽しむことも建築を学ぶことに通じるのです。五感を研ぎすませて多くを体感し吸収すること、これこそがデスクワークにもまさるデザイン教育ではないかと考えています。

建築デザインはまた「これが正解だ」という模範解答がありません。ましてやすばらしいアイデアを創造するためのマニュアルなど存在し得ないのです。ですから、自分自身が判断できるような評価基準を持つことが大変重要になってきます。若く、頭も柔軟なうちにさまざまなことを考え、好奇心を持ち、また疑問をも持つこと、そして自分なりの価値観をしっかりと養ってほしいと願っています。



ゼミ合宿

Prof. Kinoshita's laboratory introduction

Kinoshita laboratory specializes in architectural design where our focus is to understand houses and thereby understand cities. House is the basic unit that composes a city. We intend to explore houses which, in turn, compose cities that further create streetscape and cityscape.

Members of Kinoshita laboratory vary in their age and background. In the year 2009-2010, a Fulbright researcher from the US who was studying Japanese houses joined us, and we conducted some design workshops in English. We also have biyearly short-term workshop with graduate students from Canada. We expand our communication limit from these experiences of learning design and using English.

建築学科 木下 庸子



学 歴

1977年 スタンフォード大学 卒業
1980年 ハーバード大学 デザイン学部 大学院 修了

略 歴

1981～1984年 内井昭蔵建築設計事務所
1987年 設計組織ADH設立 現在に至る
(2005年～2007年3月 UR都市機構都市デザイン
チームチームリーダー)

2007年より工学院大学教授

Yoko Kinoshita

Education

1977 Stanford university, School of Engineering Bachelor of Arts in Architecture with Distinction
1980 Harvard University, Graduate School of Design, M.Arch.

Professional Experience

1981-84 Shozo Uchii Architect and Associates
2005-07 Team Leader, Urban Design Team, Urban Renaissance Agency (Governmental Subsidized Housing Agency)
1987-present Established ADH Architects with Makoto Shin Watanabe
2007-present Professor, School of Architecture, Kogakuin University

連載
企画大学近況、研究室を訪ねて3
野 部 研 究 室

夏期強化合宿 宿の前で

研究室の研究テーマはなんですか、具体的にどのような活動を行っていますか？

私たち野部研究室は「次世代の空調システムに関する研究」「建物の室内環境及びエネルギー性能評価に関する研究」「建築における自然エネルギーの有効活用に関する研究」という3テーマを元に研究を行っております。過度な専門分化によりブラックボックスとなってしまった現代の建築を、シンプルで飲み溢れるものに回帰すべく、テーマを選定しています。具体的には実際に稼働している建築の実測評価や、実験室において様々な実験を行っています。計画の段階から自ら行う為、1つの研究として結果を出した時の達成感は格別です。また、多くの企業の方と共同研究を行う機会が多い為、社会勉強にもなりますし、人生の大先輩と一杯飲めるというのも大きな魅力でもあります。



夏期強化合宿 船で穴場スポットへ

その他、研究室内では多くのイベントが開かれます。

・夏には夏期強化合宿が開かれ、南伊豆入間を拠点として様々な海岸に足を運びます。ビーチと言うよりも磯を徘徊し、素潜りをしてサザエ、カメノテ、フジツボなどの獲物を捕らえます。宿は先生も大学時代に訪れたという歴史ある場所。ご主人が捕獲してきた海の幸の味は格別です。

・秋には「酔狂会」と題したOB・OG会が開かれます。歴代の先輩方と、在学生でその名の通りお酒を飲み交わします。昨年は先輩方を含めた大ボウリング大会が開かれ、世代を問わず大盛り上がり。一番気合いが入っていたのは先生だったので？

・冬には冬期強化合宿が開かれます。蔵王のグレンデに聳える山小屋を拠点とした、スキー三昧の3日間です。例年初心者は、野部先生直々の指導の下猛特訓。蔵王は吹雪く事が多く、極寒の山頂ア

タックも良い思い出となります。宿である山小屋名物は夕食のジンギスカン。毎年大量の肉と白米を平らげます。

学ぶときは学び、遊ぶときは遊ぶ。野部研究室は、有りとあらゆる事を学べる研究室です。

学生にどんなことを期待していますか？

野部先生が学生に期待する事項をご紹介します。

・野部研適性指数(N値)が高いこと。

ここで云うN値は土壌の硬さを示すものではない。簡単に表現すると、

$$N = (G/S) \times O \times C$$

であろうか。ここで、

G:Grade 成績あるいは成果

S:Study それらに費やした勉強や仕事の時間

O:Optimum Span 最適化のための時間軸の長さ

C:Curiosity 好奇心

である。

ことに建築という包括的な分野においては、成人してからも日々新たなことを学びながらアウトプットを出すという「無限ループ」を構築させる必要がある。従って、一生の総量を徒に減らしてはならない。故に重視するのは効率指標で、G/Sはまさに効率を示す。

また、人生を最適化する上で高い視点から将来を展望する努力も必須である。その日暮らしではN値は大きくならない。何処まで遠くを見渡すかというファクターがOである。



OB・OG会 集合写真

最後のCは物事への接し方を示す。別名助平心とも云う。

もっとも、それぞれのファクターには具体的な数字が当て嵌まるものではなく、概念を示すものである。

・議論を厭わないこと。

研究室では常に議論を学生に吹っ掛けるのが先生の仕事のひとつである。話は建築の枠を超えて森羅万象に及ぶ。それによって学生が長い年月をかけて頭に埋め込んできたバラバラの知識が次第に脈絡を持つようになり、知恵となって結実を見る。とくに多数の人智を長期間にわたって結集する必要がある建築分野では、この洗礼は大きな意義を持つ。

・安易な情報やツールに踊らされないこと。

パソコン、インターネット然り。ツールは上手に使うこそメリットが生まれる。道具に使われてはならぬ。考える時間をつくるためには、敢えて情報機器を遠ざけることも、場合によっては必要である。情報は得るのが目的ではなく、それを材料にして考えるのが肝心であると認識されたし。



冬期強化合宿 ゲレンデで集合写真

Prof. Nobe's laboratory introduction

We research based on three themes, "Next-generation Air Conditioning Systems" "Evaluation of Indoor Environment and Performance Assessment of Buildings" "Efficiently Use of Renewable Energy in Buildings". We are working hard every day to make black box modern building simple and fun. Specifically, we measure of buildings and have made various experiments in the laboratory. Therefore we create a plan of the research oneself, achieve a sense of accomplishment. Also, we have many opportunities to collaborate with social superior, thus we learn something about society. And, it is pleasant to drink with social superior.

In addition, we have many events. Every year, summer camp is held. We go to the various beaches based in the Minamiizu, Iruma. And everyone enjoys diving. Seafood caught by innkeeper is exceptional. In autumn, alumni association named "SUIKYOU KAI" held. Drink with seniors. Last year, Bowling Tournament held and turned out to be extremely successful. In winter, the winter camp held. We play sky three days in Zao ski slopes.

NOBE laboratory is where to learn various things.



建築学科 野部 達夫

略 歴

1958年 東京都生まれ
1981年 早稲田大学理工学部建築学科 卒業
1983年 早稲田大学大学院 理工学研究科 建設工学専攻
修士課程 修了
清水建設株式会社 入社(～2001)
1989年 早稲田大学大学院 理工学研究科 建設工学専攻
博士課程 修了
1998年 早稲田大学理工学部建築学科 非常勤講師
2001年 工学院大学工学部 建築学科 環境コース 助教授
2004年 同 教授

mail : nobe@cc.kogakuin.ac.jp

Tatsuo Nobe

1985 Born in Tokyo
1981 Graduated Department of Architecture,
Faculty of Science and Engineering,
Waseda University
1983 Completed Doctor prophese,
Division of Science and Engineering,
Waseda University
Shimizu Corporation, Ltd(～2001)
1989 Completed Doctor later,
Division of Science and Engineering,
Waseda University
2001 Department of Architecture,
Faculty of Technology, Kogakuin
University

建築デザイン特論

「都市デザインと建築」

法政大学名誉教授／ミシガン州立大学特任教授 萩原俊一

2010年10月6日、久しぶりに工学院大学新宿校舎での授業機会をいただいた。谷口宗彦教授の「建築デザイン特論」での特別講義であったが、十数年前に「建築設計第4」を非常勤としてお手伝いして以来である。

講義タイトルは「都市デザインと建築」とし、内容は「剛の都市デザイン」、「剛・柔の都市デザイン」、「柔の都市デザイン」に分類し、それぞれに建築を基本的なエレメントとして組み込んだ。実質75分で26枚のスライドを用いた講義は学生諸君に深い理解を求めるのは難と思えたが、寄せられた感想文からはそれは杞憂であった。

剛の都市デザイン

「剛の都市デザイン」は、形や機能から入る都市デザインである。紀元前15世紀頃エジプトの「テル・エル・アマルナ(Tel el Amarna)」に建設されたピラミッド建設に従事する職人村(下)が最古とされる。村は6mの壁で囲まれており、その面積は6,500㎡ほどで700人余りが居住したとされる。1戸当たり65㎡程度で2階や屋上テラスもあり、自治制度も確立されていたという。

現在にも繋がる街区計画技術である格子状街区はギリシャ時代の紀元前4世紀頃、小アジア(現トルコ南西部)に建設された「ミレタス(Miletus)」や「プリエネ(Priene)」に見られる。いずれも「格子状街区プラン(Gridiron Plan)」の始祖とされるヒポダムス(Hippodamus)に



Tel el Amarna 出典:南風博物館

「プリエネ(Priene)」に見られる。いずれも「格子状街区プラン(Gridiron Plan)」の始祖とされるヒポダムス(Hippodamus)に

よる。

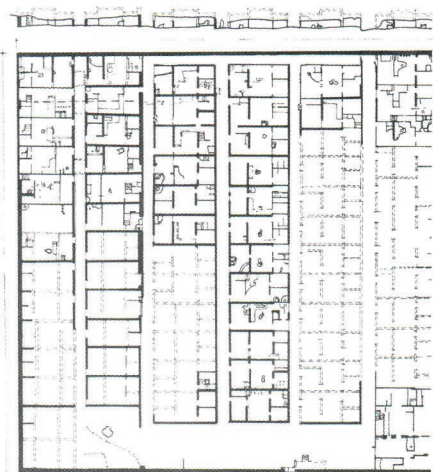
フィラデルフィアで永らく都市計画に携わったエドモンド・ベイコン(Edmond Bacon)の「Design of Cities」(1967年)には、それぞれのモデルが掲載されているが、ミレタスのモデルにはギリシャ(紀元前4世紀)からヘレニズム(紀元前2世紀)、そしてローマ時代(2世紀)へと政治や行政体制の変遷と共に公的施設が開放型から囲込み型に変わっていく様子が明快に示されている。プリエネが格子状街区とコートヤード住宅で構成されていることもよくわかる。

中世には防御を旨とした「要塞都市」が数多く誕生したが、限られた敷地での人口増は建物を高層化し、幾つかの都市で高さを70フィート以下に制限する勅令が発せられたという。上層階から汚水を投げおろす行為は日常化し、仏語で「Gare de L' eau(汚水だぞ)」、英語で「Gardy Loo(同意味)」という表現が今に残る。結果は黒死病の蔓延で都市人口の半分近くを失ったとの記録があるのは良く知られている。クロアチアに残る「デュブロブニク(Dubrovnik)」(次ページ上)は代表的な要塞都市で今もなお残る。

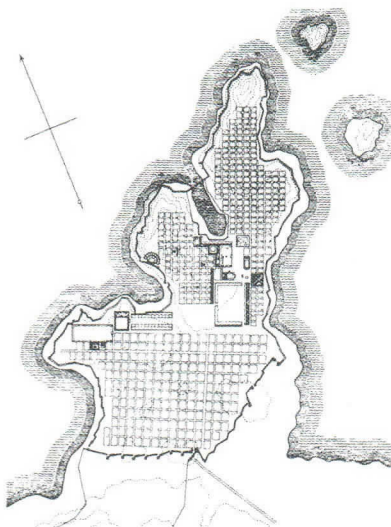
ルネッサンス時代の欧州では中世での疫病の蔓延への反省もあり、理想都市を求める動きが顕著となった。この時代、魔術師、占い師などに免許が与えられたりしたこともあり、占星術に基づく曼荼羅型やその変形、さらに、レオナルド・ダヴィンチ(Leonard da Vinci)の「ヴィトルヴィウスの人体図(Vitruvian Man)」に基づく理想都市が多く計画されたが、実際に建設されたものは少ない。

右ページ中央図は「ヴィトルヴィウスの人体図」である。人体図の下のは二つは曼荼羅型で右の三つはその変形である。

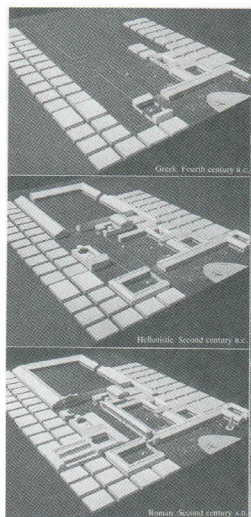
形としての都市デザイン、中でも格子状街区は近世、新世界、米国で開花した。代表的なものにウィリアム・ペン(William Penn)



Tel el Amarna
出典:Encyclopedia of Urban Planning



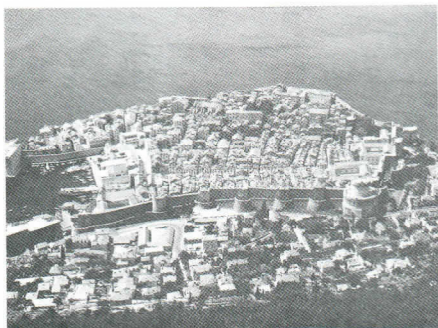
「ミレタス」プラン 出典:Planning and Cities



ミレタスの変遷モデル
出典:Design of Cities



プリエネの野外劇場跡 出典:Wikipedia



Dubrovnik
出典:Encyclopdia of Urban Planning



要塞都市クロアチア・デュブロブニク
出典:Wikipedia

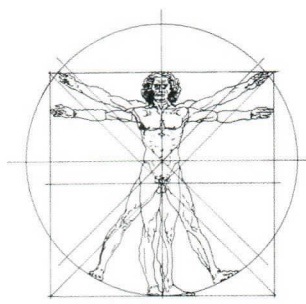
の「フィラデルフィア (Philadelphia)」がある。ここには格子状街区に公共空間としての公共広場「コモン (Common)」が設けられている。ペンが地代を払わない不法居住者達への対応の仕方を英国の弁護士に相談したとの逸話が残っている。

因みに、フィラデルフィアでは市庁舎頂部に立つペンの彫像(右下)を超える建物は存在しない。

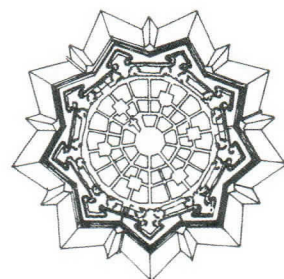
首都ワシントンも格子状街区を基本とするが、ここには放射状の街路が走る(次ページ:左上)。ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) は整然な格子状街区を主張したとされるが、計画者のピエール・ロンファン (Pierre L'Enfant) は首都としての統治性を主張し、自身、英国での貴族階級であった初代大統領ジョージ・ワシントン (George Washington) もこれに同調したとされる。

近代に入っても「剛のデザイン」は各地に見られる。中でも19世紀半ば、ナポレオン三世の命により時のセーヌ県知事オースマン (Georges Haussman) が手掛けた「パリ大改造」は当時のパリの3/4とも2/3ともされる街区を取り壊し、凱旋門を中心に8本の大通りを放射状に設け、沿道の建物の壁面線や高さを統一するなど世界に誇る都市景観を構築したが、この事業の最大の功績は上下水道を整備したことである。これにより「Gare d' Leau」は過去のものとなり衛生環境が大きく改善し、黒死病の抑止に貢献した。加えて、ノートルダム寺院やオペラ座も建設され、今の文化芸術都市の基礎を作った。

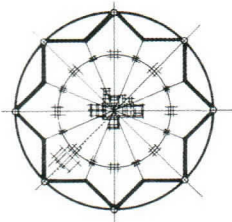
他にも、ウォルター・グリフィン (William Griffin) によるオーストラリアの「キャンベラ・プラン (Canberra Plan)」(1911年)、ルシオ・コスタ (Lucio Costa) による「ブラジリア (Brasilia)」(1971年) など一概に「剛の都市デザイン」と定義しえないが、それに類したものと言ってよい。



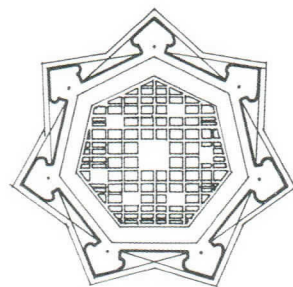
Vitruvian Man [after Leonardo da Vinci]
Note the mandala forms of square and circle and their relationship with the navel and genitals



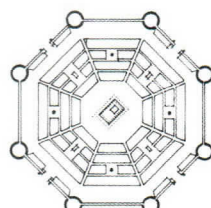
Ideal City [after Lorini]



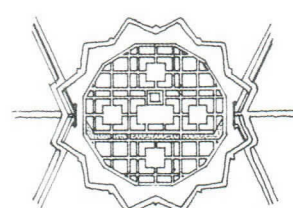
Storzinda [after Antonio Filarete]



Ideal City [after Cataneo]



Vitruvian Ideal City.

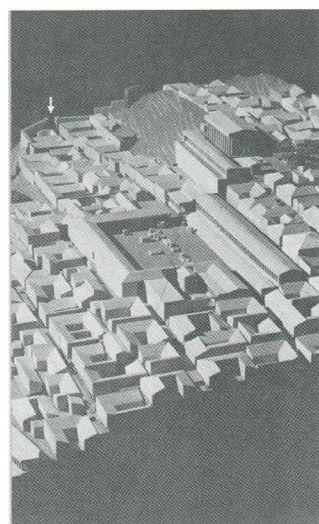


Ideal City [after Scamozzi]

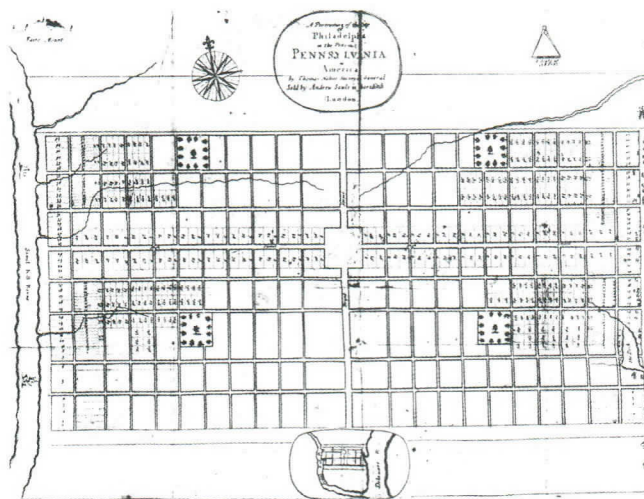
Mandala forms.

ヴィトルヴィウスの人体図
出典:Encyclopdia of Urban Planning

Ideal cities (mandala variants).



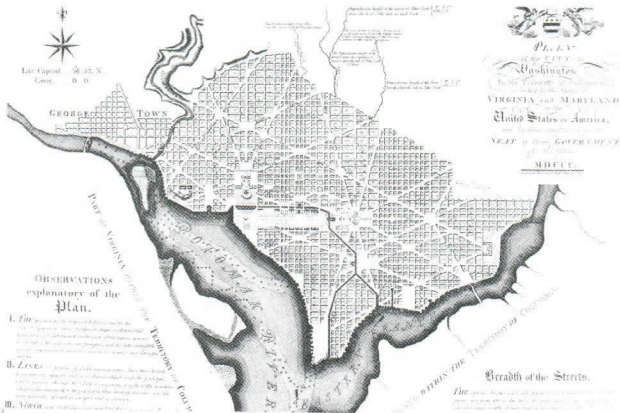
プリエネ街区模型
出典:Design of Cities



初期の「フィラデルフィア」プランニング
出典:Planning and Cities



市庁舎頂部に立つペンの彫像
出典:Downtown USA



首都ワシントン 出典: Planning and Cities

剛・柔の都市デザイン

「剛・柔の都市デザイン」としてはニューヨーク市「ゾーニング条例 (New York City Zoning Act)」とサンフランシスコ市 (San Francisco) の「プロポジションK (Proposition K)」を採りあげた。

土地所有を求めて新世界に亘った米国民は土地への権利意識が強い。19世紀末のニューヨークではそれが所有地一杯に建築物を建てることに繋がり、これが日照、採光、通風を妨げ、都市環境を悪化させ、疫病が多発した。これへの対応として、1916年、土地所有者自らがその利用に制限を課す「ゾーニング条例」を受け入れたものである。これにより建物は前面道路からの斜線を基に上部がセツバックしていく「ウェディング・ケーキ (Wedding Cake)」型 (次ページ: 左上) になったが、敷地の1/4については財力に応じて高さ制限を設けないなどは興味深い。結果は「セントラル・パーク (Central Park)」沿いに整った壁面線と高さが揃った美しい景観となった (右上)。代表的な建築には「エンパイア・ステート・ビル (Empire State Building)」 (右上) がある。



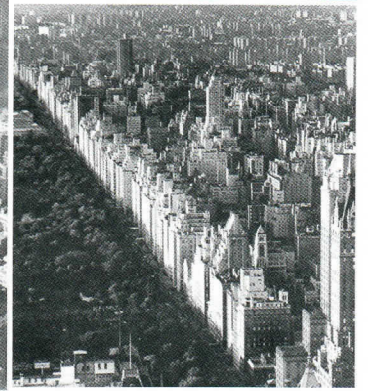
シャンゼリゼ大通り。「凱旋門」を望む



遠く「グラン・アルシェ」を望む



Empire State Building
出典: Downtown USA



Central Park沿いの景観
出典: Downtown USA

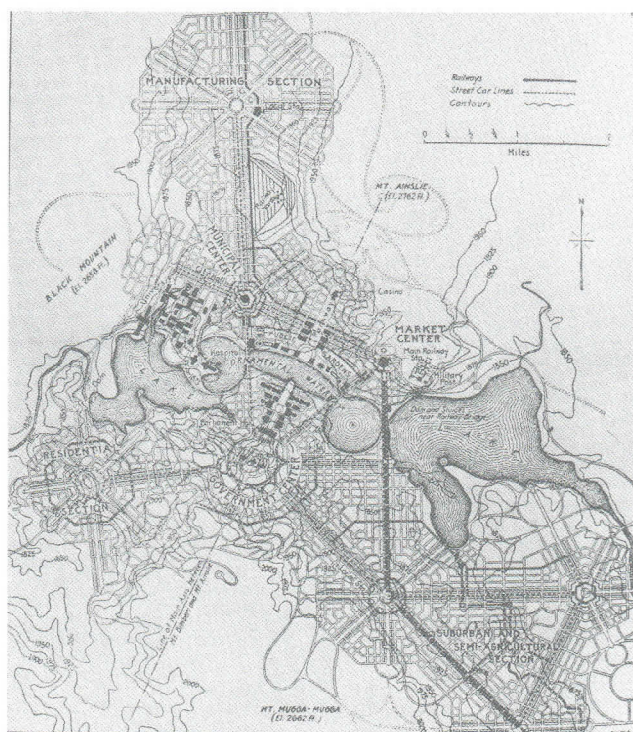
ニューヨークのゾーニング条例はその後1961年に改訂され、公開空地と引き換えに容積ボーナスを与え、さらにボックス型ビル (右ページ中央) の建設も可能となったが、公開空地の位置、使い勝手などに疑問も出されただけでなく、セントラル・パーク沿いの景観を損なう建築も現われるなどで批判を浴びるようになり、1982年再度改訂された。1961年改訂による代表的な建築には「国連ビル (United Nation Headquarters)」や「シーグラム・ビル (Seagram Building)」などがある。

1982年改訂による建物形態はスキースロープ型と呼ばれる形態 (右ページ右上) から日光分布線 (同左右) に基づく形と変化しているが本質的には1916年条例に里帰りである。これによる代表的な建築に「バッテリー・パーク・シティ (Battery Park City)」の建築群 (右ページ中右) がある。右のツインタワー「ワールド・トレード・センター (World Trade Center)」も箱型建築の代表作であるが2011年9月11日に自爆テロで破壊された。左に固まる頂部に天蓋を持つ建築群が1982年条例による。

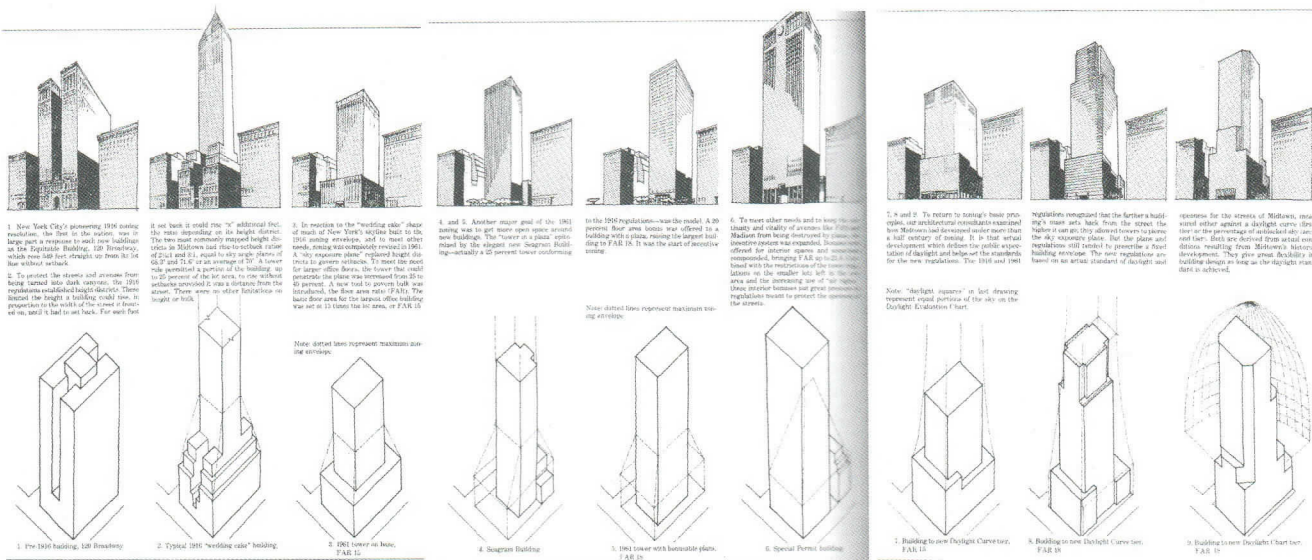
サンフランシスコ市での建築形態規制には「アーバン・デザイン



キャンベラ・プラン



ブラジリア・プラン



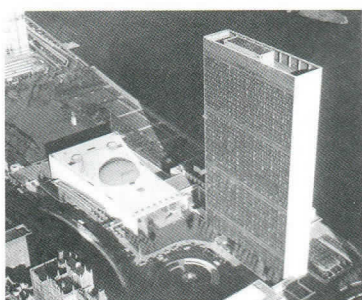
1916年条例

1961年条例による建築形態
出典: An Introduction to Urban Design

1982年改訂



シークラム・ビル(右)
資料: いずれもDowntown USA

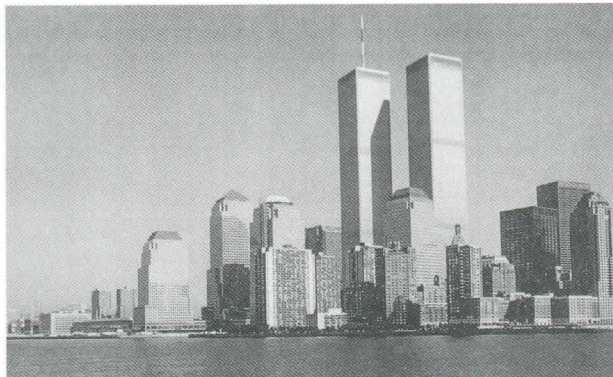


国連ビル

ン・プラン(Urban Design Plan)」と「プロポジションK(Proposition K)」がある。

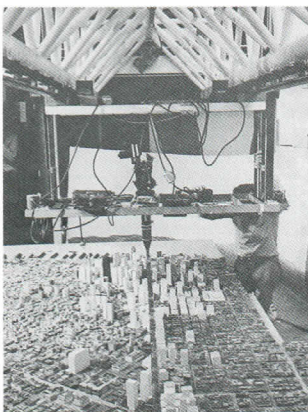
「アーバン・デザイン・プラン」は都心部に建設された「アメリカ銀行ビル(Bank of America Building)」の出現が物議を醸したことから制定された。「カリフォルニア大学バークレイ校(University of California, Berkeley)」によるシミュレーション調査が行われ、結果として、陸屋根建築の禁止、サンフランシスコの丘状地形のコンテクストを乱す建築の建設禁止などが条例化された。

「プロポジションK」はおそらく米国で最も厳しい日影規制であろう。建築物の日影の影響を天空率により計算し、そのエリア量によって規制を掛けている。これにより、新築・再築建築物は近隣の公園、歩道、広場などに3月21日午前11時から9月21日午前11時までその影を落としてはならない。次ページ左上のアクソメ図は中華街の公園に影を落とさぬためのビル群の高さ制限を示す。この条例により、フィリップ・ジョンソン設計の25階建てビルが「アーバン・デザイン・プラン」には適合したものの「プロポジションK」規制により15階に変更させられた事例がある。因みに、小木曾定彰氏は既にその著「住まいと都市の環境論」(昭和54年9月)で道路・街路・広場などで周辺建物から受ける圧迫感を魚眼レンズで撮影、天空阻害量率を計算し、20%を超えると圧迫感が増し、40%を超えると絶大になるとしている(次ページ:円グラフ)。氏はまた、欧米の6都市の広場や街路で天空率量を計算し、それぞれの開放感を示している。それによれば、「オペラ座」前広場(次ページ下図左上:88%)、フィレンツエ「市庁舎前」(同右上:



バッテリー・パーク・シティ遠景

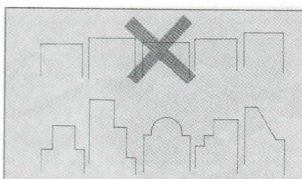
72%)、パリ「モンマルトル」(同左中:56%)、ロンドン「オックスフォード通り」(同右中:50%)、ニューヨーク「ロックフェラーセンター」(同左下:39%)、ニューヨーク「ウォール街」(同右下:13%)で、パリ「オペラ座前」、「フィレンツエ市庁舎前」の圧倒的な開放感とニューヨーク両地区の圧倒的な圧迫感を明記している。



バークレー校による視覚的影響調査
出典: Urban Design International



アメリカ銀行ビル 出典: Wikipedia

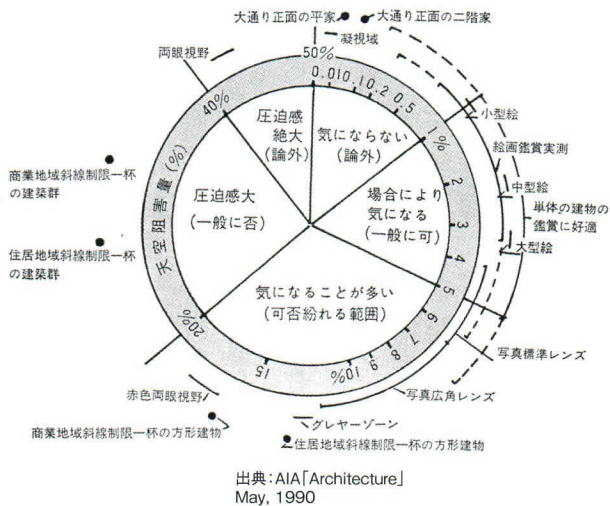
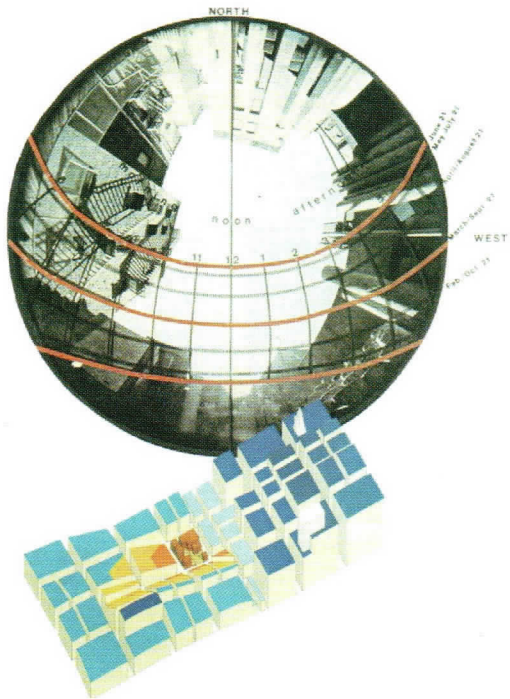


陸屋根の禁止

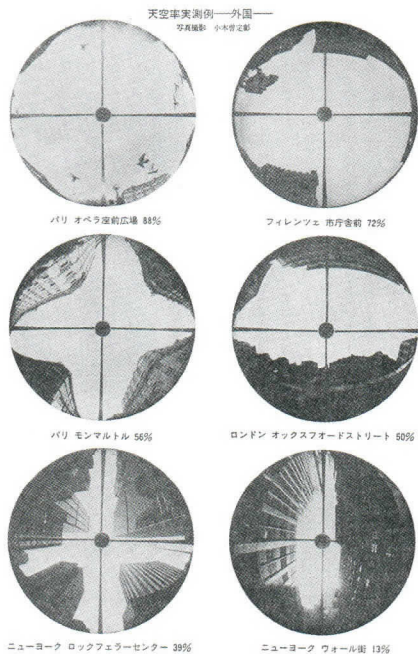


地形のコンテクスト破壊の禁止

出典: American Planning Association [Planning August 1981]



出典: AIA「Architecture」
May, 1990



欧米6都市の天空率量

柔の都市デザイン

「柔の都市デザイン」には、「ニュー・アーバニズム」および近年米
国諸都市の都心部再生に貢献してきた「ビジネス改善地区
(Business Improvement District: BID)」手法を取り上げた。

「ニュー・アーバニズム」での街づくりは車利用を前提とした従来の郊外型住宅地計画と異なり、歩行を基本とする格子状街区理念を取り入れるだけでなく、近隣住区理念なども取り入れて計画、建設されているもので、「ネオ・トラディショナル・プラン」とも呼ばれる。代表的なものにメリーランド州にある「セントランド (Kentland)」(右ページ左上)やフロリダ州にある「セレブレーション」などがある。

「セントラント」は格子状の6つの近隣住区からなり、それぞれから500m以内に利便施設を設けている。建物は道路に直接面し、車庫は裏の路地に面して設けられ、アメリカン・ドリームの象徴であった前庭と2台分の車庫付き住宅はここではもはや存在しない。建築様式も伝統を継承している。

「ネオ・トラディショナル・プランニング(Neo-Traditional Planning)」の計画指針はカリフォルニア州ヨセミテ公園のホテル・アワニーでピーター・カルソーブ(Peter Calthorpe)など6人の建築家により起草された「アワニーの原則(The Ahwahnee Principles)」(1991年)に基づくので参照されたい。「ビジネス改善地区(Business Improvement Districts: BID)」は米国の1,000におよぶ都市で採択されているが、代表的なBIDはニューヨーク市の「グランド・セントラル・パートナーシップ(Grand Central Partnerships)」、「タイムズ・スクエア・アライアンス(Times Square Alliance)」などがある。改善の手法はBIDに指定された地区内の企業群から固定資産税だけでなく、特別税や評価税を上乗せ税として課すことへの同意を取り付け、それら上乗せ税の全額をBIDを運営、管理する非営利組織に還元することで地区環境の改善経費に充てるとしたものである。

「グランドセントラルBID」はかつて麻薬取引、売春、路上居住者のたまり場であり、荒れ放題であった「ブライアント・パーク (Bryant Park)」および周辺街区の整備を行っている。因みに同BIDが掲げるキャッチフレーズは「We Clean (清掃)」、「We Protect (警備)」、「We Beautify (美化)」、「We Build (整備)」、「We Promote (福祉・観光)」であり、都市デザインが剛、柔両面で行われることを示す。当BIDには法政時代のゼミが2004年より3度調査したが、都市環境が年々賑いを増すありさまに眼を見張るものがある。

タイムズ・スクエアBIDも劇場の空中権を売却し、それを資金として、劇場の改修に取り組み、今の繁盛に繋げた。また、来街者のための快適空間の整備を進め、最新の施設として中心部で改修した当日券売場の上部に階段状のベンチを設け、休息と眺望の場としている。

昨今、ガラスを用いたトランスペアレントな建築や構造物が都市景観の新たなエレメントとして採りいれられている。ガラス建築そのものは1980年代半ば以降、インパクトの強いものはいくつか生まれた。ヘルムート・ヤーン(Helmut Yahn)の「ジェームス・



ケントランド



出典: The New Urbanism

トムソン・センター (James Thompson Center) (1985年)、バッテリー・パーク・シティの「ウインター・ガーデン (Winter Garden)」(1985年) などだが、最も衝撃的なガラス建築は、I. M. ペイ (I. M. Pei) のルーブル美術館の「ガラスのピラミッド (Glass Pyramid)」(1990年) であろう。しかし、大規模なものは省エネ志向の高まりなどにより、強い批判も受けることになった。

しかし、昨今の省エネ技術の向上により、ガラスを都市景観の重要なエレメントとして採りあげる傾向が見える。

それらは例えば商店建築物の外観を透明化する、ショーウィンドウ化するなどであるが、最近、最も強いインパクトを与えたものに米国セントラル・パークのコーナーとも言える場所に開店したアップル社の旗艦店の入口として設えられた「ガラスの箱」がある。今後もガラスの景観改善への利用は増えていくであろう。



冬のアイススケートリンク



We Clean



We Protect



We Beautify



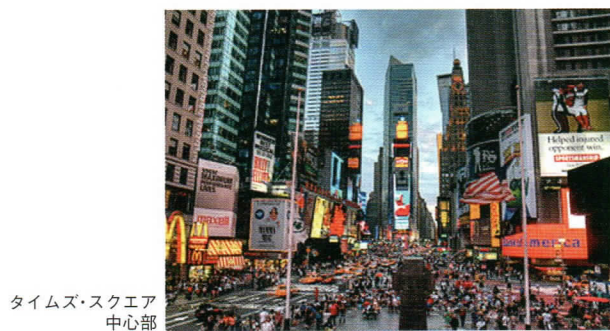
We Build



We Promote



配置されたキオスクでの販い

タイムズ・スクエア
中心部

中央左に赤色の階段状デッキが見える



トランスペアレント建築の先駆
「シカゴの商店建築」(1990年)



ニューヨークマンハッタンの高層ビル



パリのガラス・ガレリア



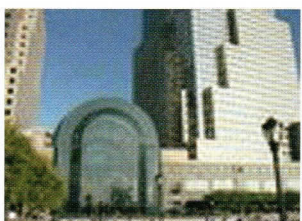
ニューヨークのアップル社旗艦店



ジェームス・トムソン・センター 外観



ジェームス・トムソンビル内観



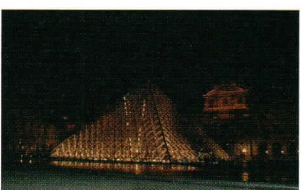
ウインター・ガーデン外観



ウインター・ガーデン内観



ガラスのピラミッド外観



ガラスのピラミッド夜景

剛から柔の都市デザインへ

「剛から柔の都市デザインへ」の移行過程において、二つのエポック・メイキングな出来ごとがあった。一つは1972年3月16日、ミズーリ州セントルイス市で「プルーイト・アイゴー団地 (Pruitt-Igoe Public Housings)」が連邦政府によって爆破され始めたことである。当団地は1954年着工、1955年竣工の11階建て33棟で、設計はミノル・ヤマサキ (Minoru Yamasaki) で、スラム街であった当地区を再生することが主旨であった。当時の建築界はこれをスラム対策の切り札と賞賛し、幾つかの団体からは建築賞を受賞している。しかし、その荒廃は建設後すぐから始まり、入居率は60%を超えることは無く、65年には3割となったことから、連邦政府は68年、全居住者に退去を求め、4年後爆破を開始、76年までに全棟を爆破した。

米国では、これを近代建築の終焉とする論調が多く、都市計画・デザインに「剛の都市デザイン」を担う建築家が参画する時代の終焉としている。

二つ目は、1980年頃と記憶するが、ディベロッパーでメリーランド州の「コロンビア・ニュータウン (Columbia New Town)」などを建設したジェームズ・ラウズ (James Rouse) と「アメリカの大都市の死と生 (The Death and Life of Great American Cities)」(1961年)の著者ジェーン・ジェイコブス (Jane Jacobs) が都市環境改善手法について議論した。場所はボストンの「ファネイル・ホール (Faneuil Hall)」で司会は1967年「モントリオール万博」の際、画期的な集合住宅「ハビタ67 (Habitat 67)」(右上)を設計し、当時はハーバード大学のGraduate School of



Pruitt-Igoe Public Housing

DesignのDeanであったモッシュェ・サフディ (Moshe Safdie) である。ラウズは総合的な計画 (Comprehensive Plan) を基本としてスクラップ・アンドビルドなども含めてバランスよく整備を行うべきという「Large Plan」を唱え、ジェイコブスはコミュニティの基幹である道路・街路環境を整備していき、そのインパクトを他所に展開していくという「Small Plan」を唱えた。近年のBID手法の成果を見ると、「Small Plan」に軍配が上がったようである。

筆者が特任教授を勤めるミシガン州立大学 (Michigan State University) での都市デザインの授業は「Urban Design is



資料:Form Follows Fiasco



Habitat 67

Process」と黒板に書くことから始まる。事実、「都市デザイン」は短期に行えるもの、中期もしくは長期に取り掛かる必要があるものに分類できよう。ラウズはこのプロセスを的確に設定することを唱え、ジェイコブスは短期で行えるものを積み上げていくことを唱えたものであろう。米国の「Institute for Urban Design」はその冊子「Cities By Design」で都市デザインには配慮すべき6つの事項があるとする。それらは、

1. プロジェクトやプログラムは都市の歴史や都市が持ち、保全・継承すべき都市資産への配慮があるか、
2. プロジェクトやプログラムは何よりも来街者にとって快適な空間確保への配慮があるか、
3. プロジェクトやプログラムはそれが単機能でなく、複合的な機能(商業、業務、住宅、公共施設など)が補完しあい、強めあうための配慮があるか、
4. プロジェクトやプログラムは文化や芸術活動を発展、成長させるだけでなく、生み出すためへの配慮があるか、
5. プロジェクトやプログラムは地球環境、自然環境、とりわけ、地質、空気、水への配慮があるか、
6. プロジェクトやプログラムは都市、コミュニティの基本的かつ重要なエレメントである建築とそのデザイン、美、用途などについて、的確な判断基準を設けることへの配慮があるか、

などである。これらを如何に組み込むかは早期に専門家による合意形成が必要であり、それには近年、米国などで取り入れられている都市計画、建築、行政、金融、不動産などの分野の専門家による研究会「シャレット(Charrette)」が有効とされている。筆者はかつて日本都市計画学会30周年記念大会で自治体、事業主体(権利者含む)による「第3セクター」を地域住民を含む「第4セクター」に変換していく必要を論じたが、国情の違いもあり、その実現を得ていない。超高齢社会を迎えている我が国である。社会的弱者である幼児や児童、高齢者や妊産婦などが都市空間を安全かつ安心、楽しめるための環境整備が必要であり、そのための新たなシステムの開発が必須であろう。

Urban Design and Architecture

The article is an executive summary of the lecture titled “Urban Design and Architecture” at Kogakuin University on October 6, 2010. The lecture classified Urban Design into three categories. Those are 1) the one takes count on forms and functions of built environment, 2) the one inquired the appropriate relationship between architectures and built environment and 3) the one concerned with residents and visitors with built environment. The examples are the gridiron plans in the era of Greece and in the New World of America and medieval walled cities in Europe, New York City Zoning Act of 1916, 1961 and 1982, and the concepts of New Urbanism for community design and Business Improvement Districts that revitalized a number of downtowns in the United States respectively.



はぎわら しゅんいち
萩原 俊一

略歴

1938年 旧満州国新京特別市生れ
1975年 帝人株式会社を経て、
ミシガン州立大学大学院 社会科学系修士課程へ(専任助手就任)
1978年 ミシガン州立大学大学院社会科学系博士課程へ(専任講師就任)
1982年 同大学院社会科学系博士課程修了。
学位: Ph.D. (主専攻: 都市・地域計画学、副専攻: 地域経済学) 取得
株式会社 萩原俊研究室設立(～現在)
1987年 ミシガン州立大学社会科学系特任教授就任(～現在)
2000年 法政大学現代福祉学部開講教授就任
2005年 韓国韓東大学校環東海経済・文化研究所国際評議委員就任(～現在)
2006年 ルーマニア国立バベス・ボリヤイ大学
政治行政学部国際評議委員就任(～現在)

2008年 法政大学名誉教授就任

- ・1978年度「フルブライト奨学金」獲得
- ・「1991年度北九州市建築文化賞(対象:ゼンリンプリンテックス門司工場)」受賞
- ・「バリアフリー思想と福祉のまちづくり」(ミネルヴァ書房、2000年)、「Public Places in Asia Pacific cities」(Kluwer Academic Publishers)など
- ・中国「同済大学」、ルーマニア「バベス・ボリヤイ大学」、トルコ「イスタンブール工科大学」、韓国「延世大学校」、同「忠北国立大学校」、同「韓東大学校」などでの集中講義・特講

Shun'ichi Hagiwara

Ph.D. in Social Science (Major in Urban and Regional Planning and Minor in Regional Economics)
Professor Emeritus, Hosei University
Adjunct Professor, Michigan State University
Member, International Advisory Committee, Babes Bolyai University, Romania
Member, International Advisory Committee, Handong Global University, Korea
Lectures at Tongji University, China; Babes Bolyai University, Romania; Istanbul Institute of Technology, Turkey; Yonsei University, Korea; Chungbuk National University, Korea and Handong University, Korea.
One-time Part-time Instructor, Kogakuin University



イリノイ工科大修士論文最終講評会 クラウンホール

アメリカからメキシコ、そして日本へ

舞台をアメリカからメキシコへ

2007年夏、イリノイ工科大を卒業した私は荷物をつめこんだトラックに揺られながらアメリカを南下していた。目的地はメキシコ。シカゴからメキシコまではおよそ3000キロ。寒冷地帯から乾燥地帯へと風景が変わっていくのを目の当たりにするとメキシコが近づいているのだということを実感する。

「なぜメキシコに？」と思われた方もいると思う。

日本とアメリカで建築教育を受けた私は、先進国の経済性を優先した建築の作られ方があまりしっくりこなかった。そういう意味で土着の文化を色濃く残し、発展途上の国メキシコに惹かれたのは必然であったと思う。5日間の旅。最終日はハリケーンの直撃を受けながらもようやくアメリカとメキシコの国境の街、マクアレンに到着した。



建築家 片桐 和也

学歴

1981 長野県生まれ
2004 工学院大学卒業 谷口研究室
2007 イリノイ工科大学大学院修了
2007 Lopez_Katagiri Architectsメキシコにて設立
2008 Universidad de Monterrey非常勤

隈研吾建築都市設計事務所

1981 Born in Nagano
2004 Graduated from Kogakuin University Taniguchi Lab.
2007 Completed Master of Architecture in Illinois Institute of Technology
2007 Established Lopez_Katagiri Architects in Mexico
2008 Visiting Professor at Universidad de Monterrey
2010 Joined in Kengo Kuma & Associates

メキシコで設計事務所をはじめる

メキシコに来て設計事務所を始めるもうひとつのきっかけになったのが、パートナーでイリノイ時代の親友であるルイス。イリノイ工科大学大学院の最優秀論文賞を2人で分け合い、その賞金を使って事務所を開設するという、まさにトントン拍子で開設までたどり着いた。が、もちろん開設したばかりの事務所に仕事はなく、小さな住宅の改築にひたすら取り組む日々。メキシコの設計料は非常に安い為、これでは生活さえていけない。そうした日々が半年ほど続いた後、初のチャンスにめぐり合う。住宅デ



O2Tower 外観

ベロッパーから実験的な建売住宅をシリーズで設計してほしいという依頼だった。その最初の作品が、CASA VAL。とにかく工事費を安く、尚且つ魅力的な住宅を求められた。メキシコの国境付近は情勢が不安定で治安が悪い。住宅をなかなか外部に開けたものにすることが難しい。そこで、都市構造を住宅の中に作り出し、都市と住宅、パブリックとプライベートの入れ子構造とすることで、閉じながらも都市との一体感を持つ内部空間を作り出した。この作品以降、徐々に事務所が軌道に乗りはじめた。

アメリカでの仕事

この建て売り住宅シリーズは、II、III、IVと続き、現在ではVの設計が進んでいる。このプロジェクトをきっかけに、アメリカ側でも住宅シリーズを展開。したいという依頼を受けた。ここでは、システムティックに作り上げる大量生産工法を用いながらも、どれだけ住宅のアイデンティティを築き上げることができるかということを経験として取り上げた。住宅とはその土地の気候や風土が反映されるもので、画一的なルールで作られるべきものではない。これはアメリカ郊外に広がるスプロール住宅群に対する挑戦であった。

このプロジェクトを通して、圧倒的に広がる無個性な住宅群の中に小さな点ではあるが、自分たちの信じる住宅のあるべき姿を提示することができた。

再び日本へ

小さな住宅から街のマスタープランまで、様々なスケールを横断的に経験することで、“建築をつくること”をいろいろと考えることができた。事務所の規模も大きくなり、数多くのプロジェクトに関わるにつれて、これらの経験を携えて日本で挑戦してみたいという気持ちが強くなった。メキシコでの活動が一段落ついた後、中南米の国々を身一つで渡り歩いた。様々な文化や風土の中、人々の生活にふれることで、建築のありかたを再度考えることができた。

その後日本に帰国してすぐ隈研吾さんの事務所の門を叩いた。それは隈さんが本気で世界で戦っていこうと考えている数少ない日本人建築家であり、その意思に共感したからである。

現在は、アメリカ、イギリス、中国の物件を担当している。それぞれ違う大陸でのプロジェクトである。異なる文化圏で様々なバックグラウンドを持つ国々でのプロジェクトであるが、1つ共通していることは人々の生活を考え、その街に馴染んだ建築を作りたいということ。それは、経済主動のつくり方ではなく、その土地の人々の視点に立って建築をつくることである。そこに建築と人々の幸せな関係性を築くことが設計者として必要だと考える。

6年間の海外での生活を通して学んだこと、それは、最も単純であり、最も大切なこと。世界を自分と並列で考える視点をもつことである。



Casa 1 VA エントランス



Casa 2 DQ 外観

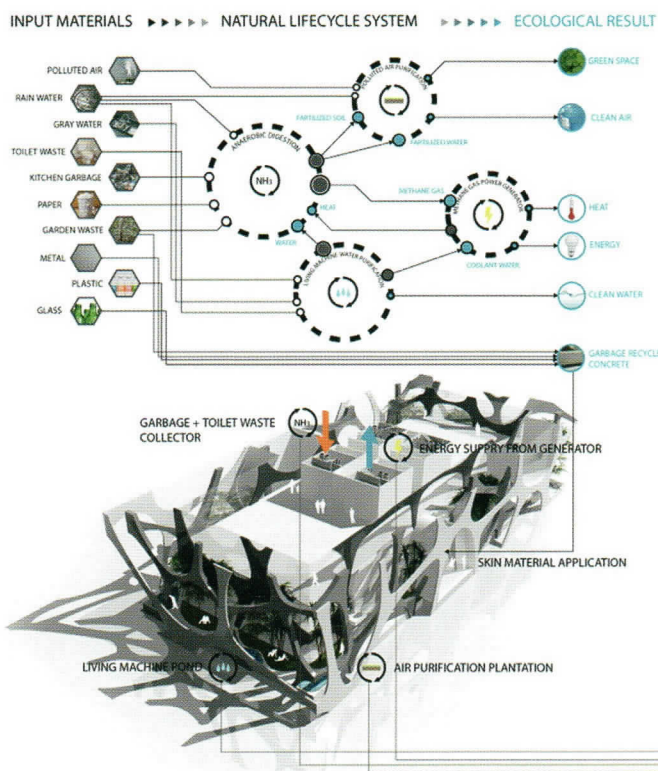


Palmview Plaza 鳥瞰



レイノサマスタープラン 鳥瞰

Energy Circulation Diagram

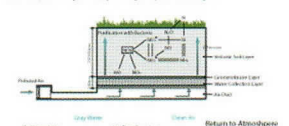


Natural Lifecycle System

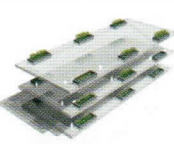
SOIL AIR POLLUTION PURIFICATION



The Soil Air Pollution Purification is a process for remedial polluted air from transportation exhaust air and industrial facilities. In this process, the polluted air is brought into a soil layer with nutrients and microorganisms and decomposed by these organisms to nitrogen and release back to the air. This system also provides green space into buildings.



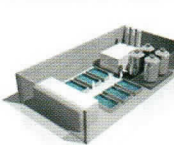
LIVING MACHINE WATER PURIFICATION



The Living Machine Water Purification is a system of biological wastewater treatment using natural ornamental plants and fish to remediate contaminated water. Aquatic and wetland plants, bacteria, algae, protozoa, plankton, snails, clams, fish and other organisms are used in the system to provide specific cleaning functions.



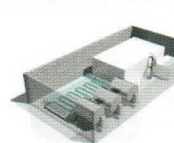
ANAEROBIC DIGESTION SYSTEM



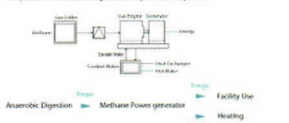
The Anaerobic Digestion System is a naturally occurring process of anaerobic decomposition. An anaerobic digester is an industrial system that uses three natural processes to break waste, to produce biogas that can be used to power electricity generators, and to provide heat and produce fertilizer soil for vegetation fields.



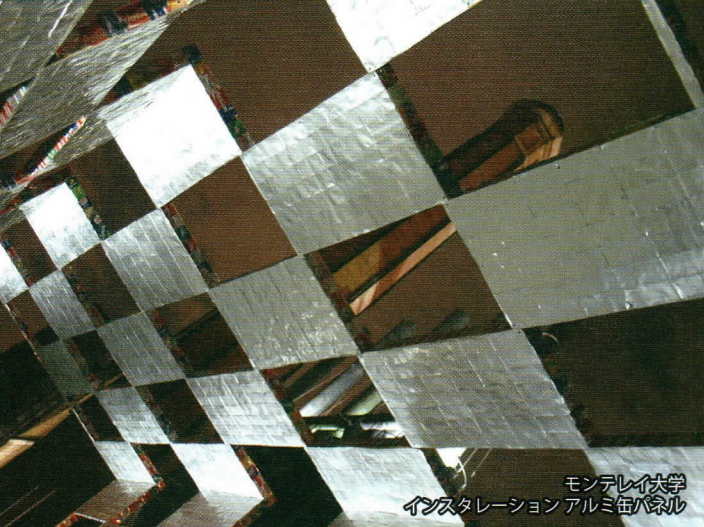
METHANE GAS POWER GENERATOR



The Methane Gas Energy Generator is a system where biogas is used to generate electricity. The biogas produced by anaerobic digestion systems is used to drive a power generator. By-products of this process are clean and hot water. The hot water can be recycled to increase the temperature of the anaerobic digester to keep constant temperature.



O2Tower エネルギーダイアグラム



モンテレイ大学
インスタレーション アルミ缶パネル



モンテレイ大学 インスタレーション 外観



Discoteque Volta バーカウンター



Discoteque Volta 外観

From U.S.A. to Japan via Mexico Kazuya Katagiri, Architect

In the summer of 2007, after graduating Illinois Institute of Technology, I traveled southward on a truck full of cargo. Looking blankly at changing scenery, I came to realize that I was coming to Mexico.

I did not feel very comfortable with the architectural approach with an emphasis on efficiency. It seemed to be a natural choice for me to make up my mind to move to the dramatically developing country where vernacular culture still vividly existed. After five days of being rocked and rolled on the commercial vehicle, I finally arrived at McAllen, a city near the U.S. - Mexican border.

It was not only my own way of thinking but also an influence of Louis, my business partner and close friend since the academic days, which inspired me to launch a design office in Mexico. It had been a smooth ride for Louis and I. We shared the highest prize in university thesis and started our professional career by opening the office of our own with the prize money. No major offer, however, had not come to us, relatively unknown pair in the architectural industry. For a while, we were forced to concentrate to reform projects of small residences.

Six months had passed quickly -- time flew!! It was when we got the first major working offer from a residential house developer, who asked us to produce a series of experimental ready-to-live, pret-a-porter houses. The first version was called "Casa Vai". One of our challenges was to minimize the production / construction costs while ensuring attractiveness. Another challenge lay in a security issue of the area close to the border. We suggested an enclosed structure that effectively protected those who would live there and, at the same time, a clear linkage to the outside world was established. This work more or less served as a trigger and we had offers from different clients.

The series of the residential housing went further to Series II, III and IV. Currently we are working with the fifth generation. In due course, an offer came to us from the other side of the border. To respond to it, we dealt with a challenge to create an identity as residential house while utilizing a systematic mass-production method. I am strongly convinced that each house should come in harmony with the climate, culture and tradition of the surrounding environment. It was, in a sense, a challenge against the urban and suburban sprawls.

To our pride, we are quite confident that our work demonstrates what we think a house should be like in a land without its own face and personality.

Being involved in a wide variety of projects gave us good lessons and opportunities to reflect 'what architectural creation means'. Our office grew bigger and got more offers, making me to tackle another challenge in my homeland, Japan. A travel through the Central and South American countries motivated me with fresh ideas about how architecture should be.

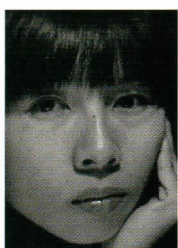
I joined the office run by Mr. Kengo Sumi because I have sympathy with his challenging spirit. He is one of a few Japanese architects whose works are genuinely world class.

I am now in charge of the projects in the U.S., the U.K. and China. Interestingly enough, they are in three different continents. As a result, the background and environment differs from one another. That said, I have found at least one common factor, which was my intention to create architecture that comes in good terms with the people's lives there and surrounding environment. In order to achieve the goal, I as an architect have to be fully committed to establishing a happy relationship between people and architecture.



Piazza San Carlo

イタリアからの便り～オランダ留学のその後～



建築家 橋本 しのぶ

学歴

1988年 東京都道府県(私立)文化女子大学付属杉並女子高等学校 卒業
1992年 工学院大学建築学科 卒業
望月大介研究室

略歴

1992年に卒業後、フジタの設計部に6年間勤務。退職し工学院大学の設計準備室に1年従事し、1999年オランダのベルラーヘに留学、2年でマスタープログラムを修了。

2003年よりイタリアのトリノ市にて個人で建築設計とコンサルタントをメインに活動中。

HP: www.hashinobu.com

mail: shino@hashinobu.com

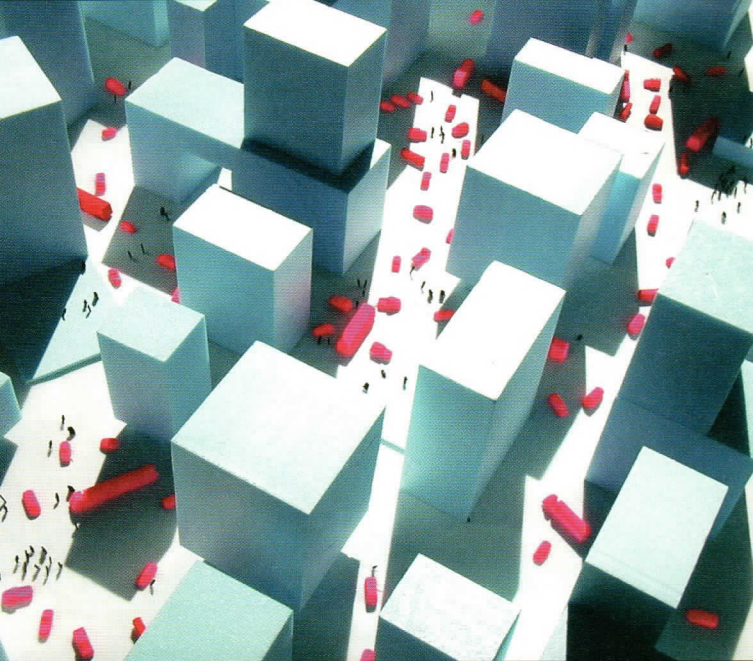
Shinobu Hashimoto

Since 2003 living in Italy, I do a work on myself as an architect and design consultant.

Please have a look on my HP: www.hashinobu.com

ベルラーヘ修了

ご無沙汰しております。2000年、オランダのベルラーヘ(The Berlage Institute)留学中に寄稿させて頂いてから11年の月日が経ちまして、現在はイタリアのトリノ市で、個人の建築活動を行っております。ベルラーヘ在籍時は、多国籍・異文化の仲間との刺激あふれる2年間を過ごし、修士課程では、“「GPS-(Global Positioning System)」が建築・都市環境に与える影響”というテーマを研究したプロジェクト「Chip City」を行いました。個人個人がワイヤレスに「場所」に関する様々な情報を、手元で安易に収拾できる現代社会が加速していく、いう過程で「人間が都市を纏う」と理論的に考えた時、果たして今後の都市と建築環境はどのように存在し得るのか、又都市・建築デザイナーとしてどのようなスタンスでGPSを都市と建築に導入していけるのか、の考察と提案をまとめたものでした。在学中は、乏しい英語学力と自己主張の強い欧州人に囲まれた環境の中にあって、修論に向けては常に周囲より遅れをとっていた2年間でしたが、最後の修了プレゼンテーションは会場に大きな議論を投げ、クリティク陣から好評を頂いた形でベルラーヘのマスタープログラムを修了しました。修了後



Chip City Project



アイスホッケースタジアム周辺の航空写真



アイスホッケースタジアムと
改装されたサッカースタジアム



アイスホッケースタジアムのファッサード



スイミングプールは現在も工事中

もロッテルダム市にあるMAXWAN都市建築事務所にて2年間、オランダ都市デザインを実践で学び、また引き続き修士プロジェクトの更なる研究を続けさせてもらうことができ、その成果はオランダ、他欧州国々の建築雑誌や日本の雑誌に掲載されました。

イタリアへ

2003年、磯崎新氏の2006年冬期オリンピック用のアイスホッケースタジアム計画・実施設計チームに参加するという機会を得て、オランダを離れてイタリア北の街・トリノ市に単身で移住しました。初めての場所。新しい見知らぬ人達。未知の文化。トリノ市は、ピエモンテ州というフランスとの国境近くに位置する人口約90万人の街です。環境は、典型的なイタリアの古代、中世建築都市の雰囲気や、地中海の温かなイメージとは異なって、市街周辺はアルプスの山々と緩やかなワイン畑の丘に囲まれ、変わって街中心はバロック建築の宝庫。お隣フランスの影響、サヴォイア王家の支配による歴史をもち、またバロックの都市計画によって、主要な歴史的建造物や広場が軸線上でつながり、街の中心部は碁盤目状に通りが展開しています。



UdA とのコラボレーション作品（オフィス／住宅改装）

イタリア語

スタジアム実施設計を終えた後も、隣接する公共スイミングプール施設（同氏設計）の計画・実施設計に携わり、2003年から2004年までイタリアで最初の実務を経験したわけですが、その頃一番困ったのは言語でした。仕事上は英語が日本語でし、大半は家とオフィスの往復だったので、イタリア語を話す必要は特にありませんでしたが、日常マーケットでの買い物、郵便局、官庁諸手続きなどの場では、イタリア語不理解ではコミュニケーションがとれず、大変苦心しました。トリノに住みながらもある意味で実は疎外されたその状況に疑問を抱き、同時に徐々に真にトリノに住み、美しいトリノの街や文化に触れたいと強く思いはじめた頃、イタリア語の勉強は必須と悟り、語学大学へ2カ月通い、磯崎事務所を辞めてトリノ地元の設計事務所に移り、毎日イタリア語を話す環境に身を置くことにしました。当時34歳でイタリア語を習い始め、年齢的に新しい言語習得は容易ではありませんでしたが、仕事場という毎日の生活を通して、足りない言語力は、模型やスケッチ制作して表現することで言語力不足を補いながら、一緒に建築を創っていく仲間とのコミュニケーションの中で段々身に着けることができていったように思います。

建築

イタリアで一般的な「建築の仕事」は、改装と改築が大半になります。1900年代ははじめから文化的遺産と環境保存が徹底され、イタリアのあらゆる街の中心部は、歴史的建造物保存地域に指定さ

れ、外壁や屋根の形、窓のサイズ、枠の装飾から色まで全てオリジナル同様に修繕して維持するのが原則です。文化的遺産としての建築自身を保存するのが主旨としても、更に街の景観としても保存していく意図もあります。私が興味ある点は、イタリアの街はハードウェア的には既にほぼ完成されているけれども、代わってソフトウェア的な機能やインテリア、使われ方は常に変化、その時代々に適合されて創られ、それらが都市の活力となっている点です。東京のスクラップアンドビルトの繰り返しの過程では、ハードもソフトも常に変化、都市の景観も住み方も常に変わり続け、ゆえにその経済的効果も充分あってイタリアのものとは比較にならないでしょうが、その一方で同時に建築の商業的価値が強くなり、建築が消費されている事実は残念に思います。私がここトリノで建築家として邁り甲斐を感じるのは、新しいハードウェアを設計する場合でも、ソフトウェアのデザインや提案をする場合でも、いかに建築がその文化的存在意味を継続しながら、同時に現代社会生活と共存させ、引き続き都市と絡ませ、活気を与えていけるか、を常に意識した提案が求められる事です。私も携わった磯崎氏のアイスホッケースタジアムは、トリノの人々に大好評を得ていて、その愛称も「パラ・イソザキ」と親しまれています。氏の60年代「お祭り広場」を見現化したその建物は、都市的なスケールで巨大イベントを行う場、それ自身が成長し変化する「応答する」建築の志どおり、オリンピック以降も柔軟に多目的に使われ、また周囲の高環境づくりを促し、トリノで多くの人が集う場所のひとつになっています。おかげで、自己紹介する時は、自信をもって「トリノに來たの



GAA とのコラボレーション作品（住宅改装）



友人との作品・香水セレクトショップ



Piazza Carlo Albert

は、パラ・イソザキの設計に参加したからです！」と言います。「あれは素晴らしい建物ね！おめでとう！」という反応が必ず返ってきます。その度感じるの、トリノ人の「建築」に対する関心の高さ。それは単にトリノの街が小さいから知られているだけかもしれませんが、その意識に对应していくこと、私が現実の建築現場を通して直面する、保存されるべき建築（ハード）」と現代社会生活（ソフト）の共存を解いていくことは、街における建築の文化的価値を保存していくこととして建築家としての責任だと思う次第です。

トリノ

トリノ市の中心部は約3km四方大。端から端まで無理なく歩くことができる距離です。街を歩く時、トリノは人が自分の街と認識できる適当な大きさの街だといつも思います。馴染みのBar（バー）があり、店の扉を開けると「チャオしの！」と声がかかり、注文しなくても私がいつも飲むカフェを用意してくれる。街角で友人にすれ違うことがよくある。古いものと新しいものが対照的に上手く共存している。歩きたい、探求したいと常に欲させる街。外国人として住む事に色々問題も抱えますが、私にとっては理想の街に辿り着いたと思っています。次の寄稿機会があれば、是非「パラ・しのぶ」の話題を提供できれば…と思います！

オランダのペルラーヘを、GPS が建築都市環境に与える影響を考察した修士プロジェクト「CHIPCITY」で2001年に修了。2年間のオランダ都市デザイン実務経験後2003年イタリアのトリノ市へ移住し、オリンピックのアイスホッケースタジアムの設計に

従事。現在はイタリアでの建築における文化的な価値を考えながら、保存されるべき建築（ハード）」と現代社会生活（ソフト）の共存を解いた提案、街と対話のある建築の提案、設計活動を行っております。

A letter from Italy ~ After going abroad to study at the Netherlands ~

After finishing the master program at the Berlage Institute with the theoretical thesis project "CHIP CITY - How the GPS system causes an impact on the urban and architectural environment", I was involved in cityscape planning and architectural design in the Netherlands and then moved to Turin in Italy to join a design team for the Ice hockey stadium project in 2003.

Still staying in the Italian city while working as an architect, I am trying to re-understand the significance and importance of considering the cultural values of architecture that forms a city. One of my challenges lies in the co-existence / positive integration between the architecture to be preserved and inherited to the next generation (hardware) and our modern lives (software) when designing architecture.

高齢者を魅了する、 今話題の百貨店経営者に聞く

ダイシン百貨店社長 西山 敷

にし やま ひろし

経歴
1969年 工学院大学建築学科卒業
1969年 日産建設株式会社入社
1970年 株式会社長崎屋入社
ジョッピングセンターの開発
フランチャイズチェーンの開発に携わる
1977年 株式会社商業建築計画研究所
(現 株式会社商業建築)設立
2004年 株式会社ダイシン百貨店
取締役就任
2006年 同社代表取締役就任



東京都大田区・大森山王地区に奇跡の百貨店がある。倒産しかかったこの百貨店を突然引き継ぐこととなり、V字で黒字回復させるどころか、次々と新しいアイディアで、地域社会に密着して発展させ続ける注目の人。年間400万人が訪れる知られざる人気スポット。その西山敷氏に、大学時代から親しい本学教授 谷口宗彦氏が、本学大学院生を集め講義をお願いした。その内容を紹介すると共に、現地取材を交えてお伝えする。

谷口：1965年に同じ工学院大学建築学科に入学して以来、お互いに永い付き合いですね…。大学時代は苦学生で、生活力旺盛な西山君でしたが、卒業後もバンカラで波瀾万丈の人生。(笑) この「ダイシン百貨店」の経営に携わって6年目、相変わらずエネルギーがすごいですね。

揃っている。最上階はレストラン。人気メニューはナポリタン500円、食事中のお年寄り「おいしい、昔の味がします。」売り上げを支えているのも昔のお嬢さん達、売り上げの50%以上を60歳以上が占めている。このように高齢者を熱狂させている秘密は何ですか？

高齢者熱狂の秘密

・徒歩圏の半径500m圏内は、シェア100%

西山：まず品揃えが毎日来るお年寄り、高齢者のツボを押さえている。その品揃えが大切。例えば「スモカ歯磨」という粉歯磨きとか、柳屋のポマードを買ったお爺さんは「もう70年位柳屋のポマード使っているけど、もう他の店では売っていない」。豚肉は1パック42g。さしみは4切れから。太巻きは一切れで1パック。たくさん食べ



高齢者を含め、混雑する1階売場

ここはJR大森駅から徒歩12分、表通りの寂しさが嘘のように、店内に入ると中は大混雑。昭和レトロ商品も満載、そんな店内に毎日高齢者が大集合。先程も、メガネのお爺さんが「毎日来ています」、隣のお婆さんは籠を下げて「今日だけで来店は2回目」と聞きました。大変な人気スポットですね。1階食料品、2階衣料品、3階生活用品・化粧品、4階家電・大工用品、5階家具、生活に必要なものは全て



のり巻き一個から

られない人のために、少しずつの量を小分けして出している。ひとり向けへの心遣いがお年寄りにとっては最高です。お爺さんお婆さんも一人で住んでいる人が都会には多い。だから、今やアイテム数は18万点。

化粧品売り場には洗顔パウダー「うぐいすの粉924円」という商品がある。鳥の糞を粉末にした洗顔パウダー。売れ行きは僅か4個／年 ですが、必ず楽しみに買いにくるお客様がいる。販売担当者が発注する際、お客様の顔を思いだす



こだわりの卵、種類の多さも日本一

ので仕入れている。お客様の顔が浮かぶものは数が出なくても仕入れている。売り場効率を追求する一般の店では、そこまでしていない。

顧客の顔が見える仕入れ、心のふれあい

谷口：大森に暮らすお婆さん(86歳)は、毎日ダイシン百貨店に通う常連客。今日も一人で来店し、真っ先に4階メガネ売り場でメガネを無料クリーニングしてもらう。綺麗になったメガネをかけてにっこり、相手する女性スタッフも「来ないと心配です」とニコニコ。お祖母さんは、各階の売り場に馴染みのスタッフがいる。声をかけてまわるお婆さんは店員達との触れ合いが楽しみ。顔もイキイキして「大好き。他には行かない」。とニコニコ話している。

西山：衣料品売り場のブラウスは一見似ているが柄が、みんな全て違う。地元で自分が買った洋服を他の人が着ているのを女性は嫌がるので、常に1点ずつ仕入れるようにして回転している。



ペットフードの品揃えも日本一多い

朝9時半に僕が出社すると、全てのフロアにまず顔を出し、スタッフや裏方さんに声をかけて歩く。みんな手を休めずに「おはようございます」の音が響いていく。毎日休まずにみんなが働いている姿を見ることが一番大切。

午前9時50分、開店とともに客が店内に殺到する。あえて営業時間中に品出しを行って、客が店員に話しかけやすい状況を作っている。「あのスタッフが勧めてくれるトマトは甘いの!」と、にっこりするお婆さんもいる。

商店の原点、地元商店街と生き残る

西山：商店の原点をやっていけば地域再生はできそうな気がする。地元支持率100%という発想は、地域密着を目指すということと、お客様が自分の台所のように毎日使ってくれる。車でピューツと来て一回で買い物するよりも、単価は低くてもほぼ毎日のように来てくれる方がもっと良い。地域の近い方、一番は歩いて来るお客様、5分以内に來られる500m圏内のお客様を大切にしようとする思想です。



谷口：特に「しあわせ配達便」の配達料無料サービスの企画は、500m圏内に住む70歳以上のお年寄りや妊婦、体の不自由な人などを対象に、買い物金額に

関係なく自宅まで届ける…。重い荷物が買い物の障害になる高齢者にとっては大変ありがたい!と評判ですね。

西山：一年前に太田区の介護支援センターと立ち上げた「日替わり弁当の出前サービス」は、食事を作るのに不便を感じる高齢者に、1食500円で手作りの弁当を提供するサービスです。配達料無料。当日午前11時までに予約すれば1個でも配達している。しかも、出前の時に何か異常があれば、支援センターへ連絡してもらえる。地域の人から信頼される形で日々進化させています。

地域共通お買い物券、地元商店街との共通の商品券も、地元住民・自治会の要望で始めた。ダイシンの客が少しでも商店街に回れば良いと思っています。



ダイシンのアップルカードは、来店するだけでもゲームができ、当たりがでると100ポイントになる。買い物でポイントが貯まると、地元商店街で使える地域共通お買物券に換えることができる。

谷口：それこそ地域全体の活性化を促し、大型店舗と小売店との共栄につながる。今の日本の商店街が学ぶべき事例になる。学生達もこの「共栄」という西山君の講義に感動したというレポートが多かった。



谷口教授と西山社長

新館計画のこだわり空間で、さらに魅力アップ・活性化

西山:ここ大森に住んでいる人が良かったと思える店を、生活空間の場として作ってあげたい。

谷口:間もなく5階建て新店舗の工事が2012年春に完成予定だそうです。新館の地鎮祭や上棟式では、獅子舞、餅つきイベントなど、地元の人達を招待して行い、乾杯の挨拶に二人の子供がたどどしく自分の声で希望を語って工事関係者を感動させている。地元住民を大切にするデザインは、地元密着型で地域の心と打ち解けたようすがTVでも放映された。

西山:新館計画では屋上に最もこだわった。テーマは「水と緑」。50坪位の庭と、50坪位のフロアがあって、そこで地域の人達がパーティーをやったり、結婚式をやったり、葬式でもいい、何でもいから、地元の皆さんが何かをやるようにしたい。また屋上の半分を芝生にして、その上に車を止めるようにする。できればその芝生の上に馬を走らせようと思っている。本物の大きな馬です。ホースセラピー(乗馬治療)をやってみたい。体の不自由な人が馬に乗って、また馬に乗りたくて体全体で表現する場に遭遇し、実際に体験して気持ちが動かされました。実際に見ないと分かりにくいのですが、慈善事業でなく、これは是非やってみたいと思っています。障害者の治療や、高齢者のリハビリなども目指したい。

建築家は「箱モノ」を創るだけで満足せずに、その使われ方、企画にまで踏み込めば、本当に世の中を変える力を持っていると思います。

「モノ」売りから「コト」売りへ

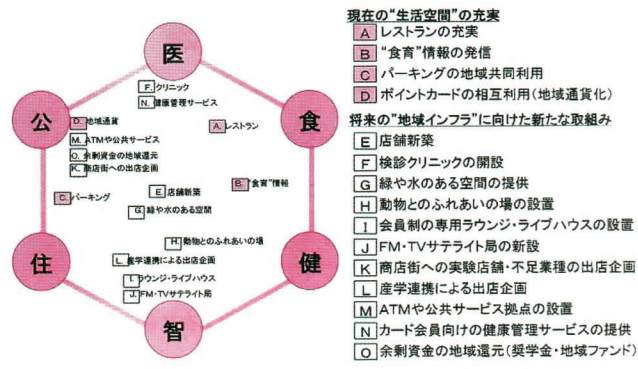
西山:商業施設が「地域のインフラ」に進化するためには、「モノ」売りから「コト」売りへの転換が必要だと思います。実はまだ道半ばのテーマがあって、買い物のポイントカードと医療・健康管理カードを共通化したいと考えている。インターネット上のシステムは、自社開発済みだが、それを運用するための医師会・厚生労働省のOKがまだ出ない。毎日使う商業施設と、福祉・医療とが一緒になれば、地域住民に



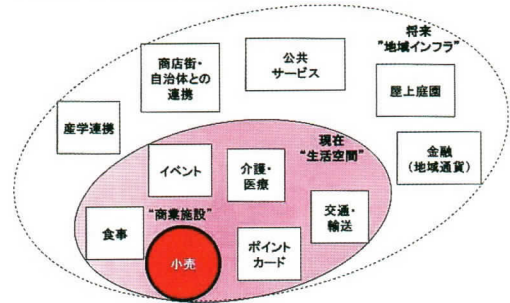
奥並びに新館増築工事中のダイシン百貨店

とってこれほど幸せなことはないと思うのですが。
谷口：単なる地域の商業活性化に止まらず、ダイシン百貨店を地域インフラの核とする考え方、ダイナミックな西山君の発想に学生達が皆感動していました。

- 現在の“生活空間”を充実させ“コトを売る”ことで付加価値を出し、将来は“地域インフラ”として欠かせない存在になるように様々な取組みを行う。



- ダイシン百貨店は、商業施設を核とした“地域インフラ”として存在することで、大森山王に住むお客さまの生活を総合的に支え、お客さまが“この地域に住んでよかった”と実感してもらうことを目指す(=「住んでよかった街づくり」の実践)。
- 一言でいうと「半径500m圏内シェア100%」。



高齢化地域社会での新しい可能性

谷口：西山君の考えについては、昨年TV番組の中で、村上龍氏が次のように語っている。

「血縁崩壊みたいな感じで孤独な老人が増えているというが、ダイシンのような場所があれば自分の居場所になる。凄く大事なことをやっている。こういう場所は行政が支援してもいいくらいです。」

「メディアは無縁社会の恐怖を煽る。だが、成熟した社会において、家族という制度から離れ、自立と自由を求める人が、増えるのは自然であり、決して悪いことではない。ダイシン百貨店はこれからの地域社会が持つ可能性を示している。西山さんの笑顔は印象的だった。人々のために何かをなし得る人は、結果的に自らも幸福を手に入れる。」と。

今日の話のように、ダイシン百貨店が西山社長に代わったとたんに、注目されて熱烈なファン層が芽生え、500m圏内に居住する高齢者のシェアを完全に押さえている。生で身近に話を聞いていると、日本を変えていく原点になる示唆が沢山含まれていると思う。建築家も自分たちの能力

をどのように地域に反映・生かしてしていくかという基本的な姿勢がとても重要。最近の西山君の活躍ぶりを、様々な報道から見ていて、このような考え方の企業は、今後地域に受け入れられ、おおいに発展していく可能性を秘めていると思っていましたが、今日は西山君の考えを聞かせてもらいその感を強く持ちました。

今後も体調に気をつけて、益々のご活躍を期待しています。

(NICHE編集部取材/2010年12月8日工学院大学に於ける講演内容の要約と現地取材。2010年6月28日テレビ東京の放送番組「カンプリア宮殿」カンプリアFile No.204)から一部引用しました。

Renovation of Daishin Department Store: A Successful Example of Creating A "Happy to live" City Environment

A man behind the current commercial success of Daishin Department Store in a downtown Tokyo is Mr. Hiroshi Nishiyama, who was elected as President in 2006. At that time the department store was near bankrupt.

Nishiyama set several items in order to make a V-shape turn from continuous red ink to black ink. What were important lay in fully commitment, dedication and speed. Also important were a good relationship with banks that should be regarded as strategic partners. One item, which was unique to Nishiyama's concept, was the management including President should be fully ready to lose by protecting all the stakeholders.

One of the core activities of Nishiyama was to make his department store as central platform of communications within the local society. Specifically, Daishin should respond the local-specific demands -- there are a large number of aged persons who live alone -- and offer what is genuine and authentic.

For further development, the department store always has to pay attention to something "traditional" and "new" to keep abreast of time. Also, the department store should be fully committed to contributing to the local society. It should show its respect to the aged customers by offering personal courier service, lunchbox delivery and shuttle bus for easier movement.

Additionally, the department store should carry out the festive activities to facilitate the communication among local people.

Furthermore, Daishin should serve as a core of the local infrastructure, including services such as electricity, water supply and gas services, plus clinical services. The image is that everyone would be able to do what they needed to do, including buying foods, meeting infrastructural needs and seeing medical doctors if necessary.

Daishin is now planning the second phase of reform and renovation, which are called for fulfilling its targets mentioned above.

NICHE PASSPORT

Let's go on a tour of inspection abroad!

NICHE PASSPORTは工学院大学建築系学科学生・大学院生海外渡航奨励金の制度を利用した、学生達による海外視察の様態を掲載するコーナーです。

今回は7名の学生達が、それぞれアジアおよびヨーロッパの7カ国を訪問しました。

NICHE PASSPORT projects introductory lights on a wide variety of activities of undergraduate and post-graduate students, who had opportunities to have a close look at masterpieces abroad thanks to the financial encouragement through Kogakuin University scholarship.

This issue specializes seven cases visiting Asia, Europe and North Africa, namely Germany and the Netherlands (01), Italy (02, 06 and 07), Laos and Thailand (03), Morocco 04) and Spain (05 and 07).

01 田揚裕子

「ヨーロッパの茅葺き建築の旅」

▶ ドイツ・オランダ

📷 photo 5

02 殿村勇貴

「外を愛するイタリアの文化・街並を求めて」

▶ イタリア

📷 photo 2

03 増田康治

「タイ・ラオスの寺院建築を巡る」

▶ タイ・ラオス

📷 photo 3

04 宮坂瑞穂

「モロッコ、イスラム都市を巡る」

▶ モロッコ

📷 photo 1

05 丸山裕貴

「西班牙旅」

▶ スペイン

📷 photo 4, 8

06 性全孝円

「イタリア渡航記」

▶ イタリア

📷 photo 6,7

07 市川達也

スペイン・フランス・イタリア
「一期一会 One WORLD One LOVE」

▶ スペイン・フランス・イタリア

📷 photo 9

本誌では、上記渡航者のうち、4名分の記事を掲載しています。

今後「建築系学科 web サイト」にて、全員分の記事を順次、掲載していく予定です。

そちらもあわせてご覧ください。

* "Niche" features four articles hereinafter. All of them will be presented at the official website of School of Architecture (建築学部)
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

▶ <http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1025/>

05 07 スペイン

01 オランダ

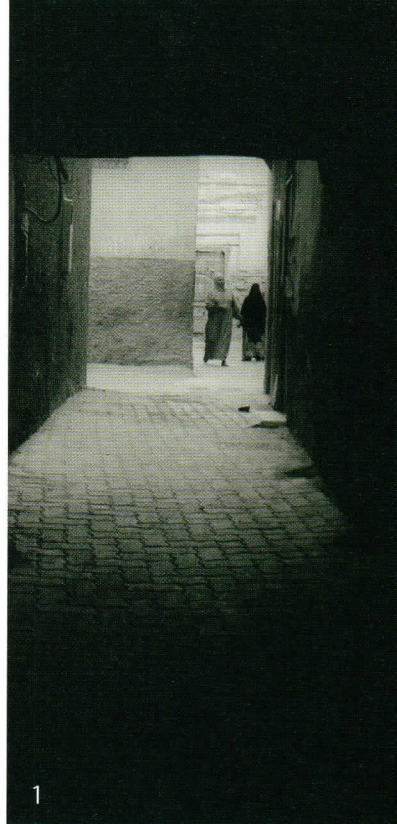
01 ドイツ

02 06 07 イタリア

04 モロッコ

03 ラオス

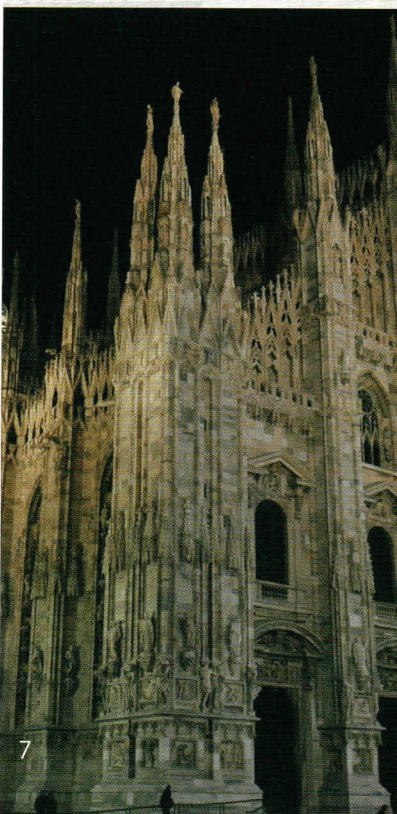
03 タイ



1



4



7





01 ヨーロッパの茅葺き建築の旅



- 1 Laren にある茅葺きを用いた4つ星ホテル
- 2 Jan de Bie 氏による茅葺風景
- 3 Nunspeet-Noord にある5階建ての茅葺きアパート
- 4 職人さん (Jan de Bie 氏) (中) と茅葺き協会の方 (P.Hartog 氏) (右)



茅葺き建築の現状

オランダの建築全体のうち約1パーセントが茅葺き屋根である。1999年では400万束使用したのに対し、2007年は870万束と葺き屋根工事は倍以上茅を使用している。これは1999年に比べると茅葺き建築が好まれ増加傾向にあることを示している。

茅葺き職人の教育

茅葺き教育には2種類ある。①初等教育：茅葺きの経験が殆どない16歳前後の青年を対象に行っている。教育期間は2年間であり、年に8週間高等学校に通い理論教育（茅葺きだけでなく、オランダ語、英語、社会教育）を受け、それ以外はRON北部地域開発機構で働きながら現場教育を受ける。②茅葺き専門教育：最低3年以上経験のある成人したかや葺き職人を対象にした教育プログラムで教育期間は1年間である。

消防計画

オランダでは消防団によるボランティア消防が行われる。以下茅葺き職人でもあり、消防団の一員であるJan de Bie氏のヒアリング結果をまとめたものである。RIETENKAP州には4つの消防団が存在するが、茅葺き屋根を行える専門消防団はそううち2つしか存在しない。消防団は常に防災ベルを持ち歩き火災が生じるとベルによって呼び出される。基本的に所属する消防団までは2分以内で出動し、8分以内で現場に到着できるようにになっている。茅葺き専門は2団しかないので茅葺きの消防団は20分以内の範囲まで出動する。他の消防団では茅の消火活動は難しいのが現状であるが、茅葺き屋根の構法や消し方を踏まえた教育を行っている。

茅葺き建築は日本の伝統構法でありながら、世界を見ると日本は後進国と言える。伝統構法を守りながら、新しい茅葺き建築の提案が今後の課題であると言える。

今回の渡航において関係しているすべての方に敬意を示したい。



田揚 裕子 Yuko Taage

略歴

2004 神奈川県立元石川高等学校卒業
2009 工学院大学建築学科卒業
2009- 工学院大学大学院建築学専攻修士課程
後藤研究室在籍
mail : glucklich_zeit_0715@yahoo.co.jp

Living under Thatched Roofs

There has been a significant decline in the number of thatched-roof houses. It is not true in Europe. I visited Germany and the Netherlands to find the reasons why the traditional roofing is still being used and, what is more, it shows upward trend in recent days. In the Netherlands, in particular, there are supporting measures to use the traditional means of roofing, including Vakfederatie Rietdekkers (the Dutch Federation of Thatchers). One of the major activities of the Federation is the specialized education programs for two years (those without previous thatching experience) and one year (those with at least 3 years of experience). The use of thatch is also supported by the local fire-fighting teams, who have special techniques and knowledge to effectively put out the fire on the thatched roof.

▶ 茅葺き協会のHP : <http://www.riet.com/>

▶ Jan de Bie氏のHP : <http://www.rietdekker.nl/debie>



02 外を愛するイタリアの文化・街並を求めて



殿村 勇貴 Yuki Tonomura

略歴

2006 神奈川県立追浜高等学校卒業
2010 工学院大学建築学科卒業
2010- 工学院大学大学院建築学専攻修士課程
澤岡研究室在籍
Mail ytonomura1106@gmail.com

イタリア

イタリア人は世界一大きなリビングを持つなどとも言われるように、外部空間に対する意識が日本人とはまるで違う。街にある広場や道にテーブルやイスを広げ、まるで自分の家のリビングかのように、そこで食事や談笑をしたりする。そんな外部をリビングとして考える人たちの日常生活や街並を自分の目で確かめたいと思い、飛行機に乗ること13時間、イタリアに着いたのは8月末の真夜中だった。

バーリ

駅から歩いて10分ほどの場所に、道が迷路のように入り組んでいる旧市街がある。夕暮れ時、オレンジの街灯に照らされたこの街を歩いていると、狭い道にテーブルを広げて夕食を皆で囲んだり、上のベランダでおばあちゃんが犬と一緒に編み物をしていたり、こういう光景によく出会った。とにかくみんな外に出ているのだ。

マテラ

サッシと呼ばれる洞窟住居で有名な街である。斜面に広がる自然発生的で複雑な街並だ。夜のサッシ群はその表情を一変させた。地中に埋め込まれたオレンジ色のアッパーライトがサッシ群を照らし、とても幻想的な夜景が広がるのである。この夜景は、昼間の殺風景なこの街に対する最高の飾り付けなのだ。

おわりに

イタリア人はとにかく外を愛していた。この事実が本の知識を通してだけでなく、自分の目を通して実体験で理解できたことだけで、今回の旅は十分な成果があったように思う。この経験を次に繋げられるように日々努力していきます。最後に、海外渡航を支援して下さった方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。

The World Biggest Living Room

For the Italians, their surrounding environment is regarded as "living room outside their houses". They have a tradition and culture to enjoy eating and chatting with friends in Piazza and on roads. I have been allured by the cultural difference and that was why I chose Italy as my destination. In the "living space widest in the world" there were various flowers, sculptures and lighting sophisticatedly laid out to decorate the public living room.

- 1 マテラ夜景
- 2 バーリ
- 3 プラノ島

自分の高校時代からの希望であった青年海外協力隊への参加という目標を考え、アジア地域への渡航を決めた。同時にアジア地域の寺院建築の形態を学び多くの刺激を受けたいとも思っていた。私はタイとラオスの首都と古都を順に回った。バンコクにて、チャクリマハプラサート宮殿を見学し感じたのは、ビクトリア様式とタイ様式の完全な融合で、二つの要素が混ざるときに発生する不快感が一切なくタイ様式の寺院ワットプラケオやそれに付随する塔が多くある敷地内においても違和感なく調和していた。

タイ北部で最も格式高い寺院とされるチェンマイのワットプラシンを見学して、私はその寺院の敷地内に学校があったことで格式とは何かを考えさせられた。

ラオスはビエンチャンよりも先にルアンパバンを訪れた。飛行機から降りたときに感じたのは、日本との差であり今なおその衝撃は忘れられない。空港を降りてすぐに帰ろうと思ったラオスであったが実際にはラオスのルアンパバンにおける滞在が最も良い思い出として残っている。常に人々は笑顔で丁寧に接してくれて日本語はもちろん英語も通じなかったが不快な思いをすることはなかった。ルアンパバンにおけるワットシェントーンはラオスの寺院の中でも最高の美しさを誇る。その空間は思いのほか涼しくなっていた。

タイに戻った私は反政府デモに遭遇した。日本でこのような大規模デモに遭遇することはなく非常に驚いたがデモ参加者とも言葉を交わし、身の危険を感じることはなく無事帰国し、この旅の様々な経験は今の自分の糧となっている。

Touring round Temples in Thailand and Laos

The trip to the South-East Asia gave me a time for deep breath to think about my future. Also, I have been interested in the temple architecture in the region. I did not feel much difference between Japan and Thailand but the difference was so clear in Laos. I am happy to report that all the temples that I visited were very beautiful and well-maintained. There was an anti-governmental demonstration in Bangkok, which has ceased peacefully. To my relief, now I am able to say it was one of my travel experiences.

- 1 チャクリマハプラサート宮殿
- 2 チェンマイ、ワットプラシン
- 3 ラオスのシンボル、タートルアン



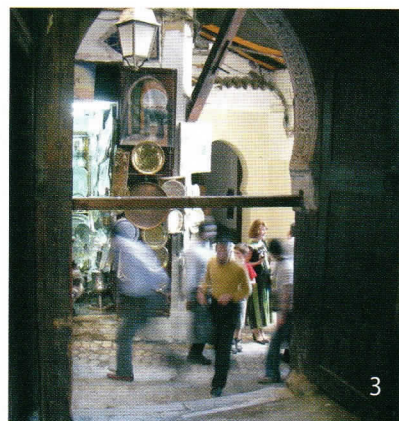
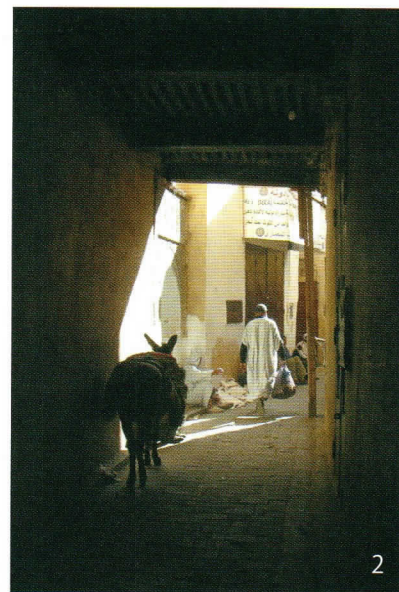
増田 康治 Koji Masuda

略 歴

- 2007 東京農業大学第二高等学校卒業
- 2008- 工学院大学建築学科
山下てつろう研究室在籍

03 タイ・ラオスの寺院建築を巡る





04 モロッコ、イスラム都市を巡る

私はカサブランカ、マラケシュ、エッサウイラ、フェズの順に主に4都市を周り、また途中マラケシュ―フェズ間は、通称カスバ街道と呼ばれる街道を経由し、アトラス山脈や砂漠での生活を見てきた。モロッコの海岸都市、内陸都市、アトラス山中の町を見ることにより、一つの国の中でも全く異なるタイプの都市を見ることが出来た。カサブランカ、エッサウイラは、「海岸都市」。マラケシュ、フェズは、「内陸都市」のタイプに分類できる。海岸都市は明確で分かりやすく、道路は比較的直線が多く、道幅も広く、十字路が多いといった特徴があるが、内陸都市は規模も大きく、実に複雑で迷路性に富む。この迷路性を実際に体感してみたいと思い、私はモロッコを渡航先を選んだ。

実際、マラケシュ・フェズの両都市では地図の意味を果たさず、お店、道の雰囲気 で位置を把握するしか方法はなかった。街は大きく分け、旧市街(メディナ)、新市街(ギリーズ)と二分される。メディナは城壁に囲まれた中にモスクを中心とし、住宅、商業施設がつまっている。部外者には複雑でも、実は実用的に店舗や施設がゾーニングされ、イスラム法によって道幅、窓と通路側の視線の関係等、細かく規則が設けられているようだ。(今村文明著「迷宮都市モロッコを歩く」より)そしてどのメディナにも共通する点は、商店が並ぶにぎやかな道から

一歩住区のある方へ足を進めると、プライベートな場へと一変し、とても静かであったことだ。様々な音が聞こえるスーク(市)の喧噪から、一変する静けさがとても印象深かった。

Visiting Four Major Moroccan Cities

I have been to four major cities in Morocco; Casablanca, Marrakish, Essaouira and Fez. When moving from Marrakish to Fez, I took so-called "Kasbah Way" to watch people's lives in the Atlas Mountains and desert. Four cities I visited differ from one another, the fact which can be explained by the geographical difference. It is worth mentioning that I was much impressed by the labyrinth-like city centers at Marrakish and Fez.

- 1 通称カスバ街道の集落(オート・アトラス)
- 2 日常的に運搬に使われるロバと男性(フェズにて)
- 3 かつて「イスラム教徒以外立入禁止」を表していた横棒(フェズの中心街にて)
- 4 モロッコの日常着ジュラバを身にまとう男性(マラケシュにて)
- 5 小さな間口で靴を修理する男性と客(フェズにて)



宮坂 瑞穂 Mizuho Miyasaka

略 歴

2002 普連土学園高等学校卒業
 2009 工学院大学建築学科卒業
 2009- 工学院大学大学院建築学専攻修士課程
 山下てつろう研究室在籍
 Mail mizuhozumizuho@hotmail.com



NICHE GALLERY
2011

平城遷都1300年祭

平城宮跡会場 全体整備計画

澤崎 宏





「あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり」—和銅3(710)年の平城遷都から1300年を経て「平城遷都1300年祭」が2010年1月元日から12月31日まで開催された。この平城遷都1300年祭は、「平城京」の都が誕生して1300年を記念する国家的プロジェクトとして開催される記念イベントである。私は、4人のプロデューサーもと平城宮跡会場の会場整備プロジェクトのチームリーダーとして参画した。この記念すべき記念事業に対して、私は日本の多くの博覧会の計画を経験した設計者の一人として博覧会的事業を通じ、いかに地域活性化に寄与するか、本計画ではいくつか試みている。第1に日本が持つ歴史的なポテンシャルをどのように活用して日本の観光事業を発展させるか。第2に歴史的な都市景観をどのような形で都市形成モデルを確立するか。第3に奈良県の地域資源として捉えた木材の活用をどう考えるかである。

全体整備計画

計画地である特別史跡・平城宮跡の広さは約130haの規模で、昭和53年に制定した「特別史跡平城宮跡保存基本構想」に基づき「遺跡博物館」として活用するために整備が進められた。平成12年には、古都奈良の文化財と共にユネスコの世界遺産として登録。そして、現在の知事となって、平成19年12月に国営公園化が閣議決定され、国による本格的な事業として整備が行われることになった。

主会場となる平城宮跡は、長年の文化庁の発掘調査・研究によって遺構・遺物を紹介する「平城宮跡資料館」と地下遺構そのものを紹介する「平城宮跡展示館」が設置され、復原施設として朱雀門、「東院庭園」等、そして今年「第一次大極殿正殿」が完成した。更に、隣接地には恒久施設の「平城京歴史館」と「遣唐使船復原展示」が奈良県によって整備された。

イベント時は、これらの施設群を結びつけるために「交流広場」と「エントランス広場」を仮設整備し、新たに開発した歴史文化のインタープリターシステムを導入して、歴史文化を楽しく学べるような体験価値を創出した。

各広場には、通訳や運営を支援するサービス施設を適宜配置して、各施設が相互に有機的にネットワークされるように回遊式の会場構成とした。

世界遺産に認定された遺跡を利用してイベントを開催する場合には、仮設施設でも地下遺構の保全と宮跡景観への配慮が科せられ、ユネスコの世界遺産委員会の許可を得る必要がある。そのため文化庁と奈良県が協議し、「会場施設構造検討委員会」と「会場施設景観検討委員会」を新たに設置して、さまざまな角度から研究・提案を実施し、専門委員による審議を行って、施設整備の指針を得ることができた。

その結果、地下にある遺構・遺物に影響を及ぼさない基礎を持った施設整備と宮跡の重要な景観である若草山をはじめとする大和三山の眺望を妨げない会場計画とすることが求められ、施設の規模・形態・構造・色彩・素材が規制された。

最終的には、主要な宮跡の遺構に支障がない場所に施設を配置し、更に建築は奈良市の景観条例を順守した切妻屋根平屋建てとして木造建築で統一した。

主要施設は3タイプの建築で計画している。協会が整備する休憩施設・飲食物販・案内施設・展示施設等は木格子で覆ったテント建築とし、会期後の撤去が容易な仮設建築を採用した。

主要催事が開催される「まほろばステージ」は、小断面集成材の木造建築とした。今後は再利用の検討を行う予定である。また、第一次大極殿院の周辺の築地回廊に代わって、院地区の空間と位置を規定する「大極殿院修景柵」を奈良県が整備し、会期後も本格整備までの期間は存置させることになっている。



今回、会場や施設に使われる木材は奈良県産材の杉材を中心に選定して、仮設建築に使用する木材は「奈良県木材協同組合連合会」に、会場のサイン・ファニチャー等の施設に使われる丸太材は「奈良県森林組合連合会」に、それぞれの団体の協力を得ながら、奈良県産木材のアピールする機会とした。

大極殿院修景柵

往時の大極殿院は、外周総延長約 1,000 m の築地回廊に囲われていた。しかし、用地の問題や本格的な整備が現状ではできないために、第一次大極殿院の広さを表示するために仮設の修景柵を設置した。正面には、中央に南門、両側に東楼、西楼の3つの門を設置した。設計にあたっては、往時の築地回廊を復原したと誤解されないように、直接的なデザインに喩はさけた。木組みについては、奈良時代の建築の木組みをイメージし、簡素化するデザインに努めた。

構造的には、挟み柱と2段梁を組み合わせる接合部の剛性を高めて、筋違いのない面剛性の高い格子組みを採用した架構システムが実現できた。会期後も回廊が整備されるまで存置する計画である。

まほろばステージ

劇場建築は大スパンの無柱空間が要求されるが、あえて大断面の部材を使用せずに、小径木を束ねた架構で構造システムを成り立たせるデザインとした。透かしのある架構は、それぞれ断面形状は大きい、透かしの効果で軽い構造が実現でき、新たな木造の空間構造が獲得できた。また、この構造実現のため岐阜森林センターにて実物大の破壊試験を行い検証し、確認申請作業を行った。

素材の柔らかい杉材でも集成技術によって住宅レベルの小断面

NICHE GALLERY 2011

材が製作でき、中規模の集会施設などの木架構に应用が可能であり、特殊な断面部材や金物を使わず、プレカットなど既成部材と合理化工法で構築できるので汎用性が高い構造システムであると言える。新しい木質空間を創出することによって、木造建築の新たな方向性を示すことができたと思う。

最後に文頭の「あおによし・・・」とは、「青と丹(に)がとてもよく、きれいであり、奈良の都はとても賑わっている」という意味の万葉集の歌であるが、まさに平成の奈良の都は「今盛りなり」と言えよう。

Overall Planning for Heijokyo Capital Ruin - The 1,300th Anniversary of Capital Relocation to Nara - Hiroshi Sawazaki

Year 2010 was coincided with the 1,300th anniversary of capital relocation to Heijokyo in ancient Nara. To commemorate it, there were a number of festive events under the name of "the 1,300th Anniversary of Capital Transfer to Heijokyo (Nara)" all over Nara prefecture. Heijokyo ruin, a UNESCO World Heritage site, hosted the main event in order to reiterate the importance of the preservation and practical use of the historical and cultural heritage.

In addition to turning our eyes to the historical aspect of the prefecture, the main venue featured a large-scale wooden building that did not only pay tribute to the long-cherished traditional architectural structure and techniques but also promote the wood product of Nara.



澤崎 宏

略 歴

1957 東京生まれ
1981 工学院大学工学部建築学科
(山下研究室)卒業
1981 株式会社 計画・環境建築
／YAS 都市研究所入社
建築家 木島安史、橋本文隆に師事
2000～同社 代表取締役東京事務所長
2004～同社 代表取締役社長
2008～工学院大学非常勤講師
2009～東京都建築士事務所協会千代田支部 支部長

Hiroshi Sawazaki

1981 KEIKAKU-Inc./YAS&URUBANIST
It studies under the history of architect
Yasufumi Kijima and Fumitaka Hashimoto.
2000~ Tokyo of representative director
of this company office manager.
2004~ President and Representative
Director of this company.
2008~ Lecturer at Kogakuin University.
2009~ Head of Tokyo Association of
Architectural Firms Chiyoda branch
Head of Tokyo Association of Architectural Firms
Chiyoda branch Head of Tokyo Association
of Architectural Firms Chiyoda branch

新千歳空港 新国際線旅客ターミナルビル 照明デザインについて

東海林弘靖 ライティング・デザイナー / LIGHTDESIGN INC. 代表



日本にある魅力的な観光資源に磨きをかけて、外国人旅行者の訪日を促進する「観光立国」政策の一貫として新千歳空港の国際線旅客施設拡大計画が始まった。2007年に私は照明デザイナーとして設計チームに参画し、本年3月26日、新千歳空港に新しい国際線ターミナルビルがオープンした。このプロジェクトは、「観光立国」というテーマに対して、照明デザイナーとして何が提案できるか？という社会的な責任を感じるものであった。

1. 照明デザインに何ができるのか？

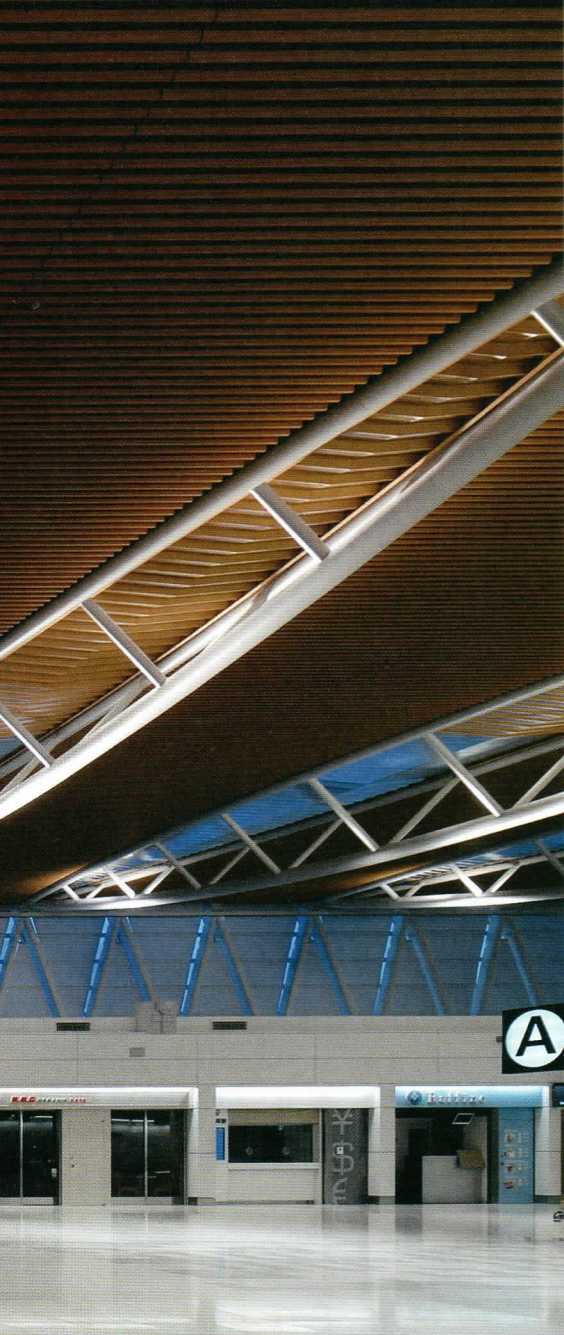
私が照明デザインを始めたころ(約27年前)は、単に美しい光の景色を作れば良いと考えていた。しかし、そもそも光は美しいものであるから、美しいこと以上に何かを生み出さねば意味がない。そして照明デザインは、空間に与えられた光が建築空間に作用して新たな価値を付け加えることだと考えるようになった。「美しさを越えた光による新しい価値」言葉で言うのはたやすいが、実際には何が行われたのか？私は、空港の照明環境を、「旅立ちの期待

感を高め、到着時の温かな出迎え、そして旅の余韻を楽しめる光環境」にすることを考え、光源の色温度の違いを積極的にデザインとして取り入れることにした。

2. 色温度のデザイン

色温度というのは、光の色味を数値化したもので、太陽の光も朝は白く、昼にはさらに青白く、そして夕にはオレンジ色へと変化する。このように自然に変化する太陽光の色温度の違いは、それらの光のもとで行われる人間の活動には相関関係がある。昼の高い色温度では活動的、夕の低い色温度では、リラックス・休憩モードとなる。

まず、出発ロビーで航空会社のチェックイン窓口でボーディングパスをもらう環境は、色温度が高くすっきりとしたイメージとし、出国手続きを済ませ出発コンコースに出ると、今度は、色温度を下げてリラクゼーションさせようというシナリオである。また、到着客へのサービスでも、長い空の旅から地上に降り立った



新千歳空港 新国際旅客ターミナル



出発ロビー(色温度:4200K)

人々は、ぬくもりの感じられる暖かな色温度の空間に迎えられる。そして、入国審査場までの廊下も色温度は低いままであるが、税関で急に色温度が高くなる。一気に 5000 K まで上げ、リフレクシュモードにはいるという筋書きである。(図1) 色温度を積極的にデザインするというアイディアは、完成後に改めて体験してみたが、予想以上の気持ちの変化が楽しめた。

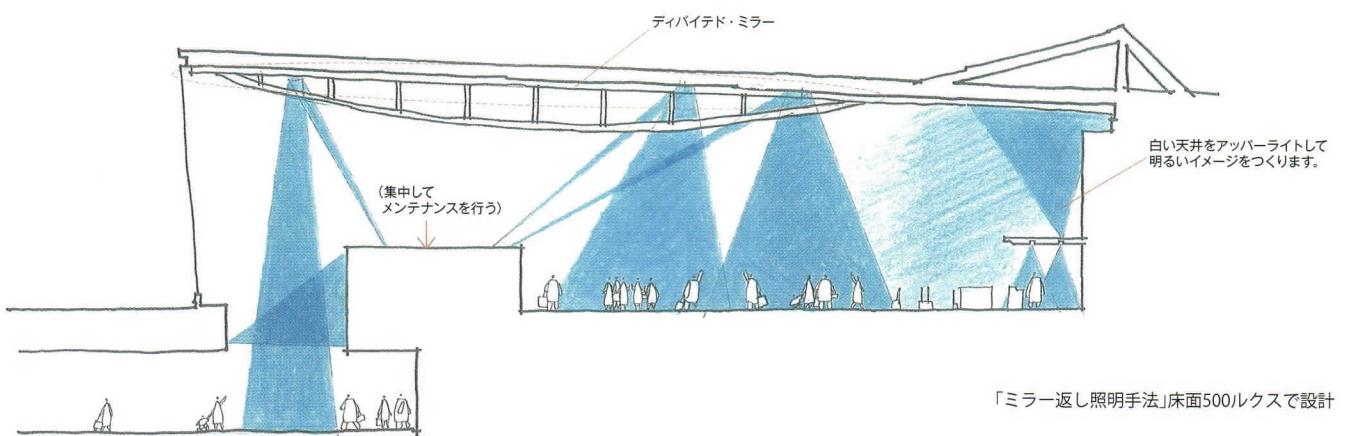
3. サステナブルな照明手法

ここで採用したのは、照明器具をメンテナンスのしやすいところに設置して、そこから平行光線に近く絞った光を天井に設置されたミラーで反射させるという照明手法である。大屋根の大スパンを支える構造にアルミ製反射鏡を固定した。この「ミラー返し照明手法」には、二つのメリットがある。ひとつは、照明器具の姿が空間から消え洗練された空間となること。ふたつ目は、メンテナンスが容易であるという点。照明器具は、店舗屋根の上にあるので、そこへ登れば簡単にメンテナンスが出来るのだ。

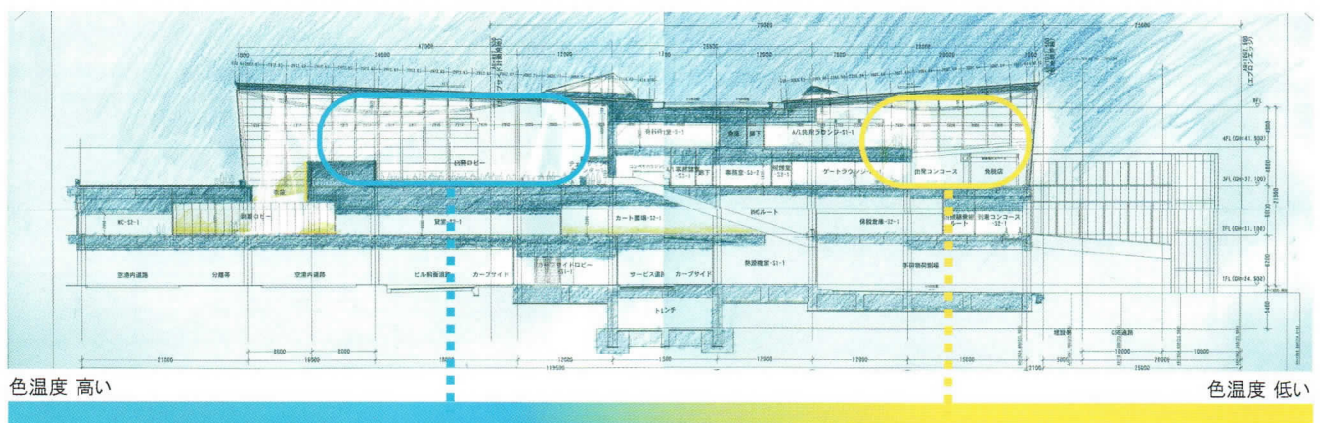
CG シミュレーション技術が進化し、一見大仰な照明手法のメリットをプレゼンテーションしやすくなったという背景も手伝って、デザイン性とメンテナンス性の両立するサステナブルな照明空間が完成した。



出発コンコース (色温度: 3000K)



「ミラー返し照明手法」床面500ルクスで設計



色温度 高い

色温度 低い

図1- 色温度ストラテジー

Grand Illumination Design for International Terminal, New Chitose International Airport, Hokkaido

Designed by Hiroyasu Shoji, Lighting Designer,
LIGHTDESIGN, INC.

When I look back my career as lighting designer, which started 27 years ago, I confess I was totally wrong at the very beginning. In due course, however, I came to realize that I have to create additional values to the light's beauty. A mere trial to make the lighting look nice is not enough. Since then, my personal target has been set at a "creation of values that expands the possibility of lighting".

What I attempted to do for the lighting scheme for the terminal building of Shin Chitose International Airport lay in logical transition of color temperatures in order for "producing a positive inspiration that encourages the people's adore for air travel" for the departure lobby and "easing mind for a temporary relaxation by welcoming atmosphere by lighting technique" for the arrival lobby.

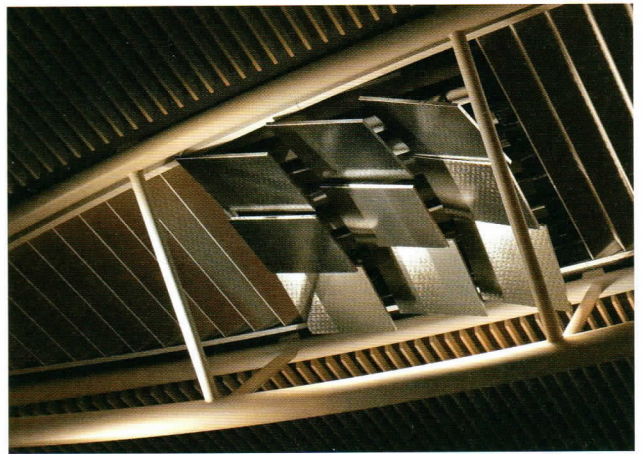
Let me talk about the lighting strategy, or color temperature transition for the building. First of all, the color temperature offers a useful index for the color of the light. For example, the sunlight looks white in the morning, pale bluish during daytime and becomes deep orange at the sunset. In that sense, the color temperature of the sunlight varies; with the day sunlight the temperature is high, which promotes our activities. At the sunset, the color temperature lowers, encouraging us to be relaxed and laid-back.

At the check-in counter, the color temperature is set high for clean and clear image. The lighting for the departure concourse is designed to offer relaxing atmosphere with lowered color temperature. A warmer environment is created for the arrival lobby with low-temperature lighting. At the immigration, the temperature remains low, which, on the other hand, is drastically increased to 5,000K at the customs area with the purpose of refreshing those arrived. After the completion of the design project, I was personally convinced the effect of the positive change in color temperature, which fell exactly on what I intended.

The other important aspect of the design project was sustainability ensured through maintenance ease. All the lighting equipment was installed in areas that allow easy maintenance. The light projected and emitted from the apparatus is delivered to the environment after being reflected by the aluminum mirrors on the inner roof.

This reflective design provides two advantages; one is a design sophistication where no lighting apparatus can be seen and the other is, as I mentioned earlier, ease of services.

I am pretty satisfied with the project because the final outcome achieved the double-faced success in terms of design creativity and maintenance ease/sustainability.



高効率反射ミラーの角度はすべてシミュレーションにより決定。



東海林 弘靖

照明デザイナー / LIGHTDESIGN INC. 代表

略 歴

1958年生まれ。

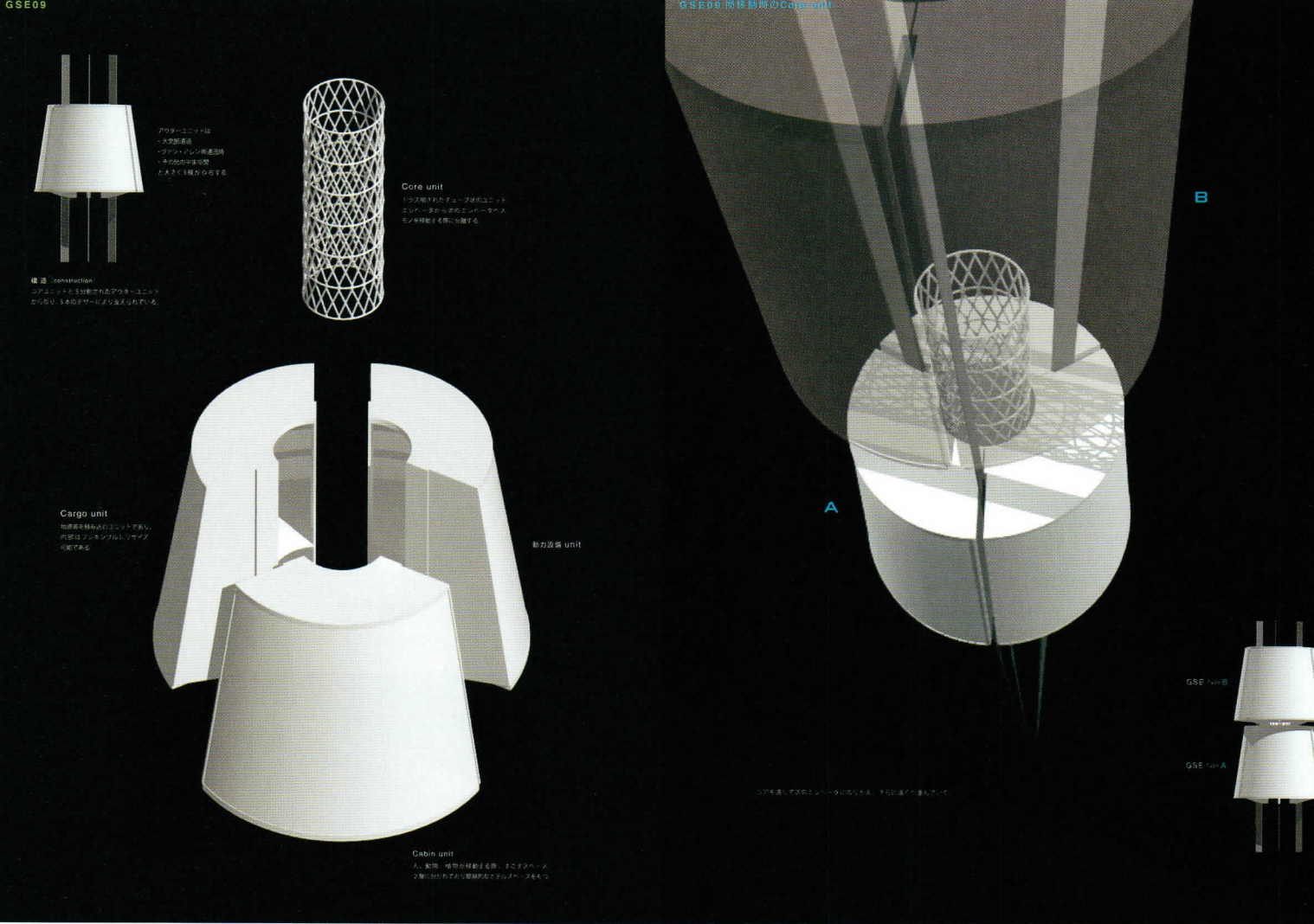
光と建築空間との関係に興味をもち、建築デザインから照明デザインの道に入る。

1990年より地球上の感動的な光と出逢うために世界中を探索調査、自然の美しい光の感動を糧にして、超高層建築のファサードから、住宅まで広く空間における光のデザインを行っている。

「座・高円寺」(東京・杉並区)では国際照明デザイナー協会 / Special Citation 2010 を受賞。

Shoji Hiroyasu

Lighting Designer.
LIGHT DESIGN, INC



宇宙エレベーターからの視点

加藤匡毅

設計 GEOGRAPH

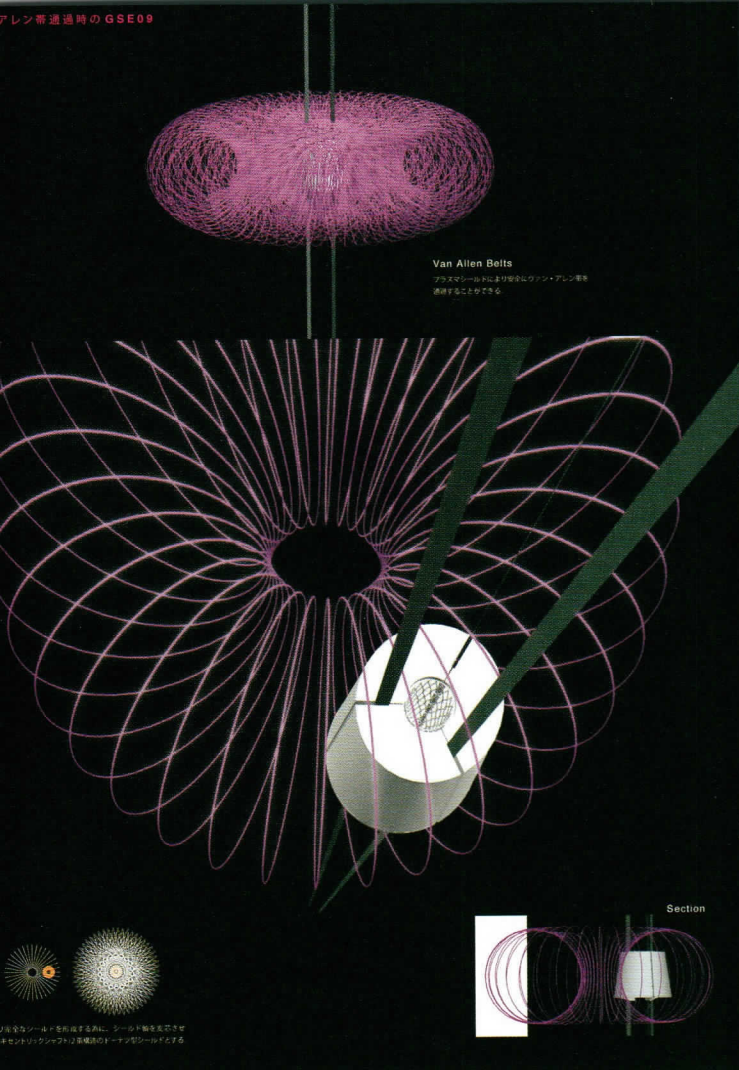
私が「宇宙エレベーター」という聞きなれない言葉と出会ったのは、2008年夏のことでした。朝日新聞の小さな記事には簡単な概要と概念図、CGと日本宇宙エレベーター協会発足の内容が書いてありました。中でもその概念図はとても明快で衝撃的でした（※イメージ1 space elevator basic structure GEOGRAPH作成、著作権）。

人類が月に降り立った後、1973年に生まれた私は小さなころから「宇宙」を手塚治虫、アーサーCクラーク、キューブリック、ジョージ・ルーカス等を通して身近に感じてきました。宇宙に関する仕事につき、いつかは宇宙に行けるものだと思っていました。横浜の広大な埋立地に建てられた集合住宅で育ち、その建築やランドスケープに大きな影響を受けたと思います。絵を描いたり手を動かしてモノを作ることが大好きで、自然と建築の道を目指しました。設計事務所を経て家具屋IDEEに転身、デザイナーとして5年勤めました。IDEEでは世界中のデザインや文化を目の当たりにし、ライフスタイル(衣食住)をデザインすること

の重要性に気づきました。本当に必要なものをもっとデザインしたいと考え、仲間と立ち上げたデザインユニットが現在活動するGEOGRAPHです。GEO(地理・地球)をGRAPH(図・形)にする、すなわち地球にあるあらゆるものをデザインしたいという思いを込めてつけた名前でした。

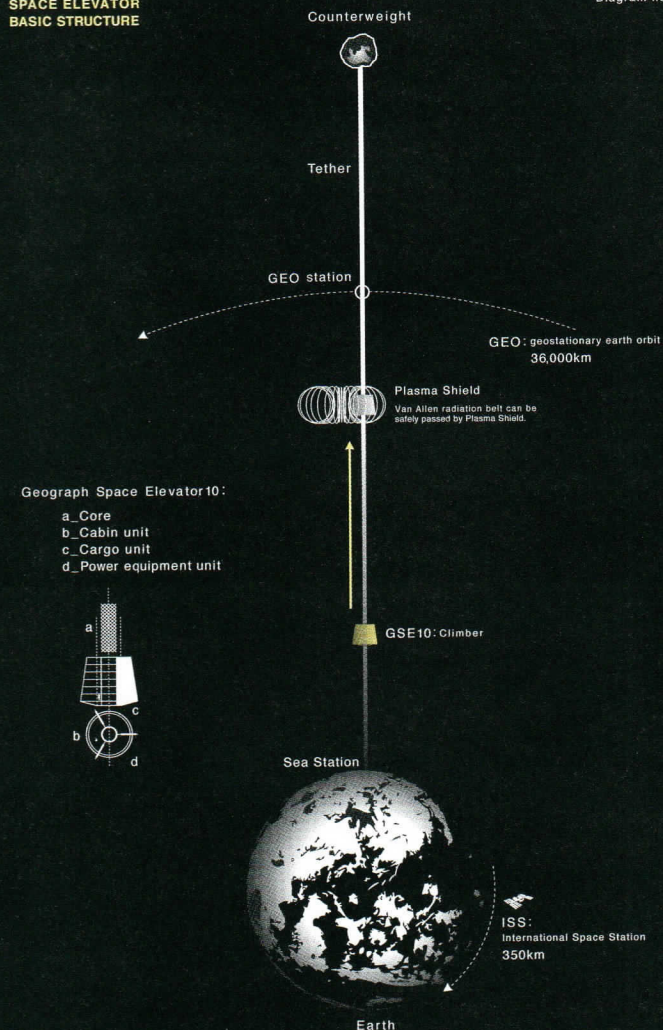
それから5年ほど経った夏に「宇宙エレベーター」と出会ったのです。子どものころの宇宙に対する漠然とした思いを今ならデザインという手法で表現できるのでは。その日から宇宙エレベーターについて学びました。日本宇宙エレベーター協会（以下JSEA）主催の会議「jpSEC2008」の開催とデザインコンペの情報を手にし、コンペ応募を短期目標に設定しました。

ここで「宇宙エレベーター」について簡単に解説します。現在主流のロケットを使った移動手段に対する代替案であり、その名の通り、長い紐(デザー)をつたってエレベーターが宇宙まで昇っていく装置です。これまでSFの中でしか描かれなかった「宇宙エレベーター」が、最新技術と新素材(カーボンナノチューブ)



SPACE ELEVATOR BASIC STRUCTURE

Diagram not to scale



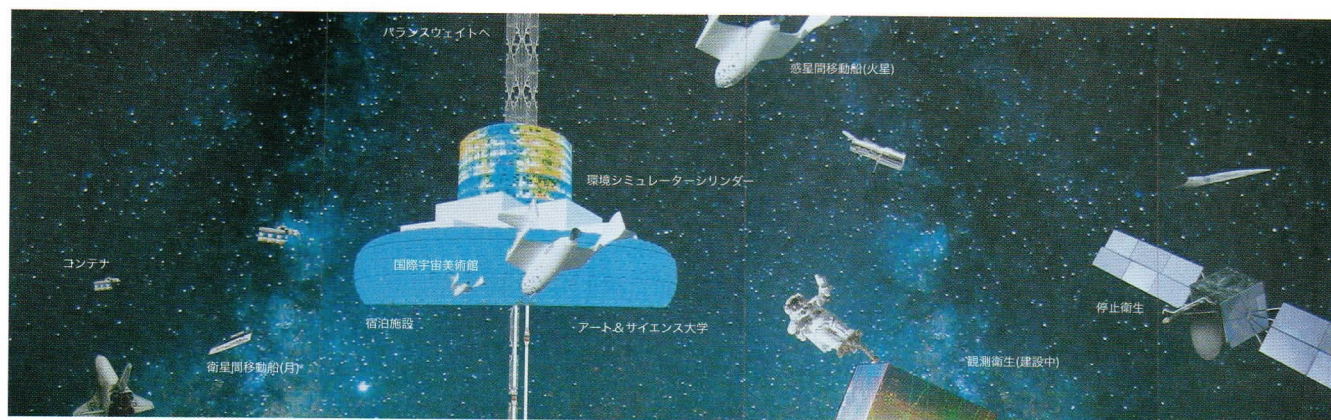
NICHE GALLERY 2011

の出現により現実化に近づき、50年後の完成も不可能ではないといわれています。肝心なその建設方法ですが、まず地上から36,000 kmに位置する対地静止軌道(GEO)まで打上げた衛星から地球に向かってテザーを降ろしていきます。衛星の重心が地球に近づくと落下してしまうので、テザーは地球とは反対側にも伸ばします。遠心力と重力のバランスを取りながら伸ばし続けると、赤道近辺の空から一本の紐が地上に降りてきます。そのとき反対側に伸ばしたテザーの長さは60,000 kmを超え、全長約100,000 kmに及び構造物が完成。地球と月の距離の約1/4までになります。その後、テザーの強度を高める為に、地上からロボットエレベーターを200回程昇らせテザーを太く編み上げます。構造物の重心は常に対地静止軌道上にあるので、24時間で地球を一周します。つまり地上からは静止した強靱な紐が固定された状態になるのです。

輸送コスト面でも「宇宙エレベーター」は期待されています。現在スペースシャトルなどロケットによる輸送手段は、地表から

400 kmの地球低軌道(LEO)まで1 kgの物を運ぶのに100万円ものコストがかかっています。私一人だとしたら6000万円強。それが「宇宙エレベーター」を使うと約1/100のコスト、60万円で宇宙まで行けるようになります。

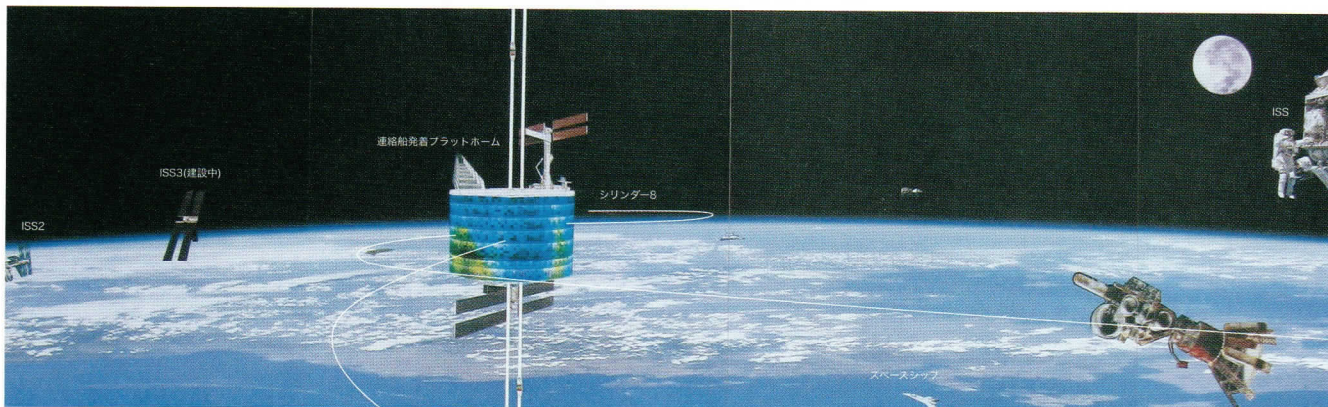
私は、私と家族が宇宙旅行する日を想像し、100年後の「宇宙エレベーター」とそれを取り巻く環境をデザインし、コンペに応募しました(※イメージ2,3,4,5,6space elevator2108 GEOGRAPH 作成、JSEA 版權)出発地点となる地上の島はおそらく、22世紀の新しい国家モデルとなるでしょう。(※イメージ2)政治、経済、文化、法律、さまざまな分野で新たな試みを実現され、発射駅の機能のみならず、環境問題のひとつの回答としての地球立公園(世界遺産)となるでしょう。成層圏は今よりもっと発達した気象学の研究施設が併設されます。(※イメージ3)現在の宇宙ステーションがある、地球低軌道(LEO)では宇宙ゴミの問題が深刻になり、回収～リサイクルの装置が休みなく稼働。(※イメージ4)そして地上から36,000 kmに位置するメインステー



36000km International space arena

ISA. 宇宙エレベーターのメインステーション。
現在宇宙旅行が一般的になったのもこの施設が担った役割は大きい。
これまでの白く、硬質的な居住空間のイメージから一新、美術館や
教育機関、宿務施設が混在したデザイン性の高いカルチャーコンプ

レックスとして認知されている。
ここで生まれた数多くの芸術、思想、文化が地球にもちこまれる。
去年、初めての世界サミットが行われたことも記憶に新しい。



350km Absorbent station

ISSと同軌道上に位置する駅。
主にISS、ISS2間の物資および人のやり取りをする一方、宇宙に増え
続けるデブリを回収する巨大掃除機でもある。
その構造は、コンピューター制御による8つの回転速度が異なる

巨大シリンダーから成り立つ
今日までで、この領域の60%のデブリが回収され地球に持ち帰られ
ている。



15km Floating palette

宇宙エレベーター第一の駅。
宇宙エレベーターの出現により地球重力下でも、ある程度の大きさの
浮遊島を建造することが可能になった。

エネルギー研究施設と、宇宙開発の歴史資料館博物館、そして職業宇
宙飛行士の訓練施設が存在する。



0km Floating palette

赤道に存在する人工島。
この島は世界中の研究者、技術者、政治家が集まるだけでなく、漁業、
農業、サービス業も発達しており長期休暇を過ごす観光地としての
顔も持つ。
しかしなんとこの島の主役は国際指定公園にも認定されて
いる、宇宙エレベーターの発射駅である。

緑豊かな遊び場から遠く宇宙へのびる2本のケーブルが島のシンボ
ルである。
島の東側は未だ埋め立てが慎重に進んでいる。今では周知の事実で
あるが、埋め立てに使用されている材料の大半は持ち帰ったリター
ンマター(宇宙ゴミと以前は呼ばれていたもの)である。

ションが宇宙の玄関として多くの人とモノが集まる結節点となり、大学や宿泊施設が混在したカルチャーコンプレックスとして発展します。(※イメージ5)

「宇宙エレベーター」建設には新国際組織と新法律が必要不可欠であるということを意識しました。使い方を誤れば世界最大の兵器にもなってしまう怖さもあれば、テロによる攻撃も受けやすいものです。だからこそ「宇宙エレベーター」は世界平和の象徴とも言えます。

この案の特徴は「宇宙エレベーター」を通して、文化発展の未来を予想し環境をデザインしたことであり、その結果、最優秀賞受賞に繋がったのだと考えています。

とはいえ、今回は100,000 kmある「宇宙エレベーター」のわずかに4箇所についてイメージしたに過ぎません。現在はJSEA大野会長、青木副会長はじめ多くの識者の協力を経て、ヴァンアレン帯(放射線帯)を通過する際のエレベーターのシールド方法とクライマーのデザインに取り組んでいます。(※イメージ7,8,9space elevatorGSE.09 GEOGRAPH作成、版權) また、JSEAの活動をより多くの人に知ってもらうことをデザインの力でバックアップしたいと考えています。(※イメージ10,11space elevatorJSETEC GEOGRAPH作成、版權)

将来、低コストで物資、生物を宇宙空間に運べるようになった時、衣食住の新基準が生まれると思っています。現在は国際宇宙ステーションの内装にみられるように、宇宙は選ばれた人のための無機質な狭小空間ですが、より大きな空間で、大きな物資を作れる事が、宇宙建築や宇宙デザインといった新分野が発展するでしょう。私はそこをデザインしていきたい。「宇宙エレベーター」のデザインを考える事は未来のライフスタイル全般をデザインすることなのです。どう働き、暮らし、食べて、眠るか。興味は尽きません。GEOGRAPHは、GEO(対地静止軌道)からの俯瞰した視点によってライフスタイルに関わるデザイン提案をGRAPH(図・形)化し続けていきます。

A View from Space Elevator Designed by Masaki Kato, GEOGRAPH

Space Elevator. Does it sound attractive? Or you might laugh at it, saying that it is just an idea in an SFX movie? Thanks to the technology development and material research (carbon nano tube), it is now said to be possible in 50 years.

The Space Elevator is an alternative means of transportation between the earth and the space. As the name implies, the carriage moves up and down through a super long tether.

If it is made true, the Space Elevator will offer cost advantage. Currently, transport of a 1 kg object from the earth to an orbiter on a 400km low-earth orbit (LEO) requires JPY1,000,000 (approx. USD12,000). I have to pay more than JPY60,000,000 (approx. USD715,000) for my personal travel to an LEO space station. The Space Elevator, on the other hand, will be able to offer the identical trip at approximately 1/100, JPY600,000 (approx. USD7,150).

One of my ambitions -- someday I want to go to space with my family -- motivated me to design the Space Elevator and its surrounding environment in 100 years and apply the plan for the competition.

One important characteristics of the project is to predict the future of cultural development in the 21st century by designing the Space Elevator, which was, I am convinced, the reason why I was awarded the highest prize. Designing the alternative tool for space travel means designing the lifestyle in the future. I cannot help thinking how our offspring will enjoy living.

GEOGRAPH is committed to GRAPHically presenting



加藤 匡毅

略 歴

1995 工学院大学建築学科卒業
1996 隈研吾建築都市設計事務所を経て
1999 IDÉE 入社
2004 GEOGRAPH 設立

Masaki Kato

1995 Graduated in Architecture from
Kogakuin University
1996 Kengo Kuma and Associates
1999 IDÉE
2004 GEOGRAPH

江戸時代の松江藩領内が主テーマの博物館 松江歴史館

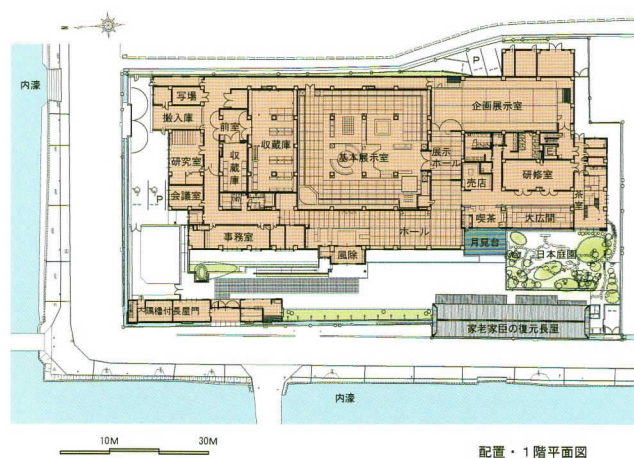
設計 環境計画建築研究所



松江市が開府 400 年を記念した博物館。2005 年に県内外 12 社指名のプロポーザルで選定され、2011 年 3 月開館を目指し設計監理を行う。城下町松江の街の構成は、堀川や道路・橋の位置など開府当時のものが多く残っている。敷地は濠を挟み松江城に隣接し、明治初年まで豪壮な家老屋敷が建ち並んでいた通りの角地で、次席家老屋敷跡の一画。プロポーザルの基本デザインの要件にも「黒瓦・白壁・腰板の家老屋敷に相応しいイメージ」との指定があった。

基本設計中、多くの市民参加で数度のワークショップや各種検討会を重ね、また友人・有識者の協力を得て進める事ができた。城下町松江の伝統的な造形を踏まえ、往時を偲ぶデザインモチーフも取り入れ、現代の感性と和を基調に設計した。伝統的美観地域の城山内濠地区のため、12m 以下の高さ制限の中で歴史的環境に応じた佇まいの建築とし、家老屋敷の面影を印象づけると共に、“松江の文化施設”として人々に愛着をもって親しまれ、また“まち”の中心・核となるこの場所にある事で、“まち”に活気と格調が生まれ、豊かな文化や生活が育まれていくようお願い取り組んだ。外構エリアにゆとりはないが、限られた広さの中で日本庭園や外構設計も出雲地方の伝統的手法で行った。

福島正則から譲り受け、松江藩筆頭家老大橋家にあった加藤清正ゆかりの「伝利休茶室」も、中村昌生先生監修のもとで復元設計監理。時代考証は、建築史家の平井聖先生を訪ねたり、広島大学の三浦正幸先生や工学院大学の後藤治先生にもお世話になる。構造計算は前田清行さん(工学院大学 '69 年卒)をお願いした。





A Unique Museum Specialized in Matsue Clan in Edo Period Historical Museum of Matsue Designed by Kazuhiro Yada, Kankyo Keikaku Kenchiku Kenkyujo

The project commenced in 2005 when City of Matsue initiated and announced an interesting architectural / cultural project to build a museum of Matsue Clan in Edo Shogunate Period (1603 - 1868) as a commemoration of the 400th anniversary of the period. The city authority appointed a dozen of qualified candidates for the project. The official opening of the museum is planned to be in March, 2011.

There are a number of conditions to be met to create a coordinating atmosphere between the city and the museum. One basic idea behind the building is "black-tiled roof, white walls combined with wood panels below waistline", which conforms to the typical residence of high-ranked liegeman.

We also had to take the legal restrictions into account. The site lies in so-called "area where historical beauty must be respected", which required a harmony between the traditional heritage and the modern beauty. The museum was designed to be a "new cultural symbol" of the city while projecting a grandeur image under the height restriction of 12 meters.

In addition to the museum construction, the tea ceremonial room "Den Rikyu Chashitsu" was fully restored under the direction of Professor Masao Nakamura.

In order to ensure the authentic redefinition of Edo Period, another necessity for the museum, was made possible thanks to the help and supports by Professor Masayuki Miura, University of Hiroshima, and Professor Osamu Goto, Kogakuin University. Special thanks should also be extended to Mr. Kiyoyuki Maeda, a 1969-graduate of Kogakuin University, for structural computation.



矢田 和弘 Kazuhiro Yada

〒 690-0855 島根県松江市浜佐田町 982-1
TEL 0852-36-8266 FAX 0852-36-9133
e-mail : kankyou@ceres.ocn.ne.jp
<http://www11.ocn.ne.jp/~kankyou/>

略 歴

1994 島根県生まれ
1962 島根県立出雲産業高校卒業
1966 工学院大学工学部建築学科
(波多江研究室) 卒業
1976 環境計画建築研究所 設立
現在に至る

NICHE GALLERY 2011

デンタルクリニック

設計 フォレスト建築研究所





1階 診察室

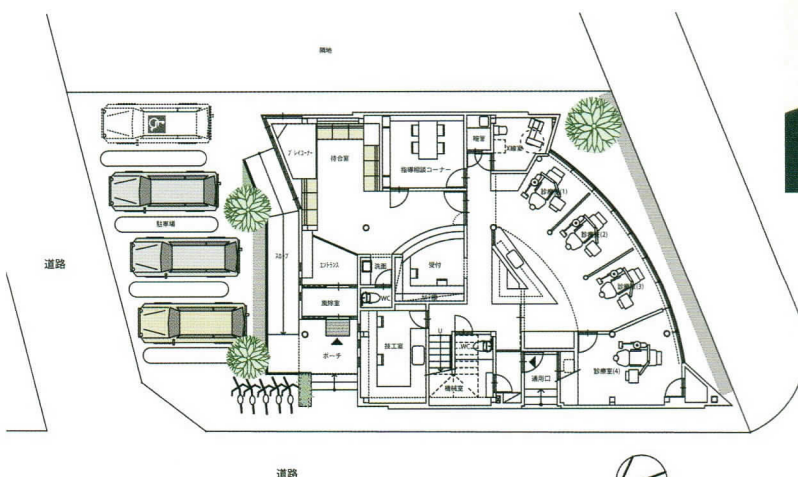
このクリニックは、道路が鋭角に交わる交差点に立地する。変形敷地に対応し、主道路側に明確なファサードを構成する意図から、両端に壁を配置しその間に有孔折板とガラスによる上下2層のシンプルな構成としている。緩やかにラウンドする外壁ラインは、透過性のある有孔折板のスクリーンに覆われており軽やかで優しい外観を印象づけている。 外部の曲線のモチーフは、受付カウンターや診療室の吹抜けなどの内部にも持ち込まれ、クリニック全体の統一イメージをつくり出している。

1階の中央部には、受付、消毒コーナー等のスタッフ機能を配置し、周辺部に待合や診療ブースを設け、中心部をサーキュレーションプランとすることでコンパクトなスタッフ動線が確保された。

診療室は、高さのあるゆったりとした吹抜け空間とし、治療中の患者さんの視界には、有孔折板でろ過されたやわらかい光の粒子がミストのように降り注ぎ、治療時の緊張と苦痛を和らげてくれる心地良い室内空間をつくり出している。

2階には、院長室、スタッフ控室、吹抜けに面したライブラリーなどの諸室が設けられている。

夜間には、建物内部からスクリーン越しの光が外部に放たれ、建物全体がひとつの発光体となり、地域のランドマークとして美しい情景をつくり出している。



配置図・1階平面図

NICHE GALLERY 2011

A Design for Dental Clinic

Designed by Shoji Ogura, Forest Architect & Associates

The clinic featured herewith is at the sharp corner of the intersection. One of the design targets was to give a clear facade to the clinic facing to the wider street. In order to achieve this, two large walls were placed with punching metals and glazing connecting the walls to create a simple two-story basis structure. One of the outer surfaces, featuring flowing curvature, is made by punching metals, providing airy and friendly semi-transparent atmosphere with a lot of light.

This particular arch structure is repeated inside the clinic that defines the authorized areas of reception counter, consultation room and sterilizing booth. The centralized layout offers mobility advantage for the doctor and medical staff members with the minimized lines of movement.

The use of the semi-transparent material mentioned above has a relaxing and easing effect thanks to modulated mists of light that come through the punched holes.

After dark, the direction of the light is reversed, i.e., from inside to the outside. The clinic will be a light-emitting object and will surely be one of the local landmarks.



小椋 祥司

学歴

1971 岡山県公立津山工業高等学校卒業
1979 工学院大学建築学科卒業 伊藤鄭爾研究室
1981 工学院大学大学院修士課程修了
武藤章研究室

略歴

大成建設株式会社(設計部)
武藤章研究室一級建築士事務所を経て
フォレスト建築研究所開設
2000-2006
工学院大学建築都市デザイン学科兼任講師

Shoji Ogura

1971 Okayama public Tsuyama
technical high school
1979 Graduated in Architecture
from Kogakuin University
1981 doctoral programme, Kogakuin University

TAISEI CORPORATION
Akira Muto Architects office
Forest Architect & Associates
2000-2006 Lecturer, Department of
Architecture, Kogakuin University

新しい風に聞く

新任の挨拶

木の力を活かす建築



建築学部建築デザイン学科教授 河合 直人

学歴

1976年 神奈川県(公立)多摩高等学校卒業
1981年 東京大学工学部建築学科卒業
1986年 東京大学大学院工学系研究科建築学専門 博士課程修了

略歴

1986年 東京理科大学工学部第二部助手
1992年 建設省建築研究所
2001年 国土交通省国土技術政策総合研究所
2004年 独立行政法人建築研究所

Building Research Institute



2004年に行った五重塔の模型振動台実験

建築学部のスタートとともに4月に着任します。専門は建築構造、中でも木造建築物(構造の種類としては木質構造)の耐震性能に関する研究を主に進めてきました。建築研究所では、木造建築物の基準に関係する業務も行ってきました。

木造は今、様々な面で注目を集めています。地球環境に対する配慮から木造が選択されることが増えてきました。また、特に阪神大震災のあと耐震性の研究も盛んになり、一方で伝統木造に対する再評価がなされ、さらに近年、4階建て以上の中層建築物も建築可能になりました。こうした背景から各地で意欲的な設計も生まれてきています。

木質構造に関する研究は、私が関心を持った学生のころには今ほど盛んではなく、ひと頃は伝統木造の耐震の研究をしているなどと言うと、怪訝な顔をされるくらいでした。その後、特にここ15年くらいの間

ですが、木質構造を取り巻く情勢は大きく変わって、社会的なニーズの高まりとともに研究も盛んになってきています。研究的には、まだまだわからない所がたくさんあって、そういう意味では大変魅力的な分野でもあります。

一方、こうしたニーズに対する人材育成という点からいうと、日本全体として、木質構造の教育はまだ不十分と言わざるを得ません。可能性はものすごくあるのに、きちんと設計ができる人は限られていますし、実務に使える資料も不足がちです。

工学院大学は建築構造の教育が充実しているところだと思います。木質構造に関しては、宮澤先生が長年にわたり研究・教育を進めてこられました。この伝統を引き継ぎながら、これからの時代に役立つような教育や研究、社会に対する情報発信を行って行きたいと思っています。

動物的なデザイン



建築学部建築デザイン学科教授 飯島 直樹

学歴

1967年 東京都(私立) 正則高等学校 卒業
1973年 武蔵野美術大学造形学部産業デザイン科
工芸工業デザイン専攻卒業

略歴

武蔵野美術大学卒業後、スーパーバトを経て、
1985年飯島直樹デザイン室を設立、現在に至る。
2004年より(社)日本商環境設計家協会理事長。

mail : iij@iijima-design.com



「東京系井重里事務所／ほぼ日刊イトイ新聞」オフィス

工学院大学から、インテリアデザインを専門とする私に教師としての招聘の相談があったときは、やはりとまどいました。日本の「建築」と「インテリア」は隣接しながらも別の領域として認定されてきたからです。行政の窓口も「建築」は国交省、「デザイン」は経産省です。例えば、先頃経産省が企画した日本の優れたデザイナー20人を中国企業とビジネスマッチングさせる「今様遣唐使」でのこと。デザイナーを紹介する職能名称にはインテリアデザイナーやプロダクトデザイナーはあっても、建築家の名称がなく、20人の中の数人の若手建築家の職能は、なんと「その他」となっていたそうです。経産省の取り扱い項目に建築が無いのです。このような明治以来の日本の縦割りの現実があります。

工学院的建築学部を発進させる背景には、建築というものを幅広く捉えて次の時代の価値に対応できる力の育成があると思います。そのひとつとして「インテリアデザインの視点」の導入を図り私への招聘となったのだとすると、それは私にとって、逆の方向から願っても無いことでした。つまり、インテリアという孤立したジャンルをもう少し大枠

の視野のなかで捕まえないと、この領域は衰弱し消滅すると思っていたからです。縦割りの領域区分けは20世紀が作った利便性です。しかしネットを介在する現実、とっくに別種のリアリティを指し示しているように見えます。

就任にあたり、私は、建築とインテリアとを分断して「インテリアデザイン」を教えることは考えておりません。「空間デザイン」の幅広いリアリティの関係要素として「インテリアデザイン」を位置づけ、自分の比較的得意なインテリアデザインに固有な特質を伝達したいと思っています。それは、大きな建築的要素と小さなインテリア的要素とを行き来し接合できる身体感覚とっていいのかもしれません。学生の皆さんには身体感覚を研ぎすまし、おいに動物的であって欲しいと思っています。

どうぞよろしくお願い致します。

新しい風に聞く

新任の挨拶

自分の小船を見つけよう



建築学部建築デザイン学科准教授 富永 祥子

学歴

1986年 福岡県立修猷館高等学校卒業
 1990年 東京藝術大学 美術学部建築科卒業
 1992年 東京藝術大学 大学院美術研究科建築専攻修士課程修了

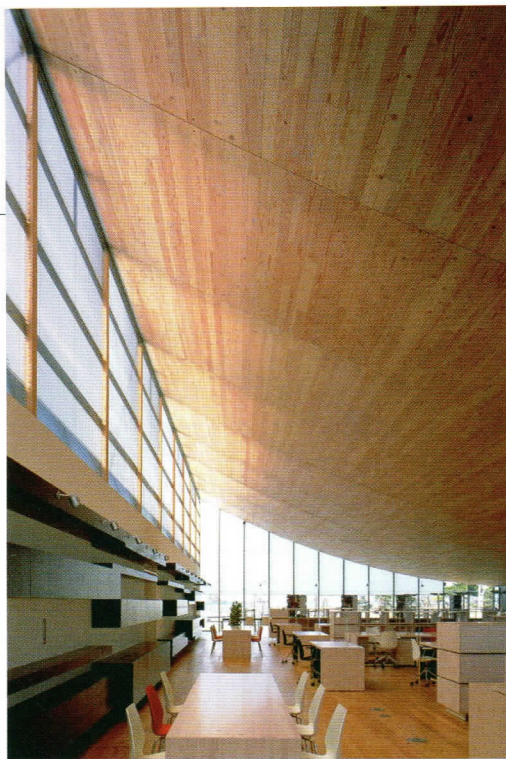
略歴

1992年 香山壽夫建築研究所
 2003年 福島加津也+富永祥子建築設計事務所設立
 2005年度 JIA 新人賞受賞
 2006年 日本建築学会作品選奨
 2009年 平成21年住宅建築賞金賞受賞

今年四月から建築学部建築デザイン学科の准教授に就任する富永祥子です。八王子キャンパスを拠点に、初年度は主に1.2年生の設計演習等を担当します。

東京藝大片山研究室在席時には中国・台湾の民居実測調査に携わり、卒業後入所した香山壽夫建築研究所では地方の資料館や劇場といった公共建築の設計監理を担当、そして独立後は個人住宅や民間のオフィス等の新築・インテリア設計を手がけてきました。それらの設計活動と並行して複数の大学の非常勤講師を勤めてきましたが、今回初めて常勤の立場で建築教育に携わることに責任の大きさを感じています。

建築は個人に親密に寄り添う存在であると同時に直接社会に繋がるものです。設計者は自分の強い意志を持ち続けながら、一方で様々な人達と考えを共有し、それを現実の物として作り上げなくてはなりません。単なる知識や技術だけではなく、自分という人間そのものを問われるようなハードな仕事だと痛感します。しかし何でも手軽に答えを欲しがると昨今だからこそ、この血の滲むようなプロセスを建築を通して体得することに、大きな意味があると感じています。



撮影：新建築写真部

建築を学ぶことは、全貌の掴めない海へ航海に出るようなもの。時には波に揉まれたり方向性を見失ったり、それでも頼りにするのは自分と言う小さな船です。私にできることは、学生一人一人の船、つまり建築への小さな(でも確かな)手がかりを見つける手助けをすることかもしれません。そしていつかはその船にたくさんの人を乗せ、船頭となって航海してくれたら素晴らしいなと思っています。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

自分で考え、自分で歩く



建築学部建築デザイン学科教授 筧 淳夫

学歴

1978年 宮城県立仙台第二高等学校卒業
 1984年 東京都立大学工学部建築工学科卒業
 1986年 東京都立大学工学部研究科修士課程建築学専攻卒業
 1989年 東京都立大学工学部研究科博士課程建築学専攻単位取得退学

略歴

1989年4月 病院管理研究所建築設備部 研究員
 2002年4月 国立保健医療科学院 施設科学部部長
 学会・協会活動：日本建築学会、日本医療・病院管理学会理事、日本看護管理学会評議員、日本環境感染学会、日本医療福祉建築協会理事

National Institute of Public Health

本年4月に建築学部建築デザイン学科の教授に着任しました。宜しくお願い致します。東京都立大学(現首都大学東京)の大学院を出てからこれまで厚生労働省の研究所で、医療施設や福祉施設の建築計画に関する研究を行ってきました。初めのうちは患者・高齢者や医療・介護スタッフの快適性や効率性などを中心に研究を行ってきましたが、最近では医療施設における安全性に問題が大きな課題となっており、医療事故対策、院内感染対策といった医療・介護サービスに直接関係するようなテーマに取り組んでいます。また建築空間が直接治療効果に結びつく精神科医療やリハビリテーション医療といった分野において、建築空間をクリニカルインディケーター(臨床指標)のひとつとして取り上げる試みにもチャレンジしています。これらに加えて病院マネジメントの課題のひとつとして医療施設の維持管理の問題にも取り組んで



きました。残念ながら我が国の医療施設における施設管理のレベルは決して高くはなく様々な問題を抱えています。

これまでも講義・講演は数多く行ってきましたが、相手は医療スタッフであったり建築関係の実務者がほとんどでした。医大や看護大学での講義も行っていました。建築系の学生相手の講義はほとんどやったことがありません。これまでとは違ったことに取り組むことになるのはとても楽しみです。いろいろと工夫をしながら教育にも取り組みたいと思っています。

新しい風に聞く

新任の挨拶

災害を知る 診る 考える



建築学部まちづくり学科教授 宮村 正光

学 歴

1967年 静岡県立橋原高等学校卒業
1971年 日本大学理工学部建築学科卒業

略 歴

1971年 鹿島建設武藤研究室(至1986年)
1987年 同 小堀研究室(至2010年)
1981年 南カリフォルニア大学客員研究員
1986年 プリンストン大学客員研究員
2002年 日本大学大学院非常勤講師

mail : miyamura@kajima.com

Kajima Corporation

本年4月よりまちづくり学科の教授として、就任することになりました宮村です。鹿島建設に入社以来、国内初の超高層、霞が関ビルを実現した武藤清先生のもとで約15年、主に超高層や原子力発電所など重要構造物の耐震設計を担当しました。その後建物の揺れを抑える制震構造を提唱した小堀鐸二先生のもとで約23年、国内外の地震被害調査、米国の大学連合との共同研究、江戸東京博物館の耐震設計等に関わり、後半は主に地震防災に関連した業務に従事してきました。地震や台風などの自然災害に対して、安全な建物を作るのが、建設に関わる我々の使命ですが、災害が起こる度に予想外の盲点が顕在化するのを目の辺りにしてきました。人が作る建造物は大自然の前には、脆弱であり、限界



防災に取り組む契機となったメキシコ地震

があることを知らされます。基本となる個々の建物をきちんと作ることが大切であることは言うまでもありませんが、地域や都市全体の安全の観点からは、人間との係わり方の中で、被害をどのように受け入れるのかも考える必要があるようにも感じます。

無限の可能性を秘めた若い人たちの夢の実現に役立てるのか、長年民間企業の組織にどっぷりつかった自分に何ができるのか、不安も大きいですが、40年余りのささやかな経験や知見を、少しでも伝えられたらと願っています。変化、多様化する社会や企業のニーズに応えるために大学ですべきことは何か、皆様に教えて頂きながら、考えてみたいと思っています。

「地」についてエコ



建築学部まちづくり学科准教授 篠沢 健太

学 歴

1986年 私立栄光学園高等学校卒業
1990年 東京大学 農学部農業生物学科学科卒業 緑地学研究室
1992年 東京大学 大学院農学系研究科農業生物専攻課程
修士課程修了
1995年 東京大学 大学院農学系研究科農業生物専攻課程
博士課程修了、博士(農学)

略 歴

1990~94年 A.U.R.建築都市研究コンサルタント
1995~96年 大阪芸術大学環境計画学科講師
2001~11年 同 環境計画学科助教授
東京大学院、関西大学環境都市工学部非常勤講師
登録ランドスケープアーキテクト(RLA)

Osaka University of Arts, Department of Landscape
Design, Associate Professor
Registered Landscape Architect



東京大学柏キャンパス外構の計画

2011年4月から工学院大学建築学部まちづくり学科准教授になります、篠沢健太と申します。専門はランドスケープデザイン、とくに公共空間の公園緑地の計画設計とそれに関わる研究です。21世紀、地球環境時代を迎え、建築・まちづくりの分野でも「エコ」が注目されています。モノやエネルギーに関してさまざまな「エコ」の技術、工学的な方法が研究、提案されています。ランドスケープデザインは、土地の生態学的な立地特性を把握、考慮しつつ、これらを活用して空間的な問題解決のために計画設計を行う、いわば「地についてエコ」を担当する分野だということです。これまで行ってきた河川敷の都市公園や米軍施設跡地の公園などでの計画設計、ニュータウンの公園緑地システムに関する研究活動などの経験を活かし、また前任の芸術大学で身につけた視野と発想を生かして、新たな工学を切り拓いていく人材を社会に輩出することができれば…と考えています。よろしく願いいたします。

緑地の種類		1947	1977	1988	1992
1	公園緑地				
2	緑地				
3	人工緑地				
4	人工緑地				
5	人工緑地				
6	人工緑地				
7	人工緑地				
8	人工緑地				
9	人工緑地				
10	人工緑地				
11	人工緑地				
12	人工緑地				
13	人工緑地				
14	人工緑地				
15	人工緑地				
16	人工緑地				
17	人工緑地				
18	人工緑地				
19	人工緑地				
20	人工緑地				



本牧山頂公園の土地自然ユニット区分図

また会う日まで

大学卒業と研究室

'63年大学入学以来48年、学卒240、修士42、博士取得(課程5、論文2名)、計287名で、東大、東工大等他大修士進学7、他大学学位1、他に恩師望月洵先生の助手時の学生200名もいる。学生は大事な成長期、教師の役割を果たせたか心もとない。実験研究や論文作成の苦い失敗、成功の感動、楽しい旅行や国際会議も思い出される。

'69年修士卒で助手となり、最初の論文「HPシェルの座屈」は海外からも注目されたが、その後研究的が絞れず、ありとあらゆる研究を行い失敗した。'68年恩師の計らいで会費10万円の有限要素法講習会(英語)で、大きな影響を受けた。恩師の下構造設計、RCプレハブ開発、山下教授の箱根国際会議場コンペの模型制作や有限要素法解析は楽しくて、寝れなかった。

青年期の研究活動

プレハブ開発が終わり、RC柱引張り・せん断の研究をまとめ夏期米国自費研修旅行を計画したが、助手は夏期でもだめとのこと。恩師の応援でやっと許され、大学、実験施設、超高層や大空間構造を見た。論文を持参しイリノイやカリフォルニア大等の研究室も訪れた。日米協力が盛んで、日米の研究者の知己を得た。この1ヵ月半は有形無形の財産で、写真は構造デザインや技術者倫理の教材に、施設見学は八王子実験棟建設にも役だった。

帰国後ソフト関連の出版を思い立ったが、作業する場所がなく暗室に閉じこもった。後に退職教員の研究室を占拠し恩師を困らせた。現在の私から想像できないのは、保育園、事務所、公共建築や橋の設計であろう。自作ソフトと構造デザインの楽しさに浸った(建築雑誌等5件)。しかし、講師昇格の業績ではすべて抹殺された。それ以後構造設計から遠ざかってしまった。

最近の研究

研究は、シェル構造→プレハブ→枠組壁工法→東京大学研究員・学位→阪神淡路大震災関連研究→学会木質構造運営委員会主査経験にある。広澤教授の下文科省学術フロンティア事業採択で実験棟を完成し5年、後継採択で3年間、建築、機械、電気系教員35名と学外者で研究を行った。4年間センター長を努めた。成果は研究の活性化と多くの博士輩出だった。ご協力に感謝致します。

教職員の方々には感謝し今後益々難しくなる大学教育に精力的に取り組まれることをお願い致します。在学生には「決して夢を忘れず、何でも果敢に挑戦せよ、挑戦しなければ何も得るものはない」という言葉を贈りたい。



工学院大学建築学科 宮澤 健二

学 歴

1962年 新潟県立十日町高等学校 卒業
1967年 工学院大学建築学科 建築コース卒業
望月洵研究室
1969年 工学院大学大学院 建築学専攻修士課程 終了
望月洵研究室
1991年4月～1992年3月 東京大学研究員

略 歴

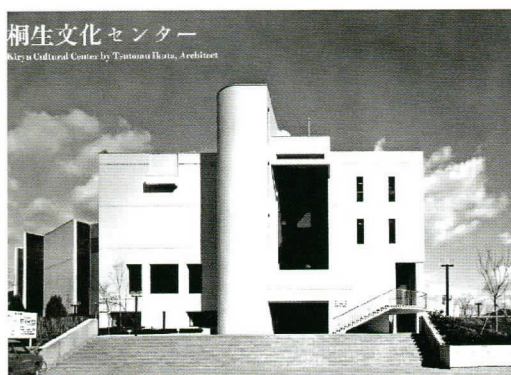
1969年4月 工学院大学工学部建築学科助手
1988年4月 工学院大学工学部建築学科講師
1991年4月 工学院大学工学部建築学科助教授
1997年4月 工学院大学工学部建築学科教授
2004～2005年度 工学院大学工学部建築学科主任教授
2005年4月～2009年3月 工学院大学地震防災
・環境研究センター長
現在に至る 工学院大学工学部建築学科教授



アメリカ研修旅行
工事中と竣工後の
ワールドトレード
センターにて

左: 1 回目1974年(31歳)

右 2 枚: 2 回目1986年(43歳)



桐生文化センター
Katsushika Cultural Center by Tetsuo Kato, Architect

桐生市文化センター構造設計



江戸東京たてもの園旧光華殿耐震補強



盛岡市武道館構造設計



研究室軽井沢研修合宿で(2011年夏)

また会う日まで

建築系学科・卒業生・つのはづ会の皆様へ

卒業後4年間の建設業界を経て、1972年(昭和47)に大学に戻りました。以降、今日まで教育・研究者としての力不足を日々感じながら過ごしてまいりました。

定年には2年ほど早い退職となりましたが、多くの皆様のご協力により何とか本日を迎えました。改めて御礼申し上げます。

さて、研究活動では、時代の流れの中で蓄熱、自然エネルギー、ソーラーハウス、省エネルギー、リニューアル、廃棄物問題など多くのテーマに係わる事ができました。

また、学生の進路(就職)では良い時代、悪い時代を通して、多くの卒業生が後輩の相談を引き受けていただいた事で、100%の就職率を続けることができました。大変感謝致しております。

写真は研究室の代表的な年間行事です。改めて見ますと、ほとんど遊んでいたようで、反省しております。

新年度の入学式に出席できず、今後の計画も全く有りませんのでどうしようかと悩んでおります。もし顔を見かけましたら「まだ生きているか!」と声を掛けて下さい。宜しく御願い致します。

祝! 建築学部発足



工学院大学建築学科 大橋 一正

学 歴

1964年 工学院大学建築学科 設備工学コース 入学
1968年 工学院大学建築学科 設備工学コース 卒業
中島康孝研究室

1971年 工学院大学専攻科 建築学専攻課程 入学
1972年 工学院大学専攻科 建築学専攻課程 修了

略 歴

1972年 工学院大学 建築学科 助手
2000年 工学院大学 建築学科 教授



①:春(日本建築学会大会論文提出)花期温度の調査 市川お花見です。



②:夏(3ゼミ生と活動開始)海水温度の調査 伊豆七島めぐりです。



③:秋(卒業論文中間発表)河川水温度の調査 秋川バーベキューです。



④:冬(卒業論文最終審査)寒冷地の気象調査 ニセコでスキーです。

また会う日まで

工学院大学への就職は、横田道夫教授の元におられた杉野福三講師が1969年3月退職されるのを期に、同年4月助手として就任しました。しかし、横田教授は、3年後には常務理事に就任されたため、講義の前に白衣と教科書を取りに来られるのみで、1・2部を合わせて50人あまりの卒論生には申し訳なく思っていました。

横田研究室は、教授が北海道大学から1960年1月1日工学院大学に就任され、約10年間、前任の杉野先生が雰囲気作りをされ、大学内でもユニークな存在でした。中でもお湯を沸かすだけで「おでん」の香りが漂う直径70cmの大鍋大会は、好評で研究室をはじめ、野山や湖沼など10年前まで続いていました。その他、横田杯争奪ソフトボール大会、合宿ゼミなど盛りたくさんあり、横田先生退職後もOB会(ヨコタックス)で行ってきましたが、集まりも少なくなり、卒論生の減少で現在は休業状態です。

喜寿・傘寿・卒寿・紅寿(95歳)をお祝いし、「白寿は中途半端だから100歳にしてくれ」と伸び、北海道大学でも「伝説の人」に会いたいと合同の「100歳を祝う会」を計画しましたが、体調などで伸びてしまい、2010年3月1日、102歳で帰らぬ人になられました。ご冥福をお祈りします。

私は、工学院大学にお世話になって41年、多くの人に教えを受けました。

横田道夫先生には「線のにじみ」の言葉に表されるように、人間性を、保岡豊先生には逆に「ブレのない」生き方を、狩野春一先生には実験への取り組み方を、小林啓美先生には研究の取り組み方を教えていただいた。そして十代田昭二先生と今泉勝吉先生は、公私に渡りご指導いただき感謝いたしております。また、多くの関係各位にお礼申し上げます。



工学院大学建築学科 大塚 毅

学 歴

1962年 愛媛県立(公立) 宇和島高等学校 卒業
1963年 工学院大学建築学科 建築コース 卒業
望月洵研究室
1969年 工学院大学大学院 修士課程修了
望月洵研究室

略 歴

1969年4月1日 工学院大学建築学科助手
1991年4月1日 同建築学科講師
1995年4月1日 同建築学科助教授
2010年 現 在 同建築系学科准教授

Kogakuin Univ. Dept. of Archi.



ライフワークとなった伊勢の神宮

また会う日まで

私が東京へ出てきたのは、49年前、東京タワーができて3年後である。今スカイツリーが話題になっているが、こんな馬鹿騒ぎはなかったように思う。東京にはピザという美味しいものがあり、六本木の“ニコラスピザハウス”へ行けば食べられると聞いて出かけた。当時の六本木には高い建物はなく、その店も平屋であった。なぜイタリア料理の店がロシア名のニコラスなのかちょっと疑問に思いながら人生で初めてピザを味わった。東京タワーは見ていた筈であるが、ほとんど記憶にない。タワーに上ったのは、親が上京したおり、はとバスに乗って東京観光をしたときが最初である。建築を学んでいる中で、パリのエッフェル塔と比較して東京タワーは美しくないと何度も聞かされてきた。古典主義の影響が残る時代に作られたエッフェル塔は装飾的な部分も多く、それなりに美しい。それに比べて東京タワーが作られた当時の日本では、鉄が貴重品であり、一説には戦車の鉄を溶かして建材を調達したと聞いている。少しの鉄も無駄にしない機能的で合理的な構造設計から生まれたのが東京タワーである。東京タワーの魅力は機能美にある。このようにものの評価は多様であり、時代とともに変化する。思うに東京タワーは日本の高度成長を50年間見つめてきた。スカイツリーは次の50年間何を見つめるのか。日本の低迷を、いや没落を見るような気がしてならない。日本の将来を考える政治家はいない。政治屋、政治家者ばかりが目立ち、マスコミも正義の味方を気取って健筆(嫌筆)をふるっている。

ここで少し明るい話題を。今年度から建築学部がスタートします。10年程前、トップダウンで学部、学科の再編がスタートしました。建築にも建築都市デザイン学科を設置して順調な出発でした。しかし、若手、中堅の教員(これから数十年学校にいる人たちは、

18歳人口の減少、今ひとつ評価の上からない工学院大学の将来に不安を感じていました。そんな中、ボトムアップで建築学部構想が出てきました。そこで建築系学科将来像検討委員会が発足し、学部構想主義者で最年長の私が担がれて委員長に就任しました。とかく年長者は保守的な傾向があり、学科全体がまとまっていたわけではありませんでした。それでもやる気まんまんの若手、中堅の努力で学部発足寸前までいきました。しかし、諸般の事情で学部構想は頓挫しました。諸般の事情をここで述べることは、当時の学校法人、大学の執行部、建築系学科を批判することになるので控えます。私が構想した建築学部は痛みを伴うものでした。これが頓挫した要因の一つです。今年度は、志願者増が見込まれ、明るいスタートとなるでしょう。しかし、次年度以降の見通しは立っていません。最初の建築学部構想の時は、まだ建築は上り調子でしたが、今は右下がりの時代、下落をどこまで食い止められるかという、ネガティブな挑戦です。



工学院大学建築学科 安原 治機

学 歴

- 1961年 滝県立(公立)高田高等学校 卒業
- 1966年 工学院大学建築系学科 建築学科卒業
山崎研究室
- 1968年 工学院大学大学院 工学研究科修士課程 終了
武藤研究室



2003年8月4、5、6日 安原研究室『工学院大学富士吉田セミナーハウス』

また会う日まで

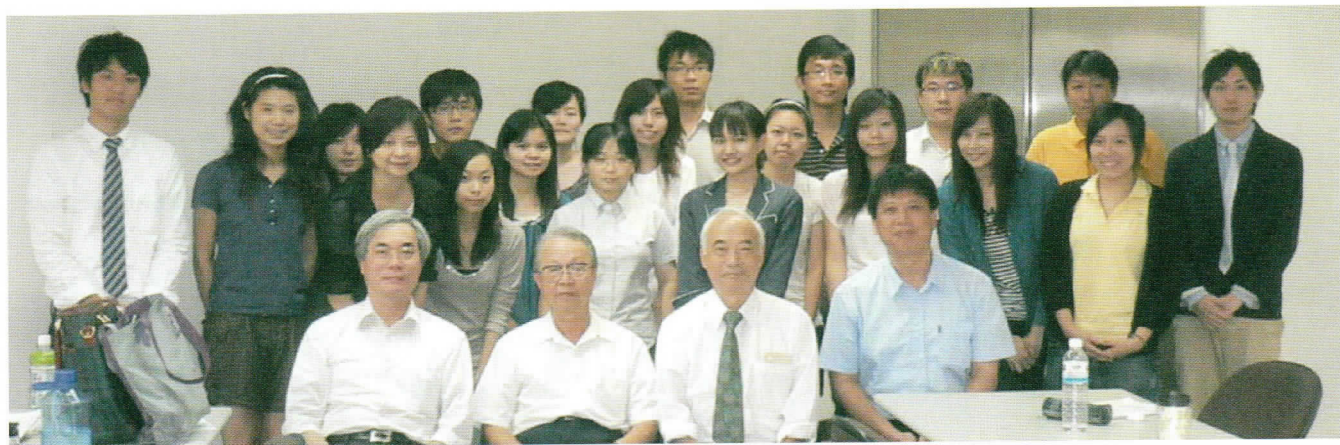
定年退職にあたってのご挨拶を申し上げます。

長らく工学院大学にお世話になりましたが、2011年3月をもって定年退職となります。何の能力もない私が、ここまで勤められたのも、大学、教職員、学生の皆様のご協力及びご寛恕によるものであり、心より御礼申し上げます。特に卒業生を含めて学生の皆様には、いたらぬ教育しかできなかったことを、この場をお借りして深くお詫び申し上げます。

幸いに毎年ゼミ生には恵まれて、楽しい教員生活を送ることができましたことを感謝しております。何の面倒も見なかったにも拘わらず、社会で活躍してくれていることを大変嬉しく思います。

最後になりましたが、工学院大学が益々発展し、有為な人材を社会に送り出し続けますよう心より祈念いたします。あわせて皆様方のご活躍及びご健勝をお祈りいたします。

工学院大学建築学科 東 正則



台湾の政治大学にて教授と大学院生 前列右から2人目、工学院大学 東 正則 教授

卒業生(校友会会員)の求職・転職をサポートします！

全国10ヶ所に直轄支店「NCSジョブ・サーチ・センター」を開設。きめ細やかな充実の職業紹介が可能です。

校友会では2007年から求職・転職を希望している卒業生に対してサポートする事業を開始し、建築士資格取得教育で40年以上の実績を持つ日建学院が母体の、建設・土木・不動産系に特化した実績ある職業紹介専門会社『ニッケン・キャリア・ステーション』と提携しました。

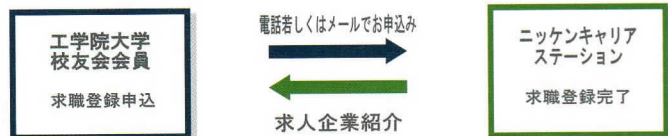
活動ネットワークを広げるチャンスです。是非、この制度をご利用下さい！

■登録希望者は本人が直接「ニッケン・キャリア・ステーション」にお申し込み下さい。

「ニッケン・キャリア・ステーション」への求職登録は電話もしくはメールで直接連絡して下さい。窓口の担当者から今後の流れをご説明致します。東京・大阪の拠点にて登録して頂きますが、その他の方法についても相談できます。

- * 登録から仕事の紹介まで全て無料です。
- * 個人情報などは厳守されます。

■ お仕事紹介システム



【求職登録申込連絡先】 詳細はホームページまで… <http://nikkencs.co.jp>

フリーダイヤル 0120-810-298 Mail info@nikkencs.co.jp

■本社: 東京都豊島区池袋 ■大阪支店: 大阪府大阪市北区
■NCSジョブ・サーチ・センター 札幌・仙台・群馬・新潟・金沢・浜松・岡山・福岡・熊本・沖縄



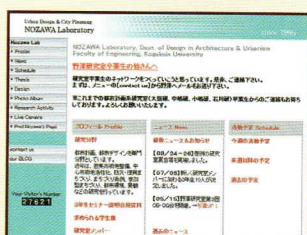
建築学部 研究室ホームページ紹介

まちづくり学科



▲倉田研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1031/>



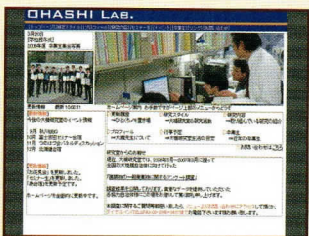
▲野澤研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1051/>



▲遠藤（新）研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwa1045/pg250.html>



▲大橋研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt72069/>



▲中島（裕）研究室

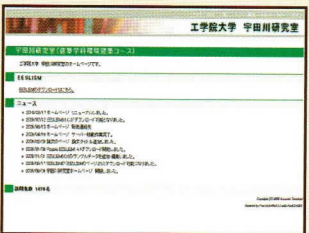
<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13052/>



▲久田研究室

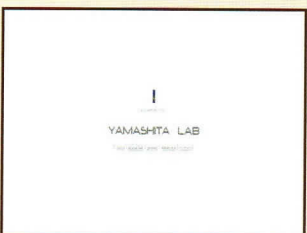
<http://kouzou.cc.kogakuin.ac.jp/>

建築学科



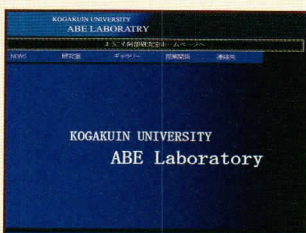
▲宇田川研究室

<http://ees.arch.kogakuin.ac.jp/>



▲山下研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1046>



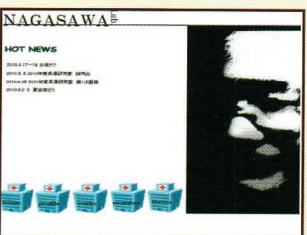
▲阿部研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt40009/abe/index.html>



▲小野里研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1026/>



▲長澤研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1044/>

都市デザイン学科



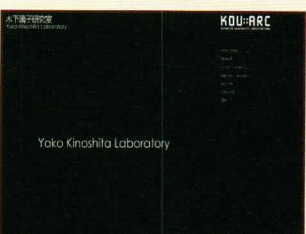
▲谷口研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1022/>



▲澤岡研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1021/>



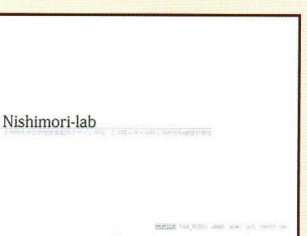
▲木下研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1039/>



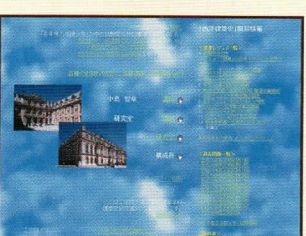
▲後藤研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwa1023/>



▲西森研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~wwd1048/>



▲中島（智）研究室

<http://www.ns.kogakuin.ac.jp/~dt13029/>



工学院大学 建築学部

Kogakuin University School of Architecture

建築って、なんだ？

What is Architecture?

建築 = 家を建てること
だけではない。

For details, look at

page 114

もちろん家を建てることも含まれるが、それだけが[建築]ではない。一戸建住宅以外にも集合住宅や商業ビル、工場、病院や学校などさまざまな建物がある。また公園、駅、橋、空港、道路などをつくるのも[建築]だ。小さな空間からまちづくりまで、またそのメンテナンスやリフォームも、[建築]の領域なのである。

Architecture encompasses everything from creating, maintaining, and renovating small spaces to large towns. Architecture includes building houses, but Architecture is not only about building houses. There are various buildings other than detached housing such as collective housing, commercial buildings, factories, hospitals, and schools. In addition, constructing parks, stations, bridges, airports, and roads is also Architecture.

建築 = 理数系
だけではない。

For details, look at

page 116

日本では歴史的に長く工学の一部とされてきたため「理数系」に分類されがちだが、本来、[建築]はさまざまな知の分野を融合した総合的学問。文系とか理数系ではなく、いわば「建築系」といえる。工学的な分野ばかりでなく、芸術的・文化的な分野など、[建築]のフィールドは実に幅広く多彩なのである。

Architecture in its nature is a comprehensive field of study, which encompasses all kinds of knowledge. In Japan it has historically been categorized with engineering and is classified with in math and sciences. However, it should not be categorized as math and sciences or arts and literature, but rather in its own category as Architecture. Architecture is not just an engineering study but its field is vast and diverse encompassing fields such as art and culture.

建築を学ぶ = 建築家になる
だけではない。

For details, look at

page 118

[建築]は、人が生きていくあらゆる空間や環境と関わっている。フィールドが広範だということは、[建築]に携わる人も多く、その関わり方も多様だということ。建築家ばかりでなく、構造や材料、デザイン、都市計画など、さまざまな分野のスペシャリストが、互いに協力しあい、[建築]の世界で活躍している。

Architecture is involved in every space and environment where people reside. The field is broad so there are various ways people can engage in Architecture. Not all people in the field are architects and there are many specialists in the field of structure and material, design, and city planning working together for their success in the world of Architecture.



建築 = 家を建てること だけではない。

「駅が新しくなったな」と気づいたり、「この家、そろそろリフォームする?」と家族で話したり、「あの空き地、公園になるんだって」と友達から聞かされたり。それはみんな、君が[建築]と関わっている証拠である。そう、君は知らず知らずのうちに、いつも[建築]と関わり、[建築]について考えているのだ。

**[建築]が関わる領域は、
社会の変化とともに年々拡大している。**

地球規模での環境問題、資源・エネルギー問題などの深刻化、少子高齢化など社会構造の変化、経済の成熟化…。21世紀を迎え、私たちの暮らしを取り巻く環境は大きく変化している。また、生活観がますます多様化し、住み方や働き方などについて、さまざまな選択ができる環境づくりも求められている。こうした変化を受け、[建築]は、自然環境保護や省エネルギーの視点、少子化問題や高齢社会への対応、景観

への配慮、多様なライフスタイルに合わせた多様な生活空間やビジネス空間の工夫、自然・歴史・文化を活かした特色あるまちづくり、新しい賑わいの創出など、さまざまな社会的要請を受けている。いまや[建築]は、工学的な枠組みの中だけでは対応できなくなり、高度な工学を活かすためにも、社会科学、人文科学および芸術など、工学以外の分野との融合が必要になってきているのである。

Architecture does not only mean to= build a house.

You are unknowingly involved and thinking about Architecture all the time. Whether you noticed that there is a new station talk with the family about renovating the house, or hear from friends that the empty lot is becoming a park, they are all examples of how you are being involved in the world of Architecture.

The fields of Architecture involved are expanding year by year according to changes in society.

Today, Architecture cannot be handled from just an engineering standpoint but a fusion with social science, cultural science, and art is becoming necessary to utilize advances in engineering technology. Environmental issues of global magnitude, escalation of energy and resource issues, changes in social structure such as the aging population combined with the diminishing number of children, and maturation of economy... As we enter the 21st century, the environment that we live in is undergoing a big

change. Because of this, our lives are becoming more diversified and are creating an increasing need to offer more selection in the way we work and dwell. Architecture is receiving societal demand to evolve to deal with the conservation of nature and energy, an aging population combined with the diminishing number of children, city planning utilizing nature, history, and culture, and creation of a new visitors' industry due to the undergoing changes in the environment.





建築 = 理数系 だけではない。

「数学が苦手だから、[建築]は無理」「芸術の分野に進みたいから、[建築]は関係ない」—— そんなふうに考えるのは、もったいないことだ。
[建築]は、多様な側面を持つ総合的学問。だからこそ、クリエイティブな能力や自然を愛する気持ちなど、[建築]の世界にはさまざまな個性が必要なのである。

工学から解き放たれた[建築]は、 多様な個性を活かす学問になる。

工学院大学建築学部は、[建築]を工学の枠組みから解き放ち、これまでの日本になかった、新しくかつ本来的な建築教育の実現を目指している。建築構造、建築生産、建築環境設備といった「工学」的分野ばかりではなく、建築計画・都市計画等の「社会科学」的な分野、建築史等の「人文科学」的な分野、さらにはデザインなど感性に訴えかける「芸術」的な分野にいたるまで、極めて広い範囲をカバーし、これ

らを総合化する能力の習得を最終的な目的とする。したがって、大学入学前のバックグラウンドは多様であっていい。理系であっても文系であっても、建築やまちに興味があり、それを学びたいということが重要だ。また、苦手な分野があっても、得意な分野を伸ばしていけばいい。誰もが個性を活かして、自分なりの[建築]との関わりを見つけることができる。それが、「工学院大学建築学部」なのだ。

Architecture does not only relate to = math and sciences

Architecture is a very comprehensive study encompassing many facets. In the world of Architecture, it's important to be creative and have personal characteristics. If you're thinking that you can't do Architecture because you're not good at math or you want to go into the art field, you are missing an opportunity.

Architecture freed from engineering will become a study enabling you to utilize a variety of creativity.

The School of Architecture at Kogakuin University frees Architecture from its traditional engineering framework and strives to bring a new form of education that has not been seen in Japan and teach architecture in its fundamental form. We cover a wide range of fields including the social science to teach architectural planning and city planning, the cultural sciences to teach the history of architecture, and the arts to teach design and aesthetics. We do not limit our curriculum to only the engineering field such as architectural structure, building construction, and architectural and environmental equipment system but Our goal

is to create a curriculum where students can develop the ability to utilize all of these diverse studies. Therefore, we are seeking applicants of diverse backgrounds. They can come from math and sciences or literature and arts background as long as they have a passion and interest in learning about architecture and cities. If students have a field that they are weak in, they can make up for it by excelling in their strong field. Everyone can utilize their individuality and find their own unique involvement with Architecture. This is what the School of Architecture at Kogakuin University is all about.

Architecture does not only relate to
= math and sciences





建築を学ぶ = 建築家になる だけではない。

[建築]に興味を持った君は、自分の将来にどんな夢を描いているだろう。「建築家になって、世界に誇れる建築物を設計したい」「自然がいっぱいの都市をつくりたい」「おしゃれなショップのインテリアをデザインしたい」…。都市や暮らしの未来をつくるさまざまな可能性が、君の中にある。ぜひその夢をかなえてほしい。

**新しい時代にふさわしい、
新しい人材を、新しい教育体制で。**

急激な社会の変化に伴い、建築は大きく変わりつつある。優れた設計力はもちろん、資源や環境の保全、持続可能なまちづくりや都市再生、防災、高齢社会に対応した生活環境づくりなど、新たな課題に対応できる人材が求められているのだ。工学院大学建築学部は、そうした社会的ニーズに応える多様な人材の育成を目指している。建築計画、建築デザイン、都市計画、ランドスケープデザイン、インテリア

デザインなど幅広く [建築] の基礎を学んだ後、ひとりひとりの個性に合った専門分野をより深く学ぶシステム。個性を活かす道はさまざま、だから卒業後の進路も多様だ。建物や空間を設計する建築家、建築設備や建材の技術研究者、都市計画に携わる公務員、企業の防災管理担当者、施設や公園づくりに関わるランドスケープデザイナー…。[建築] を学ぶその先に、将来の可能性が限りなく広がっている。

Learning Architecture does not only direct you to = become an Architect.

What kind of dreams do you have of your future? Do you think, "I want to become an architect and create an architectural structure that will be revered around the world" or "I want to create a city filled with nature" or "I want to design the interior of a trendy store." In each case, you hold the potential to build our future cities and lives. We want you to make these dream come true.

Providing education fit for the new era to new talent using a new education system.

Architecture is undergoing a significant change along with the rapid changes in today's society. There is a demand for new talent that not only has a strong skill in architectural design but can also handle new issues such as conservation of assets and environment, sustainable community development and urban renewal, disaster prevention, and living environment improvement corresponding to the aging society. The School of Architecture at Kogakuin University strives to train various individuals that fit these evolving societal needs. Our programs allow students to choose and focus on their specialized fields that

fit their interest such as architectural planning, architectural design, city planning, landscape design, and interior design after learning the basics of Architecture. As there are many ways to express one's individual character, the career options after graduation are equally diverse such as architecture that designs buildings and spaces, technology researcher in architectural equipments and materials, government officials involved in city planning, disaster management personnel for corporations, and landscape designers involved in creating open spaces and parks... The future after studying Architecture is limitless.

新しい時代の
ニーズにあった
建築のプロデューサー
になりたい!

ビッグプロジェクトと
いわれる建設現場で
監督になってみたい!

公園や緑の
デザインをしたい!

地球環境について
考えたい!

誰もが考えつかな
かった建築材料を
開発したい!

地震に強い
建築を作りたい!

人を感動させる
ことのできる建築
をデザインしたい!

自然エネルギーを
使った建築を設計
したい!

古い寺院建築の修復
に携わってみたい!

ショップやホテルの
インテリアをデザイン
したい!

救命士になって被災
地でボランティアの
指導者になりたい!

Learning Architecture
does not only direct you to
= become an Architect.

都市の設計や
デザインをしたい!

エネルギー会社

ハウスメーカー

設計事務所/
一級建築士

建設会社/工務店

家具メーカー

建材メーカー

研究機関

インテリア
デザイン事務所

都市計画
コンサルタント

公務員/NPO

銀行/
保険会社

不動産会社/
デベロッパー

● 2011年。
工学院大学に、
日本初の[建築学部]
誕生。

A new school. A new way of thinking. Architecture reborn.



それは、「工学部」の枠から[建築]を解放し、
技術と芸術の高度な融合である本来の
[建築]に立ちかえること。
そして、大きく激しい社会の変化に対応した、
これからの、新しい[建築]をつくりだすこと。

君たちは、自分が将来どんな仕事をしたいか、
何になりたいか、今はわからなくていい。
数学が少しくらい苦手でも、
都市より自然が好きでも、構わない。

[建築]を学び、その奥深さに気づき、
広大な知のフィールドを目の前にした時、
君の中にどんな興味や意欲や、
自信や夢が生まれるのか。

道を決めるのは、それを待ってからでいい。

歴史と伝統の上に、建築の未来を探して
——工学院大学は、先に行く。

Free Architecture from the framework of Engineering
and return it to its most fundamental form where
technology and art fuse together at a high level, and
create a new Architecture that complies with a
fast-changing society.

You do not need to know what you want to become in the
future right now. It doesn't matter if you're not good at
math or like nature more than the city.

What dreams, confidence, or motivation will be born when
you learn Architecture and see how deep and vast its
field of knowledge is?

You can wait until then to choose your path.

Searching for the future of Architecture
from History and Tradition
—— Kogakuin University will go on.

2012年、学園創立125周年。 工学教育の長い伝統の上に、 新たな建築教育の未来を拓く。



工学院大学は、2012年に学園創立125周年を迎える。日本の私立学校で最も古い工業学校として誕生し、これまでに送り出した卒業生は10万人超。彼らが産業の各分野に広がり、日本の「ものづくり」を支えている。新しい時代を拓く技術のパイオニアを世に送り出してきた工学院大学は、学びの場として常に最先端であり続けてきたのである。そんな工学院大学の

次なるチャレンジが、[建築学部]の創設だ。日本で初めての[建築学部]、その意味は、工学の枠を超えた幅広い知のフィールドにある。「まちづくり学科」「建築学科」「建築デザイン学科」という3つの学科が、相互に刺激しあい、さまざまな形で連携する、かつてない建築教育の場が、ここに生まれる。

2012 is the 125th anniversary of the foundation of the school.
We will open up a new future in Architecture education
based on the long-established foundation of engineering education.

Kogakuin University will be celebrating the 125th anniversary of its foundation in 2012. Kogakuin University is one of Japan's oldest private engineering schools and has presented over 100,000 graduates since its foundation. Our graduates set out into their corresponding industries and become the support of Japan's Manufacturing. Kogakuin University has continued to be at the leading edge as a place of education and produced many graduates over the years that have become pioneers in innovating technology

in this new era. Our new challenge for Kogakuin University is the establishment of the School of Architecture. The key to Japan's first Architectural School lies in the diversity of fields that goes beyond the engineering framework. Three departments that comprise the School of Architecture, Department of Urban Design and Planning, Department of Architecture and Department of Architectural Design, will each inspire and work with one another to bring forth the birth of a new form of Architecture education.



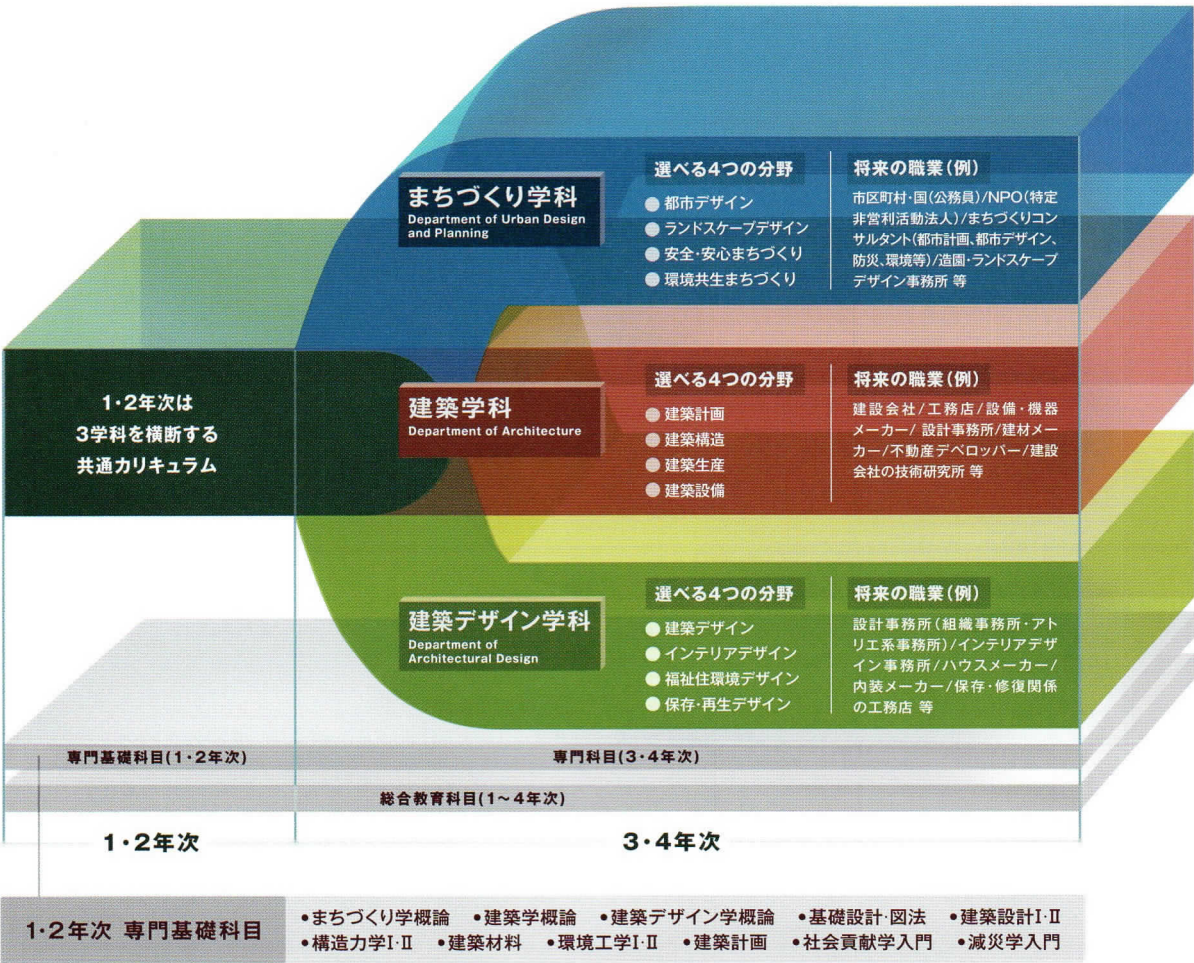
有機的につながり、刺激しあう、
3つの学科・12の分野。

工学院大学建築学部は、建築の多様性を踏まえた3学科・12分野を置く。1・2年次は3学科共通の専門基礎教育を学び、3・4年次には、12分野のうちの1つの分野に軸足を置き、関連する他学科や他分野の科目も合わせて履修しながら、興味のある領域を深く学ぶことができる。3学科がゆるやかにつながる、刺激的な学びの場だ。

The 3 departments and 12 specializations are organically linked and inspire one another.

The School of Architecture at Kogakuin University is separated into a variety of 3 departments and 12 specializations. We provide a stimulating environment where the three departments work together fluidly. During the first and second year, students will be educated in the shared basics

among the 3 departments. During the third and fourth year, the student will focus on one of the 12 specializations while taking classes in other related departments and specializations so each individual will have a deep understanding of their interested field of study.



工学院大学 建築学部
School of Architecture

Table with 2 columns: 共通科目 3年次, 共通科目 4年次. Row 1: 各学科共通, • 建築総合演習I • 建築総合演習II

まちづくり学科
Department of Urban Design and Planning

まちづくり学科では、地球規模の大きな社会状況の変化のもとで、これから私たちがより快適に住み続けられるためのまちの新しいあり方を考え、身近なまちについて考えるさまざまな視点(つくり手・住まい手の両方からの視点)を学修・研究する。

Table with 2 columns: 専門科目 3年次, 専門科目 4年次. Rows include: 都市デザイン分野, ランドスケープデザイン分野, 安全・安心分野, 環境共生分野.

建築学科
Department of Architecture

建築学科では、安全で快適な生活の場を構築することを目的とした教育・研究を行う。建築をただ単に「つくる」だけではなく、これからの新しい建築のあり方を規定するための高度な要素技術(計画、構造、設備、生産)を学ぶのが、この建築学科の特徴だ。

Table with 2 columns: 専門科目 3年次, 専門科目 4年次. Rows include: 建築計画分野, 建築構造分野, 建築生産分野, 建築設備分野.

建築デザイン学科
Department of Architectural Design

建築デザイン学科では、単に美しいだけではなく、機能的にも優れ、快適で使いやすい、人間のための建築デザインとは何かを考え、新しいデザインを創造・発信していく。また、環境への配慮や人間の生活の質(Quality of Life)をも考慮した建築のあり方を学ぶ。

Table with 2 columns: 専門科目 3年次, 専門科目 4年次. Rows include: 建築デザイン分野, インテリアデザイン分野, 福祉住環境デザイン分野, 保存・再生デザイン分野.

君には君の[建築]が、
きっとある。きっとみつける。

「建築って、なんだ!？」という問いに対する答えは、たぶん、人それぞれ。
[建築]に携わる者ひとりひとりに、自分なりの[建築]のフィールドがあり、
道がある。専門分野を最初から決める必要はない。1・2年次の専門基礎
教育では、建築の多彩な魅力に触れることができる。専門分野を見きわめ
るのは、それからでいい。

You have your own Architecture.
I'm sure you'll find it.

The answer to "What is Architecture?" is probably different for everyone. There
is a unique field and path for everyone involved in Architecture. There is no need
to choose your specialization right at the beginning. Students can experience the
many aspects of architecture in basic education during the first and second year.
You can always choose your specialization after you take those classes.



まちづくり学科



都市デザイン

野澤康 Yasushi Nozawa

多くの建築が集まって都市ができています。しかし、都市は建築だけではできていません。道路や自然、看板、活動する人々、様々なルール等々も都市を構成しています。これらを総合的に考えるダイナミックな分野です。



ランドスケープデザイン

倉田直道 Naomichi Kurata

我々が生活する都市環境を建築空間だけでなく総合的に捉え、自然環境を活かした快適で豊かな都市空間のデザインや人々の活動の場づくりを考え、それを実現するためのソフトからハードまでの専門的な技法を学びます。



安全安心まちづくり

久田嘉章 Yoshiaki Hisada

建物やまちのしくみを理解し、地域住民や企業・自治体と連携した実践的な安全安心なまちづくりを学びます。神戸学院大・東北福祉大との連携講座により、上級救命士や社会貢献活動支援士などの資格も得られます。



環境共生まちづくり

中島裕輔 Yusuke Nakajima

ヒートアイランド対策や自然エネルギー活用などの環境配慮は年々重要になってきており、実際に自治体と共同で対策を実践したり、自然と共生する住宅の設計サポートなどを行いながら、専門的な知識を学んでいきます。

建築学科



建築計画

山下てつろう Tetsurou Yamashita

建築はその時代の様々な知恵や技術等の総体です。そのまとめ役を担う為の勉強が建築計画学です。様々な知恵や技術を総合する力、人をまとめる力、そして何より、みんなと建物作りを楽しむ力を鍛えましょう。来たれ!



構造計画

近藤龍哉 Tatsuya Kondo

丈夫な建物を作りたい。どうすれば建物は丈夫になるか。そんな事をばかりを考えて過ごした夏休み。60日間の名古屋・実験合宿の風景です。君も参加しよう。目指せ、建築構造エンジニア。



建築生産

遠藤和義 kazuyoshi Endo

我々の生活空間である、都市や建築は、自然、経済、社会、産業、技術・技能、法律などが複雑に機能して成り立っています。それらを束ねる広い知識と柔軟な考え方を身につけたプロジェクトマネジャーになりませんか。



建築設備

野部達夫 Tatsuo Nobe

建築設備は、建築の毎日の活動を支えるメカニズムで、ヒトに例えると呼吸器や消化器、脳や神経などに相当します。安全で快適な室内環境の創造と、地域や地球の環境保全に必要な知識と技術の習得を目指します。

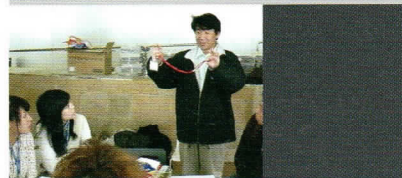
建築デザイン学科



建築デザイン

澤岡清秀 Kiyohide Sawaoka

建築は人間がその中に入って体験できる唯一のアートです。建築空間は人の心に、安らぎを、励ましを、あるいは感動を与えることができます。建築デザインは人に生きることの喜びを与えることのできる仕事なのです。



福祉住環境デザイン

赤木徹也 Tetsuya Akagi

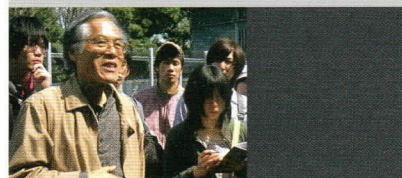
高齢者を中心とした様々な人々の「生活の質」を向上させる住環境的課題に取り組みます。「人間の尊厳」といった理念に基づき、多様な人間の行動や心の動きを理解し、その結果を具体的なデザインに応用しうる技術力を目指します。



保存再生デザイン

後藤治 Osamu Goto

建物を長生きさせることも、建築という分野の重要な仕事のひとつです。長生きした建物には、歴史的な価値があります。後藤研究室では、全国各地にでかけ、現地で歴史的な建物を活かすことに取り組む実践的な研究活動を行っています。



保存再生デザイン

藤森照信 Terunobu Fujimori

建築は、大昔の人も作っていたし、今の人も同じように作っている。その点が機械や化学や電気とちがうところ。人間の身体と感覚の延長上にある仕事で、やっていてとても楽しい。

<http://www.kogakuin.ac.jp>

工学院大学



安原研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	大久保裕護	採光方法の変化による空間印象に与える影響に関する研究
1部 建築コース	岡部 朋弥	戸建て住宅の外部空間(主庭)における印象が与える人間心理への影響についての基礎的研究
1部 建築コース	窪田 一也	住宅データの統計的研究 ―道路に面する居室と外部との関係性―
1部 建築コース	江間 泰介	都市型低層住宅の共有部分における構成要素の視覚的效果に関する基礎的研究
1部 建築都市デザ	石岡奈々実	狭小住宅の内部空間における開放感を与える要素に関する基礎的研究
1部 建築都市デザ	内田 智也	椅子を印象づける要素の基礎的研究
1部 建築都市デザ	沖山 廉	狭小住宅の内部空間における開放感を与える要素に関する基礎的研究
1部 建築都市デザ	梶原 寛史	住宅データの統計的研究 ―道路に面する居室と外部との関係性―
1部 建築都市デザ	唐川 優輝	住宅データの統計的研究 ―道路に面する居室と外部との関係性―
1部 建築都市デザ	鈴木 温美	都市型低層住宅の共有部分における構成要素の視覚的效果に関する基礎的研究
1部 建築都市デザ	高橋 将太	採光方法の変化による空間印象に与える影響に関する研究
1部 建築都市デザ	松野 祐也	狭小住宅の内部空間における開放感を与える要素に関する基礎的研究
1部 建築都市デザ	宮腰 理人	戸建て住宅の外部空間(主庭)における印象が与える人間心理への影響についての基礎的研究
1部 建築都市デザ	川島 千明	路地空間における構成要素が与える時間感覚と距離感覚への影響に関する基本的研究
1部 建築都市デザ	窪島 章伍	戸建て住宅の居間における注視点が与える影響に関する研究
1部 建築都市デザ	星野 護裕	椅子を印象づける要素の基礎的研究
2部 建築学科	竹中 春彦	狭小住宅の内部空間における開放感を与える要素に関する基礎的研究
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	伊藤 諒輔	狭小住宅の内部空間における空間印象に関する基礎的研究
建築学専攻	井上 訓	日本庭園から感じられる和が人間に与える心理的影響についての基礎的研究
建築学専攻	福岡 直記	採光方法の差異が空間印象に与える影響に関する基礎的研究
建築学専攻	山田 将寛	戸建て住宅の外部空間(主庭)における印象が与える人間心理への影響についての研究

野澤研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 環境建築コース	的場 靖代	米軍ハウスの実態と今後の活用法に関する研究―東京都福生市を事例として―
1部 建築コース	小川 千尋	伝統的建造物群保存地区周辺におけるマンションの景観阻害とその対策に関する研究―埼玉県川越市、石川県金沢市を事例として―
1部 建築都市デザ	奥村 拓也	住宅地におけるセットバック空間の実態についての研究―中野区平和の森公園周辺地区を対象として―
1部 建築都市デザ	園田 美樹	埼玉県戸田市の準工業地域における土地利用転換と住工混在問題に関する研究
1部 建築都市デザ	市橋 広輝	夜間の景観構成要素の照度削減及び色彩変更による見え方の変化に関する研究―新宿通りと銀座通りを対象として―
1部 建築都市デザ	榎本 愛美	小津安二郎が描く東京の街の風景に関する研究
1部 建築都市デザ	小口 祐登	伝統的都市祭礼による空間構成と町会組織の変容に関する研究
1部 建築都市デザ	黒田 学	阪神・淡路大震災に学ぶ現代の復興計画と都市マスタープランの適切な相互関係に関する研究
1部 建築都市デザ	杉山 智美	中心市街地における商店街とチェーン店の地域連携・協働のあり方に関する研究―世田谷区北沢および代沢地域を対象として―
1部 建築都市デザ	近澤 耕平	西新宿における公開空地の賑わいづくりに関する研究と提案―移動飲食店導入による公開空地の有効活用―
1部 建築都市デザ	敦谷志緒理	新宿区高田馬場駅周辺のバリアフリー化に関する研究
1部 建築都市デザ	野島 彩花	都心居住促進事業が景観に及ぼす影響に関する研究―信濃川本川大橋下流沿岸地区を事例として―
1部 建築都市デザ	村田 宗大	ジェーン・ジェイクスによる都市理論とまちの再開発に関する研究―下北沢を対象として―
2部 建築学科	東 未奈子	単身者の住環境にみる「集合」へのとけ込みの為の要素に関する研究
2部 建築学科	植松 裕太	チェーン店の増加が商店街に与える影響に関する研究―中央線沿線(中野駅―吉祥寺駅)を事例として―
2部 建築学科	柴田 陽介	道州制の可能性を踏まえた地方都市の在り方に関する研究―千葉県柏市を事例とした地方都市のこれから―
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	森島 健太	まちづくり条例による土地利用調整の有効性に関する研究―府中市地域まちづくり条例を対象として―

遠藤(新)研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	宗像 泰士	中心市街地活性化協議会の実情の検証:TMOとの比較の視点から
1部 建築コース	阿部総一郎	歴史的風致維持向上計画の基礎的検証
1部 建築コース	伊場野 武	地区計画を活用した駅周辺地区の整備手法に関する研究―仙川駅周辺地区を事例として―
1部 建築コース	下田 雄三	マンション問題における地域住民の役割に関する考察―東京都町田市を事例に―
1部 建築コース	内田 倫司	防犯マップ作成手法に関する研究
1部 建築コース	落合 宏至	平塚市におけるコミュニティ施設の現状と課題に関する調査研究
1部 建築コース	河嶋 翔	夜間景観ガイドラインに関する研究
1部 建築コース	有泉 岳史	大規模再開発に付随するオープンカフェの空間特性に関する研究
1部 建築都市デザ	江崎 智美	地元組織のネットワークを通じたまちづくり手法に関する研究―日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会を中心に―
1部 建築都市デザ	高梨 浩史	既存市街地環境に対する道路拡幅整備の影響に関する考察―世田谷区下北沢地区を事例に―
1部 建築都市デザ	田村 淳和	ウォーターフロントと市街地の空間的つながりに関する研究―横浜市内地区を対象に―
1部 建築都市デザ	千葉 一樹	都市の子供たちへ ―学びから遊びへのグラデーション―
1部 建築都市デザ	根元 亜衣	地方都市におけるLRTを活かした中心市街地整備手法に関する研究
1部 環境建築コース	岩崎 宏子	小学校教育における地域学習の現状と課題に関する考察―埼玉県内小学校中学年を対象として―
1部 環境建築コース	中川 陽介	都市景観の色彩コントロール手法に関する研究―東京都23区を中心に―
2部 建築学科	馬立理英香	テーマ性を持つ地区の空間構造抽出方法に関する基礎的研究―日黒通り・馬喰町・神保町・下北沢を事例に―

遠藤研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	相羽 広志	公共調達制度設計に向けた入札モデリング
1部 建築コース	新井 隆由	在来的な木造住宅生産システムの持続可能性に関する研究―東京都豊島区、徳島県板野郡藍住町、群馬県旧新治村の実態から―
1部 建築コース	加藤木辰徳	J-REIT投資法人の保有物件の経済性評価―地理情報システムを利用した保有物件の立地と収益性の関係―
1部 建築コース	鈴木 達也	J-REIT投資法人の保有物件の経済性評価―地理情報システムを利用した保有物件の立地と収益性の関係―
1部 建築コース	高橋 傑	在来的な木造住宅生産システムの持続可能性に関する研究―東京都豊島区、徳島県板野郡藍住町、群馬県旧新治村の実態から―
1部 建築コース	望月 勇太	建設業者の財務内容、経費データと入札における競争力の関係について
1部 環境建築コース	赤堀 弘透	建設業者の財務内容、経費データと入札における競争力の関係について
1部 環境建築コース	遠藤 真人	実際の履歴データに基づいた建物の維持・修繕モデルの構築
1部 環境建築コース	牛房 篤史	建設業者の財務内容、経費データと入札における競争力の関係について

宇田川研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 環境建築コース	平柳 奏	KTC環境実験室を用いた空気調和とシステムシミュレーションに関する研究
2部 建築学科	石橋 聡子	戸建住宅の熱負荷低減に関するシミュレーション研究

阿部研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	上本 洋	各種スラグ細骨材を使用したコンクリートの長期性状
1部 建築コース	栗原 龍仁	公共住宅に用いられたコンクリートの品質調査
1部 建築コース	佐々木 健一郎	モルタルの促進中性化に及ぼす各種要因の影響
1部 建築コース	白井 貴明	各種セメントを用いたコンクリートの促進中性化試験
1部 建築コース	田島 裕也	低強度コンクリートの物性に関する検討
1部 建築コース	中西 航太	品質改善した各種スラグ細骨材を用いたコンクリートの諸性状に関する研究
1部 建築コース	水野 恭佑	品質改善した各種スラグ細骨材を用いたコンクリートの諸性状に関する研究
2部 建築学科	阪本可奈子	高強度域を含むコンクリートの力学特性および中性化に及ぼす空気量の影響
2部 建築学科	柴 亨太	高強度域を含むコンクリートの力学特性および中性化に及ぼす空気量の影響
2部 建築学科	外山 明日香	高強度域を含むコンクリートの力学特性および中性化に及ぼす空気量の影響
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	赤荻 満	モルタルの中性化試験結果の活用方法に関する研究
建築学専攻	築地 健	コンクリートの中性化に及ぼす環境条件の影響に関する研究
建築学専攻	古川 雄太	スラグ細骨材を用いたコンクリートの有効利用に関する研究―副産物の用途拡大―

東研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	伊藤 政喜	GREEN SCHOOL
1部 建築コース	佐藤 雄亮	Slender Life
1部 建築コース	塚越 教文	森―もり―mori
1部 建築コース	横野 航平	ありからみると
1部 建築コース	元嶋 恭平	育み(はぐくみ)
1部 建築コース	若松 悠香	I am...
1部 環境建築コース	小菅 敬志	Culture Park
1部 環境建築コース	一戸健太郎	creative hilly regions
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	小松 春奈	小学校を核とする地域防災連携からみた防災協定農地の在り方
建築学専攻	佐々木慶太	東京都における相続に伴う農地処分類型からみた生産緑地の持続性
建築学専攻	宮崎 貴徳	農村地域の景観側面にみる行為の制限の基準の根拠についての研究

澤岡研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	殿村 勇貴	既景染色群―四谷におけるストライプ街並更新の提案―
1部 建築都市デザ	後 棟真	荒城―煙のない工場―
1部 建築都市デザ	加藤 雅史	札束と絆 ―大規模開発と変わらぬ境内の狭間―
1部 建築都市デザ	川名 紗織	こどもびじゅつえん
1部 建築都市デザ	清水 基宏	忘却からの帰還
1部 建築都市デザ	竹重 剛毅	愛し合う家々
1部 建築都市デザ	渡邊 一功	建築を着る
1部 建築都市デザ	宇田川恭子	Gradation Space ―変わらないものと変わるものを繋ぐ―
1部 環境建築コース	蛭原 啓貴	絵空建築
1部 環境建築コース	木村 貴典	Kaleido scope ―犯罪社会を映し出す鏡―
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	荒川 朗	見出されたカタチ―発見的手法の研究―
建築学専攻	小栗 秀章	コントラスト研究 ―対比による建築の構築―
建築学専攻	花澤 亜衣	バラレールに展開する世界をめぐる思考
建築学専攻	藤村美貴子	微差対比による空間分節の研究―経路空間の接続関係による身体感覚の変化―
建築学専攻	村口 勇太	包圍の観点から観る空間認識の研究

谷口研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	加藤 学	天使のおくりもの
1部 建築コース	黒川 裕司	逝きて、住きて、生きて、 死を知って、生をなす。
1部 建築コース	斎藤ゆうき	平成商店街大学
1部 建築コース	坂本 達典	人⇄人 依存建築 ―隣り―という環境を持つテナントビル―
1部 建築コース	重田 和也	記憶のひきだし
1部 建築コース	松本 瑛介	External Architecture
1部 建築都市デザ	小沢 翔太	連なる空間―十字壁が広がる新たな風景―
1部 建築都市デザ	竹内 勇磨	今日は・・・この場所です。
1部 建築都市デザ	虎本 和也	THE PACKAGING CITY―梱包された地盤と都市に散開するメディア―
1部 建築都市デザ	宮越 真央	あみめいろ ―現在地と目的地をつなぐ毛糸―
1部 建築都市デザ	渡邊ちひろ	道に住まう ―バラバラ家族のバラバラな生活―
1部 建築都市デザ	平原 佑	TOKYO BABEL
2部 建築学科	藤井 彩加	Present House
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	阿部 典之	余剰再考 ―住宅における建築化された外部空間についての研究―
建築学専攻	河原 恵	グループリビングに関わる高齢者予備軍の求める形態と現状の相違―高齢期の住まいに関する研究
建築学専攻	孔 立岩	中国の高齢化社会における高齢者福祉施設の研究 ―中日比較に基づく中国都市部における高齢者施設の住環境整備に関する研究
建築学専攻	古橋 尚弥 與那城健多	アダム建築―起源から再考する人と建築空間の関わりに関する考察― 無意識に潜む空間性に関する研究
【博士課程】	鯉坂 誠之	高齢者の視覚探索特性に基づく高速道路サービスエリアの物理的環境整備に関する研究

中島(智)研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	平川裕希子	ルネサンス期における建築と音楽の比例に関する研究 ―比例論の共通性と相違性について―
1部 建築コース	飯干 雅史	中世イングランドのハーフ・ティンバーの壁面パターンと構法の変遷
1部 建築コース	泉谷 吉信	建築概念「内 within」から見たフランク・ロイド・ライトの建築
1部 建築コース	高先 佳苗	vivez dans Kawagoe
1部 建築コース	服部 紗知	シカトル大聖堂のステンドグラスに対する日本の建築家・建築史家と美術史家の視点の相違
1部 建築都市デザ	青木 一記	step house
1部 建築都市デザ	高藤 真章	ENCLOSED SPACE
1部 建築都市デザ	多田 正幸	白井晟一の住宅における「試作小住宅」の意義
1部 環境建築コース	堀内 正紀	クロード・ニコラ・ルドゥーの建築にみるアンドレーア・パッラーディオの影響
1部 環境建築コース	阿部 馨	SYMBOL
1部 環境建築コース	日野 貴弘	YOKOHAMA Art and Architecture Design Center
2部 建築学科	藤古 一樹	都市との隣和 ―住宅地と大通りにおける緑を用いた緩衝地帯の提案
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	安島 裕香	東京の主要な百貨店における屋上施設の変遷
建築学専攻	車田 寛	現存する資料から見る三鷹市山本有三記念館
建築学専攻	辻 雄貴	建築における偶然性の研究―いけばなと変容する建築
建築学専攻	名塩 知恵	ジュゼップ・マリア・ジュジョールのジョアン・ミロに通ずる色彩

中島(裕)研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築都市デザ	上山 拓也	関東地域における教育関連施設のエネルギー消費実態と影響要因に関する研究
1部 建築都市デザ	彦根 裕	ガラス用遮熱コーティング塗料の性能評価に関する研究
1部 建築都市デザ	山本 貴皓	地理情報システム(GIS)を用いた都市エネルギーマスタープランの作成に関する研究―名古屋市内におけるケーススタディー
1部 建築都市デザ	遠藤 綾乃	新宿DHC地区超高層ビルのエネルギー消費動向に関する研究 ―(その2)省エネルギー対策の実効性調査―
1部 建築都市デザ	大野 豪士	小学校のエネルギー消費量と教育生活環境に関する研究
1部 建築都市デザ	奥村 正樹	環境共生型アパートにおける情報提供システムを利用した冷暖房エネルギー削減効果に関する研究
1部 建築都市デザ	金子 紘子	小学校校舎の形態とエネルギー消費量の関連性に関する研究
1部 建築都市デザ	小山 太一	新宿DHC地区超高層ビルのエネルギー消費動向に関する研究 ―(その3)建物の外皮仕様と使い方からみたエネルギー消費の詳細分析―
1部 建築都市デザ	高山 秀樹	NHL(天然水硬性石灰)を用いた外装・舗装材の環境性能評価に関する研究
1部 建築都市デザ	原 佑介	自治体における環境啓発手法の実態とその効果に関する研究
1部 環境建築コース	勝又 大典	新宿DHC地区超高層ビルのエネルギー消費動向に関する研究 ―(その1)建物特性によるエネルギー消費分析―
1部 環境建築コース	窪木 達昭	環境共生型アパートにおける空気式屋根集熱システムの運用評価に関する研究
1部 環境建築コース	清水 哲也	満型ガラスの使用形態と熱的性能評価に関する研究
2部 建築学科	木藤 宏美	環境共生型アパートにおける住まい方とエネルギー消費に関する調査研究
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	新井裕一朗	新宿DHC地区超高層ビルのエネルギー消費分析
建築学専攻	小原 茂樹	学校冷房化に伴うエネルギー消費実態と環境配慮型学校運営に関する調査研究
建築学専攻	佐藤光太郎	居住者ニーズを考慮した家庭用省エネ行動促進ツールの開発に関する研究
建築学専攻	中村 仁子	NHL(天然水硬性石灰)の水分物性調査と内外装利用時の室内環境予測

藤木研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築都市デザ	大淵 崇司	memento-mori
1部 建築都市デザ	川村 健介	在る自然の形
1部 建築都市デザ	坂下 溪谷	Living in the cliff
1部 建築都市デザ	鈴木 勇人	トオルコト
1部 建築都市デザ	田崎 修也	with grow
1部 建築コース	鈴木 将仁	Culture wave
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	落合 謙太	都市におけるヴァンキュアー建築を応用した設計手法の可能性
建築学専攻	草薙 岳仁	都市の公園とその境界部における閉鎖性の研究
建築学専攻	酒井 有紀	表層操作による建築内部空間への自然光導入手法の研究
建築学専攻	若山 晃久	現代住宅作品における外部空間の構成に関する研究

木下研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	濱田真理子	house of HUEMANITY
1部 建築コース	伊藤慎太郎	MEGRO DELTA
1部 建築コース	勝亦 優祐	wheelchair×建築
1部 建築コース	近藤 巨男	浄化・浄化・浄家
1部 建築コース	佐藤 央一	coincidental encounters
1部 建築コース	平賀 卓也	地殻都市
1部 建築コース	山内 響子	溶けあう庭、住宅の余白
1部 建築コース	山田 善紀	Skip Structure Building ―建築を家具のように使う―
1部 建築都市デザ	神保 隆文	路の暮らし方
1部 建築都市デザ	長谷川公彦	地底の星
1部 環境建築コース	内田 裕太	the scens of wonder
1 環境建築コース	長山 友幸	重壁
2部 建築学科	梅沢 裕介	“歩く”ことを第1に考えた集合住宅の提案
2部 建築学科	加納 学	48 HOURS HANEDA INTERNATIONAL AIRPORT
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	阿出川 南	壁の誘導性に関する研究
建築学専攻	小島 勉	Louis I. Kahnの建築思想と無時間性獲得の過程に関する研究
建築学専攻	鈴木 宏	小住戸集合建築研究
建築学専攻	高田麻衣子	曲面住宅―曲面による空間の可能性―
建築学専攻	橋本ひとみ	音を構成要素とする居住建築の研究

西森研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	足立 瞳	だんちえん
1部 建築コース	田村真理子	my self―自らつくる商業施設―
1部 建築コース	西野 淳	刻まれる駅、つながる谷―渋谷駅街区基盤整備に伴う駅ビルの提案―
1部 建築コース	丸山 裕貴	BOOK GEODE
1部 建築コース	村山 萌	THE SECOND HOME TOWN―巻きこむ・織りこむ―
1部 建築都市デザ	阿部ちひろ	SYMBOL
1部 建築都市デザ	岩本 真菜	不老不死
1部 建築都市デザ	大谷 金秀	残り続けるもの。
1部 建築都市デザ	小林 春美	suki ma
1部 建築都市デザ	陳之内 秋	ショー ウィンドウ ショー
1部 建築都市デザ	中島 和信	積層 ―体験としての図書館―
1部 建築都市デザ	中野 祐太	Particles of Green
1部 建築都市デザ	広田 裕基	コキユウするマチ ―さいたま新都心における小学校を中心とした地域活性化プロジェクト
1部 建築都市デザ	福井 健太	ふれんず
1部 建築都市デザ	三平真樹子	HAPPY OFFICE
1部 建築都市デザ	岡崎 翔子	町をつなぐ 人をつなぐ 時をつなぐ
1部 建築都市デザ	牧 秀人	広がる生活
1部 建築都市デザ	中尾 厚介	中野をつなぐ輪
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	福田 大輔	触景―皮膚感覚を刺激する空間の研究―
建築学専攻	渡辺 晴晃	公共園の建築的展開―空間コミュニケーションの自由度に関する研究―

野部研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	荒井 博之	個別分散空調機の運転効率向上に関する研究
1部 建築コース	木口 雅之	寒冷地におけるマルチ型パッケージ空調機の長期オンサイト性能評価
1部 建築コース	根本 茂樹	日本アイ・ビー・エム本社ビルにおける空調調和機の運用状況に関する調査研究
1部 環境建築コース	佐川 真美	個別分散空調機の製造熱量精密同定手法に関する研究
1部 環境建築コース	菅間 啓吾	人流データを活用した換気システムの最適運転に関する研究
1部 環境建築コース	高取高一郎	パーソナル放射冷房と置換換気併用時の温熱環境に関する研究
1部 環境建築コース	田中 廉	高等学校校舎におけるエネルギー消費量内訳の推定方法に関する研究
1部 環境建築コース	松測 悠輔	日本アイ・ビー・エム本社ビルの建築設備運用実績データベースに関する研究
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	石田かなえ	在室者の熱的受容度の不連続性に関する研究
建築学専攻	田中光太郎	パッケージ空調機を用いた空調システムのロバスト設計に関する研究
建築学専攻	平川 敏也	空調調和機の効率評価に関する研究

田村研究室		
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	田中 良拓	首都圏で実施工された鉄骨造および鉄筋コンクリート造建築物に関する資材利用・輸送時環境負荷評価
1部 建築コース	箕山 敏彦	建築物内装用塩化ビニル壁紙のテクスチャーと色彩特性が印象性に与える影響
1部 建築コース	吉岡 智博	各種セメントを用いたモルタルの炭酸塩化処理による二酸化炭素固定量の把握と改質粒子の開発
1部 建築コース	石田 慎平	資源環境保全を目指した副産微粉コンクリートの総合的物性評価に関する研究
1部 環境建築コース	清永美奈子	伝統的木造建築に用いる柿葺き材の物性分析と改質処理による高度維持化に関する研究
1部 環境建築コース	太原 亜美	改質した骨材回収型コンクリートによる二次副産材料の成因特性と骨材回収性向上に関する研究
1部 環境建築コース	小室 清人	海洋生物廃棄物を用いたコンクリート系材料の破壊特性と環境改善効果
1部 環境建築コース	渡邊 恭平	首都圏で実施工された鉄骨造および鉄筋コンクリート造建築物に関する資材利用・輸送時環境負荷評価
2部 建築学科	重山のぞみ	表面改質処理木材の色彩特性と熱劣化に関する研究
2部 建築学科	鍋内 翔太	引き試験による骨材回収型コンクリートの付着強度―すべり関係と補強効果の影響
2部 建築学科	野中 英治	市場普及品塩化ビニル壁紙における色差・光沢度及び換算表面粗さの物性分析と3指標の相関性評価

久田研究室		
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	小野 恵司	工学院大学八王子校舎における地震防災に関する研究
1部 建築コース	松本 俊明	強震動予測手法ベンチマークテストに関する研究
1部 環境建築コース	堀越 将人	首都圏に建つ超高層建築の地震応答特性の評価
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	島村 賢太	首都圏に建つ超高層建築物の地震応答と制震補強に関する研究
建築学専攻	長澤 徳明	サンプル地震波による高層建物の地震リスク評価

近藤研究室		
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	大久保 綾	既存集合住宅の耐震性能と袖壁補強の有効性について
1部 建築コース	立川沙緒美	片袖壁付柱の新工法による耐震補強の実験的研究
1部 建築コース	西村 睦	両袖壁付柱の新工法による耐震補強の実験的研究
1部 建築コース	三好 孝幸	平面的に偏心した建物・不整形な建物の立体効果に関する解析的研究
1部 建築コース	力石 勇太	片袖壁付柱の在来工法による耐震補強の実験的研究
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	栗 慎一	R C造柱・梁接合部における破壊機構に関する研究

後藤研究室		
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	植田みこと	山梨県甲州市上条集落旧中村健一郎に関する調査・研究
1部 建築コース	原嶋 純平	重要文化財建造物の棟か対策に関する調査・研究―熊本県人吉市の神社を例に―
1部 建築都市デザ	岸田あさみ	江東区清澄白河庭園内店舗向住宅に関する調査・研究
1部 建築都市デザ	高田 裕志	福島県南会津町の集落における歴史的風致に関する調査・研究
1部 建築都市デザ	竹澤 春香	長野県東御市海野宿の防火対策に関する調査・研究
1部 建築都市デザ	梅野 佑也	練馬区農家の昭和前期の台所周りに関する調査・研究
1部 建築都市デザ	中島裕衣子	山梨県甲州市上条集落旧中村健一郎に関する調査・研究
1部 建築都市デザ	福島 郁美	福島県南会津町の集落における歴史的風致に関する調査・研究
1部 環境建築コース	矢野 千尋	こけら葺建造物の葺替に関する研究
1部 環境建築コース	新井 克弘	長野県東御市海野宿の防火対策に関する調査・研究
1部 環境建築コース	荒川 亮	長野県東御市海野宿の防火対策に関する調査・研究
1部 環境建築コース	日下部有香	旧日本IBM本社ビルの避難安全に関する調査・研究
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	木下 和也	近代に於ける銀行建築の外観・意匠に関する研究
建築学専攻	高松 敬	結核療養施設における療養空間の研究 傷痍軍人療養所の建築的実態、京都療養所を事例に
建築学専攻	高山 基	農村集落における保存基準に関する研究
建築学専攻	古坊 威人	土地利用からみた京王井の頭線における駅とまちの関係
建築学専攻	渡邊 祐介	ブルーノ・タウトの「日本評価」に対する日本・国際ナショナル建築会が与えた影響

赤木研究室		
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	小園麻衣子	Present
1部 建築コース	駒形 悠貴	A NURSERY SQUARE IN FRONT OF SANGENCHAYA STATION
1部 建築コース	高橋 志保	川への抜け道
1部 建築コース	谷岡 伸飛	みちひきする建築
1部 建築コース	丹治 友宏	LIBRARY×TRAIN
1部 建築コース	長谷 志保	ひとつ屋根の下
1部 建築コース	朴 民宣	ぼくたちわたしたちのまち
1部 建築コース	星崎みなみ	Tanada He Kaeru
1部 建築コース	星山 圭輔	WASEDABUNNKO in confused wall
1部 建築コース	守田 善範	B.R.C.
2部 建築学科	中山 恵理	イッショウ此処で生きてきます
2部 建築学科	富丸けい子	団塊の世代における日常生活環境と老後の住まい方ニーズとの関係性
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	尾門 智志	住宅データの統計的研究 ―戸建住宅の開放性とまち（外部）までの距離における条件との関係性
建築学専攻	小杉 拓也	建築家の椅子及び居間空間における調和度に関する基礎的研究
建築学専攻	笹原 怜子	M－G T Aを用いた妻介護高齢者の在宅環境と生活の継続性に関する研究
建築学専攻	安松 良朗	都市型狭小独立住宅における相隣関係との関わりからみた周辺社会との関係性

倉田研究室		
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築都市デザ	川口 桂	匿名の墓、生者の墓
1部 建築都市デザ	田島奈々生	Wedding Road
1部 建築都市デザ	小川千江美	KINEMA TOWN KAMATA
1部 建築都市デザ	久保田幸恵	興味×出会い×キョウミ ーすみだ3M運動拠点施設ー
1部 建築都市デザ	佐々木智生	mom's town Jiyugaoka
1部 建築都市デザ	柴田 智恵	ふるさとのまち
1部 建築都市デザ	田中 美佳	都市建築 GINZA
1部 建築都市デザ	中込 裕太	まちに立つ波 ―ヒトはまちを描き続ける―
1部 建築都市デザ	中野 博文	つながる ―浅草文化の拠点づくり―
1部 建築都市デザ	星山 剛	Restruction
1部 建築都市デザ	増岡 慶彦	“Green×Grass×Grow” 3G station ―「街の遺産」と繋がる駅―
1部 建築都市デザ	渡辺 仁	マチとがつこう ―アタラシイマチの小学校―
1部 環境建築コース	岡村 洋介	mild high line ―開かれた新宿御苑へ―
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	麻生 洋平	景観条例に基づく景観目録の活用プロセスに関する研究
建築学専攻	城所有希子	生活支援機能を付加した共同建替えによる住環境向上に関する研究
建築学専攻	菅沼 瞬	建築の集合により構成される外部空間の研究
建築学専攻	土田 康太	農と食を核とした都市型ライフスタイルに関する研究
建築学専攻	降旗 宗一	廃校小中学校を活用した地域コミュニティの拠点形成に関する研究
建築学専攻	三好 量平	環境配慮時代における都市ストックの活用法に関する研究
建築学専攻	金 龍成	(休学)

大塚研究室		
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	島田 誠	遠心載荷振動実験装置の開発と基礎実験に関する研究

大橋研究室		
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	浮田 祐哉	エアバリアシステムにおける熱負荷計算のための熱的性能値に関する実験研究
1部 建築コース	洲崎 弘人	大規模物流施設における外気導入システムの省エネルギー性能と有効性に関する研究
1部 建築コース	谷川原 亮	BCP策定に資する建築設備の地震防災対策に関する研究
1部 建築コース	千葉 広之	BCP策定に資する建築設備の地震防災対策に関する研究
1部 建築コース	村越 孝志	エアバリアシステムにおける熱負荷計算のための熱的性能値に関する実験研究
1部 建築コース	横山 晃一	大規模物流施設における外気導入システムの省エネルギー性能と有効性に関する研究
1部 建築コース	渡部 隆大	事務所建物における廃棄物運用管理の実態と環境性能評価に関する研究
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	小垣 喬	大規模建物におけるごみ集積所インフラ整備に関する研究
建築学専攻	齋藤 寛徳	生産・物流施設における外気導入システムの有効性と環境性能評価に関する研究

村上研究室		
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	原島 裕貴	地域と連携した災害時要援護者の避難等支援に関する研究
1部 建築コース	長谷川 翔	工学院大学新宿キャンパスにおける震災後の施設利用及び避難所運営に関する研究
1部 建築コース	松原 音糸	地域と連携した歴史的建築物の防火対策に関する研究―熊本県人吉市を事例として―
1部 建築コース	宮城 裕司	環境対策による深夜営業規制が地域防犯に与える影響に関する研究
1部 建築コース	矢沢 雄太	地震災害時における応急活動支援システムの構築に関する研究
1部 建築コース	横山 亮	地域と連携した災害救急医療体制に関する研究
1部 環境建築コース	岩波やよい	工学院大学新宿キャンパスにおける女性のための防災対策の検討
1部 環境建築コース	長田 侑也	地震災害時における応急活動支援システムの構築に関する研究
1部 環境建築コース	海沼 大樹	高層マンション集積地域および住居混在地域における地震防災対策に関する研究
1部 環境建築コース	中山 芽夢	大学と地域が連携した災害時要援護者の支援体制に関する研究
1部 環境建築コース	平本 達也	超高層キャンパスの防災計画に関する研究
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	濱野 航平	都心高層キャンパスの地震防災と事業継続マネジメントに関する研究

山下(て)研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	佐藤 豪	つながりの街 ―緑を媒介とした温かみのある街づくり―
1部 建築コース	島崎 泰典	都会で育つ『場』―子どもと働く女性のための保育空間づくり―
1部 建築コース	古澤 由貴	非物質(空間・時間・情報)のためのミュージアム
1部 建築コース	飯田 歩	さんばみち
1部 建築コース	池田 勇介	流郷の町 ―歴史を受け継ぐ―
1部 建築コース	黒川 瑞樹	技の伝承
1部 建築コース	綿織 雅基	長良川鶴飼エコミュージアム
1部 建築コース	坂本 圭一	繋がる町屋 ―住み続けられる場―
1部 建築コース	高橋 理華	自然へ続く道
1部 建築都市デザ	関宮 啓輔	都市型漁港
1部 建築都市デザ	池沢 圭介	趣道の誕生 ―人、趣味からできる街を求めて―

山下(哲)研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	尾澤 聡	曲げを受ける合成梁の弾塑性挙動に関する研究
1部 建築コース	佐藤 玄樹	弾塑性ダンパーを設置した鋼構造主架構の設計法に関する研究
1部 建築コース	椎葉 健之	学校体育館におけるブレース構造の実態に関する調査
1部 建築コース	米田 良祐	学校体育館におけるブレース構造の耐震性に関する研究
1部 環境建築コース	増田 真也	山形鋼ブレースの耐震性能に関する研究・座屈耐力に関する実験

長澤研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	小池 雄太	浅草・花川戸温泉計画
1部 建築コース	後藤 瞬	『探』訪 ―小田原市の町並み再生計画―ハッシンしていく場所
1部 建築コース	齊藤 勇太	こどもの未来を考える
1部 建築コース	齋藤 裕佳	ALONG THE RIVER ―葬送を日常風景に―
1部 建築コース	高橋 裕紀	Re:START ―ランドマークのリノベーションとコンバージョン―
1部 建築コース	長谷川恵美	オワリの場所はハジマリの場所
1部 建築コース	藤間かおり	MERT TOWN (ARCHITECTURE?)
1部 建築コース	水野 竜一	patrioplan/lightplan
1部 建築コース	溝上 晃司	ATRANTIS
1部 建築コース	山崎 慧	迷宮図書館
2部 建築学科	長田 彩音	

宮澤研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	芝沼 健太	スキップフロア木質住宅の耐震挙動と耐震設計法に関する研究
1部 建築コース	庄司 香織	木質断熱複合パネル耐力壁の履歴特性に関する研究
1部 建築コース	鈴木 賢人	複雑形状木質住宅の耐震性評価と性能向上に関する研究
1部 建築コース	三浦 彰一	木材の蟻害強度劣化と補強に関する研究
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	石田早耶香	木造近代化遺産の常時微動による振動特性評価に関する研究
建築学専攻	迫 俊介	不整形木質系住宅の水平構面剛性の向上に関する研究 ―吹き抜け格子梁構造の開発とその性能確認―
建築学専攻	高木 良	くぎ接合部における繰り返し加力による耐力劣化を考慮した荷重変位関係に関する研究
建築学専攻	緑川 直樹	伝統的木造軸組における貫の曲げ性能に関する研究
建築学専攻	吉岡 圭介	木質系住宅の制振壁の開発に関する研究

小野里研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	阿部 周平	RC耐震壁の付帯部材の最大せん断強度に関する研究
1部 建築都市デザ	小野田一八	面外集中力を受ける平板に関する解析的研究
1部 建築都市デザ	上村 剛	ウォータージェット「ハツリ」工法におけるコンクリート打継ぎ強度に関する研究
1部 建築都市デザ	佐野 正信	集成材壁式工法のパネル接合金具の強度に関する研究
1部 建築都市デザ	守屋 栄希	架構式プレキャストコンクリート造に関する調査研究
【平成21年修士課程】		
建築学専攻	比嘉 雄大	壁板のせん断強度に及ぼすひび割れ間隔の影響
建築学専攻	宮野 領	R C造耐震壁付帯部材のせん断破壊防止設計に関する研究
建築学専攻	北村 圭	鋼管コンクリート杭の接合部耐力に関する実験的研究

吉田研究室

学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	根本 隼子	建築のライフサイクルに関する研究 ―工学院大学新宿校舎における施設管理費用の実態と保全計画との比較―
1部 建築コース	根岸 雅樹	建築のライフサイクルに関する研究 ―工学院大学新宿校舎における施設管理費用の実態と保全計画との比較―
1部 建築コース	溝口 尊人	建築のライフサイクルに関する研究 ―工学院大学八王子キャンパスにおける各施設管理費用の実態―
1部 建築コース	吉原 裕貴	建築評価に関する研究―曳家の事例調査とこれに基づく既存建物の資産価値に関する考察―
1部 環境建築コース	小島 優	建築のライフサイクルに関する研究 ―工学院大学八王子キャンパスにおける各施設管理費用の実態―
1部 環境建築コース	谷口 史晃	建築のライフサイクルに関する研究 ―工学院大学八王子キャンパスにおける各施設管理費用の実態―
1部 環境建築コース	中澤 元樹	木造住宅の振興・補助を行う事業の調査と木造住宅供給支援システムとの比較―
1部 環境建築コース	渡邊 和博	木造住宅の供給体制に関する研究 ―木造住宅の振興・補助を行う事業の調査と木造住宅供給支援システムとの比較―
1部 環境建築コース	野澤 孝徳	建築評価に関する研究 ―曳家の事例調査とこれに基づく既存建物の資産価値に関する考察―
博士論文	三原 斉	現代の左官を中心とする新しい建築技術技能教育に関する研究

塩田研究室

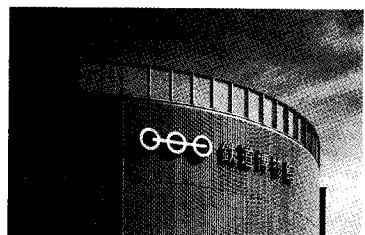
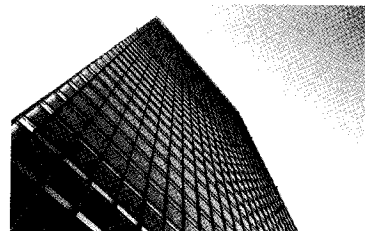
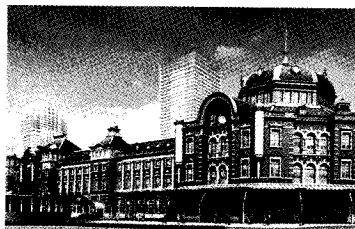
学部学科名	氏名	卒業研究・卒業設計題目
1部 建築コース	土方 誠	騒音伝搬における周波数毎の減衰傾向について
1部 建築コース	大沼 俊介	木質系住宅の床衝撃音に関する実験的研究
1部 環境建築コース	進藤 龍	木質系住宅の床衝撃音に関する実験的研究
1部 環境建築コース	吉浦 大雅	音源性状の違いによる残響時間及び音圧分布の傾向に関する音響調査
1部 環境建築コース	高橋 勇太	騒音伝搬における周波数毎の減衰傾向について
1部 環境建築コース	村里 忠輔	音源性状の違いによる残響時間及び音圧分布の傾向に関する音響調査

駅から街へ、
暮らしのなかへ。



多くの人や物が行き交う駅
笑顔が集う商業施設
新たなビジネスを生み出すオフィス
明日の活力のために憩うホテル...

私たちが創る空間と環境は、
人々の暮らしのなかへと広がっています。



空間と環境の総合クリエイター

株式会社 **ジェイアル東日本建築設計事務所**



JRE設計

〒151-0053
東京都渋谷区代々木2-2-6 JR新宿ビル
TEL 03-5371-3381

■東北事務所 TEL 022-262-9225
■上信越事務所 TEL 027-330-1600

<http://www.jred.co.jp>

代表取締役社長 杉村 貞夫
(昭和43年卒業)

日建学院グループ/建設系総合人材バンク
Nikken Career Station Co., Ltd.

■職業紹介事業許可：13-ユ-090149 ■労働者派遣事業許可：般13-090147

前向きなあなたの仕事探しをお手伝いします。

2011年 NCSジョブ・サーチ・センターを全国10ヶ所に新設！
建設業特化人材紹介事業の積極展開が始動します。

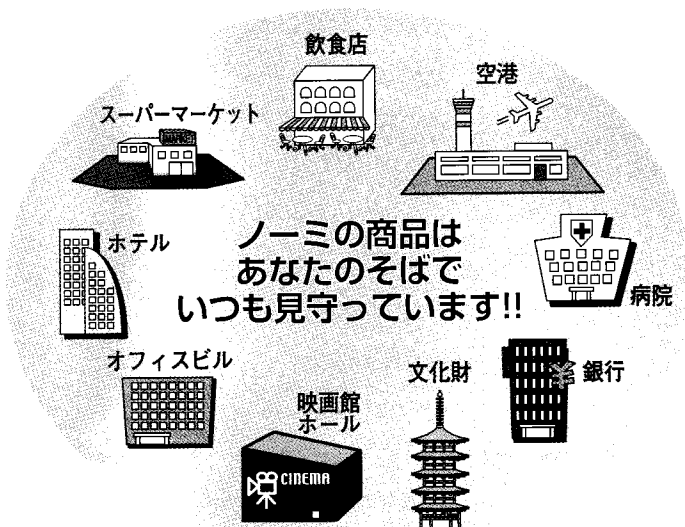


建設系職業紹介・人材派遣のエキスパート <http://nikkencs.co.jp>

株式会社 ニッケン・キャリア・ステーション ☎ 0120-810-298 / info@nikkencs.co.jp

安全は空気のように大切です

毎日の生活のなかで、
気づかないけれど大切なものが空気や水で
あるように、
火災などの災害から住宅環境や都市環境を
まもるのが防災機器。
能美防災は、防災システムの研究開発から
機器の生産、施工、メンテナンスサービス
まで、一貫した責任体制で、安全な生活空間
を構築しています。



防災のバイオニア
NOHMI 能美防災株式会社

本社／〒102-8277 東京都千代田区九段南4-7-3 ☎(03) 3265-0211

URL <http://www.nohmi.co.jp/>

MUTOH

教えるのも、教わるのも、
MUTOHなら安心です。

設計現場の即戦力となる人材育成には、優れた教材を使用したい。
そんな声に応えるのは、やっぱりMUTOHです。
あらゆる設計現場で、高い信頼性と
納入実績を誇るMUTOHの設計製図ツールは、
教育の現場でも活躍してくれます。

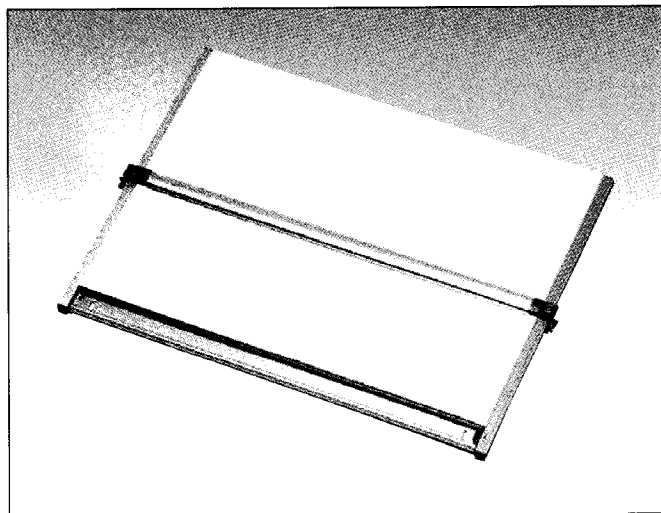
LINER BOARD

UM-09NK

塩ビシート圧着鋼板製図板使用

工学院
特別仕様

場所を選ばず高い精度と操作性が得られる
コンパクトな平行定規、ライナーボード。
耐久性に優れ快適な操作性を提供する
シンクロベルト方式を採用した本格派。
A1サイズまでの作図に対応。図面への
固定は、付属のマグネットプレートで
ワンタッチ。しかも軽量・コンパクトで
す。簡単に持ち運びができますので、思い
ついたらそこがワークスペース。アイ
ディアを生み出す頼もしい片腕です。





静岡県立小山高等学校
工学院大学大学院 工学研究科
建築学専攻 修士課程

E-mail: ike_pon927@yahoo.co.jp

表紙デザインのコンセプト

池谷 高浩
- TAKAHIRO IKEYA -

作品タイトル: Architecture Design

建築に関わるすべてのこと。

複雑に絡み合う事柄を考えていくことで新しい建築が生まれる。

そんな建築の可能性を考えてこの表紙をデザインしました。

未来の建築を創造しよう。

■ NICHE 広告出稿のお願い ■

工学院大学建築系学科同窓会 会長 加藤隆弘

工学院大学建築系学科同窓会誌 次号NICHE 2012 vol.35の誌面へ、「広告出稿」のご協力をお願い致します。

ご出稿の要領につきましては下記の通りです。

出 稿 要 領

1.掲 載 工学院大学建築系学科同窓会誌NICHE 2012 vol.35

2.発行日、発行部数 2012年3月19日 20,000部

3.広告掲載料(カラー頁へのご掲載を、お勧め致します)

カラー版 (1) A4版(表紙裏面頁) 1頁【15万円】サイズ縦265 mm x横181 mm

(2) A4版(内部の頁) 1頁【10万円】サイズ縦265 mm x横181 mm

白黒版 (3) A4版(内部の頁) 1頁【8万円】サイズ縦265 mm x横181 mm

(4) A4版(内部の頁) 半頁【4万円】サイズ縦130 mm x横181 mm

5.広告担当連絡先

「NICHE」ニッチ編集部(谷口研究室) 大場光博

E-Mail: miu@tkg.att.ne.jp

〒163-8677東京都新宿区西新宿1-24-2工学院大学

電話03-3340-3529 Fax 03-3340-0588

4.第1次申し込み期日(2011年8月1日締切)、及び版下人稿(同年9月6日締切)

申し込み書が必要な方は、広告担当者にご連絡下さい。

■ 編集後記 ■

今年は新しい編集スタッフが加わりました。同窓会新会長の加藤隆弘さん、建築系学科からは編集スタッフとして18年続けてこられた谷口宗彦先生に加え、鈴木敏彦先生、西川豊宏先生の二人のOB新任教員、卒業生の山崎文久・斉藤彩子(旧姓:横田)さんです。

「NICHE」の編集は、会費収入・広告収入等の減少から予算的に厳しい状況が続いていました。田野遼幸裕前会長の発案で、昨年、企業から賛助会員を募ることに成功。年間予算の増加で一息つくことができました。そして谷口先生の永年念願であった、「NICHE」の英文対訳を日本初となる「建築学部」創設に合わせて発行する方針としました。しかし、英文はまず概要を加えることにとどめ、鈴木先生のデザインでレイアウトを一新し、英文の翻訳作業は新に加わった山崎文久さんが主担当としました。この新たな企画のために編集作業がかさみ、版下の完了迄は時間との戦いでした。

2010年8月27日、元編集長であった久野和作さんの告別式が、彼設計の東京・蒲田教会(「NICHE2008」に掲載)で、多数の参列者によって行われました。1973年当時「NICHE(ニッチ)」と命名したのが久野さんで、『龕(がん): 建物の壁のくぼんだ場所』の意味です。また彼と谷口先生と私の三人は、本学大学院の同期生でもありました。

それから38年経った2011年には34号、発行部数は2万部に達し、全国の卒業生に届けられ、建築学部へ進学する全国2,000の高校や業界企業1,000社にも届けられるまでに成長しました。

「NICHE」は今や工学院大学建築系学科のシンボルです。卒業生と在校生に誇りを、受験生には夢を、企業には求人をつとめます。久野和作さんをはじめ多数の諸先輩達の植えた種が、目を出しスクスクと枝葉を伸ばして実を結びつつあります。

今年度も編集スタッフをはじめ多くの方々にご協力を戴きました。執筆戴いた卒業生、在校生。教職員をはじめ、広告出稿されました各企業や、印刷会社のスタッフの方々、そして数多くの関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。(文責:大場光博)

NICHE編集部

大場光博(編集長) 谷口宗彦・楠昭・加藤隆弘・伊藤真人・鈴木敏彦・西川豊宏・大塚篤・高木雅行・鯨坂誠之・横田彩子・山崎文久
学生協力(修士1年): 藤井彩花・渡辺ちひろ

平成22年度 1級建築士 設計製図試験



当学院教室開講都道府県
合格者占有率

当学院教室開講都道府県合格者 4,189名のうち
当学院合格者数 2,096名

50.0%

当学院教室開講都道府県

学科・製図ストレート合格者占有率

学科・製図ストレート合格者 2,093名のうち
当学院合格者数 1,141名

54.5%

※都道府県合格者数は、(財)建築技術教育普及センター発表の受験番号より算出。※上記、当学院開講都道府県合格者占有率には、1級設計製図講座を開講していない青森県、岩手県、秋田県、長野県、鳥取県、島根県、高知県、佐賀県、長崎県、大分県、宮崎県、沖縄県の合格者は含まれていません。※上記エリアから開講の当学院開講教室にて受講し合格された方は、合格実績に含んでおりません。※学科・製図ストレート合格者とは、平成22年度1級建築士学科試験に合格し、平成22年度1級建築士設計製図試験にストレートで合格した方です。※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。※上記、占有率および合格者数はすべて平成22年12月19日18:00に判明したものです。今後新たに合格者が判明次第、数値は変更していきます。

平成22年度 2級建築士 試験

学科試験

当学院受講生 基準達成者合格率

全国合格率 39.4%に
対して **96.4%**

8割出席・8割宿題提出・模擬試験60点以上
受講生533名中、合格者514名

設計製図試験

当学院合格者数

2,273名

2級製図講座

9割出席・9割宿題提出者

受講生合格率

全国合格率 52.1%に
対して **75.7%**

9割出席・9割宿題提出受講生1,690名中、合格者1,280名

平成22年度 宅建試験

当学院受講生 基準達成者合格率

全国合格率 15.2%に
対して **79.5%**

当学院、合格バックアップシステムの基準である8割出席・8割宿題提出・
公開統一模試得点率8割以上の受講生117名中、合格者93名

1級建築施工管理技術検定

平成22年度 学科試験

9割出席・9割宿題提出者
受講生合格率

全国合格率 40.7%に
対して **90.3%**

9割出席・9割宿題提出受講生144名中、合格者130名

平成21年度 実地試験

9割出席・9割宿題提出者
受講生合格率

全国合格率 41.1%に
対して **70.7%**

9割出席・9割宿題提出受講生559名中、合格者395名

※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。

確かな実績に基づく指導ノウハウで
合格に導きます

開講
講座

1級・2級建築士

1級・2級建築施工管理技士

宅地建物取引主任者

インテリアコーディネーター

ファイナンシャル・プランナー

構造計算コース(実務講座)

法定
講習

株式会社 総合資格学院法定講習センター

■ 建築士法に基づく 1級・2級建築士定期講習

改正建築士法により建築事務所に所属する建築士は、3年度ごとの建築士定期講習の受講が義務付けられました。

■ 建築士法に基づく 管理建築士講習

株式会社 総合資格

■ 監理技術者講習 ■ 宅建登録講習 ■ 宅建登録実務講習

充実の企業支援 **無料** ハイレベルなスキルと高い倫理観を持つ建築技術者。その育成を通し安心・安全な社会に貢献していきます。

各種合格ガイダンス

- 1級建築士学科・製図
- 2級建築士学科・製図
- 宅地建物取引主任者
- 1級建築施工管理技士学科・実地

Web学習サービス

- 1級建築士学科
- 2級建築士学科
- 宅地建物取引主任者

模擬試験・社内講習会

- 1級建築士学科・製図
- 2級建築士学科・製図
- 宅地建物取引主任者
- 1級建築施工管理技士学科・実地

有資格者育成プラン作成

- 一日プラン
- 年間プラン
- 新入社員研修プラン
- 内定者学習サポート



● PCサイト

総合資格 検索

www.shikaku.co.jp

● ケータイサイト

QRコードから簡単アクセス

http://gakuin.jp/



旭川校 TEL.0166-99-4511
札幌校 TEL.011-219-3511
仙台校 TEL.022-217-8421
山形校 TEL.023-615-2911
水戸校 TEL.029-300-4721
つくば校 TEL.029-860-3771
宇都宮校 TEL.028-614-4881
前橋校 TEL.027-290-2311
さいたま校 TEL.048-642-9811
越谷校 TEL.048-990-6971
所沢校 TEL.04-2997-2400
川越校 TEL.049-291-5211
熊谷校 TEL.048-599-3531
船橋校 TEL.047-425-8941
千葉校 TEL.043-290-7341

松戸校 TEL.047-369-3821
柏校 TEL.04-7168-9111
北千住校 TEL.03-5284-3911
新宿校 TEL.03-3366-2181
上野校 TEL.03-3832-7201
池袋校 TEL.03-3982-8211
五反田校 TEL.03-3495-8671
吉祥寺校 TEL.0422-23-6011
立川校 TEL.042-524-7841
町田校 TEL.042-724-3061
横浜校 TEL.045-316-6811
川崎校 TEL.044-850-3411
厚木校 TEL.046-297-0511
藤沢校 TEL.0466-55-2611
新潟校 TEL.025-242-2811

長岡校 TEL.0258-32-0211
富山校 TEL.076-439-1011
金沢校 TEL.076-237-6811
福井校 TEL.0776-20-2111
岐阜校 TEL.058-277-3701
沼津校 TEL.055-954-2611
静岡校 TEL.054-275-3311
浜松校 TEL.053-456-2211
名古屋校 TEL.052-202-1751
小牧校 TEL.0568-42-1211
岡崎校 TEL.0564-57-8161
豊橋校 TEL.0532-57-0311
津校 TEL.059-238-0711
四日市校 TEL.059-359-0711
草津校 TEL.077-566-6911

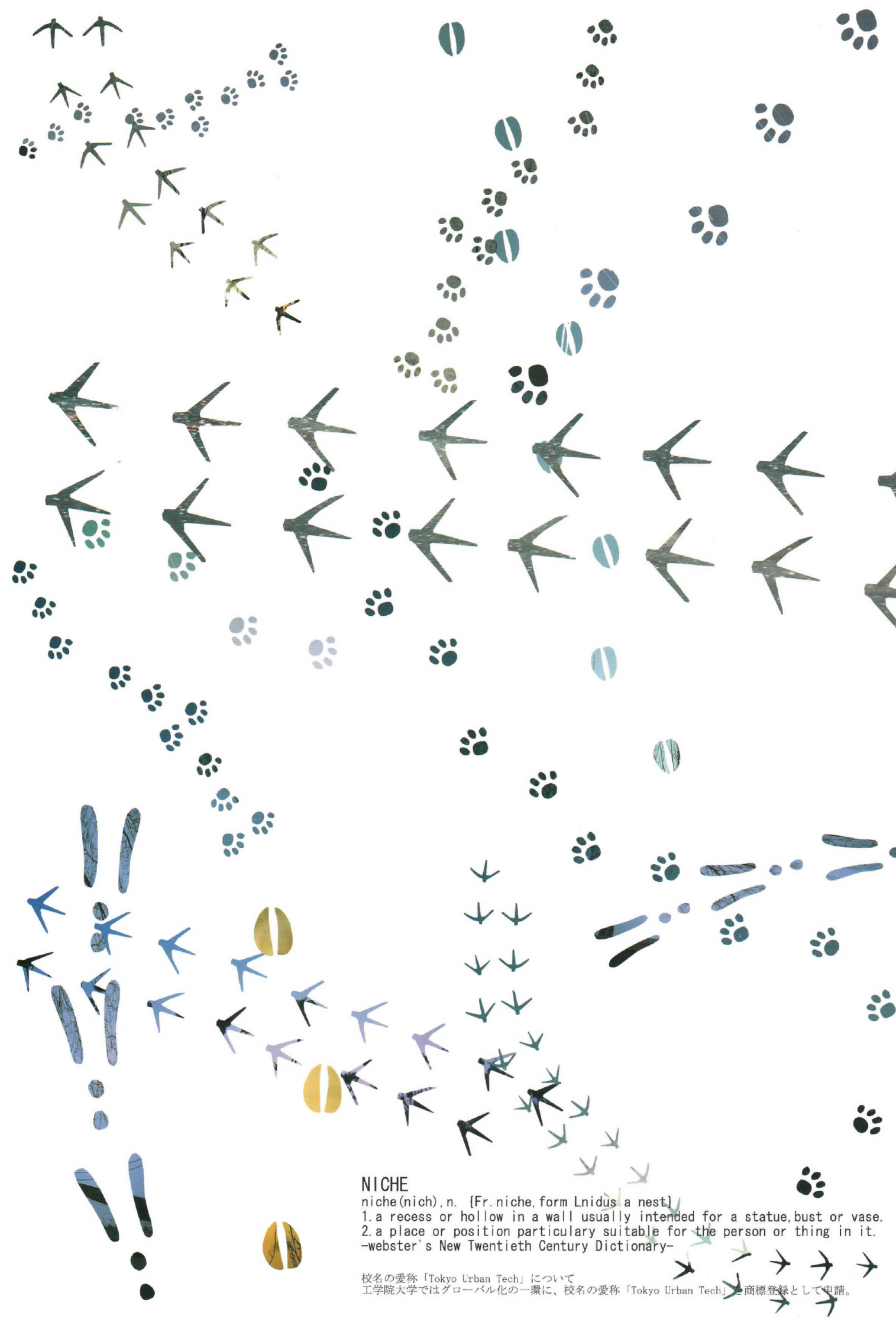
京都校 TEL.075-352-3011
高槻校 TEL.072-686-6711
梅田校 TEL.06-6374-1411
新大阪校 TEL.06-6101-1911
京橋校 TEL.06-6882-8211
なんば校 TEL.06-6648-5511
堺校 TEL.072-222-9311
神戸校 TEL.078-241-1711
姫路校 TEL.079-224-1411
奈良校 TEL.0742-30-1511
岡山校 TEL.086-235-5901
福山校 TEL.084-991-3811
広島校 TEL.082-542-3811
山口校 TEL.083-974-4011
高松校 TEL.087-811-2011

天神校 TEL.092-716-2081
小倉校 TEL.093-522-7511
久留米校 TEL.0942-36-7141
熊本校 TEL.096-212-6811
鹿児島校 TEL.099-239-5711

※平成23年1月現在
最新情報は当社HPをご覧ください。

株式会社 総合資格
(社)日本建築学会会員
(社)全国産業人能力開発団体連合会会員
監理技術者講習実施機関 登録番号7
宅建登録講習機関 登録番号(2)第009号
宅建登録実務講習実施機関 登録番号(2)第5号

株式会社 総合資格学院法定講習センター
国土交通大臣登録講習機関
● 1級建築士定期講習 登録番号 第5号
● 2級建築士定期講習 登録番号 第4号
● 管理建築士講習 登録番号 第2号



NICHE

niche(nich), n. [Fr. niche, form Lnidus a nest]

1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust or vase.

2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it.

-webster's New Twentieth Century Dictionary-

校名の愛称「Tokyo Urban Tech」について

工学院大学ではグローバル化の一環に、校名の愛称「Tokyo Urban Tech」を商標登録として申請。